



Title	織物に見るシルクロードの文化交流 トウルフアン出土染織資料-錦綾を中心に
Author(s)	坂本, 和子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/2683">https://hdl.handle.net/11094/2683</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平成19年度博士学位申請論文

織物に見るシルクロードの文化交流  
トウルファン出土染織資料—錦綾を中心に

申請者

坂本 和子

2007年 12月

## 凡例

- 本稿では研究者に対して敬称を略している。ここにお許しを乞う。
- 本稿では棉はわたを意味し、綿は真綿を意味する。
- 本文中の中国出土染織資料の名称は中国の発表に従う。但し、漢字は変える場合がある。例えば文様の紋は文に統一し、聯珠は連珠としている。
- 史料用語は括弧に入れ、「・・・」で示している。
- 筆者の造語や強調が必要なとき括弧に入れ、「・・・」で示している。
- 筆者が染織用語その他を解説・補足する場合には丸括弧に入れ（・・・）で示している。
- 引用文は原文のまま記している。
- 図における矢印 → は織物の経方向を示している。



## 目次

はじめに	1
第 1 編 シルクロードと染織研究	4
第 1 章 シルクロードにおける織物文化とトゥルフアン	4
第 1 節 シルクロードと絹織物	4
1. 絹織物の起源と発展	4
2. シルクロードにおける絹織物の役割	4
第 2 節 ユーラシアの三大織物文化圏	5
1. 毛織物文化圏とその織物の特徴	6
2. 絹織物文化圏とその織物の特徴	7
3. 棉織物文化圏とその織物の特徴	8
第 3 節 毛織物文化と絹織物文化の遭遇—シルクロードにおける織物文化 隆盛への道	10
1. 絹織物の毛織物文化圏への伝播—とくに経錦の西伝	10
2. 緯錦の成立とその東漸	11
第 4 節 トウルフアンの位置づけ	14
1. 地理的・歴史的な位置づけ	14
2. トウルフアン出土染織資料の研究意義	14
第 2 章 トウルフアン出土染織資料の概観	15
第 1 節 中央アジア探検隊によるトゥルフアン調査—19 世紀末から 20 世紀 初	15
1. イギリス調査隊—スタイン	15
2. ドイツ調査隊—グリェンヴェーデルとル=コック	16
3. 日本—大谷探検隊	17
第 2 節 中国による発掘調査—20 世紀後半から	18
1. カラホージャ・アスターナ墓群の発掘調査	18
第 3 章 染織資料調査, 研究法の確立と発展	21
第 1 節 19 世紀末—20 世紀初めの発掘資料の到来と近代的研究の幕開け	21
1. 伝統的な伝世資料の研究	21
2. 発掘資料の到来	21
3. 国際学会—CIETA の設立	22

第 2 節 トゥルファン以外の重要出土遺跡と染織資料の研究	23
1. 西アジア・アフリカ出土染織資料	23
2. 北コーカサス出土染織資料	25
3. 中国西北出土染織資料	25
4. 中央アジアの壁画	26
5. ペルシア錦	27
6. ソグド錦	28
第 3 節 文字資料による染織研究	30
1. 文献史料の活用	31
2. 出土文書の活用	32
 第 2 編 カラホージャ・アスターナ出土染織資料	 34
 第 1 章 錦に関する諸問題	 34
第 1 節 連珠円内単独文錦と連珠円内対称文錦	34
第 2 節 出土錦の生産地判定に際しての着目点	34
1. 生産地判定における諸問題—特に錦について	34
2. 生産地の東西の決定要素	34
3. タリム盆地周辺における生産の問題	36
 第 2 章 連珠円内単独文錦	 38
第 1 節 先行研究による分析と生産地をめぐる議論	39
1. イラン文化圏生産説	39
2. 中国文化圏生産説	42
3. 問題の所在	43
第 2 節 経錦・緯錦の判定と生産地の考察	44
1. 経耳・緯耳・房耳	44
2. 点線現象	46
3. 糸質	47
4. イラン文化圏所在の遺跡・遺物の文様と連珠円内単独文との類似	48
5. 「ペルシア錦」・「ソグド錦」と連珠円内単独文錦との類似	50
6. 「ペルシア錦」・「ソグド錦」を取り巻く歴史的状況	52
 第 3 章 連珠円内対称文錦	 55
第 1 節 先行研究による分析と生産地の確定	56

1. 対称文様の織技	56
2. 文献史料および織技による生産地の確定	57
第2節 資料における東西織物文化の伝播と融合の考察	60
1. 文様にみる東西の要素	60
2. 織技にみる東西の要素	61
3. 文献史料にみる技術の伝播と東西の融合	62
第4章 吐魯番文書に現れる各種の錦の実体について	63
第1節 「丘慈錦」「疏勒錦」について	64
1. 吐魯番文書中の「丘慈錦」「疏勒錦」	64
2. 「丘慈錦」「疏勒錦」の実体と生産地をめぐる議論	64
第2節 「波斯錦」について	67
1. 「波斯錦」の実体と生産地をめぐる議論	67
2. 生産地の検討	70
3. 「波斯錦」とは	72
第3編 カラホージャ・アスターナ以降の出土染織資料	75
第1章 大谷探検隊将来三日月文錦	75
第1節 文様	76
1. 三日月文と連珠円の歴史的变化	76
2. 織り出された文字について	76
第2節 史料に現れるティラーズ	77
1. ティラーズとは	77
2. ティラーズの歴史的变化	78
3. 三日月文錦における文字とティラーズ	78
第3節 織技	79
1. 織の組織と跳び杼の使用	79
2. 二色錦における東西の技術の差異	80
第4節 生産地と年代比定	81
1. 生産地	81
2. 三日月文錦付帯文書	82
3. 年代比定	82
第2章 ドイツ隊発見の棉ベルベット	83
第1節 本資料の分析	83

1. 外観と織技	83
第2節 史料に現れるベルベットとその生産地	83
1. “maxmur”	84
2. 「剪絨」と「倭緞」	84
3. 史料にみる棉ベルベットの原産地	86
4. トウルフアンにおける棉ベルベットの生産	87
第3節 年代比定	89
1. 幡における装飾法と年代比定	89
第3章 ドイツ隊発見の金襴	89
第1節 本資料の分析	89
1. 外観と織技	89
第2節 史料に現れる金襴とその生産地	90
1. ヘラートからビシュバリクへ—織工の移動	90
2. 「ナシチ」・「納失失」・“nasj” とは	91
3. 「納失失」の金糸	92
4. 「納赤 <sub>楊</sub> 」・「荅 <sub>舌</sub> 見荅思」・「納 <sub>中</sub> 忽 <sub>楊</sub> 」 とは	93
第4編 トウルフアン出土染織資料に見る織物の発展史	96
第1章 トウルフアン出土染織資料に見る織技術史	96
第1節 古代考古資料・文字資料による織物組織とその発展	99
1. 考古資料と文字資料	99
第2節 トウルフアン出土染織資料に確認できる組織とその編年	101
1. トウルフアン出土染織資料の織組織と文字資料との対応	101
2. トウルフアン出土染織資料にみる織組織の発展	104
第3節 錦・綾の織技発達史と東西の技術的交流	105
1. 綾	105
2. 錦	108
第4節 綺と綾	111
1. 「綺」・「綾」に関する種々の見解	111
2. 「綺」・「綾」と組織	112
3. 「綺」と「綾」の関係	116
第2章 トウルフアン出土染織資料に見る文様史	117

第1節 4-8世紀出土資料の文様における東西交流と発展	117
1. 漢文様から円文へ	122
2. 西方錦の到来	124
3. 西方錦の影響による中国錦とその発展	124
4. 副文の独立と花文錦	125
5. 段文錦のいろいろ	127
第2節 9-14世紀出土資料の文様における東西交流と発展	129
1. 中国における文様の発展	129
2. 西方における文様と中国への影響	131
3. 金糸装飾の発展	133
おわりに	137
文献および文献略号	140
染織用語解説	163
図 1-73	
地図 1-3	
表 1-3	

## 図表目次

挿図	1.	トゥルファン地域	16
挿図	2.	大谷探検隊将来三日月文錦のアラビア文字	79
挿図	3.	二色錦の中国と日本の織り方	80
挿図	4.	二色錦の西方の織り方	81
挿図	5.	高昌出土金襴 ランパ組織	90
挿表	1.	古代の織物文化圏における特徴	9
挿表	2.	ソグド錦 (ユイ, ノートルダム教会所蔵)	51
挿表	3.	カラホージャ・アスターナ出土連珠円内単独文錦	51-1,2
挿表	4.	「ペルシア錦」・「ソグド錦」	51-3,4
挿表	5.	カラホージャ・アスターナ出土連珠円内対称文錦	55-1,2
挿表	6.	考古資料と文字資料	100
挿表	7.	トゥルファン出土染織資料にみる織組織の出現	103
挿表	8.	ドイツ隊収集資料に見る織組織の発展	105
挿表	9.	綾の種類とその発展	107-1
挿表	10.	錦の種類とその発展	110
図	1.	アスターナ出土 動物雲気文錦 (ヴィクトリア・アルバート美術館蔵 Ast. vi. 1. 03)	
図	2.	アンティノエ出土 連珠天馬文錦 (リヨン織物美術館蔵 897.III. 5)	
図	3.	アスターナ出土 猪頭文錦 (インド国立美術館蔵 Ast. i.5.03)	
図	4.	モシチェヴァヤ＝バルカ出土 シムルグ文錦カフタン (エルミタージュ美術館蔵 Kz 6584-a)	
図	5.	聖ルー シムルグ文錦 (パリ装飾美術館蔵 no.16364)	
図	6.	対羊(鹿)文錦 (ユイ ノートルダム寺院蔵)	
図	7.	対獅錦 (Sens, Cathedral Treasury)	
図	8.	モシチェヴァヤ＝バルカ出土 ダブルアクス文錦 (モスクワ考古学研究所蔵 MB 469-3497)	
図	9.	アスターナ出土 大連珠立鳥文錦 (新疆博物館蔵 TAM 42)	
図	10.	アスターナ出土 大連珠鹿文錦 (新疆博物館蔵 TAM 332:5)	
図	11.	アスターナ出土 連珠猪頭文錦 (新疆博物館蔵 TAM 138:9/2-1)	
図	12.	アスターナ出土 猪頭文錦 (新疆博物館蔵 TAM 325:1)	
図	13.	尼雅出土「延年益寿大宜子孫」錦 (新疆博物館蔵)	

- 図 14. アスターナ出土 鳥獸条文錦 (新疆博物館蔵 TAM 306:10)
- 図 15. アスターナ出土 連珠対馬錦 (新疆博物館蔵 TAM 302:22)
- 図 16. アスターナ出土 樹文錦 (新疆博物館蔵 TAM 170:38)
- 図 17. アスターナ出土 棋文錦 (新疆博物館蔵 TAM 139:1)
- 図 18. アスターナ出土 亀甲「王」字文錦 (新疆博物館蔵 TAM 44:23)
- 図 19. アスターナ出土 倣獅文錦 (新疆博物館蔵 TAM 313:12)
- 図 20. ダムガン猪頭文ストゥッコ (テヘラン考古博物館蔵)
- 図 21. アフラシアブの壁画
- 図 22. モシチェヴァヤ=バルカ出土 重八弁花文錦 (モスクワ考古学研究所蔵  
МБ-Г-Н-(3)1036)
- 図 23. アスターナ出土 連珠対鵲文錦 (新疆博物館蔵 TAM 206:48/1)
- 図 24. アスターナ出土 朱紅地連珠孔雀文錦 (新疆博物館蔵 TAM 169:34)
- 図 25. アスターナ出土 連珠対孔雀「貴」字文錦 (新疆博物館蔵 TAM 48:6)
- 図 26. アスターナ出土 紅地連珠対馬錦 (新疆博物館蔵 TAM 151:17)
- 図 27. アスターナ出土 双龍連珠円文綺 (新疆博物館蔵 TAM 221:12)
- 図 28. アスターナ出土 双龍文綺 (新疆博物館蔵 TAM 226:16)
- 図 29-a. アスターナ出土 騎士文錦 (新疆博物館蔵 TAM 322:22/1)
- 図 29-b. アスターナ出土 騎士文錦副文 (新疆博物館蔵 TAM 322:22/1)
- 図 30. アスターナ出土 連珠天馬騎士文錦 (新疆博物館蔵 TAM 77:6)
- 図 31. アスターナ出土 連珠小花錦 (新疆博物館蔵 TAM 323:13/3)
- 図 32. 都蘭熱水郷血渭吐蕃墓出土 紅地波斯婆羅鉢文字錦
- 図 33. 大谷探検隊将来三日月文錦 (龍谷大学大宮図書館蔵)
- 図 34. キジル十六帯剣者窟の寄進者 (ベルリン, アジア美術館蔵)
- 図 35. キジル最大窟の連珠鴨文 (ベルリン, アジア美術館蔵)
- 図 36. St. Josse の聖遺骸布 (ルーブル美術館蔵)
- 図 37. 三日月文錦 (ヴィクトリア・アルバート美術館蔵)
- 図 38. 大谷探検隊収集三日月文錦 裏面 (龍谷大学大宮図書館蔵)
- 図 39. スイパン出土 棉ベルベット (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6194)
- 図 40. 高昌故城出土 花唐草金襴 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6222)
- 図 41. アスターナ出土 藏青地禽獸文錦 (新疆博物館蔵 TAM 177:48(1))
- 図 42. アスターナ出土 盤条「貴」字団花綺 (新疆博物館蔵 TAM 48:14)
- 図 43. アスターナ出土 藍地对鶏対羊灯樹文錦 (新疆博物館蔵 TAM 151:21)
- 図 44. アスターナ出土 「胡王」錦 (新疆博物館蔵 TAM 169:14)
- 図 45. アスターナ出土 盤条騎士狩獵文錦 (新疆博物館蔵 TAM 101:5)
- 図 46. アスターナ出土 海藍地宝相花文 (新疆博物館蔵 TAM 188:29)
- 図 47. アスターナ出土 宝相団花錦 (新疆博物館蔵 TAM 214:114)

- 図 48. アスターナ出土 深紅牡丹鳳文錦 (新疆博物館蔵 TAM 381)
- 図 49. アスターナ出土 連珠対鳥文錦 (新疆博物館蔵 TAM 134:1)
- 図 50. アスターナ出土 対鹿文錦 (新疆博物館蔵 TAM 330:60)
- 図 51. 耶律羽之墓出土 花樹獅鳥文綾 (中国絲綢博物館蔵)
- 図 52. 高昌故城出土 牡丹文刺繍 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ4908,4909)
- 図 53. トヨク出土の幡 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6639)
- 図 54. 龍円文金襴 (AEDTA 蔵 no. 3270)
- 図 55. 鳳凰文金襴 (AEDTA 蔵 no. 3086)
- 図 56. 連珠鳳凰雲文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ7606)
- 図 57. 七宝繋ぎ地四弁花錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ532)
- 図 58. 高昌故城出土 菱繋ぎ四弁花文綾 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ7755)
- 図 59. 高昌故城出土 象文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6200)
- 図 60. 花鳥文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ162)
- 図 61. 高昌故城出土 唐草地花文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6992)
- 図 62. 刺繍小袋 (韓国国立中央博物館蔵)
- 図 63. 高昌故城出土 生命の樹錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ4926a)
- 図 64. 天馬文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6991)
- 図 65. ペンジケント壁画の衣服の文様
- 図 66. モシチェヴァヤ=バルカ出土 ライオン錦 (モスクワ考古学研究所蔵 MB 422-2846)
- 図 67. モシチェヴァヤ=バルカ出土 グリフォン錦 (エルミタージュ美術館蔵 Kz 6762, 6587)
- 図 68. 対向するライオン錦 (マーストリヒト, St. Servatius 寺院蔵)
- 図 69. モシチェヴァヤ=バルカ出土 対孔雀文錦 (エルミタージュ美術館蔵 Kz 5075)
- 図 70. 対獅文錦 (アベック財団蔵 no. 4863a)
- 図 71. 内モンゴ元集寧路遺址出土 亀甲地グリフォン錦 (内モンゴ博物館蔵)
- 図 72. クルトカ出土 縁飾り円文金襴 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ7443)
- 図 73. 高昌故城出土 龍文刻絲 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ535)

- 地図 1. 三世紀までの三大織物文化圏
- 地図 2. 経錦・平地綾の西漸
- 地図 3. シルクロード染織関係主要遺跡図

- 表 1. トウルフアン出土染織資料  
Stein 発掘アスターナ出土染織資料
- 表 2. トウルフアン出土染織資料  
アスターナ出土綺・綾  
カラホージャ・アスターナ出土錦
- 表 3. トウルフアン出土染織資料（年代順）  
アスターナ出土綺・綾  
カラホージャ・アスターナ出土錦

# 織物に見るシルクロードの文化交流

## トゥルフアン出土染織資料—錦綾を中心に

### はじめに

現代に生きるわれわれは、織物を衣服や寝具やインテリア用品として、日常的に何気なく使用している。われわれは、無意識に織物の着心地の良さや美しさにひかれ、苦勞することなく織物を手に入れている。なぜなら近代の織物が産業革命とともに機械化され、大量生産が可能となったからである。

織物が人の手によってのみ生み出されていた頃は、たとえ多くの人が織物を織ることに従事してはいても、その生産には限りがあった。この様な状況のもとでは織物、とりわけ、絹織物は現代の人には考えも及ばないほど貴重なものであった。一般庶民はもちろんのこと、絹織物生産国以外の人々にとって、簡単に手に入るものではなかった。このため、絹をめぐる政治・経済・文化といった各分野においてさまざまな地域、民族間の交渉が生まれることとなったのである。その大舞台こそがシルクロード<sup>1</sup>と呼ばれる地域であった。

シルクロードには、草原の道・オアシスの道・海の道があつて、ユーラシアの東西間を結び、各々の道の間には南北をつなぐ道が走っていた。とくにその陸路は、貿易のメインルートが海路に移ってゆく近代以前には、常に東西交流の大動脈でありつづけた。本稿が取り扱うのも、この前近代のシルクロードの陸路であり、それに沿う地域である<sup>2</sup>。

前近代のシルクロード地域においては絹織物が東西南北に移動しているのであるが、具体的にどのような絹がどこからどこへ移動したのかといった実態は様々な論議が交わされてはいるものの、すべて明らかにされたとはいえない。

そこで本稿では、特に錦や綾などの高級絹織物を中心とした織物文化の交流に焦点を当て、トゥルフアン地域からの出土染織資料<sup>3</sup>を研究の主軸に据え、その様相の解明に

---

<sup>1</sup> シルクロードとはドイツの地理学者リヒトホーフエンがその著 *China* で ザイデンシュトラーセン(Seidenstrassen)という語を使ったのに始まる。シルクロードは「絹の路」と訳されるが、単に絹が運ばれた東西を結ぶ道ではなく、多様な文化交流のネットワークである。

<sup>2</sup> 本稿において対象とするシルクロード地域については、中央アジア・内外モンゴリア・ペルシアを主として想定している。「中央アジア」について、本稿ではタリム盆地周辺・ソグディアナ・アフガニスタン一帯を指すこととする。すなわち、東西両トルキスタンにアフガン=トルキスタンを加えたトルキスタン全域のことである。また場合によっては、ペルシア本土とソグディアナを併せ含めた概念として別途「イラン文化圏」を想定する。

<sup>3</sup> 染織研究分野において「織物」と「染織」という用語の厳密な使い分けが特になされているわけではないが、繊維製品全体を指す一般的な呼称として、あるいは織成行為が意識される表現

取り組む。

トゥルファン出土染織資料とは、20世紀初頭以降に行われた各国の考古学的調査の結果として、中国新疆维吾尔自治区トゥルファン盆地内の各地からもたらされた資料である。具体的にはイギリスのスタイン(Sir Aurel Stein)隊や中国隊の発掘によるカラホージャ・アスターナ出土資料<sup>4</sup>、ドイツ隊による高昌故城・トヨク・スイパン出土資料<sup>5</sup>、日本の大谷探検隊によるカラホージャ・アスターナ出土資料を含むトゥルファン収集資料<sup>6</sup>といったものを指す。

スタイン隊や中国隊発掘のカラホージャ・アスターナ出土資料は4-8世紀に属する資料群であり、これによって、その年代の織物の技術、文様の歴史を捉えることができる。それに対して、大谷探検隊収集資料の一部ならびにドイツ隊発掘資料にはカラホージャ・アスターナ以外の遺跡から発掘された7-10世紀、および7-14世紀にそれぞれ年代付られる資料が含まれている<sup>7</sup>。それゆえ、ドイツ隊発見資料や大谷探検隊収集資料は、4-8世紀に編年されるカラホージャ・アスターナ出土資料に続くものであり、これによって、9-14世紀の織物の新たな交流と織物の技術、文様の歴史を明らかにすることが出来る。

以下の第1編ではまず、後に続く各編の検討に先立ち、織物の交流史と織物自体の研究にとって必要な背景を説明する。具体的には、先ずシルクロードにおける絹織物の役割を述べる。次いでユーラシアにおける織物文化圏を、繊維素材に基づき三つにわけて設定し、各織物文化圏の特徴と各文化圏の間の初期的交流過程を明らかにする。また、トゥルファンが歴史的にどのような立場にあったか、トゥルファンがどの織物文化圏に属し、地理的にどのような位置にあったかを示す。最後に、トゥルファンから出土した染織資料の全体像と、第2編以下の論述に関連するトゥルファン以外の地から出土した重要な染織資料を概観し、染織調査、研究法の確立と発展を概説する。

次に第2編では4-8世紀に属するトゥルファン地区のカラホージャ・アスターナ両墓群出土資料を主として扱い、それらのうち、特徴的な連珠円内に文様が表された二つのタイプの錦群を取り上げ、東西交流の様相を示す。その際、東西交流を示す上で重要な生産地を確定するために、生産地に関連する経錦か緯錦かという問題を検討する。次に上述の連珠円内に文様が表された錦の一つのタイプはイラン文化圏と密接に関連し、もう一つのタイプは中国と関連していることを論じる。更に「波斯錦」など史料用語につ

---

においては「織物」、織と染め両方が意識される繊維製品については「染織」という表現が使われる傾向にある。本稿ではこれにのっとり「織物」「染織」の語を適宜使用していく。

<sup>4</sup> Stein 1928, pp. 587-718. 中国隊発掘染織資料は第1編で詳述する。

<sup>5</sup> Le Coq 1913, pp. 49-52; 勒柯克 1998, pp. 138-142; Bhattacharya-Haesner 2003; Sakamoto 2004b, pp. 17-43.

<sup>6</sup> 龍村 1963, pp. 25-44; 横張 1990, pp. 257-281; 1995, pp. 177-195; 坂本 1996a, pp. 65-109. 大谷探検隊はトゥルファンにおいてはトヨク・カラホージャ・アスターナで染織品を発掘しているが、個々の染織資料については具体的出土地点が明白でない場合も多く、注意を要する。

<sup>7</sup> これは筆者の調査により判明している。(坂本 1996a, pp. 77-79; Sakamoto 2004b, pp. 17-43)

いて検討し、史料用語と実物資料の対照を試みる。

第3編ではトゥルフアン出土染織資料のうち、カラホージャ・アスターナの染織資料より後の年代に属し、文様・織技において異なる特徴を持っている重要な資料のうち3資料を取り上げ、それらの由来に焦点を当て、9-14世紀における織物の交流を詳述する。

以上の第2、3編での議論を踏まえ、第4編ではトゥルフアン出土の染織資料を中心に4-14世紀のシルクロード地域における織物技術史と文様史を再構築し、提示する。ただし、織物技術史に関しては紀元前3500年に遡り、その起源から順を追って言及する。また、中心となる議論に際しては、織物の伴出墓誌や文書や他地域出土資料なども併せて考察の対象に加える。第4編は第2・3編の発展的なまとめとなるものであり、本論文の終編にあたる。

なお、本稿の議論では染織に関する術語が頻出するが、行論の妨げとならぬよう本文中においてはその説明は必要最小限にとどめた。その代わりに、巻末に染織用語解説を付したので、適宜参照いただきたい。

# 第1編 シルクロードと染織研究

## 第1章 シルクロードにおける織物文化とトゥルファン

### 第1節 シルクロードと絹織物

#### 1. 絹織物の起源と発展

シルクロードに関わる地域において最も古く絹織物が作られたのは中国であり、紀元前3500年に遡る。その絹織物は平織りや羅のような透かし目のある織物であった<sup>8</sup>。それから幾世紀か経るうちに織物技術は発達し、平織は勿論のこと、綾や錦も織り出されるようになった。

絹織物は中国では古くより穀物と並んで徴税の対象となり、国に上納された。例えば、本論と特に関わりの深い唐代においては、絹・綾・羅・紗・錦などが諸州の貢によって中央に集められ、また官営工房によって織られ内庫（王室財政）に収められた<sup>9</sup>。一方、庸調として徴収された絹は国庫（国家財政）に入れられた。国庫に集められた絹織物は官吏の禄に当てられた。その他、絹織物は不動産の取引や奴隷・馬などの高額商品の売買に使用され、金銭と同じ役割を持っていた<sup>10</sup>。

この様な絹織物は、生産地である中国内部で消費されたのはもちろんのことであるが、その一方でかなりの量が何らかの経路を経て四方（主に西方と北方）へと流れていった<sup>11</sup>。

#### 2. シルクロードにおける絹織物の役割

絹織物の流出の形態については朝貢貿易、互市貿易、歳幣といったものが挙げられるが、例えば漢代には匈奴に対する懐柔策として中国の絹織物が大量に贈られたことはよく知られている<sup>12</sup>。唐代には突厥・ウイグルといった北方遊牧民にも大量の絹が渡った。とりわけ、唐とウイグルの間にはウイグル馬の朝貢とそれに対する唐からの回賜という名目のもと官貿易が成立し、極めて大量の絹織物が「馬価絹」としてウイグルの手に渡

---

<sup>8</sup> 朱 1992, p. 4.

<sup>9</sup> 石見 2005, p. 79, p. 83.

<sup>10</sup> 加藤 1944, p. 129; 池田 1968, p. 41; Trombert 1996, p. 110.

<sup>11</sup> 石見 2001, p. 24. 『唐律疏議』衛禁律「越度縁辺関塞」条は、唐代に化外との交易が法律で禁止しなければならないほど盛んであったことを物語っている。絹も交易の対象に含まれたに違いない。

<sup>12</sup> このような絹織物については史料上に記述が見られる外に、漢代のものについては出土資料からも確認することができる（地図2）。出土資料および遺跡については本章第3節および第3章第2節で取り扱う。

った<sup>13</sup>.

遊牧民が絹織物を熱望していたのは自らの消費のためというよりもむしろ、これらの絹織物の大部分を西方へ再輸出するためであったが、その再輸出の際に活躍したのがソグド商人である<sup>14</sup>。ソグド人はソグディアナを本拠地としつつ、タリム盆地周辺や河西地域から中国内地、あるいは北方草原地帯などにも広く交易ネットワークを有する国際商人として名高く、その東方への交易活動は紀元前後にまで遡る。彼らは上述の朝貢貿易や互市貿易にも関わる一方で、私的な交易にも携わった<sup>15</sup>。交易品としての絹織物はかれらのネットワークにのって、上記の遊牧民を経由するルートのほか、中国内地からタリム盆地のオアシス諸都市やさらにパミール高原を越えて西方へ運ばれる例もあった<sup>16</sup>。また唐の西域防備のため軍資金として中国内地からタリム盆地へ運ばれた布帛も、8世紀以降になるとソグド人の手を経るものが少なくなかったとされる<sup>17</sup>。さらに、養蚕技術の伝播の後、イラン文化圏で織り出された絹織物が6-7世紀にはいつて逆に中国に流入する際にも、ソグド人は大きな役割を果たしたと考えられる。

11世紀以降になると、それまでのソグド人の商業ネットワークは仏教徒ウイグル人やイスラム化したトルコ人・ペルシア人に継承され、モンゴル時代には有名なオルトク商人による遠隔地商業が繰り広げられるが<sup>18</sup>、ユーラシア大陸の東西南北を行き来する物流の中には当然、絹織物も含まれていた<sup>19</sup>。一部、下賜品として絹織物が直接持ち帰られ、西方で売られた例もあった<sup>20</sup>。その一方で「納失失」（後述）と呼ばれる金糸を織り込んだ西方起源の錦が中国において一世を風靡したことも、よく知られるところである。

このように、中国で生まれた絹は、衣服としての用途のほか、納税や売買などに際して金銭的役割をもって用いられた。それは中国国内のみならず、遊牧民対策として北方へ、更に、シルクロードの交易網にのってユーラシア各地へ運ばれ、歴史を通じて価値の高い産品として常に重要な役割を担っていた。

## 第2節 ユーラシアの三大織物文化圏

シルクロードに関わる地域を織物文化の観点から眺めると、大きく毛織物文化圏、絹

---

<sup>13</sup> 松田 1986, p.170.

<sup>14</sup> 内藤 1988, p. 377, p. 382, Iersalimskaja 1996, pp. 292-205 に北コーカサスで発見された7-9世紀の多数の中国絹が見られる。

<sup>15</sup> 荒川 1997, pp. 171-204; 森安 2007, pp. 100-101.

<sup>16</sup> Hinds 1990, pp. 136-137; 荒川 1997, p. 191; 森安 2007, p. 337.

<sup>17</sup> 荒川 1992, pp. 217-218;

<sup>18</sup> 森安 1997, pp. 93-119.

<sup>19</sup> 森安 1988, pp. 417-441.

<sup>20</sup> 護 1988, p. 232. ルブルクの通訳が下賜された金襴をキプロスで売り払ったという記録はその好例である。

織物文化圏、棉織物文化圏に分けられる（地図 1）<sup>21</sup>。これらの文化圏は、それぞれの土地固有の繊維生産状況から発展してきたものであるが、各文化圏の設定にあたって筆者は、各文化圏間の伝播・交流等の活動が活発化して融合や変容が始まる以前の時代を念頭に置いている<sup>22</sup>。以下では各文化圏の特徴などについて、本論文に關係する範囲で記述する。

## 1. 毛織物文化圏とその織物の特徴

毛織物文化圏は東地中海周辺・西アジアから中央アジア・南シベリアに至る遊牧・牧畜地域に一致し、羊・山羊・ラクダの飼育が盛んである。従って主として飼育動物から得られる繊維をもって織物を織った。文献に現れるのは紀元前 18-17 世紀のバビロニアのハンムラビ法典で、羊毛がバビロンの重要な産物であると記載されている<sup>23</sup>。

考古学的発掘によって発見された毛織物の出土地は、毛織物文化圏にちょうど重なっている。出土資料を見ると単色織物では平織（平組織の織物）あるいは斜文織（斜文[綾]組織の織物）で織られたものがあり、一方、多色文織物<sup>24</sup>では綴織（平組織）が主要な織物である。なお、綴織は単層で文様がモチーフごとに色違いで表された織物である。織りの組織（織物の糸の交錯の仕方）に関しては、上記組織のうち斜文組織（＝綾組織）は、他の織物文化圏に比べると 2000 年以上早くから毛織物文化圏で発達した。この点はこの文化圏の重要な特徴のひとつに挙げられよう<sup>25</sup>。

織物の材料となった羊・山羊・ラクダの毛は短繊維であるため、糸にするには「撚り」をかけなければならない。繊維は、Z 撚り・S 撚りと一般に呼ばれる左あるいは右方向に撚りをかけた方式で紡がれ、糸にされる。（Z, S については用語解説を参照されたい。）撚られた糸の表面には繊維の末端が細かな毛羽となって多数立ち上がっている。そこで、織物を織る時には毛羽と毛羽が引っかかり合って糸が互いに絡まないように、経糸はやや間隔を取って機（はた）に架けられる。経糸に間隔があるので緯糸が密に入りやすく、その結果、毛織物においては緯糸の密度が経糸に対して同等であるか、あるいは緯糸密度の方が高い。

特に毛織物文化圏で発達した独特の多色文織物である綴織もまた緯糸の密度が非常に高く、経糸をほぼ完全に隠して織り上げる技法である。綴織とは緯糸を布の端から端まで通さず、文様に応じて緯糸を繰り返して引き返し、文様を織り出すといった織り方によるものである。

<sup>21</sup> この織物文化圏という概念は、道明 1981 で毛織物の衣服の特徴を述べる際に「毛織物文化圏」という言葉によって提唱されたのが初めであるが、筆者は絹と棉を加え三つの織物圏を設定した。坂本 2004b, p. 1.

<sup>22</sup> その時期については、第 1 編第 3 章および注 33 で述べるような出土物などの諸条件から、およそ 3 世紀以前であると筆者は考える。

<sup>23</sup> Rider 1983, pp. 93-94.

<sup>24</sup> 本論ではモチーフごとに色違いで織り文様が表された織物をこのように呼ぶこととする。

毛織物文化圏の古代の衣服は貫頭衣のチュニックや巻衣で、その巻衣を床や地上に広げて敷物に応用したりする。そのため、広い幅の大きい布を1枚ずつ製作して4辺をコードや房で飾ることが多い。そこで「耳」（織物の両端で緯糸が返る部分）を作るとき、2-3本の経糸を集めて太くしたり、別糸を加えたりして、耳を厚く強くする手法や、房あるいは色違いの糸で飾る手法がある<sup>26</sup>。また、耳用の太い経糸は両端で機上の張力に耐え、短繊維で作られた糸の張力に対する弱さを補う役目をなしている。

## 2. 絹織物文化圏とその織物の特徴

絹織物文化圏はユーラシア東南部の農耕地帯にあり、中国本土や日本がそれに属し、比較的温和な気候である。絹織物文化圏には照葉樹林帯が通り、桑が自生する。桑に生息する桑蚕（くわこ）を飼育し、養蚕と繭から糸を繰る方法を開発したのは中国で、先に述べたように紀元前3500年にはすでに平織が出現している<sup>27</sup>。紀元前2500年頃の銭山漾の遺跡からは2本引き揃えの糸を用いた平織が出土し<sup>28</sup>、また、殷代の鉞に平地綾が錆着しているのが発見されている<sup>29</sup>。また、殷代の甲骨文字に蚕・桑・絲の文字が見られ、周代の金文に帛の字が見られることから、当時すでに養蚕や絹織物が普及していたことが窺われる<sup>30</sup>。日本にも中国から養蚕の技術が伝わった。弥生前期末の福岡有田遺跡から絹織物の付着した細形銅戈が出土しており、『三国志』に見られるように、遅くとも弥生後期には絹が生産されるに至ったと考えられている<sup>31</sup>。

考古学的発掘によって発見された絹織物は、中国の古代遺跡から出土するのは勿論のことであるが、同時に、西へ運ばれて毛織物圏内からも出土していることが知られている（地図2）。それら出土地や出土資料については後述するが、出土した絹の種類は平織・平地綾・経錦・刺繍と多様である。

毛織物文化圏の多色文織物である綴織に対して、絹織物文化圏における独自の多色文織物として経錦が盛んに織られた。経錦とは、色違いの経糸で文様が表され、経方向に文様が連続する織物である。

織物の材料である絹は、蚕の繭から糸繰りによって巻き取られた長繊維であり、長いものは1500mにも及ぶ。従って、糸にするために撚りの過程が必要な短繊維とは異なり、撚りをかける必要がないので、出土した殆どの織物の糸には撚りが無いか、あるいはあっても緩やかなS撚りである。また、毛糸のような毛羽がないので、機に経糸を密

---

<sup>25</sup> Barber 1991, pp. 126-214.

<sup>26</sup> Fujii, Sakamoto and Ichihashi 1989, pp. 115-116; 『コプト織』1998, p. 20.

<sup>27</sup> 朱 1992, p. 4.

<sup>28</sup> 陳 1984, pp. 33-34.

<sup>29</sup> Sylwan 1949, p. 108. 現在では中国の発掘によってより早い絹織物が発見されているが、シルワン(Vivi Sylwan)が発表した1930年代においては画期的な発見であった。

<sup>30</sup> 佐藤 1977, pp. 49-60.

<sup>31</sup> 布目 1988, p. 20; 『三国志』魏書東夷傳「卑弥呼宗女壹與…貢…異文雜錦二十匹」とある。

着して架けることが出来る。従って絹織物は経糸密度が緯糸密度より高い傾向がある。つまり、毛織物の場合と逆の傾向を示している。

一方、織組織に関して言えば、中国では技術的に単純な平組織から発展していくのであり、毛織物文化圏で早期に発達したような斜文組織は中国では西方の影響を受けた後に初めて現れる。綾や錦といったより複雑な織物さえも、技術的には平組織を基本として発展させたものである点は、絹織物文化圏の大きな特徴である。例えば、中国や日本の平地綾の殆どは斜線の「綾流れ」が見られ、一見斜文組織に似てはいるものの、実際にはそれは平組織の合成によって成り立っている<sup>32</sup>。先に述べた経錦の組織においても平組織が主流であり、西方から来た斜文組織＝綾組織が用いられるようになるのは6世紀末から7世紀初めである。

耳はどの織物も単純な折り返しの手法で作られる。錦・綾では耳の部分で地と別の色経を用いる場合があって、その場合、織物の耳の色は地の色と異なっている。耳が単純な折り返しで作られるのは、毛織物文化圏のほとんどの衣服が一枚仕立てのゆえに丈夫な耳や縁飾りを必要としたのに対して、中国ではそうでなく、衿や袖や身頃（胴体部分）に分かれ、数カ所縫い合わされる。そのため敢えて耳を強化したり、飾ったりする必要がないからである。

また絹織物文化圏では、ほとんどの織物を1枚ずつ織るのではなく、機に設置された綜絢をそのまま使って何枚も織り続ける。なぜなら、繰られた絹糸は長いゆえ、紡がれた糸に比べると伸張に耐えるので、織物1枚の規格の数倍にあたる長さの経糸を織機に架けることが出来るからである。錦・綾の場合は同じ文様を繰り返し続けて織る。織物を織っている途中で、一定寸法になると区切りのため地と異なる色の緯糸や平組織を細く入れることがある。それが「間道」とよばれるもので、納税や売買の際、織物1枚の長さの規格が保持されているかどうかの目安となるのである。

### 3. 棉織物文化圏とその織物の特徴

棉織物文化圏はインドを中心とした地域で農耕地帯にあるが、湿潤な気候である<sup>33</sup>。例えば棉を示すウイグル語 *kāpāz* やギリシャ語 *carbasus* といった語の語源はインドのサンスクリット語 *karpāsa* であって、棉の原産地を示唆している<sup>34</sup>。実際、1世紀に書かれた『エリュトラウラー海案内記』にインドでは棉布を産し、棉布が輸出されると記載さ

---

<sup>32</sup> 佐々木 1958, pp. 20-42.

<sup>33</sup> 後に棉織物の産地として重要になる乾燥地域の中央アジアは、本来毛織物圏である。しかしオアシスでは灌漑によって、棉の栽培が可能となった。新疆西南部に棉栽培が伝わったのは1世紀頃、その後東北部へ広まり、5世紀中葉までに全地域に伝播したと考えられている（武 1996, p. 9. 参照）。このように、棉織物は中央アジアにおいては輸入文化であるため、本稿ではこの地域を棉織物文化圏に含めていない。

<sup>34</sup> 森安 1991, p. 69. 村川 1948, p.199.

れている<sup>35</sup>.

インダス文明発祥の地, 紀元前 2500-1500 年のモヘンジョダロの遺跡から紀元前 1750 年と見なされている棉布が出土しているが<sup>36</sup>, 湿潤な気候で腐食するためか, それ以外にインドの遺跡から棉織物が出土した例はない. しかし, 他の地域に運ばれた棉織物が考古学上の遺跡で発見されている<sup>37</sup>. 発見された棉織物は平織やそれを染めたものが多い. 棉織物文化圏における織組織については, 管見の限りでは平組織が確認されるのみである.

棉繊維は 1.2cm-5.5cm の短繊維であるから, 必ず撚りをかけて糸にする. 撚りの方向は殆ど Z 撚りである. 毛糸と同様に糸に毛羽があるので, 経糸を密に機に架けることが出来ない. 棉の出土資料は平織が多く, 経糸・緯糸の密度はほぼ等しい. 耳は単純な折り返しの手法で出来ているが, 経糸を 2-3 本集めて経を太くしているものがある.

	地域	繊維	撚り	組織	多色文織物	耳
毛織物文化圏	東地中海周辺, 西アジア, 中央アジア, モンゴリア シベリア南部	毛 (短繊維)	S, Z	平組織, 斜文(綾)組 織, 緯錦	綴織, 緯錦 (緯糸密度 大)	太いコード, 房付き耳, 耳の強化
絹織物文化圏	インド(野蚕), 中国本土, 日本(養蚕)	絹 (長繊維)	S, 無撚り	平組織, 経錦	経錦 (経糸密度 大)	単純な 引き返し
棉織物文化圏	インドを中心とし た地域	棉 (短繊維)	Z	平組織		太いコード, 単純な 引き返し

挿表 1. 古代の織物文化圏における特徴

以上見てきたように, 三つの織物文化圏における素材とその特徴には大きな違いがあり, それをまとめると挿表 1 のようになる. 素材の性質によって織り方が規定されるわけである. また, その地域の衣装の形態によって織物の幅や仕上げが異なってくる. 次節では, シルクロード地域の織物文化の歴史における一大画期とも言うべき, 毛織物文化と絹織物文化の接触について述べるが, その際には上記の毛織物固有の特徴が絹織物

<sup>35</sup> 村川 1948, p. 106, p. 114, p. 123.

<sup>36</sup> 角山 1968, p. 17; Vogelsang-Eastwood 1990, p. 6.

<sup>37</sup> Phister 1934, p. 22; 1937, pp. 19-22; 1940, pp. 18-19; Eastwood 1982, pp. 286-326; Mackie 1989, pp.

製作に反映されるようになるのである。

なお、上記の繊維の他に天然素材として麻があるが、麻の分布はユーラシア全体に渡っているため、また本稿での議論に直接関係しないため、ここでは特に文化圏の設定は行わない。

### 第3節 毛織物文化と絹織物文化の遭遇—シルクロードにおける織物文化隆盛への道

#### 1. 絹織物の毛織物文化圏への伝播—とくに経錦の西伝

先に、中国産の絹織物が北方へもたらされ、さらに西の方へ運ばれる状況に触れたが、戦国時代以降、とりわけ漢代では経錦が北方や西方へ運ばれ珍重された（地図2）。

運ばれた絹織物は北はシベリアのパズィルク(Пазырк)墳墓群<sup>38</sup>、モンゴル本土のノインウラ(Noin-Ula)墳墓群<sup>39</sup>で発見され、次いで草原の道を経たものはクリミヤ半島ケルチのパンティカパイオン(Пантикапей)古墓群<sup>40</sup>、ウクライナのサカロワ(Соколова)古墳<sup>41</sup>で発見された。更に遠く絹糸や絹織物はドイツ・イギリスまで届いていた<sup>42</sup>。オアシスの道を経たものは楼蘭<sup>43</sup>や尼雅(ニヤ)<sup>44</sup>、シリアのパルミラ(Palmyre)遺跡で発見された<sup>45</sup>。更に西へ運ばれ、ローマではミイラが絹を纏って発見された<sup>46</sup>。

パズィルク古墳から出土した絹織物は、戦国時代の楚の墓から出土した錦や刺繍<sup>47</sup>と同様の織物である。ノインウラ古墳からは漢代の錦・綾・刺繍が出土している。これらの絹織物は中国から匈奴に贈られたものが、今日まで保存されたのである。さらに西へは1世紀のサカロワ古墳群から金糸の刺繍と共に漢錦や絹平織が出土している。また、ギリシャ植民都市パンティカパイオン、現在はケルチ(クリミヤ半島)の墓から紀元1-2世紀の菱文平地綾が出ている。その他シリアのパルミラから漢の錦・綾・平織が出土し

---

88-89; Fujii, Sakamoto and Ichihashi 1996, pp. 158-159.

<sup>38</sup> シベリアのアルタイ山地にある紀元前5-3世紀の古墳群で、経錦・絹刺繍の他に西アジア製の毛綴織・絨毯・フェルトが出土している(Rudenko 1970, p. 206).

<sup>39</sup> モンゴル本土にある紀元前1-紀元後1世紀の匈奴の古墳群で、経錦・平地綾・絹刺繍の他に毛綴織・毛刺繍が出土する(梅原 1960, pp. 72-83, 図版 14-48; Лубо-Лесниченко 1961, pp. 3-66, 図版 1-53).

<sup>40</sup> クリミヤ半島にあるギリシャ植民都市に始まる紀元前5世紀-後3世紀の遺跡で、平地綾の外に毛綴織・毛平織が出土している(Герцигер 1973, p. 95).

<sup>41</sup> ウクライナにある紀元1世紀のサルマートの古墳群(Елкина 1986, pp. 132-135).

<sup>42</sup> 絹糸・平織・綾が発見されている(Wild 1984, pp. 17-21).

<sup>43</sup> タリム盆地のロプ湖畔に栄えた紀元前2世紀-後4世紀の楼蘭王国の遺跡で、漢錦・綾の外、毛綴織絨毯などが出土している(Stein 1928, pp. 192-203, pp. 225-258).

<sup>44</sup> 尼雅遺跡はタリム盆地南辺にある紀元1-5世紀の遺跡で、漢錦・綾・「河内郡」縑の外、毛錦・絨毯などが出土する(武 1962, pp. 64-75; 『尼雅遺跡報告書』1999, pp. 110-119, pp. 134-139; 于 1999, pp. 320-326; 坂本 1999, pp. 327-334; 『沙漠王子遺宝』2000, p. 101).

<sup>45</sup> Pfister 1934, pp. 6-46; Schmit-Colinet 1995, pp. 106-113; Schmit-Colinet, Stauffer & Al-As' ad 2000, pp. 106-107, pp. 137-142, pp. 145-146, pp. 155-159, pp. 188-190, 図版 73-97.

<sup>46</sup> Ascenzi and others 1996, p. 211, p. 215.

<sup>47</sup> 『楚墓』彩版 13・22-23.

ている。

紀元2世紀頃まで地中海東部（ローマ帝国東方領・パルミラ）には中国が生産するような絹織物は存在しなかった。そこでこの地域では、プリニウス(Pliny)が述べるように「セーレスの絹（中国の絹）をほぐして更に織り直」したり<sup>48</sup>、ルカヌス(Lucan)が述べるように「セーレスの杼で密に織られた絹をエジプトのお針子が解いてゆるくした」りして<sup>49</sup>、絹織物を得ていた。このような加工の手間を加えていたのは、中国の絹織物、特に経錦は密に織られているので、一旦ほぐして平織や斜文織に織り直すことで3倍以上の大きさとなり、多くの利を得ることが出来たからである。『三国志』巻30、魏書、魏略、大秦（ローマ）の条には「常利得中国絲，解以為胡綾，故數與安息諸国交市於海中」<sup>50</sup>（中華書局標点本，p. 861）とあるように、ローマ帝国領では胡風の綾すなわち異国風の斜文織が織られたのである。

また寺院保存資料から毛織物に絹糸で綴織が織り込まれたりしたことが知られている。上記のような中国の絹を利用した実物資料はローマの寺院やパルミラ出土資料に見られる<sup>51</sup>。

中国の絹がローマ帝国に運ばれるには二つのルートがあった。まず上記『三国志』からわかるように、ローマは中国の絹糸を安息（パルティア）を経て購入していた。「海中」というのはペルシア湾か黒海、或いはパレスチナとアナトリアに面する地中海最東部海域のことであろうか。しかし、安息の中間搾取を避けようとしたのであろう。安息の領域であるペルシア～メソポタミア～コーカサス南部地方を避け、迂回する別ルートについて『エリュトウラー海案内記』は次のように伝えている。

中国の絹糸や絹織物は、陸路バクトラを経てインドへ南下する道、あるいはチベットを経てガンジス川に出る道をたどり、まずインドに運ばれた。次にインド西岸のバルバリコン(Barbarikon)、バリユガザ(Barygaza)、ムージリス(Mūziris)からアラビア海を通り、紅海のベレニーケー(Berenīcē)やアブシャール(Abushar)などの港に上陸して、ナイル川によって地中海に出、地中海沿岸各地に運ばれた<sup>52</sup>。すなわちこれはいわば紅海ルートである。

## 2. 緯錦の成立とその東漸

やがて西方において、中国から到来した経錦の顕紋法（文様を表す方法）に範を得たのであろう、綴織に次ぐ新たな多色文織物として緯錦が織り出された。緯錦とは、経糸

<sup>48</sup> Rackham 1969, p. 379.

<sup>49</sup> Duff 1969, p. 601.

<sup>50</sup> 書下し「常に中国の絲を利得し、解きて以て胡綾と為す。故にしばしば安息諸国と海中に交市す。」；訳「(大秦は)いつも中国の絹糸を買って利を得、糸を解いて胡風の綾を織る。故にしばしば安息らの諸国と海上で交易をする。」

<sup>51</sup> Pfister 1934, p. 42; Granger-Taylor 1987, pp. 16-17

<sup>52</sup> 村川 1948.

で文様が表される経錦とは違って、経錦を 90° 回転した織組織で、緯糸で文様が表される錦である。緯錦には地組織の違いによって平組織緯錦と綾組織緯錦がある。緯錦と経錦については、染織用語解説に詳しく記述しているので参照されたい。これらの緯錦の成立時期と地域については若干の研究があるので、筆者の見解も交えながら、以下に具体的に出土例を挙げつつ紹介したい。なお、以下の各編において緯錦に関する叙述では、毛織物の場合のみ「毛平組織緯錦」のように繊維を明記し、特に繊維への言及がない場合は絹のそれを指す。

1975 年、リブー(Krishna Riboud)はスタイン発見のアスターナ出土動物雲気文錦(怪獣文錦, Ast. vi 1.03 表 1, 図 1) およびその他の若干の錦を取り上げ、それらの経糸には中国の伝統的な絹糸には決して見られない強い Z 撚りの紡ぎ糸が用いられているという共通点があることを指摘した<sup>53</sup>。そして、それらの錦は経錦の技法で織られた漢代の特徴的な錦、すなわち漢錦の文様の影響を受けているところから漢錦に続く年代のものであるとみなす一方、それまでの漢錦とは違った織り方で製作されたもの、すなわち緯錦であると主張した。さらにリブーは経錦から紡ぎ糸の緯錦へという技術の移行に注目し、その緯錦の発祥の地はどこかという疑問を投げかけた。

リブーの提出した緯錦の成立問題は、横張和子におおいに影響を与えた。1992 年、横張は「丘慈錦」と「疏勒錦」と呼ばれる錦について論じる中で<sup>54</sup>、平組織緯錦が毛織物の影響のもとに織り出されるようになったのであるという見解を示し、その発祥の地はガンダーラであると推定した<sup>55</sup>。

これに対して筆者は 1993 年の論文で、緯錦発祥の地をガンダーラよりはるか西方に位置するエジプトの東地中海沿岸アレクサンドリアに求めた<sup>56</sup>。なぜなら、エジプトの 1-3 世紀前半の遺跡モンズ=クラウディアヌス(Mons Claudianus)で平組織緯錦の技法で織られた最古の毛織物が出土しているからである<sup>57</sup>。

文献史料においては『エリュトウラー海案内記』に「ポリュミタ(polymita)」がインドへ海路でもたらされたことが記述されていて、その「ポリュミタ」について、プリニウスの『博物誌』では、それは多くの糸で織られ、アレクサンドリアで織り出されたと述べられているのである。ポリュ(poly)は「多くの」を意味し、ミタ(mita)は糸そのものより「糸で作られた綜統」を意味すると推定され、「ポリュミタ」は緯錦を指すと考えられている<sup>58</sup>。筆者も同じ見解である。『博物誌』や『エリュトウラー海案内記』が著された 1 世紀という時期において、西方産で多くの綜統を必要とする織物と言え、織

<sup>53</sup> Riboud 1975, pp. 13-40.

<sup>54</sup> 横張 1992, pp. 167-179. 「丘慈錦」や「疏勒錦」については本稿第 2 編で取り上げる。

<sup>55</sup> 後年の長沢 / 横張 2001, p. 136 ではレヴァント地方になっている。

<sup>56</sup> 坂本 1993, pp. 239-240; 2004b, p. 5.

<sup>57</sup> Archaeological Textiles News Letter, 1991, p. 8; Bender-Jorgensen 2000, p. 257; Ciszuk, 2000, pp. 265-275.

<sup>58</sup> Lamm 1937, pp. 10-11. polymita の mita の解釈については議論がある。筆者は織物技術および織

組織から考えて平組織緯錦以外にないからである。

平組織緯錦の技法は、モンズ=クラウディアヌス出土錦のようにまず毛織物に用いられ、次に絹織物にも取り入れられて、地中海東岸に広まったものと考えられる。その証拠にドゥラ=エウロポス(Dura-Europos)の遺跡から3世紀の絹の平組織緯錦が出土している。そしてこの織り技術が東へ伝播し、タリム盆地周辺都市にも至ったことは、やはり出土物から確認できる。そこで織り出されたのが3-4世紀のニヤ出土人物葡萄文や亀甲四弁花文<sup>59</sup>の毛平組織緯錦と、先にリブーが取り上げた4世紀のアスターナ出土動物雲気文錦(Ast. vi 1.03, 表1, 図1)など紡ぎ糸の錦なのである。

さて以上のような平組織緯錦に続いて、斜文組織を用いた綾組織緯錦が、斜文織の技術の早くから発達した毛織物文化圏に位置する地中海東岸において発展するのは時を待たなかったと思われる。多様な出土資料からみると、地中海東岸～西アジア、特にエジプトやシリア・メソポタミアは織物生産が盛んであった。上述の出土例からも分かる通り、地中海東岸では古代から織られた平織・斜文織・綴織に加えて1-2世紀に毛の平組織緯錦が織り出され、3世紀には絹の平組織緯錦が織り出されたが、つづいて絹の綾組織緯錦も織り出されたことがスイスのアベック財団収集品の例から知られている。この綾組織緯錦は4世紀頃とされている<sup>60</sup>。

これらのシリアやメソポタミアといった地域の一部は旧来ローマの勢力下にあったが、ササン朝ペルシアとの係争地でもあった。やがてローマがササン朝ペルシアに敗退し、ササン朝ペルシアの領土が西に広がった時、シャープールII世(Shapur II, 309-379)の命によってメソポタミアのアミダ(Amida)や他のシリアの町からペルシアのフージスターン(Khusistan)にあるカルカ=デ=レーダン(Karka de Ledan)の王室工房に織工が移された<sup>61</sup>。また、900年頃に書かれた著書の中でマスーディ(Mas'ūdī)<sup>62</sup>は、スーサ(Susa)やスースター(S'ūs'tar)の絹織物業が急に発展したのはシャープールII世の治世に多くの織工をシリアから連れてきたからであると述べている<sup>63</sup>。このようにしてペルシアでも綾組織緯錦が織り出されるようになったのである。

毛織物文化圏で成立したこの綾組織緯錦は、ペルシア錦<sup>64</sup>という形をとってその後、

---

物史の観点から綜説を取る。

<sup>59</sup> 『絲綢之路』1972, 図15・16.

<sup>60</sup> 横張 2001, p. 120.

<sup>61</sup> Otavsky 1998, p. 159.

<sup>62</sup> マスーディは956年頃没したとされ、イスラム世界屈指の大旅行家である。著書『黄金の牧場と宝石の鉱山』はローマから中国に至る歴史、地理、地誌、民族史の宝庫である。

<sup>63</sup> Geijer 1964, p. 23.

<sup>64</sup> 染織研究者の間ではペルシア錦という語は通常、イランにおいてペルシア文化が隆盛を極めたササン朝時代とサファヴィー朝時代にペルシアで織られた錦を指すが、本論文ではササン朝時代と9世紀頃までの錦に対してこの語を用いる。なお、ササン朝のペルシア錦と区別するために17-18世紀のペルシア錦を指すサファヴィー朝ペルシア錦という用語もある。一方第2編で取り上げる「波斯錦」は漢文化の下ではほぼ5世紀から10世紀の間に使用された史料用語である。染織研究者の間でいわれるペルシア錦と混同しないように注記する。

その現物のみならず技術、デザインが東漸し、中央アジア・中国、更には日本といったペルシア以東の地域における織物文化に多大な影響を与えることになる。その詳細については第2編における重要なテーマとして取り上げ、また第4編の「トゥルファン出土染織資料にみる織物の発展史」でも言及する予定である。

## 第4節 トゥルファンの位置づけ

### 1. 地理的・歴史的な位置づけ

トゥルファンはタリム盆地東北部に位置し、漢代以来、北方の遊牧民と東方の中国との係争地となってきた。5-6世紀にかけては入植してきた漢人たちによって高昌国と呼ばれる独立王国が建てられ、7世紀の半ばには唐の支配下に入り西州と呼ばれた。また9世紀後半にはモンゴリアから西遷してきたウイグル人による西ウイグル王国がこの地を領有し、その命脈は13世紀初頭にモンゴル（大元ウルス）にすすんで服属するまで続いた。モンゴル支配時代にはウイグルスタンと呼ばれ、当初は半独立的地位を保ったが、徐々にチャガタイ=ウルスに包含されていった。

トゥルファンはシルクロードにおける東西交易の拠点の一つであり、すでに高昌国時代にはソグド人集落が存在したことが確認されており、都城内には対外交易の窓口ともなる「市」が設置されていた<sup>65</sup>。西ウイグル王国時代以降、ソグド人の交易ネットワークはソグド系ウイグル商人に継承され、更にモンゴル時代のオルトク商人の活躍へとつながってゆくが、その10世紀前後から13-14世紀にかけてのウイグル=ネットワークにおいてもトゥルファンは重要な拠点であった<sup>66</sup>。

トゥルファンは、織物文化の観点から眺めれば、東地中海・西アジアから中央アジア・南シベリアに至る広大な毛織物文化圏の東端に位置しており、一方で絹織物の本拠地である中国がその東方に控えていて、絹織物文化圏の直接的な影響下にあった。トゥルファンは毛織物文化と絹織物文化の重要な交差点でもあった。

### 2. トゥルファン出土染織資料の研究の意義

トゥルファン出土の染織資料は、初めに述べたように年代が南北朝からモンゴル時代にまで亘っており、その質や量の豊かさは前近代におけるユーラシアの他の地域・遺跡の追従を許さない。シルクロードの要衝であったトゥルファンのこれらの資料を調査することで、この地において必ずや交差したであろう東西の技術やその進歩、それに伴う文様の発展も克明に読み取ることができるのである。すなわち技術や文様の伝播、それによって引き起こされる受け手側の技術の進歩、さらにそれによって可能となった新しい文様の出現や、また異文化との遭遇による文様の混合と変容にともなう複雑化といっ

---

<sup>65</sup> 荒川 2003, pp. 31-39.

<sup>66</sup> 森安 1997, pp. 93-119.

た織物文化の東西交流の実像が明らかにできるのである。トゥルフアンという一地域の出土資料の中に、シルクロード東西の織物生産地における織物の歴史が凝縮しているのである。

## 第2章 トウルフアン出土染織資料の概観

### 第1節 中央アジア探検隊によるトゥルフアン調査—19世紀末から20世紀初

19世紀末に始まる中央アジア探検は、この地における覇権を争うヨーロッパ列強の政治的・経済的目的のもとに行われたものであった。そのような中であってヨーロッパ世界の学術的関心を高める直接のきっかけとなったのは、英領インド陸軍情報部将校のバウワー (H. Bower) 大尉が1890年クチャで取得した文書であった。その文書によって新疆に仏教文化や印欧系言語の遺物が存在するという事実が確認されたのであった。この情報に接して、研究者の間に中央アジア探検の機運が高まり、19世紀末から20世紀初頭にはイギリス・フランス・ドイツ・スウェーデン、及びロシアが国家規模の探検隊を送った。また日本でも西本願寺の大谷光瑞門主が仏典のルーツと伝播の道を求めて調査隊を組織した。中国では黄文弼が各国より遅れて1927年西北科学調査団を組織し、新疆に入った。以上のうちトゥルフアンの染織資料と深く関わるのは、イギリス・ドイツ・日本の探検隊の成果であった。

#### 1. イギリス調査隊—スタイン

イギリスのスタインは、1900年から1916年まで計3次にわたって中央アジアを探検し、多くの文化遺産を発見した<sup>67</sup>。トゥルフアン地区に入ったのは、第3次探検が遂行された1913-1916年の途中の1914年である<sup>68</sup>。そこでスタインは、カラホージャを基点に、高昌故城・トヨク石窟・ムルトウク（挿図1参照）で幾つかの染織品を得、アスターナの古墓を発掘し、多量の染織品を発見した<sup>69</sup>。

スタインはタリム盆地南辺の尼雅・楼蘭や敦煌の染織資料について、1921年に *Serindia*<sup>70</sup> で報告していたが、トゥルフアンの染織資料については、尼雅・楼蘭・敦煌の染織資料の調査において得ていた織組織の分類法をそれらの織物分析にも採用し、1928年に *Innermost Asia* で報告した。

スタイン将来のトゥルフアン染織資料の主たるものはアスターナで発掘された。アスターナ墓群では Ast. i ~ x と番号されるが、それぞれの古墓の年代を示唆する出土資料

<sup>67</sup> 1930-31年の第4次は状況悪化のためほとんど収穫はなかったという。Cf. 渋谷 2000, pp. 320-323.

<sup>68</sup> 梅村 1996, pp. 86-89; Stein 1928, p. 566.

<sup>69</sup> Stein 1928, pp. 587-718.

<sup>70</sup> Stein 1921.

と主な染織資料の関係は表1に示した通りである。アスターナの資料以外にはトヨクから綾が1点出土している。



挿図 1. トウルファン地域

それらの資料は現在、大英博物館、ヴィクトリア&アルバート美術館、インド国立美術館に分蔵されている。主要な図録としてはスタインの上記報告書のほか1970年発行の紫紅社『シルクロードの染織』、1984年発行の講談社『西域美術』3、2007年発行『敦煌絲綢芸術全集』がある。1970年発行の図録はインド国立美術館所蔵の資料を収録し、1984年発行の図録は大英博物館所蔵の資料を収録している。

## 2. ドイツ調査隊—グリェンヴェーデルとル=コック

スタインに次いでドイツのグリェンヴェーデル (Albert Grünwedel) とル=コック (Albert von Le Coq) は1902年から1914年にかけて合計4次の探検を行い、第1次から第3次にかけてトゥルファン地区で高昌故城・カラホージャ・センギム・ムルトウク・トヨクを発掘し、幡を含む多量の染織品を発見した<sup>71</sup>。

ドイツ隊はトゥルファンの出土資料のうち彫塑、マニ教関係の幡画、建築遺構、仏教

<sup>71</sup> Bhattacharya-Haesner 2003, pp. 18-21.

やマニ教の壁画について調査し、研究結果を発表したが、幡以外の染織資料は 1913 年に発行されたル=コックの *Chotscho* の中に 20 断片が発表されたに過ぎない<sup>72</sup>。その当該ページには写真入りで 20 断片の錦・綴織・刺繍・染め物について材質・出土地点が書かれ、ファルケ (Ritter von Falke) の解説が加えられている。

このようにドイツ隊発見の染織品はル=コックの *Chotscho* の中で僅かな資料について触れられたのみであった。筆者の知る限りでは、その後アッカーマン (Phyllis Ackermann) がベルリンの民族学博物館に資料が保存されていた時に 2 点調査したが<sup>73</sup>、殆どの資料は 90 年後に調査して発表されるまでベルリンのインド美術館 (現アジア美術館) の倉庫に眠ったままであった。その後、2003 年に発表されたバッタチャリア=ヘスナー (Chhaya Bhattacharya-Haesner) によるトゥルファントルファンの幡に関する図像学的研究と並行して、幡に使用されている染織品についての本格的な調査がようやく行われた<sup>74</sup>。まず染織品の調査にあたって織技術の分析を行ったのはシュロッター (Barbara Schröter) であるが、さらに未調査の染織資料については筆者と木村光雄が共同して繊維素材ならびに織技術の分析を行い、文献史料も併用した考察結果を報告した。それらの調査報告は、バッタチャリア=ヘスナーの著作に附録として掲載されている<sup>75</sup>。

### 3. 日本—大谷探検隊

日本の大谷探検隊は、ドイツと同時期 1902 年から 1914 年にかけて合計 3 回の探検を行った。トゥルファン地区での発掘は主に 1910-1914 年の第 3 次に行われ、大谷探検隊の橘瑞超が 1910 年と 1911 年にトゥルファントルファンのヤールホトヤールホトの西の墓地やアスターナの北にあるサイの古墓を発掘した<sup>76</sup>。その後、橘は 1912 年に別働隊の吉川小一郎と敦煌で出会い、再度、トゥルファン地区に来て、チコトン・センギム・トヨク・カラホージャ・アスターナ・ヤールホトを発掘したが<sup>77</sup>、主要な染織資料はカラホージャやアスターナの発掘で得たものと思われる。

大谷探検隊の収集染織品は、1915 年発行の『西域考古図譜』に掲載されたが<sup>78</sup>、それらは第 2 次までの収集品であったので、クチャヤムルトッククチャヤムルトックの出土染織資料の写真は掲載されているものの、第 3 次にトゥルファントルファンで発掘された染織資料の写真は掲載されていない。その後、収集資料は分散の憂き目に会い、龍谷大学大宮図書館、中国の旅順博物館、韓国国立中央博物館、東京国立博物館、天理参考館そして個人のもとに所蔵されている。

<sup>72</sup> Le Coq 1913, pp. 49-52; 勒柯克 1998, pp. 138-142.

<sup>73</sup> Pope & Ackerman 1964, pp. 2030-2031.

<sup>74</sup> Bhattacharya-Haesner 2003.

<sup>75</sup> Schröter 2003, pp. 477-489; Sakamoto & Kimura 2003, pp. 491-496.

<sup>76</sup> 大谷探検隊のこの調査に関しては、大谷探検隊自身による報告はないものの、以下の Stein の報告書の中で言及されている (Stein 1928, p. 587, p. 642).

<sup>77</sup> 藤枝 1989, p. 110; 吉川 1937, pp. 557-715.

<sup>78</sup> 『西域考古図譜』上 1915, 染織刺繍 1-7.

龍谷大学大宮図書館所蔵の錦・綾・平織・染め物、ならびに個人蔵の樹下対鹿文錦については1963年に龍村謙が調査報告を行っている<sup>79</sup>。以降も展示カタログや一般向け染織図版集に取り上げられ解説が付されたが、その内容は龍村の域を出ることなく、研究が進んだとは言い難い。その後、1990年代に入ってより本格的な分析が行われることになり、1990、1995年に横張和子が天理参考館や東京国立博物館所蔵の数点について調査・発表した<sup>80</sup>。続いて1996年に筆者が龍谷大学大宮図書館の染織資料18点を詳細に調査し、検討を加えて発表した<sup>81</sup>。

## 第2節 中国による発掘調査—20世紀後半から

中国においては1949年の中華人民共和国の成立後、それまでは黄河流域と揚子江流域に限られていた考古学の発掘が中国各地で盛んに行われるようになった。かつてル=コックやスタイン、大谷探検隊が新疆で発掘を行った頃、新疆地区には何の文物考古組織もなく、新疆の考古調査や研究に携わる学者は極めて少ない状態であった。1953年西北文化局のもと新疆全域の文物の状況について一斉調査が行われ、1956年になって自治区レベルの文物考古組織、文物保管組織が設けられ専門要員が配備された<sup>82</sup>。

### 1. カラホージャ・アスターナ墓群の発掘調査

トゥルファン地域では1959年から1975年までの間に、考古作業がアスターナ及びカラホージャの発掘をあわせて計13回行われ、古墓400基近くが発掘調査された。その結果3世紀から8世紀に至る文書や晋から唐に至る文物が発見され、当時のシルクロードを研究する上で極めて貴重な実物資料が提供された。特に染織資料は豊富で、我々は文献にみられた錦・綾・羅・繡や蠟纈・夾纈・絞纈などの実例として、文献だけでは知り得なかった当時の文様や技術を具体的かつ詳細に知る材料を数多く得ることが出来るようになった(表2)。その上、スタインの将来した資料に比べると、墓誌や伴出文書に記された年代によって、かなりの資料の年代を特定出来る点でも極めて貴重である。

出土染織資料はまず中国の研究者によって調査され、公表された。第1次の発掘が行われた1959年の翌1960年に新疆維吾爾自治区博物館によって発掘簡報が出され、1959年発掘の3墓域より各2基、計6基[TAM(アスターナ墓略称)301-306]の染織資料を含む出土文物が報告された<sup>83</sup>。発掘簡報によると、染織資料は錦・綺<sup>84</sup>・絹と麻布が出

<sup>79</sup> 龍村 1963, pp. 25-44.

<sup>80</sup> 横張 1990, pp. 257-281; 1995, pp. 177-195.

<sup>81</sup> 坂本 1996a, pp. 65-109.

<sup>82</sup> 『中国考古三十年』1981, p. 170.

<sup>83</sup> 新疆維吾爾自治区博物館 1960, pp. 13-21.

<sup>84</sup> 史料上に現れる「綺」の解釈には諸説あり(第4編第1章第4節参照)、かつ現代中国語の「綺」と入り混じって紛らわしい。本稿では中国語の報告書・論文中で用いられた「綺」については

土し、各資料の文様・色・サイズが示された。

1960年、第2次発掘が行われ、30基の墓 [TAM307-336] が発掘された<sup>85</sup>。続いて同年、第3次発掘が遂行され<sup>86</sup>、4基の墓 [TAM337-340] が発掘された。絹・綺・錦・縑・刺繍・紗の絹織物の外、麻布・棉布・麻棉混紡・絲棉混織が見出された。

1962年には新疆博物館（新疆維吾爾自治区博物館）の武敏によって、出土染織資料のより詳細な調査結果が発表された<sup>87</sup>。この報告では、1959年に発掘された尼雅を含む計41の墓のうち21の墓から錦が出土したとされている。そのうち、尼雅のものは漢錦、アスターナのものは6～7世紀（高昌～唐）の錦であるという。

更に年を追って発掘が続けられた。1963年から1965年にかけてアスターナで42基 [63TAM1-3, 64TAM4-37, 65TAM38-42]、カラホージャで14基 [64TKM（カラホージャ墓略称）1-14]の墓が発掘された<sup>88</sup>。そのうち45基が調査され、墓は晋から南北朝中期（紀元3世紀中葉 - 6世紀初め）、南北朝中期から初唐（紀元6世紀初め - 7世紀中葉）、盛唐（紀元7世紀中葉 - 8世紀中葉）の三期にわたっていた。染織品としては刺繍・錦・織成・綺、印花・絞（纈）纈・素絹・彩絵絹等の絹、麻布、棉布、毛織物が発見された。

1966年から1969年にかけてアスターナで105基の墓を墓番号TAM43-147に番号し、10基を除いて95基を発掘、カラホージャで40基の墓を墓番号TKM15-54に番号し、未発掘の30基を除き10基を発掘、合計105基を発掘した。しかし、そのうち12基は盗掘され、空であった<sup>89</sup>。これらの墓群は前回と同様に晋から南北朝中期、南北朝中期から初唐、盛唐の三期にわたっていた。染織資料は錦・綺・紗、蠟（臈）纈・絞（纈）纈・その他の染纈といった染色品を含む絹 計46資料が調査され、織物のサイズ・組織・文様・年代が表にまとめられた。

1966-1969年の発掘では地名の書かれた麻布が出土した。それらはTAM108墓出土の開元9年(721)鄖県（現在の湖北省）の庸調布、TAM96墓出土の蘭溪県（現在の浙江省）で課された脚布（雑税）、陵州（現在の四川省仁寿県）の文字が書かれた麻布である。中国本土で織られた麻布がトゥルファンまで届いていた貴重な資料であるが、これについては第2編第3章第1節で後述する。

1966-1969年発掘の一連の墓群は番号TAM43-147にあたるが、1967年にはその中には番号されていないTAM363号も発掘されている<sup>90</sup>。同墓からはヤズデギルド像のペルシア銀貨や665年から710年の間の文書が出土した。染織資料は麻布・絹・錦がそれぞれ1資料ずつ発見され、サイズ・糸密度が報告された。

---

以下原語の通り記載することとする。

<sup>85</sup> 新疆博物館考古部 2000a, pp. 1-65.

<sup>86</sup> 新疆博物館考古部 2000b, pp. 66-83.

<sup>87</sup> 武 1962, pp. 5-10, pp. 64-75.

<sup>88</sup> 新疆維吾爾自治区博物館 1973, pp. 7-27.

<sup>89</sup> 新疆維吾爾自治区博物館 1972a, pp. 8-29, 図版 9.

<sup>90</sup> 新疆維吾爾自治区博物館 1972b, pp. 7-9, 図 1-8.

1972-1973年、新疆博物館考古隊と吐魯番文物保管所によって第10次の発掘がアスターナで行われた<sup>91</sup>。第10次はTAM148-157, 159-165, 167-171, 173-190, 194, 195, 200-205, 209, 215-218, 223, 225-231, 233, 234の計63基が発掘された。これらの墓は麴氏高昌国の張氏一族の墓域を含んでいる。63基の年代は高昌郡時代、麴氏高昌国時代、唐西州時代にわたっている。染織資料は錦・綺・綾・絹・紗・羅・刺繍・印花・夾纈・絞纈など絹織物の外、棉布や麻布が発見された。

第10次発掘で出土した麻布の布団や被い布に梁州（現在陝西省）や宣州（現在安徽省）の文字が見られ、スカートの絹裏地に益州（現在四川省）の文字が見られる。これらはトゥルファンで仕立てられたと考えられるが、前述の地名入りの麻布同様、中国本土から来た布や絹を使用したのである。

1973年春に第11次発掘が行われ、20基の墓が発掘された<sup>92</sup>。それらは張氏の墓域である。墓はTAM116, 191-193, 196-199, 207, 208, 211-214, 221, 222, 232, 236-238に番号された。これらの墓は麴氏高昌国時代、唐西州時代にわたっている。出土染織資料は錦・綺・綾・羅・絹・紗・刺繍・染め（印花・絞纈）など絹織物の外、棉布や麻布と多彩である。

1973年の9月に第12次の発掘が行われ、以前に番号されてはいたものの未発掘であったTAM113-115, 206, 210, 224とTAM501-532計38基の墓が発掘された<sup>93</sup>。その中の206号墓は張雄夫婦合葬墓である。墓誌には延寿十年（633年）の張雄の死と垂拱四年（688年）の妻麴氏の死、永昌元年（689年）埋葬の記録がある。出土染織資料は表裏相反する色を呈する双面錦と錦および緯糸が報告されている。

1975年の第13次発掘によってカラホージャ・アスターナの発掘計画は終了した。しかし、実際には1979年に建築のため土を取ったところ発見されたアスターナ382号墓の発掘があり、これをもって一応の終了をみたといえる<sup>94</sup>。

以上のようなカラホージャ・アスターナ以外のトゥルファン出土染織資料としては、廃寺や仏教石窟が点在する勝金口（センギム=アグズ）<sup>95</sup>の仏寺遺跡から錦が1点発見されている<sup>96</sup>。

以上の染織資料は主に新疆維吾爾自治区博物館で所蔵され、一部は吐魯番博物館で所蔵されている。カラホージャ・アスターナ出土染織資料の主なものは『絲綢之路』<sup>97</sup>『新

<sup>91</sup> 新疆文物考古研究所 2000a, pp. 84-167.

<sup>92</sup> 新疆文物考古研究所 2000b, pp. 168-214.

<sup>93</sup> 新疆維吾爾自治区博物館, 西北大学歴史系考古專業 1975, pp. 8-18.

<sup>94</sup> 新疆吐魯番地区文管所 1983, p. 19.

<sup>95</sup> 黄 1994, p. 18.

<sup>96</sup> 公式の考古報告はなく、新疆維吾爾自治区博物館の情報提供により染織資料を調査した横張や筆者による以下の調査報告があるのみである（坂本 2000a, p. 124, pp. 136-137; 横張 2000, p. 196）。

<sup>97</sup> 『絲綢之路』1972.

疆出土文物』<sup>98</sup>に図版として掲載され、勝金口の出土染織資料を含むカラホージャ・アスターナ出土染織資料の50余点が『シルクロード学研究』<sup>99</sup>に掲載されている。そのほか武敏著の『織繡』<sup>100</sup>や『中華五千年文物集刊 織繡篇』<sup>101</sup>の中に織物の写真が掲載されている。

### 第3章 染織資料調査、研究法の確立と発展

#### 第1節 19世紀末—20世紀初めの発掘資料の到来と近代的研究の幕開け

前章で概観したとおり、19世紀末に始まる中央アジアの考古学調査は大量の染織資料をもたらしたが、その結果それらの分析研究においても新しい視点や手法が必要とされるようになった。

##### 1. 伝統的な伝世資料の研究

ヨーロッパでは従来から染織品に対する関心が存在したが、それは教会に残る聖人にまつわる染織品を聖なるものとして信仰の対象とするか、あるいはヨーロッパの博物館や古裂コレクターによる文様鑑賞を目的とする収集といった段階にとどまっていた。また、それらの染織品はあくまで聖人にかかわる伝世品であり、その来歴も伝承にもとづくものが多いため、染織品の歴史的研究が行われる場合もそこには一定の限界があった。

そのような状況のもと1913年にファルケ(Otto von Falke)は主にヨーロッパの博物館や寺院に所蔵される古典古代から19世紀に至る数多くの織物を網羅し、他の工芸品の文様と比較しながら、織物の年代や製作地を検討し分類した<sup>102</sup>。ファルケ以降の論文やカタログでは、しばしば、彼の図版ナンバーが参考として挙げられることから分かるように、ファルケの研究はヨーロッパにおける伝統的染織資料研究のひとつの到達点であった。

##### 2. 発掘資料の到来

その当時ようやく、エジプトや中近東、そして中央アジアから考古学的発掘による染織資料がもたらされつつあった。従来、主として文様や様式に基づいて行われてきた染織研究において、それらの新たに登場したエジプトやアジアの古代、中世という全くの異領域の織物を扱わねばならない困難は十分に想像できよう。

例えば、スタインは出土染織品について織り技術にも注目し、他の探検隊に比べかな

---

<sup>98</sup> 『新疆文物』1975.

<sup>99</sup> 『シルクロード学研究』2000.

<sup>100</sup> 武 1992.

<sup>101</sup> 『中華文物集刊』1988; 1992.

<sup>102</sup> Falke 1913.

り詳細な報告を残しているが、錦の織組織に関して、前述したような経糸で文様が織り表された「経錦」か、緯糸で文様が織り表された「緯錦」か、といった重要な問題については表現に曖昧な点があった。適当な用語や概念が当時存在しなかったからである。スタインの報告の後、他の研究者は、文様が経糸で表されているか緯糸で表されているかに関心を寄せるようになったが、その時点でも、まだ経錦や緯錦をしめず染織用語は存在しなかった。

この様な状況の中で、染織品の報告や研究発表の際に一定の概念を共有する必要性が生じ、学術用語の創出やその国際的統一の動きが起きたのは自然のなりゆきであった。

### 3. 国際学会—CIETA の設立

1954 年、ヨーロッパを中心とした染織研究者が集まって、フランスのリヨンに本部を置く古代染織研究国際センター (Centre International d'Etude des Textiles Anciens, 略称 CIETA) が設立された。それは国際学会が創設されたことを意味している。CIETA は各国毎の活動を学会や CIETA の紀要で一つにまとめることを目的とし、そのためにも用語の統一を図り、1959 年染織用語集を編纂した。そして 1971 年には版を増補した。また、それに先立ち CIETA は 1957 年に染織品の調査記録の書式を定めた。これは染織資料を調査するときの調査項目の指針となった。日本においても CIETA のメンバーである研究者は筆者も含め、この方針に従って、先ず調査のデータを挙げ、製作地や製作年代の検討を行っている。

さてフランス語で編纂された用語集は各国語に翻訳されたが、文字による説明だけで非常にわかりにくかった。そこで、1980 年に CIETA の用語集に更に用語を追加して英語で出版された *Warp & Weft* では、図や写真が加えられた<sup>103</sup>。また 1999 年になって CIETA の用語集はようやく日本語に翻訳されたが<sup>104</sup>、そこには日—仏—英、英—仏—日の索引と CIETA の組織図集が付されている。

このように改訂・改編が重ねられた CIETA の用語集であるが、それでもなお古代・中世のアジアにおける染織資料の多様さに応じきれないきらいがあった。これを補うのが、1999 年に出版された趙豊『織繡珍品』である。この書に付された織物の分類と解説では CIETA の用語解説も踏まえた上で東洋的な織物技術の理解に立脚した分析が行われており、さらに中国語と英語で書かれているため国際的な用語集としての機能も備えている<sup>105</sup>。また分類に際しては CIETA の織物のカテゴリーにない織組織、例えば繻子地の遼代錦といったより後期に出現する織組織をも組み込むまでに至っているが、これらは 1950 年代に始まる中国の考古学的発掘によってもたらされた新出土染織資料とその調査研究の成果が十分に反映された結果であるといえよう。

---

<sup>103</sup> Burnham 1980.

<sup>104</sup> 『織物用語集』 1999.

<sup>105</sup> 趙 1999, pp. 328-349.

一方、1960年に日本において正倉院の錦に関する報告がなされた<sup>106</sup>。この報告書中第二章の織組織の調査に携わった佐々木信三郎は、これに先立つ1950年から1951年にかけて、川島織物研究所所蔵の正倉院から配布されたと思われる断片の調査報告を行っていたが、この調査研究の成果はその後25年を経て1976年に再度出版されている<sup>107</sup>。これらの佐々木の調査によって日本における織物分析の基礎が築かれ、法隆寺や正倉院の織物研究は飛躍的に進歩した。言うまでもなく、正倉院の染織資料は唐代の織物と密接な関係があり、この佐々木の調査研究は、彼の後に続く我が国の上代染織資料や中国の古代中世染織資料の研究に携わる者の基礎文献となっている。

以上のような経緯を経て染織資料の研究は発展してきたのであるが、本稿での叙述に当たって筆者が用いる用語は、上述の佐々木の研究を基本とし、一部1999年のCIETAの織物用語集日本語版と同年の趙豊著『織繡珍品』の織物解説を参考にしている。なお、各国の研究者が独自に用いる用語については、必要に応じて原語とそれに対応する和訳または注を付す。

## 第2節 トゥルファン以外の重要出土遺跡と染織資料の研究

19世紀末以降には、先に述べたとおり、中央アジアの発掘にとどまらず、ユーラシアの各地やエジプトにおいて発掘が行われ、多くの遺跡から近代以前に属する織物がもたらされた（地図3）。出土染織資料は発掘を行った各国の考古学者および染織研究者によって調査された。本節では、それらのうちトゥルファンの染織資料と東西の織物文化の交流を研究する上で関係の深い10遺跡を取上げ、関連する出土染織資料の研究について概観する。

### 1. 西アジア・アフリカ出土染織資料

20世紀前半、中央アジア探検が行われている頃、西アジアにおいてもパルミラ（紀元前1-後3世紀）やドゥラ=エウロポス（紀元前3-後3世紀）の発掘が行われた。

パルミラはシリアのダマスカスから東へ230km、ユーフラテス川から西へ200kmにある砂漠の中のオアシス都市で、シルクロード上の隊商都市として栄えた<sup>108</sup>。都市遺跡の西部に墓場の谷があり、塔墓・家形墓・地下墓が点在する。墓から麻・毛・棉を材料とする綴織・平織・斜文織・パイル織と絹の平織・平地綾・刺繍・経錦が発見された。金糸が用いられた織物も発見されている。絹織物については、野蚕で作られたものを除いては全て中国からもたらされた絹織物およびその絹糸を用いた刺繍や異国風の斜文織であった。

---

<sup>106</sup> 太田 / 佐々木 / 西村 1960.

<sup>107</sup> 佐々木 1976.

<sup>108</sup> Pfister 1934; 1937; 1940.

パルミラならびに下記のドゥラ=エウロポスの出土染織資料の報告書は、スタインやル=コックによる中央アジア出土染織資料の報告が公刊されて後に出されたものであるが<sup>109</sup>、前述したとおり錦についてスタインの報告の時点では文様が経糸、緯糸どちらで表されているかについて明確な表現がいまだなされていなかったのに対し、パルミラ出土染織資料報告の著者フィスター(R. Pfister)は錦(S44)の文様が経糸で表されていると認め、コズロフ組織と表現した。コズロフの名を取ったのは一番初めに同氏がノインウラ出土の漢錦の文様が経糸で表されていると解明したからである<sup>110</sup>。

その後もパルミラの発掘は続けられ、新たに毛織物や中国の経錦が発見された<sup>111</sup>。パルミラの出土染織資料はダマスカス博物館とパルミラ博物館に所蔵される。

ドゥラ=エウロポスはシリアのユーフラテス川西岸にあり、紀元前4世紀末軍事基地として、また隊商都市として建設された。遺跡からは麻・毛・棉を材料とする綴織・平織・斜文織・パイル織と絹の平組織緯錦が出土した。それらの織物は主に3世紀のものである。ドゥラ=エウロポスの出土染織資料の調査をしたフィスターとベリンガー(Louise Bellinger)は、錦(no. 263)を漢錦のような経糸ではなく緯糸で文様が織り出された錦であると記している<sup>112</sup>。ドゥラ=エウロポスの出土染織資料はアメリカのイェール大学に所蔵される。

一方、エジプトにおいても発掘が盛んに行われていたが、1896-1906年にエジプト学の学者ガイエ(A. Gayet)によるアンティノエの発掘が行われた。アンティノエはナイル川右岸に紀元130年にハドリアヌス帝によって建設され、行政の中心として繁栄した。5世紀の中頃凋落したが、538年ユスティニアヌス帝の勅令により、再びその地位を復活した。しかし、アラブの征服後はその重要性を失った。この遺跡から毛織物のほか絹の綾組織緯錦が発見された。

アンティノエの発掘は学術的発掘でありながら、考古学上の記録が十分になされておらず、また染織資料の報告の記述においても用語が適切に用いられていないため、織物の研究者から見ると不満の残るものであった。そのうえパリのギメ美術館で展示の後、資料は散逸してしまった。しかし、多くの錦はリヨン織物歴史美術館（現在のリヨン織物美術館）の所蔵となった。

アンティノエ出土の染織資料についてはその後も研究が進められ、前述のファルケはアンティノエ出土錦にギリシャの要素を見ているが、天馬文錦（図2）に関してはペルシア的要素を指摘してペルシア錦としている。このペルシア錦については後述する。

エジプトにおけるもう一つの重要な遺跡はモンズ=クラウディアヌス(Mons Claudianus)である。この遺跡は1988-1990年に発掘されたエジプト東部砂漠中のロー

<sup>109</sup> Pfister 1934; 1937; 1940. Pfister and Bellinger 1945.

<sup>110</sup> Pfister 1940, pp. 41-42.

<sup>111</sup> Schmit-Colinet, A., Stauffer, A. & Al-As'ad, Khaled 2000.

<sup>112</sup> Pfister and Bellinger 1945, p. 3.

マ時代の石切場で、紅海から 50km、ナイル川から 120km にある。石切場は 1 世紀に始まり、3 世紀中頃まで機能した。織物は 2 世紀前半の廃棄物が堆積した中であつた。その織物の中に毛平組織緯錦が 6 点見出された。それらはベンダー=ヨルゲンセン(Lise Bender-Jørgensen)とチズック (M. Ciszuk) によって調査され、平組織緯錦として知られる最も年代の早いものであることがわかつた<sup>113</sup>。

## 2. 北コーカサス出土染織資料

北コーカサスで発見された遺跡モシチェヴァヤ=バルカ (モシチェヴァヤ峡谷) の古墓群はシルクロードの支線を証明する重要な遺跡である。モシチェヴァヤ=バルカ古墓群はバリシャヤラバ川 (大ラバ川) の上流にあり、北西コーカサスの山中、海拔 952m の峠道の近くにある。古墓は風化で形成された砂岩のテラス状プレートの上に位置し、各墓は板石で四方を囲まれている。20 世紀初めに発見され、1951 年に遺跡の調査が行われ、1980 年代に再度発掘された。年代は 7-9 世紀に属している<sup>114</sup>。毛織物、絹織物、棉織物が出土し、それらは、1980 年代発掘の資料を除いて、イェルサリムスカヤ(A. A. Иерусалимская) によって調査された<sup>115</sup>。これらの織物は東ローマ帝国・エジプト・シリア・ソグド・中国のものであり、通過税や土着人の労働に対する手当としてこの地域に残ったものとされている。

モシチェヴァヤ=バルカ出土資料のうち 1980 年代にモスクワの科学アカデミー考古学研究所によって発掘が行われたものについては、残念ながら正式の報告書は未発表である。筆者は幸いその染織資料を調査する機会を得た。しかし、その報告を行う場がなく現在に至っているが、本論文第 2 編の議論においてその一部を新たな資料として提出し、既発表のイェルサリムスカヤの報告やリブーの研究による資料と併せて、トゥルフアン出土染織資料に対する比較資料として考察を加えたい。

## 3. 中国西北出土染織資料

モシチェヴァヤ=バルカと同様にシルクロードの支線を証明する遺跡は 1982 年に発見された中国青海省都蘭にある古墳群である。それは 6 世紀末から 8 世紀後半に至る吐蕃支配下の吐谷渾の古墳群である<sup>116</sup>。出土資料には中国文化と吐蕃文化が共存している。出土染織資料の調査は許新国と趙豊によってなされ、染織資料は平地綾・綾地綾・経錦・緯錦・織金・羅・綴織・緋と多様である<sup>117</sup>。絹織物は大部分が中国製であるが、西アジアや中央アジア、特にソグドから到来したとされる緯錦を含んでいる。そのうち中国製の錦・綾はトゥルフアン出土の錦・綾と共通するものが多い。出土染織資料は青海省文

<sup>113</sup> Bender-Jørgensen 2000, p. 257; Ciszuk, 2000, pp. 265-275.

<sup>114</sup> Иерусалимская 1967, pp. 56-58; Савченко 1980, pp. 116-117.

<sup>115</sup> Иерусалимская 1996.

<sup>116</sup> 許 2000, pp. 13-22; 2002, pp. 212-225; 『都蘭吐蕃墓』 2005.

<sup>117</sup> 許・趙 1991, pp. 63-96.

物考古学研究所に保存されている。

また、シルクロード上に位置し、スタインやペリオやロシアのオルデンプルク(C. Ф. Ольденбург)によって文書をはじめとし絹織物も含む大量の文物が収集された敦煌石窟は、中国甘粛省にある。特に莫高窟はその壁画や塑像がよく知られているが、それらにしばしば描かれた織物の文様は、染織研究の貴重な資料となり得る。莫高窟自体は4世紀に創建され五胡十六国造営の早期窟から元窟まで長期にわたっているが、スタイン・ペリオ・オルデンプルクによってその藏経洞から収集された絹織物は唐代のものが多い。スタイン収集資料は大英博物館やヴィクトリア&アルバート美術館に、ペリオ収集資料はギメ美術館およびパリの国立図書館に、オルデンプルク収集資料はエルミタージュ美術館に所蔵される。

20世紀後半にスタイン収集資料はウイトフィールド(Roderick Whitfield)によって<sup>118</sup>、ペリオの収集資料はリブーとヴィアール(Gabriel Vial)によって<sup>119</sup>、オルデンプルクの収集資料はルボ=レスニチェンコ(Лубо-Лесниченко, Е. И.)によってそれぞれ調査された<sup>120</sup>。調査結果によれば、これらの敦煌莫高窟の絹織物資料は平織・平地綾・綾地綾・羅・経錦・緯錦・刺繍・染め物など多様であり、そのうちにソグド錦とされる緯錦を含んでいる。このソグド錦については後述する。

その後莫高窟からは、中国人によって若干の絹織物が発見されたが<sup>121</sup>、近年になって、敦煌莫高窟北区で新たに絹織物が発見された。それらはほとんど元代のものであり、織金を含んでいる<sup>122</sup>。

#### 4. 中央アジアの壁画

ウズベキスタンの現サマルカンド北部に位置するアフラシアブの都市遺跡には染織資料の出土は見られないが、人物の衣服に織物の文様が表される壁画が注目される。1958年から組織的に発掘されたアフラシアブは、かつて中国の史料で康国とも呼ばれていた都市サマルカンドの廃墟で、7-8世紀に年代付けられている。宮殿の広間を飾った壁画は7世紀のもので、外国の使節がサマルカンド宮廷に到着した様子を主題にしたものである。織物の文様には猪頭文・鳥文・天馬文・シムルグ文・獅子文などがあり、トゥルファン出土染織資料と同様の文様が描かれており、染織品の文様の考察に欠かせない資料である<sup>123</sup>。その外、ペンジケントやワラフシャなどにも衣服に織物の文様が見

<sup>118</sup> ウイトフィールド 1984, Pls. 1-44, pp. 277-302.

<sup>119</sup> Stein 1921, pp. 697-701, pp. 717-721, pp. 767-790, pp. 895-913, pp. 937-1088; Riboud et Vial 1970.

<sup>120</sup> Лубо-Лесниченко 1997, pp. 27-32, pp. 71-80 pls. 164-217.

<sup>121</sup> 敦煌文物研究所考古組 1992, pp. 55-67, p. 71, pls. 1-4.

<sup>122</sup> 『敦煌北区石窟』2000, pp. 235-236, pls. 15・21・24-25; 2004, pp. 143-146, pls. 10・12-13・15, pp. 136-139, pls. 15・18・25-26・28.

<sup>123</sup> アリバウム 1980; Azarpay 1981.

られる壁画がある<sup>124</sup>.

## 5. ペルシア錦

西アジア・アフリカの出土染織資料の項でエジプトのアンティノエ出土錦に触れたが、ファルケはそれらの出土錦のうち天馬文錦（図 2，挿表 4 資料 3）とイベックス（野生山羊）文の錦を表現様式からペルシア錦（原文 *persischer Seidengewebe*）としていた<sup>125</sup>。続いてスタインはアスターナで発掘した猪頭文錦（図 3）・鳥連珠円文錦（Ast. vii. 1. 01）などをイラン文化圏に起源を持つグループに入れた。その際、上に記した錦のような連珠円にモチーフを詰め込んだ文様を純粋にササン様式（原文 *purely Sasanian style*）と記述した<sup>126</sup>。このように、連珠円に何らかのモチーフを詰め込んだ文様をササン様式とするのはスタインに始まるのである。

ついでアッカーマンはスタインがアスターナで発掘した錦，アンティノエ出土錦やヨーロッパの博物館所蔵錦の中で，ターク=イ=ブスターン（Taq=i=Bustan）<sup>127</sup>の浮彫にみられる衣装の文様やペルシア製銀器の文様に類似し，陰経の構成が 2 本であり，経糸が赤味を帯びた錦のグループをペルシア錦とした。その中に上記の錦すべてが含まれ，エルミタージュ所蔵モシチェヴァヤ=バルカ出土のシムルグ<sup>128</sup>文錦（図 4，挿表 4，資料 1）やパリの装飾美術館のシムルグ文錦（図 5，挿表 4，資料 2）・連珠花卉文錦（Ast. i. 1. 01）・側花連珠円文錦（Ast. ix. 2. 01）などが加わった<sup>129</sup>。

更に別の視点から研究が進められた。アンティノエ出土資料の中に東ローマ帝国の衣服とタイプの異なるペルシアの騎士が着用する衣服が存在していることが指摘され，その衣服はペルシアから来たものと考えられた<sup>130</sup>。ゲイエル(Agnes Geijer)の調査により，その衣服の材質，染料，糸の撚り，衣服のカットはペルシア製を証明するものであり，その衣服にトリミングされた錦は他の地域の錦に比べて高品質であることが判明した<sup>131</sup>。

その後，マルチニア=ルーバー(M. Martiniani-Reber) によってリヨン織物歴史美術館所蔵のアンティノエ出土綾組織緯錦のうち技術上共通する 19 点の資料がペルシア製

<sup>124</sup> 影山 2002, pp. 40-43. ペンジケントは中央アジアの都市ペンジケントの南東郊外にあるソグドの都城址で織物文様は 6-8 世紀中頃のものである。ワラフシャも中央アジアのソグドの都城址で織物文様は 7-8 世紀のものである。

<sup>125</sup> Falke 1913, p. 40.

<sup>126</sup> Stein 1928, p. 676.

<sup>127</sup> ターク=イ=ブスターンはケルマンシャーの 11km にあるザルデ=クー山麓にある遺跡で大洞と小洞がある。小洞はシャープール III 世(383-388)の手による。

<sup>128</sup> シムルグとは古代イランの神話に現れる不死の猛禽で，犬・獅子・グリフォン・孔雀を折衷した姿で表される。

<sup>129</sup> Pope & Ackerman 1964, pp. 691-715, PL. 197-202.

<sup>130</sup> Pfister 1948, pp. 59-60.

<sup>131</sup> Geijer 1964, pp. 14-31.

として分類された<sup>132</sup>。そのなかにイベックス文錦（897.Ⅲ.3）や天馬文錦（図 2）が含まれ、両錦は 7 世紀と年代付けられた。このように錦の帰属だけでなく、年代付けもなされるようになり、上記、パリの装飾美術館所蔵シムルグ文錦（図 5、ヴィクトリア&アルバート美術館に分蔵）をギルシュマン（Roman Ghirshman）は聖ルーの聖遺物を包むのに用いられていたところから 7 世紀とした<sup>133</sup>。ちなみに先のファルケはこの錦を 600 年としていた<sup>134</sup>。一方、同じシムルグ文を表すエルミタージュ所蔵モシチェヴァヤ=バルカ出土錦は、上記の錦と細部の表現が異なっているので、イェルサリムスカヤは考古学上の年代と文様表現から、その錦を 8 世紀以降のイラン製とし<sup>135</sup>、リブーは技術的見地から 8 世紀前半のイラン製と年代付けた<sup>136</sup>。

## 6. ソグド錦

ソグド錦とは、ソグド地域、すなわちアムダリヤとシルダリヤとの二河間、とくにゼラフシャン河の流域の都市群で製作された錦を指す。前世紀の中頃、ベルギーのユイ（Huy）にあるノートルダム寺院が所蔵する錦の裏に記されたソグド語がヘニング（W. B. Henning）によって解読された<sup>137</sup>。そこにはザンダニージー（Zandanījī）といってブハラ郊外にあるザンダナ村にその名の由来があり、ブハラをはじめヴァルダナ（vardāna）などソグドで織られた錦を意味する言葉が記されていた<sup>138</sup>。その錦に表された文様は、小粒の連珠で構成される環の中に羊（後に趙豊が鹿であると指摘した<sup>139</sup>）が生命の樹の中に相對している構図である（図 6、挿表 2）。シェパード（D. Shepherd）は、その錦に

<sup>132</sup> Martiniani-Reber 1986, pp. 36-60. ペルシア錦に分類されたものにはシリアから来た織工の影響が残る 6 世紀の人面文錦などとペルシア独特の 7 世紀の動物文錦がある。

<sup>133</sup> ギルシュマン 1966, p. 228.

<sup>134</sup> Falke 1913, P. 81.

<sup>135</sup> Иерусалимская 1972a, p. 13-14. 1996 年論文ではシリアかもしれないと見解を変えている。

<sup>136</sup> Riboud 1976, p. 28, p. 37.

<sup>137</sup> Shepherd and Henning 1959, 38-40.

<sup>138</sup> Frye 1954, pp. 15-16. Marshak 2006, pp. 49-60 で、氏はザンダニージーが記述される『ブハラ史』の著者ナルシャヒー（al-Narshakhi）がザンダニージーは一種の綿布と書いているところから、それは綿であって絹であるユイの錦は真のザンダニージーではないという説を展開している。その論文で Marshak はユイの錦の裏に書かれた寸法 61 スパン（Marshak によれば 12m 余りとある。それはおよそ一匹の長さに当たる）が、ユイの錦や、フリンジがあるため完形とされるサンスのライオン錦の寸法（縦 2.42m）と一致しないことを論拠の一つとしている。しかし、ユイの錦は裏に 61 スパンと書かれた巻布から切断されたものであり、サンスの錦も切断され、切断された後、布の経糸がそのままフリンジにされたものと考えられ、寸法が一致しない理由とはならない。また『ブハラ史』は 10 世紀の著作であるから、それ以前のザンダニージーは絹の可能性が高く、筆者はベレニツキーとベントヴィッチが述べるように（Беленицкий и Бентович 1961, p. 77）10 世紀末からザンダニージーは材質が絹から綿に変化したという推定に同意している。Watt and Wardwell 1997, p. 28 にもザンダニージーが絹織物から綿織物を指すようになったという見解が述べられる。原因は異なるかも知れないがトゥルファンにおいて主要な生産が絹から綿に変化していく過程がみられるのと同様の現象である。なお、横張は 2006 年ザンダニージーを論じたが 1961 年のベレニツキー等と同じ結論である（横張 2006, p. 121）。

<sup>139</sup> 趙 1999, p. 112.

表された文様・技術・色彩と類似する錦をソグド錦として分類した<sup>140</sup>。それらは装飾付連珠円内に獅子や鹿が相対している錦で、連珠円内の文様はユイの錦と異なるが、技術・色彩が類似するところから、ソグド錦としたのである。それらの錦はヴァチカンの12使徒図書館の対獅錦、ナンシーのロレーヌ美術館の対獅錦、サンスの寺院所蔵の対獅錦（図7）、ヴィクトリア&アルバート美術館の2点の対獅錦（763.1893, 1746.1888）、ベルリンの国立美術館の対獅錦（84.225）、ブリュッセルの芸術・歴史ロイヤル美術館の対獅錦、大英博物館やギメ美術館所蔵の敦煌千仏洞出土の対獅錦（MAS858, Ch00359a）同じ敦煌出土の連珠対鹿対鳥文錦（MAS862a, Ch. 009, MAS862b, Ch00359a）とリージュにあるロゼット文錦である。

ヘニングがユイの錦に書き残されたソグド文字をムグ山城址出土のソグド文書と比較して8世紀初め、どちらかといえば7世紀としたところから、シェパードはそのユイの錦を7世紀のものと考えた。シェパードがソグド錦としたもののうち、サンスの寺院所蔵の対獅錦をリブーは8世紀とし<sup>141</sup>、趙豊はそれを9-10世紀と見ている<sup>142</sup>。また、リブーはナンシーのロレーヌ美術館の対獅錦を9-10世紀としている<sup>143</sup>。マルシャークは注138に述べたように、ユイの錦を真のザンダニーギーでないとしながらも、ユイの錦や対獅錦をソグドで8世紀後半から9世紀前半に織られたと考えている<sup>144</sup>。このように年代に関して見解の相違が存在しているが、シェパードが挙げた錦群はソグド錦と認められている。

その後、モシチェヴァヤ=バルカ出土資料が研究され、その過程でメナンドロス（Menander Protector）が記述するシルクロードがこの地を通過していたことが伴出の出土資料から確認された<sup>145</sup>。その遺跡出土の染織資料やシェパードの分類したソグド錦および中央アジアの壁画を考察して、イェルサリムスカヤは6-9世紀のソグドにおける絹織の形成と発展をザンダニーギーⅠ・ザンダニーギーⅡ・ザンダニーギーⅢに分けて示した<sup>146</sup>。その分類は専ら錦の文様に基づいており、ザンダニーギーⅠはモチーフの借用の初期的段階で、様式の共通性があり、高品質でありループ状の耳をもっているという。氏はこのグループに下限が705年あるいは718年の上記のリージュにあるロゼット文錦を入れていて、シェパードがソグド錦とした上記の各美術館の対獅錦は、ザンダニーギーⅠとザンダニーギーⅡの間に年代付けられるという。ザンダニーギーⅡは主題・構成・モチーフの変形が著しく、イスラム芸術の影響がみられるといわれ、8世紀末-9

<sup>140</sup> Shepherd and Henning 1959, pp. 22-37.

<sup>141</sup> Riboud and Vial 1981, p. 142.

<sup>142</sup> 趙 1999, p. 120.

<sup>143</sup> Riboud and Vial 1981, p. 143.

<sup>144</sup> Marshak 2006, p. 60.

<sup>145</sup> Иерусалимская 1978, pp. 151-157; 雪島 1985, pp. 74-85. 出土資料に東ローマ帝国コインや漢文書がある。

<sup>146</sup> Иерусалимская 1972b, pp. 5-33. この論文でモシチェヴァヤ=バルカ出土染織資料の文様とソグドの壁画はあまり関係がないと述べている。

世紀初めに年代付けられる錦がこの中に入れられている。例えば対孔雀文錦（No. kz 5075 図 69）や連珠対孔雀文錦（No. kz 6981）である。ザンダニーギーⅢは文様が単調で品質が悪いといわれ、ダブルアクス文錦（図 8、挿表 4 資料 5, 6, 7）がこのグループに入る。1996 年の氏の著書でこのダブルアクス文錦は、8 世紀前半の東ローマ帝国のコインを伴出するところから 8-9 世紀とされている<sup>147</sup>。このようにしてシェパードによって提示されたソグド錦に、モシチェヴァヤ=バルカ出土染織資料を主とする、コーカサス山中から出土したソグド錦が加わった。

その外、ムグ山城址から出土した八稜屋内連珠円とハート型四弁花文が交互に表された錦（CA9173）<sup>148</sup>やスイスのアベック財団所蔵の対獅文錦（No. 4863a, 4864a, 図 70）対羊文錦（No. 4901）がある<sup>149</sup>。

前項でペルシア錦、本項でソグド錦に関して、今日までの研究史を簡略に述べておいた。そこで本稿では、ササン朝に錦が導入された 4 世紀から、連珠円や動物文様が依然として織り出されている 9 世紀頃まで、ペルシアで織られたに違いないと思われる錦をペルシア錦と総称し、次に、6 世紀頃からイスラム文様に変化する 10 世紀頃までにソグド地域で織られたと思われる錦をソグド錦と総称する。それらのペルシア錦、およびソグド錦のうち、精査され、詳しくデータが発表されている錦がある。それらの錦とデータを第 2 編で挿表 4 にまとめた。筆者は第 2 編第 2 章第 2 節において、それらのデータを用いてペルシア錦・ソグド錦の特徴を示し、アスターナ出土錦との比較を行う。以下の文中で挿表 2・4 に記載されたペルシア錦・ソグド錦を指す場合には、特に「ペルシア錦」・「ソグド錦」と括弧付きで表示し、挿表 4 を参照して、関連する文をより良く理解するための一助とした。

以上、トゥルフアンの出土染織資料を考察する上で深く関わりを持つ 10 遺跡と出土染織資料について、織物研究の観点から概観した。なお本稿に記述される他の遺跡やその出土染織資料に就いては、随時、関連箇所て注記することにする。

### 第 3 節 文字資料による染織研究

発掘による出土染織資料の調査研究と共に重要なのは文字資料による染織研究である。文字資料と対照することによってより詳細かつ正確に織物の特徴を把握し、織物の移動や織物の社会経済的役割をも知り得る。以下では、まず本稿と関連する文献史料とそれに基づく染織研究を取り上げ、簡単に紹介する。

<sup>147</sup> Ierusalimskaya 1996, p. 233, pp. 271-277.

<sup>148</sup> Винокулова 1957, p. 25.

<sup>149</sup> Otavsky 1998a, Abbs. 4-6; 許 2002, p. 221, 図 55・61・62. 許は入植ペルシア・ソグド人の作と見ている。

## 1. 文献史料の活用

西欧の古典史料としては、作者不詳の1世紀頃の書である『エリュトゥラー海案内記』(*Periplus Maris Erythraei*)があり<sup>150</sup>、それには記事の全体を通じて各港の輸出入品に関する情報や航路が記述される。例えば、前述のアレクサンドリア起源の「ポリュミタ」という織物がインドに輸入されるという重要な記述がある。逆に、第1章第2節で述べたように棉布がインドから輸出されることや、また絹織物や生糸が同様にインド西部の港から輸出されることが述べられている。それらの絹は内陸の大きな都ティーナイからバクトゥラを通じて陸路で、あるいはガンゲース河を通る別ルートでインドの商港へ運ばれる、といった絹の道を示す記述もある。このように『エリュトゥラー海案内記』によって、当時のエジプトからインドにかけて流通していた染織品やルートの具体的な情報が得られる。これらの記述は当時の陸海を経た東西交流を知る史料としてしばしば利用される。

プリニウスの『博物誌』は上記の「ポリュミタ」に関する情報の外、金刺繍、綴織の古称、野蚕や貝紫など染織関係の情報が豊富である。その他セーレスについても触れ、絹を「森から得られる毛織物」と記述している<sup>151</sup>。

また時代は下るがイスラム史料の染織に関する記事は8-13世紀の西アジア、中央アジアや、9-11世紀のインドを含めて、ユーラシアの動向を伝える貴重な史料であり、織物とその文化交流に関する重要な情報もまま存在する。例えばタバリー(at-Tabarī)の『予言者と国王の歴史』(*Kitāb Akhbār al-Rasūl wa-l Mulūk*)<sup>152</sup>、ナルシャヒー(al-Narshakhī)の『ブハラ史』(*Ta'rikh-i-Bukharā*)<sup>153</sup>、イブン=フルダズベール(Ibn Khurdādhbih)の『道里および諸国誌』(*Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik*)<sup>154</sup>、サアーリビー(Tha'ālibī)の『知識の愉しみ』(*Latāif al-Ma'ārif*)<sup>155</sup>といったものは英訳、仏訳が利用できることもあって非常に有用である。イブン=ハルドゥーン(Ibn Khaldūn)の『省察すべき実例の書、アラブ人、ペルシア人、ベルベル人および彼らと同時代の偉大な支配者たちの初期と後期の歴史に関する集成』の第1部と前書きである『歴史序説』(*al-Muqadima*)は和訳<sup>156</sup>がある。その外、サージャント(R. B. Serjeant)が、モンゴル時代までの染織に関する記述を多く

<sup>150</sup> 村川 1948.

<sup>151</sup> 中野 1986, p. 258, p. 384, pp. 420-422. 中野訳では原文「ポリュミタ」を「ダマスク」と訳している。「ポリュミタ」は緯錦であり、中野訳はそれを「ダマスク」と意識している英文を参考にしたらしく、間違いである。また、訳文中「いろいろな色を一つの模様織り出すことは主としてバビロンで流行した。それでその製法はバビロンと名付けられた」とある。バビロン周辺の多色文様出土資料は綴織のみであるから、筆者はこのバビロンは綴織であると考えている。

<sup>152</sup> Powers 1989, 9-10世紀に書かれた年代記である。

<sup>153</sup> Frye 1954, 10世紀に書かれたイスラム以前とイスラム初期のブハラとその周辺に関する情報を伝える書である。

<sup>154</sup> de Joeje 1967, 9世紀に書かれた道里記や郡国誌である。

<sup>155</sup> Serjeant 1951, p. 81 にサアーリビーの著作中の織物に関連した部分の英訳がある。

<sup>156</sup> 森本 2001. 14世紀に書かれた表題通りの内容に関する書の1部と前書きである。

のイスラム史料から拾い、地域ごとにまとめて英訳している。その英訳は研究者によく利用されている。

一方、西側からアジアへ赴いた使節や商人による記録も、西アジアから東アジアに至る貴重な情報を伝える。東ローマ帝国から西突厥に赴いた 6 世紀のゼマルコス (Zemarchos) の紀行や<sup>157</sup>、13 世紀末、イタリアから中国まで旅し、その途上で得た各地の情報を記述したマルコ=ポーロの『東方見聞録』はその例である。

中国の絹生産を考える上で、以上にも増して重要なのは、言うまでもなく漢籍である。漢籍による織物研究については、歴史学の分野での社会史経済史的観点から織物を取り上げた研究などは従来から行われてきた。しかし、染織品そのものの研究に特化したものに限って言えば以下のようなものがある。まず、『周礼』・『儀礼』・『礼記』・『詩経』や他の漢籍から染織用語を拾い解説する文献中心の方法である。任大椿は『釈繒』で先秦から唐までの絹織物名とその分類を行い、民国の王國維は『釈幣』で漢から元までの布帛の規格と価格の変遷を述べ、呉承仕は『布帛名物』において三礼の名物研究の一つとして主に麻織物を扱い、朱啓鈴は『絲繡筆記』で古代より近代までの絹織物の種類を拾い集めている<sup>158</sup>。

次に出土資料と漢籍中の染織用語を対照したり、織物に関する歴史的事実を出土資料に即して述べたりする方法で、1961 年にルボ=レスニチェンコは『周礼』・『漢書』・『後漢書』・『西京雜記』・『齊民要術』・『太平御覧』・『農政全書』・『傳子』など多くの史料を用い、ノインウラ出土の漢代染織資料をその手法で研究した<sup>159</sup>。このような手法をより徹底させたものが、1977-8 年の佐藤武敏の研究である。佐藤は古代から唐代に至る絹織物の研究において膨大な漢籍史料を駆使し、各時代の染織品の名称や同時代の出土染織品の例を挙げ、更に絹織物の生産と流通を明らかにすることを試みた<sup>160</sup>。

## 2. 出土文書の活用

最後に、本稿で扱うトゥルフアン出土染織資料に関わるものとして特に注目すべきは、いわゆる西域出土文書である。主要な西域出土文書には、「敦煌文書」<sup>161</sup>・「吐魯番文書」<sup>162</sup>・「大谷文書」<sup>163</sup>という名称で呼ばれるものがあり、「敦煌文書」や「大谷文書」には

<sup>157</sup> 白鳥 1932, pp. 14-20. ゼマルコスの紀行はメナンドロスの書によって伝えられた。

<sup>158</sup> 佐藤 1977, pp. 2-11.

<sup>159</sup> Лубо-Лесниченко 1961.

<sup>160</sup> 佐藤 1977; 1978.

<sup>161</sup> 「敦煌文書」とは王圓籙によって、敦煌莫高窟中の藏経洞（ペリオ編番号 163 窟、敦煌文物研究所編号、第 17 号窟）から発見された文書類をいい、スタイン、ペリオ、オルデンブルク等によって収集された文書類をいう。それらの文書は『英蔵敦煌』、『法蔵敦煌』、『俄蔵敦煌』、『真跡積録』、『敦煌宝蔵』に収録される。

<sup>162</sup> 「吐魯番文書」とは中国の新疆維吾爾自治区博物館の発掘によるアスターナ及びカラホージャ出土漢文文書を指す。それらの文書は『吐魯番文書』、『吐魯番出土文書』に収録される。

<sup>163</sup> 「大谷文書」とは大谷探検隊によって中央アジアで収集された西域文化資料、特にその中の

漢文文書の他、非漢文文書も含まれる。既に生の史料として諸研究に資しているが、なかでも吐魯番文書はトゥルフアン出土という点で本稿での論考に欠かせない。

なお、文字資料としては特殊ではあるが、織物上に残された銘文の伝える情報は格別に重要である。例えば、トゥルフアンから出土した庸調布と呼ばれる麻布や絹布上の墨書や<sup>164</sup>、先に述べたベルギーのユイ(Huy)にあるノートルダム寺院内の教会が所蔵する錦の裏に記された銘文は、それぞれの織物の生産地を考察する画期的な研究に繋がった。特に後者の錦の銘文はその後のソグド錦の識別において重要な役割を果たすことになった。また、ティラーズというイスラム圏において生産された銘文入りの織物には、当時のカリフや支配者の名が刺繍されたり織り込まれたりしており、当該の織物の年代や生産地の考察に際して有用である。これに関しては、既に銘文の内容や文字スタイルの研究といった美術・文献学方面から研究も発表されているので、活用できよう<sup>165</sup>。

以上のように、文字資料を参照し考察に用いることは、今日の染織研究においてもはや不可欠な要素となりつつある。

---

文書類を指す。それらの文書は『大谷文書』に収録される。

<sup>164</sup> 王 1981, pp. 56-62, 詳細は後述する。

<sup>165</sup> Britton 1938. Blair 1998, 164-181.

## 第2編 カラホージャ・アスターナ出土染織資料

### 第1章 錦に関する諸問題

#### 第1節 連珠円内単独文錦と連珠円内対称文錦

カラホージャ・アスターナ染織資料には連珠円内に動物が詰め込まれた錦、花文様の錦、幾何学文様の錦などがある。

それらの染織資料群には連珠円内に動物が詰め込まれたササン様式の錦が多く見られ、カラホージャ・アスターナ染織資料の一つの特徴となっている。それらのササン様式の錦には連珠円内に単独の文様が詰め込まれた錦と連珠円内に対称の文様が詰め込まれた錦の二種類がある。

それらの錦は文様と織技の分析に基づいてしばしば分類と生産地の比定が試みられた。この二つの特徴ある錦のうち、東西交流を論じる上で重要な生産地の決着を未だ見ないのが、連珠円内に単独の文様が詰め込まれた錦である。つまり、この錦は果たしてペルシア本土で製作され東に将来されたものなのか、それともペルシア錦の文様や織技が東伝して模倣され、他の地域（すなわちソグド・タリム盆地・中国）で製作されたものなのか、という問題が残っている。一方、連珠円内に対称の文様が詰め込まれた錦の帰属は前者ほど見解の相違が見られない。

筆者は8世紀までのトゥルフアン出土染織資料におけるこの二つのタイプを「連珠円内単独文錦」ならびに「連珠円内対称文錦」と呼んで区別することにする。

#### 第2節 出土錦の生産地判定に際しての着目点

##### 1. 生産地の判定における諸問題—特に錦について

織物が伝播する際には、次のケースが考えられる。1. 織物自体が到来する場合で、貢ぎ物・贈り物として流入し、また商品として運ばれてくるもの。2. 流入した織物の文様が模倣され、あるいは変容し、流入地の技術で織り出される場合。3. 織物自体が到来するのではなく、人の移動によって技術そのものが移入され、移入先で文様が模倣され、あるいは変容して織り出される場合。以上三つのケースがある。生産地を考察する場合、個々の織物の技術と文様を詳細に比較・検討してその特徴を見極め、三つのケースのどれに当たるかを確認することが肝要である。

##### 2. 生産地の東西の決定要素

生産地を考察するには、ペルシア錦の東漸を念頭に置くと、生産地が西にあるか東に

あるかという問題、つまり、それは毛織物圏の生産か絹織物圏の生産かという問題に行き着く。具体的には毛織物圏すなわちペルシアないし中央アジア（ソグド・タリム盆地）か、絹織物圏すなわち中国かという問題である。そこには当然第1編で述べたような技術的な差異が存在した。

東西の、つまり毛織物圏と絹織物圏の技術的差異は、それが経錦であるか緯錦であるかという点に最も顕著に現れる。織物が経錦か緯錦かという問題は、織技に関わっている。経錦とは経糸で文様を表す技法で織られた錦のことであり、緯錦は緯糸で文様を表す技法で織られた錦である。経錦は周代に始まる中国の伝統的な技法であるのに対して、緯錦は毛織物文化圏で成立した。両者はその技法において大きく異なるにもかかわらず、織りあがった錦を見ると経糸・緯糸の方向が互いに  $90^\circ$  回転している点を除けば、その外見から織りの組織にいたるまで非常によく似通っている。このため、殆どの場合完形ではなく断片で出土する染織資料においては、両者の判定は非常に困難を伴う。しかし、もしもその判定が正しくなされるならば、対象とする資料が中国産であるのか西方産であるのかを見極める非常に有力な基準となることは間違いない。だからこそこの経錦・緯錦問題は「連珠円内単独文錦」の、あるいはそれ以外の資料についても、生産地決定に際して重要視されてきたのであった。

この経錦・緯錦の判定は、織物の経方向・緯方向を定め、文様が経糸で表されているか緯糸で表されているかを見定める必要があり、そのためしばしば織物の耳によって経方向・緯方向が決定された。なぜならば、織物の耳は織る作業の過程で織物の端で緯糸が折り返されることによって生ずるのが一般的であり<sup>166</sup>、経糸は耳に並行しているので経方向がわかるからである。

しかし、出土資料には、上記のように必ずしも耳が残っているとは限らない。むしろ、耳が残っていない場合が多い。たとえ、耳と見なされるような痕跡が残っていても、色々なケースを考え慎重に対処しなければならない。

経錦・緯錦のような織組織の判別の他に、糸の撚り方向にも東西の特徴が現れている。

ただし、織組織に関しても撚りの方向についても先に述べたように他地域からの技術移入が起これば生産地本来の織物文化以外の要素が加わることもあり得るので<sup>167</sup>、最終的には技術・文様・歴史的背景といった総合的な考察が必要とされる。

---

<sup>166</sup> 毛織物において、経糸を折り返したまま機に掛け、緯糸を入れ織る場合があり、外見上、経糸のこの折り返し部分と耳とがよく似ている。そこで緯糸の折り返しの耳を緯耳といい、経糸の折り返しを経耳と呼ぶ研究者もある。緯耳は緯糸が折り返すため、経糸が布の中央へむけて寄せられ、込んだ状態となるので、両者は耳際の糸が込んでいるかどうかにより見分けがつく。

<sup>167</sup> 技術の伝播により、中国本土では6世紀後半から平組織緯錦、7世紀中葉から綾組織緯錦が出現し、Z撚りの糸も見られるようになる。逆にソグドでも8世紀になると無撚りの糸が使われるようになる。

### 3. タリム盆地周辺における生産の問題

生産地判定における東西の相違と、タリム盆地生産織物の特徴を、出土資料によって具体的に示したのは賈応逸である。織物の撚り方向と耳の有様に基づいて、タリム盆地生産の織物を氏は次のように考察した<sup>168</sup>。

氏によれば糸の撚りという観点から眺めると、タリム盆地出土の織物ははっきりと二つの種類に分かれる。その一つ、尼雅出土錦<sup>169</sup>やトゥルフアン出土錦の一部は経緯糸とも無撚のグループである。このグループでは、たとえ撚りがあつたとしても、それはごくゆるいS撚りである。このS撚りは絹であれ麻であれ中原地区の織物に特徴的に見られるS方向の撚りである<sup>170</sup>。もう一方のグループの絹織物は、毛・棉織物と同じ特徴を持っていて、すべてZ方向に撚られ強撚である。一方、絹と棉の混織も多く、これらはトゥルフアンと巴楚県脱庫孜沙来（トックズ・サライ）<sup>171</sup>で出土している。アスターナ309号出土の6世紀の「幾何文錦」はその例である<sup>172</sup>。これらの絹棉混織の織物は総じてZ撚り強撚で経糸は緯糸より撚りが強い。これは毛織物の特徴と共通する。この区別は同じ絞染の絹と比較しても歴然と現れ、例えば于田の尾于来克（原文による。ダンダン・ウイリクを指すと思われる）<sup>173</sup>出土のものは経緯ともにZ撚りであり、一方トゥルフアン出土のものは撚りが無く、中原からもたらされたことを示唆する。脱庫孜沙来出土のブラフミー文字墨書のある絹織物（BTA7137）もZ撚りであるという。

上記の絹織物に使用されている絹糸のほとんどは太さが均一でなく、傷が多い。このような糸の品質と加撚する原因は、後述するような宗教上の理由によって蛾が飛びだした後の繭から糸を採るので、糸が短くちぎれていてそれを紡ぐ必要があるからである。あるいは棉や毛の織物圏では扱う素材の性質上それら繊維に強く撚りをかけてから機に架けていたので、絹を扱う際にもやはり撚りをかけたのである。これがタリム盆地産織物の特徴となっている、というのが賈応逸の見解である。

また、タリム盆地産織物のもう一つの特徴は緯錦で耳の所に比較的太い麻質の経糸が用いられていることだという。これも尼雅遺跡の罽（毛錦）と同じ手法である。タリム盆地生産の緯錦のように経糸密度の粗なものは張力が弱く、織りにくいので経糸の両側で張力を増すために耳の中に往々1~2本の太めの毛または麻の経糸を織り込んであると賈応逸は説明している。

織物の分析はタリム盆地産を決定するための重要な手段であるが、もう一つ有力な手

<sup>168</sup> 賈 1985, pp. 173-179.

<sup>169</sup> 尼雅はタリム盆地南辺にある1-5世紀の遺跡で住居跡・墓・仏教遺跡などが発見された。文書・染織品などが出土している。

<sup>170</sup> ただし、中原地区の織物にも7世紀半ばからZ撚りが現れる（坂本 2000b, p. 174 参照）。その場合、Z撚りであっても、文様を検討し製作地を決定する必要がある。

<sup>171</sup> タリム盆地北西にある仏教寺院遺跡で文書・染織品・陶磁器破片などが出土している。

<sup>172</sup> 賈 1985, 図版 7-1.

<sup>173</sup> ホータン市東方にある仏教遺跡で住居跡も発見されている。蚕種西漸伝説の板絵が出土した。

がありがある。それは文字資料によるものである。

1982年、孔祥星は、もともと毛織物、棉織物が織られていたトゥルフアンにおいて、絹織物の代表である錦が織られていたことを、吐魯番文書（「北涼承平五年道人法安弟阿奴拳錦券」TKM88: 1b, 「北涼承平八年翟紹遠買婢券」TKM99: 6a）の記載によって証明した。そこには「…高昌所作黄地丘慈中錦一張，綿経綿緯…」<sup>174</sup>と記されており、高昌すなわちトゥルフアンで「丘慈（中）錦」なる錦が織られていたことがわかったのである。

1985年、唐長孺は上述の「北涼承平五年道人法安弟阿奴拳錦券」に注目し、丘慈錦が「綿経綿緯」であると記載されている点に特に注意を促した。氏はこのような「綿経綿緯」の錦とは「綿」すなわち真綿から紡いだ絹糸を経糸と緯糸に使用して織ったものであるとの解釈を示したのである<sup>175</sup>。この文書は6世紀初めのものであるが、別の墓から出土し、伴出文書の年代から判断して上記の文書より早いとされる「高昌永康□十年用綿作錦条残文書」（TKM90:34）に「須綿三斤半作錦条<sup>176</sup>」と見え、やはり「綿」から「錦条」を作っていると考えられることから、トゥルフアンでは五世紀末すでに「綿経綿緯」の錦を織っていたことを明らかにした。

更に、氏は582年の文書が伴出している文書「某家失火烧損財物帳」（TKM99:17）に「綿経緯二斤」（紡ぎ糸の経糸・緯糸二斤）、「布縷八斤」（麻糸八斤）、「綿十両」（真綿十両）、「豊縷卅両」（棉の糸四十両）、「絹姫」（絹機）など織物工房を思わせる機や織物材料が記載されることから、麹氏高昌国中期においてもなおこれらの材料で工房において絹・練の外に「綿経綿緯」の錦を織っていたことを明らかにした。

この「綿経綿緯」がこのように注目されるのは、それが法顕や玄奘や『続高僧傳』の作者道宣の記述と合致するからである。すなわち彼ら求法僧が旅をし、道宣が西域僧から情報を得た頃、西域は仏教を信仰しており、殺生を禁じていた。そのため玄奘が于闐について記し、道宣が亀茲について記すように、通常中国内地で行われているような殺蛹した蚕の繭から繰糸することを嫌い、蛾が飛びだした後の出殻繭から綿（真綿）を作り、それから糸を紡いだというのである。これを上記の吐魯番文書の記述と照らし合わせ、トゥルフアンでも出殻繭から経緯の糸を紡ぎ出し、実際に織物を織っていたとみなすわけである。

当時現地では錦を織る際にも紡ぎ糸が使われていたとするこの指摘は、非常に大きな

<sup>174</sup> 書下し「…高昌作る所の黄地丘慈中錦一張は綿経綿緯…」；訳「…高昌で製作された黄地の丘慈錦の中幅の一張（長さ九尺五寸、幅四尺五寸）は紡ぎ糸の経糸と緯糸で織られていて…」．いうまでもなく、この「丘慈」とは「亀茲」と同音でタリム盆地北辺に位置する都市クチャを指すとされる．中錦が中幅の錦であることについては呉 2000, p. 94 参照．

<sup>175</sup> 唐 1985, pp. 146-148; これに先立つ1981年、唐長孺は日本で出土文書について講演し、「綿経綿緯」の解釈を示している（池田 1982, pp. 59-85）．

<sup>176</sup> 書き下し「綿三斤半をもって錦条を作る」；訳「真綿三斤半で紡ぎ糸を紡ぎ出しリボン状の細かい錦を作る」．

意味を持つものであった。

## 第2章 「連珠円内単独文錦」

トゥルファン出土の「連珠円内単独文錦」の実例は次の通りである<sup>177</sup>。

a 正円連珠環に文様が囲まれる錦：

猪頭連珠円文錦 (Ast. i.5.03), ユスティニアヌス I 世(527-565) 模造金貨伴出 (図 3)

猪頭連珠円文錦 (Ast. i.6.01)<sup>178</sup> 632 年墓誌伴出

連珠花卉文錦 (Ast. i. 1.01)<sup>179</sup>

側花連珠円文錦 (Ast. ix.2.01)<sup>180</sup> 706 年庸調布伴出

連珠天馬文錦 (TKM303<sup>181</sup>)

天馬文錦 (ムルトウク出土)<sup>182</sup>

b 非正円連珠環に文様が囲まれる錦：

連珠戴勝鸞鳥文錦 (TAM138:17)<sup>183</sup> 636 年文書伴出

大連珠立鳥文錦 (TAM42) 651 墓誌伴出, (図 9)

鸞鳥文錦 (TAM332:17)<sup>184</sup> 665 年文書伴出

鳥連珠円文錦 (Ast. vii. 1.01)<sup>185</sup>

連珠鳥文錦 (TAM ?)<sup>186</sup>

連珠鹿文錦 (TAM55:18)<sup>187</sup>

鹿文錦 (TAM84:5)<sup>188</sup> 574 年文書伴出

大鹿文錦 (TAM337:13)<sup>189</sup> 663 年文書伴出

大鹿文錦 (TAM322:30)<sup>190</sup> 663 年墓誌伴出

大連珠鹿文錦 (TAM332:5) 665 年文書伴出 (図 10)

鹿文錦 (Ast. v.1.01)<sup>191</sup> 667 墓誌伴出

<sup>177</sup> 年代については伴出した貨幣・墓誌・衣物疏・文書のうち最も年代の下がるものを記している。他の伴出資料については、表 1, 2 を参照されたい。

<sup>178</sup> 『染織の美』1984, 図版 26.

<sup>179</sup> Stein 1928, PL. LXXX.

<sup>180</sup> Stein 1928, PL. LXXIX.

<sup>181</sup> 『吐魯番博物館』1992, 図版 141.

<sup>182</sup> 『西域考古図譜』1972, 染織と刺繍 [2].

<sup>183</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 42.

<sup>184</sup> 『新疆出土文物』1975, 図版 141

<sup>185</sup> Stein 1928, PL. 77; 山辺 1979, 図版 43.

<sup>186</sup> 『吐魯番博物館』1992, 図版 193.

<sup>187</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 47.

<sup>188</sup> 『絲綢之路』1972, 図版 33

<sup>189</sup> 武 1962, 図 17.

<sup>190</sup> 武 1962, 図 3.

<sup>191</sup> 山辺 1979, 図版 48.

大連珠戴勝鹿文錦 (TKM71:18) <sup>192</sup>

連珠猪頭文錦 (TAM138:9/2-1) 636 年文書伴出 (図 11)

猪頭文錦 (TAM325:1) 663 年文書伴出 (図 12)

猪頭文錦 (TAM5:1) <sup>193</sup> 668 年文書伴出

上記の「連珠円内単独文錦」は、その連珠が正円の錦と連珠がいびつな非正円の錦に分けられる<sup>194</sup>。連珠花卉文錦、側花連珠円文錦のように花文が織り出された一部の例を除いて、ほとんどの錦は連珠円内に動物が単独で表されている。

まず、連珠が正円の錦には、欠損しているものを除いて、連珠環の上下や上下左右に回文（重角）が置かれ、連珠円と連珠円の間にある菱形の空間に置かれる副文は上下左右対称の植物文が表されている。連珠円内の動物は馬や猪である。

次に、連珠が非正円の錦では、連珠環相互の接点に小連珠が置かれその内部は花文・小円・正方形が詰められ、副文には左右対称の植物文が表されている。非正円連珠錦のうち連珠猪頭文錦 (TAM138:9/2-1) は、連珠円内単独文と植物文で構成された段文である。この非正円の連珠円内の動物は猪・鹿・鳥である。

## 第 1 節 先行研究による分析と生産地をめぐる議論

上に「連珠円内単独文錦」の文様の総体について述べておいたが、これらの錦の生産地については異説があり未だ意見の一致を見ない。それらの説は、中国製またはトゥルフアン製とする説<sup>195</sup>、西域製（ホラサン、ソグド、トゥルフアン）とする説<sup>196</sup>、ソグドを中心としたイラン文化圏製であるとする説<sup>197</sup>に大きく分かれている。

先行研究に基づいて文様の分析と生産地に関する見解を年代の順を追って見てみよう。

### 1. イラン文化圏生産説

1928 年の報告書でスタインは、自身の発掘によるアスターナ出土染織資料の文様の

<sup>192</sup> 新疆博物館考古隊 1978, 図 29; 『中華文物集刊』1992, 付図 3.

<sup>193</sup> 『吐魯番博物館』1992, 図版 191.

<sup>194</sup> 影山 2002, p. 46. 薄 1990, p. 322 では連珠環が円か楕円かという区別をしている。

<sup>195</sup> 武 2000, pp. 148-150; Wu 2006, p. 242; 盛 1999, p. 348. (中国隊発掘資料について)

<sup>196</sup> 横張 2000, pp. 200-202 (中国隊発掘資料について。西域の範囲は横張説)。2006, p. 113 で 2000 年の時点でソグド地方の錦との認識は持っていたが証拠はないと述べている。

<sup>197</sup> Stein 1928, pp. 674-678 (東イラン・ソグド); アッカーマン 1964, pp. 702-704, p. 714 (東イラン); 以下中国隊発掘資料について: 夏 1963, p. 76 (中央アジア); 薄 1990, p. 331 (中央アジア); 賈 1998, p. 39 (ソグド); 趙 1999, p. 97, p. 110 (ソグド); 坂本 2000a, pp. 128-141 (ソグド, ただし実物の調査を行い 2000 年論文に取り上げた非正円連珠の錦について); 影山 2002, pp. 46-49; 2006, pp. 322-323 (A 型正円連珠錦はペルシア, B 型非正円連珠錦はソグド)。

分析を試みた。そこでスタインが注目したのは文様の中でも特に、連珠円内動物文（単独と対称の両方）の文様についてであり、それをササン様式であると指摘した。スタインは次のような三つのタイプに分類している。

(1) 文様そのものは純粹のササン様式（連珠円内に動物・樹木・開花などが詰め込まれた文様）であるが、文様のラインがすっきりした曲線でなく、階段状になっているグループ、代表的な錦は猪頭文錦（Ast. i.5.03, 図3）、鳥連珠文錦（Ast. vii.1.01）である。

(2) 変容したササン様式のものと中国の文様の混合したシノーササン=グループ、代表的な錦は対天馬連珠円文錦(Ast.ix.3.02)、対孔雀獅子唐草連珠円文(Ast. v.2.01)である。

(3) ササン様式の文様と中国の文様の混合したグループ、代表的な錦は対鳳開花段文錦（Ast. ix.3.03）。

スタインの分類によると、グループ(1)は本稿で筆者の設定する「連珠円内単独文錦」に当たり、グループ(2)が「連珠円内対称文錦」に当たる。スタインは各グループの文様と織り方から判断して、(1)の純粹のササン様式の錦は西方からトゥルファンへ輸入されたものという見方をしている。この西方という言葉は随所でのスタインの記述から判断して、東イランやソグドが念頭にあるものと思われる。

それと同時に、(2)(3)のタイプのように文様は西の影響を受けてはいるものの、技術的には Warp-rib（経畝）という中国製錦の特徴を有するとされる錦の存在も指摘しており<sup>198</sup>、すでに連珠文錦に関する基本的な問題、すなわちイラン文化圏産かあるいはペルシア文化の影響下に中国などの地域で製作されたものかという生産地問題を提示している。

その後、アッカーマンは、スタインがアスターナで発掘したササン様式の錦、グループ(1)の猪頭文錦、側花文錦を、出土地が中央アジア（原文 Central Asia であるが新疆を指す）であることや文様に東方の影響が認められるとして東イランの産（原文が East Sasanian silk であるのでササン朝の東部を指す）と推定している<sup>199</sup>。

中国隊発掘の初期出土資料を調査し、後述する武敏の1962年の報告<sup>200</sup>に遅れること1年、新疆で発見された染織品の研究を行って武敏の説に異を唱えたのは考古学者の夏鼐であった<sup>201</sup>。氏はスタイン、シルワン<sup>202</sup>、ルボ=レスニチェンコ<sup>203</sup>やアッカーマン等の染織関係の著作を広く引用して、新疆出土資料と同じ織り方をした他地域出土染織資料にも言及した。

その論文で、夏鼐は中国隊の第1次から第3次発掘染織資料のうち綺・錦・刺繍の代表的な織物の技法について詳細な分析を行っているが、錦に関しては、連珠円内に動物が一つだけ表された錦、すなわち連珠円内単独動物文錦を緯錦であると推定した。更に

<sup>198</sup> Stein 1928, pp. 674-678.

<sup>199</sup> Pope & Ackerman 1964, p. 714.

<sup>200</sup> 武 1962, pp. 64-67.

<sup>201</sup> 夏 1963, pp. 45-76, 彩色図版 I-II, 図版 I-XII.

<sup>202</sup> Sylwan 1949.

<sup>203</sup> Лубо-Лесниченко 1961.

それらの錦を中央アジア製（原文は **Central Asia** であるが文脈からみるとソグドを中心とした地域に傾いている）と推定した。氏は緯錦と判定する理由としては、布が厚手で糸に撚りがしっかりとかかっている漢・唐の経錦と異なること、中央アジア製と考えるのは連珠円内単独動物文錦がササン様式の文様で、バーミヤンやウズベクのパラリクテペやキジルの壁画に同様の文様が表されていることを挙げている。

また生産地の問題に関連して、氏は技術的な東西の交流についても考察を行った。養蚕の技術は中国から東ローマ帝国に到達し、逆に斜文組織は中国より早く西方にあったことを指摘した。また、緯錦に関連する緯浮（緯糸を経糸と 1/1 で組織するのではなく浮かすこと）で文様を表す技法は、もともと毛織物を織る際の繊維の特徴から生ずる必然的な要求から生まれた毛織物文化圏特有の技術であって、それらは西の文様、つまり連珠円内単独文とともに東へ到来し、そこで初めて西の技術と文様が唐の織物工匠によって（変容され）採用された、といった見解が述べられている。

中国隊発掘の初期の染織資料の報告で、「連珠円内単独文錦」の織組織と生産地に関する議論がなされた後、研究者の関心は専らカラホージャ・アスターナ出土の文字資料や中国製の錦に向けられた。

1990 年に薄小瑩はトゥルフアン発見の連珠文の分類と製作地の考察を行った<sup>204</sup>。薄は連珠圏内<sup>205</sup>に対称文様が埋められている文様を **1 類**とし、連珠のタイプを小連珠圏、複合連珠圏、単層連珠圏の三つの型に分け、更に各型を四方連続と二方連続の亜型に分けた。本稿で取り上げる「連珠円内対称文錦」は **1 類**、単層連珠型、四方連続亜型に入る。次に、連珠圏内に非対称の単一の禽や獣の文様が表されたもの、すなわち本稿の「連珠円内単独文錦」を **2 類**とした。この **2 類**の連珠圏の型は単層連珠圏のみである。薄はこの **2 類**の製作地を、ソグドの壁画との類似から、ソグドとする見解に傾いた。次に、ペルシア錦にトゥルフアン出土錦に見られる鹿の主題がないこと、一方、**2 類**の「連珠円内単独文錦」にはシムルグが表されていないことを指摘し、また、ペルシア錦とトゥルフアン出土「連珠円内単独文錦」との織り技術や文様の細部における相違を指摘し、ペルシア製を否定して中央アジア製とした。そして **1 類**は中国本土製と考えた。その見解は夏鼐と同様である。

次に、2002 年、影山悦子はソグド壁画に基づいて連珠円内単独文様（薄の **2 類**）の考察を行った。まず、連珠円内単独文様を正円連珠の錦（これを影山は **A 群**としている）と非正円連珠（これを **B 群**としている）に分け、**A 群**をペルシア製とする説に基づき、**A 群**の錦の文様が、アフラシアブの壁画に描かれたペルシア錦とされる衣装文様と一致することを新たに指摘して、**A 群**の錦をペルシア製とする見解を補強した。また、**B 群**の動物表現が粗い錦について、薄が指摘した鹿の文様が **B 群**の錦にだけ現れる点に注目して、鹿文様の銀器がソグド製であることと関連づけ、**B 群**の錦をソグド製とした

<sup>204</sup> 薄 1990, pp. 311-340.

<sup>205</sup> 薄は我々が連珠円と呼ぶものを連珠圏と称している。

<sup>206</sup>. その後、影山は研究を進め、B群の錦にだけ鹿の文様が現れるのは西突厥の可汗が愛好した鹿を（西突厥の影響下にあった）ソグドで織り出したからであるとした<sup>207</sup>.

薄小瑩がペルシア錦との技術や文様の差異から、「連珠円内単独文錦」の中央アジア生産説を称えたのに対して、影山はアフラシアブの壁画に注目することによって、A群の錦をペルシア製とし、B群の錦にだけ鹿の文様が存在する理由を述べ、それをソグド製としたのである。

## 2. 中国文化圏生産説

1962年に武敏は中国隊によって発見された尼雅・アスターナ出土染織資料の調査研究を行った。氏は1959年に出土した34資料の錦の文様について、以下のように三つのカテゴリーに分け解説した<sup>208</sup>。

1. 経方向に繰り返される祥瑞獣の文様：この文様は漢錦によく見られ、南北朝まで継続する。しかし、6世紀中葉には次第に消えていく。（例、図13）
2. 全面に連続して散らされた文様と植物文様：この文様の年代は最も早くて541年である。（例、図14）
3. 連珠円内動物文様：この文様は約10cm大の円に鳥獣が対称に表されたものと22-26cm大の円に鳥・鹿・猪頭や騎士が表されたものがある。そして連珠円の間は上下左右にひろがる花葉が埋められている。この第3の文様の年代は最も早くて619年である。このカテゴリーに入る文様はペルシアの影響でササン様式の風格を持っているが、文様のモチーフや配置をみると漢民族の伝統的な工芸装飾である。（例、図15）

以上のように武敏は解説しているが、これら三つのカテゴリーに示された文様をみると、34種類と限られた資料数の中ではあるが、漢代から南北朝、唐に至るおおよその文様の流れを把握することができる。

さて、上記の解説から、武敏が問題の連珠円内動物文の錦（単独文様と対称文様のいずれも含む）についてはスタインと異なり、ササン様式の影響は認めつつも全てを中国製、あるいは中国の影響を受けたものであると見なしていることがわかる。

武敏はまた織技の面からの分析も行い、漢代錦は経畦紋（平組織経錦）であり、北朝から唐代初期の錦には、漢代錦と同じ経畦紋ならびに経斜紋（綾組織経錦）が存在すると分析しているが、いずれにせよすべて経錦であると考えている<sup>209</sup>。経錦とみなすということは、すなわち中国産あるいは中国の技術の影響があるとみなすということである。武敏は連珠円内動物文錦を、文様の上からも織技の上からも中国本土の特徴を示すと考

---

<sup>206</sup> 影山 2002, pp. 37-55.

<sup>207</sup> Kageyama 2006, p. 322.

<sup>208</sup> 武 1962, pp. 64-67, 表 1.

<sup>209</sup> 武 1962, pp. 66-67, 表 1.

えたのであった。後年、武敏がアスターナ出土のほとんどの錦について経錦説を唱えるのは、初期のこの見解を堅持しているからであろう。

後の2000年論文においても、耳に関する新たに提示した根拠に基づいて、再び「連珠円内単独文錦」が緯錦でなく経錦であると述べ、東イランやソグドを中心とした中央アジアの製作という他の研究者の見解を否定した<sup>210</sup>。

盛餘韻 (Angela Sheng) は1998年にアスターナ出土錦に関する論文を発表し<sup>211</sup>、文様と織組織を分析した。その中でアスターナ出土錦のうち、シンプルな文様であるが複雑な織り方の錦を氏はアンバランスと考えAグループと名付けた。Aグループの錦は4点が平組織経錦の樹葉紋錦(図16)、3点が六角形や格子内文様入りの綾組織経錦(図17)、3点が「吉」や「王」の文字入り平組織緯錦で織られているとした(図18)。このAグループの織り手と産地を推定するために盛餘韻は高昌に住むソグド人の実態について説明した。崇化郷で唐の制度の下に土地を得て納税したソグド人の外に、ソグド人の工匠やソグドから移住した商人が存在したことを述べ、その中に織工もいたのではないかと推定したのである。更に、四川からトゥルファンに来たらしい漢人の工匠がいたことも付け加えている。

そのような状況から、トゥルファンに移住したソグド人がソグド商人の勧めによって経錦の織技術を学び、経錦の技術をマスターした。その後、ソグド人の好みのデザインであるAグループの錦、シンプルな文様の綾組織経錦を織り、同じ組織で複雑な文様の環繞野猪頭錦(猪頭紋錦, 図12)や鹿連珠文錦を織り出した。次いで、ソグドの故地で織られていた緯錦を織ったと結論している。つまり、盛餘韻は「連珠円内単独文錦」である環繞野猪頭錦(猪頭紋錦)や鹿連珠文錦を武敏の説に従って経錦と見なしてトゥルファンで製作されたソグド錦とし、製作者についてはソグド人がトゥルファンで織ったものと結論づけながら、トゥルファンの漢人が織った可能性も残している<sup>212</sup>。

上の盛餘韻の結論から見ると、トゥルファンでは経錦の後、緯錦が織り始められたことになるが、盛餘韻が経錦とみなすところの猪頭文錦や鹿文錦が7世紀に年代付けられるのに対し、それらより早い6世紀に既に緯錦で織られた漢錦模倣の倣獅紋錦(図19, 表2参照)が存在している。盛餘韻のいう錦の技術的発展に関する説ではこの錦の位置づけが出来ないという欠点がある。

### 3. 問題の所在

武敏と夏鼐の論文に代表される連珠円内単独動物文錦の生産地に関する見解の相違点は、武敏が出土資料そのものの調査研究であるのに対して、夏鼐は海外の著作にあた

<sup>210</sup> 武 2000, pp. 148-150. 耳に関する新たな根拠については後述する。

<sup>211</sup> Sheng 1998, pp. 117-160.

<sup>212</sup> 1999年にこの論文はAグループをXグループと名付け中文で発表された(盛 1999, pp. 323-371)。

り、連珠円内単独動物文錦の糸の撚りや仕上がりの違いに気付いたことから生じた。結果として、武敏は連珠円内単独動物文錦を中国製あるいは中国の影響を受けたものと考えたが、夏鼐はイラン文化圏の製作であると考えた。製作地決定の主要な根拠は、武敏が連珠円内単独動物文錦を経錦としたのに対して、夏鼐はそれらを緯錦であると推定したことにある。この推定に基づき、夏鼐は、緯錦の織技上の利点<sup>213</sup>を挙げ、経錦から緯錦に技術は発展し、経錦は消えてゆくという見解を提出しているが、武敏から口頭で聞いた限りでは同氏は経錦は存続すると考えている。また、文様に関する両者の見解の相違は、武敏がササン様式の風格はあるが中国の伝統を受けたものと考えたのに対して、夏鼐は、連珠円内単独動物文が、中央アジアの壁画と類似している点を指摘し、先のスタインやアッカーマンらと同じくササン様式そのものと考えた点にある。この二人の見解の相違が、その後の研究に影響を与え、二つの流れとして受け継がれているのは先に述べた通りである。この二つの流れとして対立する論考のうち、文様の分析からみれば、「連珠円内単独文錦」は、薄や影山が示したように、イラン文化圏に属する可能性が高いと筆者は考えている。それが果たしてイラン文化圏で製作されたものなのか、それともその地の文様の影響を受けながらも中国文化圏（中国本土と中央アジア東北部）で製作されたのか、という問題になると次なる手掛かりはやはり織りの組織と織りの手法にしかない。

このように見てくると、経錦・緯錦の問題が織物の生産地問題において重要な意味を帯びているのがわかる。そこで経錦と緯錦の問題を具体的に検討してみよう。

## 第2節 経錦・緯錦の判定と生産地の考察

### 1. 経耳・緯耳・房耳

本編第1章で述べたように経錦か緯錦かを判定するために研究者が先ず見るのは耳の存在である。ただ、この耳というものが一様でないことに注意しなければならない。トゥルフアンの出土錦群を全て経錦とみなす立場の武敏は、ヨーロッパの研究者や夏鼐が一部の経錦を緯錦と「見誤った」のは、最初にシルワンが機頭<sup>214</sup>であるはずの部分を幅辺<sup>215</sup>としたことに始まると述べ、布端にあるコード（太い紐状の糸束）のところで折り返す部分や毛套（ループ状の部分）は機頭であるとし、一枚の布に幅辺と機頭の両方が存在する平織や綺の例を提示し説明している<sup>216</sup>。

確かに、経錦・緯錦を判別するには織物断片中のどちらの糸が経でどちらの糸が緯であるかを見抜くことが重要である。そしてその経・緯の方向を見定めるにあたっては、

<sup>213</sup> 文様の色数を多くすることが出来る。綾組織緯錦は緯浮きで満たされるため光沢が出るなどである。

<sup>214</sup> 経耳ともいわれ、織機上の布巻具と糸巻具に経糸を輪状に架けた場合生じる。

<sup>215</sup> 緯耳ともいわれ、通常「耳」と呼ばれる。

耳が緯耳か経耳かの見極めが決定的にものを言う。しかし果たして問題の錦の「耳」は正しくはどちらであったのか。

武敏の論文に先立つ 1975 年のリブーの論文では<sup>217</sup>、経錦と緯錦の判定で「見誤り」の原因となったと武敏が考える問題の錦、スタイン発見のアスターナ出土動物雲気文錦（怪獣文錦，Ast.vi.1.03，図 1）を取り上げて考察している。その際リブーは、シルワンと同じくこの錦の太いコードを何らの疑念を抱くことなく緯耳と判断し、緯錦としているのである。なぜならヨーロッパの研究者にとっては、毛織物の太いコードの緯耳や、後で述べるようなソグド錦のループ状の緯耳は珍しくないからである。

武敏が「連珠円内単独文錦」を中国錦の発展したものと考え、中央アジアでの製作を否定する根拠は、「連珠円内単独文錦」を綾組織経錦とするところにある。その理由は、出土した平織や綺の布断片に緯耳（中国語で幅辺）があり、かつ、それぞれの断片に「毛套」と表現されている経耳（中国語で機頭）も併存する例に照らし合わせ、「連珠円内単独文錦」に見られる同様のループ状の耳（大連珠鹿文錦，図 10 参照）を経耳としたからである。それに基づき経糸顕紋の経錦と判断しているのである。しかし武敏が比較の対象とした出土資料は平織や綺の単層織物であって、経錦のように複層で経糸数の多い織物ではなく、両者を単純に対応させることは不可能である。

耳の問題に関して目を西に転じると、房付きの耳は遙か西のエジプトのコプト織物やシリアのパルミラの毛織物の中にも見られる<sup>218</sup>。「連珠円内単独文錦」に見られるループ状の耳（筆者はこれを「房耳」と呼ぶ）は、織りの過程で横幅が狭まることを防ぐため、緯糸に余裕をもたせて織った結果生じる現象である。「房耳」はまたその役割と共に装飾も兼ねている。その「房耳」と同じものが、ヨーロッパに残るザンダニーギーと呼ばれる織物に見られる。ザンダニーギーとは、第 1 編で説明したようにブハラ周辺で製作された特産品で、ソグド錦の代表格であるとされる<sup>219</sup>。その現存する実物がベルギーのユイのノートルダム寺院にある対羊（鹿）錦（寸法，縦×横 191.5×122cm）や同じザンダニーギーとされるフランスのサンスの寺院にある対獅錦（図 7，寸法，縦×横 241.5×118cm）である<sup>220</sup>。ほとんど完形のこれら織物は横（緯糸方向）に対して縦長（経糸方向）であって、「房耳」の房は横サイドに付いていて緯糸と連続しているから緯糸である。その緯糸で文様が表されているから緯錦であることがわかる。つまり、錦におけるこの種の耳は、武敏の主張するような経錦の根拠とはなり得ず、むしろ緯錦で西方に由来することを示しているのである。

<sup>216</sup> 武 2000, pp.143-168.

<sup>217</sup> Riboud 1975, pp. 13-40.

<sup>218</sup> 道明 1981b, 図 100; 『コプト織』1998, p.20.

<sup>219</sup> Shepherd and Henning 1959, pp. 15-40.

<sup>220</sup> Shepherd and Henning 1959, p. 18, p. 30; Muthesius 1997, p. 95, pp. 197-198, pls. 49A・97A; 坂本 2000b, p.174.

## 2. 点線現象

この経錦・緯錦の判定について、耳以外に文様を表す糸の状態を観察して決定する方法がある。一般に文様を表す糸が交錯点で細くなるのが経錦であると言われている。まず、筆者は龍谷大学大宮図書館所蔵の大谷コレクションを調査した際、そのような経錦に比べて、緯錦においては文様を表す糸の太さが交錯点で余り変化しないという傾向に気づき、それを実物写真で示した<sup>221</sup>。更に、筆者は1997年トゥルフアン出土染織資料の日中共同研究<sup>222</sup>に参加し、同報告中で錦の特徴による東西交流について考察した際、織組織の経・緯を決定するにあたって重要な経錦と緯錦の判断指標を新たに提出した<sup>223</sup>。これは武敏が2000年論文で示したように毛套を機頭と判断し、経・緯を決定した判断基準とは異なった全く新しい視点からの判断基準であり、経錦・緯錦の判定に有効であるはずである。

それは経錦にのみ現れる「点線現象」である。これは織物に点線状に現れる一種の織り傷で、経糸と母緯（binding weft 用語解説、経錦参照）の組織点（糸が交錯するところ）で本来あるべき色糸と違った色糸が点々と連続する。あるいは経糸と母緯・陰緯（main weft, 用語解説、経錦参照）との組織点にわたる長い浮、といった形で確認できる経錦特有の現象である。つまり、織物の文様上に点線を引いたように見えるのである。この現象は経糸を機に架けたり、綜統に通したりする時の間違いによって生ずる。筆者は耳の残存により確実に経錦ということが分かる13点のトゥルフアン出土資料を精査し、その全てにこの「点線現象」が現れることを確認した<sup>224</sup>。このことは、この種の織り傷がきわめて高い確率で経錦に現れることを示す。経錦・緯錦を決定する最重要要素である織耳が往々にして欠けている出土資料において、糸の交錯状態に加えて、この「点線現象」は非常に重要な判定指標となることが理解されよう。しかるに「連珠円内単独文錦」にはまったく「点線現象」がない。逆に経錦では技術上起こり得ない形の糸の浮きや糸の交差といった織り傷が、これらに見られるのである。

例えば上に挙げた大連珠立鳥文錦（TAM42, 図9）は平行して機に架けられたはずの経糸が交差している。経糸の糸継ぎの間違いから起こったのであろうが、1本ずつ入れられる緯糸には起こらない現象である<sup>225</sup>。このことは、「連珠円内単独文錦」が緯錦であることの十分な証左といえよう。

次に、「連珠円内単独文錦」の大連珠鹿紋錦(TAM332:5 図10)を例に取り、これを経

<sup>221</sup> 坂本 1996a, p. 69.

<sup>222</sup> 日本側から織物調査に横張和子と筆者と他1名が参加し55点を調査・報告した。分析データとしては、横張は各資料の解説と、調査済みの55点に未調査の錦や文書に現れる錦を加え織組織を記入した編年表を付し（横張 2000, pp. 180-203）、筆者は各資料の簡単な解説とその時点まで未発表であった糸の太さや撚り方向、削り(はつり)、経糸の配列順、緯糸を入れる順序など詳細な調査結果を表にまとめた（坂本 2000a, pp. 128-141）。

<sup>223</sup> 坂本 2000b, pp. 169-175.

<sup>224</sup> 坂本 2000b, pp. 169-170.

<sup>225</sup> 坂本 2000b, pp. 172-174.

錦と仮定してその正否を検討してみよう。これが経錦だとすると文丈(文様の1リピート)は17.3cmで緯糸数は平均33/cm、陰緯は半分の16.5/cm削り(はつり)3<sup>226</sup>であるから $17.3 \times 16.5 \div 3^{227}$ で紋綜統数は約95となり、地組織の綾を織るのに3枚の綜統が必要なので、文綜統より前にあって地を織る前綜統と合わせれば約98である。かくも多くの綜統を水平に並べ織ることは困難である。たとえ並べても先の方で揚げると杼を通す口が開かない。従って紋綜統機能を垂直に配置する空引機のような機で、しかも広幅織物用に織らなければならない。しかし、経錦のように経糸数の多い錦は各経糸に付けられた錘が重くて横綜(空引機で綜統の役割をするもの)で引いても経糸が上に揚がりにくく、経錦は織れない<sup>228</sup>。

以上のような理由で「連珠円内単独文錦」は経錦でなく緯錦と考えるのがやはり正しく、毛織物文化圏の所産とするべきであろう。

本章1節第2項で述べたような経錦という中国織技の伝統のもとトゥルファンで作られたとする盛餘韻や、中央アジア製でないという武敏の中国錦発展説で「連珠円内単独文錦」をとらえることは困難である。

アスターナ出土大連珠鹿文錦の耳を緯糸による「房耳」とする筆者の見解や、筆者が発見した経錦に見られる「点線現象」が、「連珠円内単独文錦」の経錦説を否定する大きな決め手となったのである。

### 3. 糸質

技術的側面として紡ぎ糸の問題も取り上げねばならない。武敏はアスターナ出土錦の少数はトゥルファン産で、ほとんどは中国製であると主張している<sup>229</sup>。武敏も賈応逸もトゥルファン産の錦が「綿経綿緯」すなわち紡ぎ糸で織られているという出土文書中の記述と、紡ぎ糸で織られていた一部の出土品を対照させ、紡ぎ糸で織られた出土品をトゥルファン産やタリム盆地周辺産の根拠としている。

確かに、トゥルファンあるいはタリム盆地周辺では絹織物製作に際して紡ぎ糸が使用されていたことは、文献研究の立場から既に指摘されていることである。実際、アスターナ出土錦に経も緯も紡ぎ糸で織られた倣獅文錦(TAM313:12, 548年衣物疏, 598年文書伴出, 図19)や、絲棉交織ではあるがやはり紡ぎ糸を使用した幾何文錦(TAM309:48,

<sup>226</sup> 坂本 2000a, pp. 134-135.

<sup>227</sup> 経錦としたこの計算の仕方について説明を加えると、まず経糸の各組は斜文組織の場合は最小3枚の綜統の1枚に経糸3組に1組ずつ連結している。経糸各組のうち経糸1本が文様に応じて紋綜統に連結している。次に文様1リピートに緯糸が17.3×33本ある。その緯糸は母緯と陰緯が交互に通され、母緯は前綜統(地をおるための綜統)が開いた時に通され、陰緯は紋綜統が開いた時に通される。従って紋綜統に関わるのは半分の17.3×16.5本である。削り3というのは同じ紋綜統の開口時に3度続いて通されることであるから綜統数は3分の1となる。

<sup>228</sup> 川島織物の故高野昌司氏が正倉院織物の復元を行った時の実体験による。

<sup>229</sup> Wu 2006, p. 242.

6 世紀, 表 2 参照)があり, これらをトゥルファン産あるいはタリム盆地周辺の製作と認めるに筆者もやぶさかではない. しかしながら, これらはササン様式を示す「連珠円内単独文錦」に属するものではない.

これらの倣獅文錦や幾何文錦といった 6 世紀のトゥルファン産あるいはタリム盆地周辺の製作の錦を実見したところ, 織物に使用された紡ぎ糸は全体に太い上, 糸に節がある. 技術的に見て低級である. 6 世紀のトゥルファン産あるいはタリム盆地周辺で製作された錦は, それに用いられた紡ぎ糸がこのように粗くて太いという特徴を持っていた. 従って織り目の粗い凹凸のある織物といえる. これに対して連珠戴勝鸞鳥文錦 (TAM138:17, p. 38 参照) は, 倣獅文錦や幾何文錦より細くて織度斑のない (一定の太さの) 糸であるがやや毛羽立っている. この糸質はムグ山出土のソグド錦である八稜星内連珠円とハート型四弁花文が交互に表された錦<sup>230</sup>と同じである. トウルファン出土「連珠円内単独文錦」と類似の糸がソグドでも使われていることを意味する.

本編の第 1 章第 1 節で述べたように 7 世紀前半にタリム盆地周辺を旅した玄奘や, 西域僧から情報を得た道宣は, 于闐や龜茲で養蚕があり, 真綿が取られていることを記述している. 7 世紀においても紡ぎ糸を使用していたと思われる. 実際 7-8 世紀においてもタリム盆地出土資料に紡ぎ糸が使用されたものがあり<sup>231</sup>, 9 世紀に至るもホータンでは紡ぎ糸による紬縵が盛んに織り続けられた<sup>232</sup>. しかし, 7 世紀の「連珠円内単独文錦」は紡ぎ糸でなく織度斑のない糸で整然と織られているものが多い. 以上のように「連珠円内単独文錦」と倣獅文錦・幾何文錦の糸や織り技術には大きなギャップがあり, 連珠円内単独文錦がトゥルファン産とは考えがたい.

1・2・3 項を通じて「連珠円内単独文錦」は, 中国産・トルファン産と認め難い点を指摘した. その生産地の候補として残るのはイラン文化圏となった.

#### 4. イラン文化圏所在の遺跡・遺物の文様と連珠円内単独文との類似

ペルシアの遺跡にはササン朝ペルシアのターク=イ=ブスターン (Taq=i=Bustan) の大洞がある<sup>233</sup>. それはホスロー (Khusrau) II 世 (590-628) の造営になるが, 大洞狩猟図の人物像浮彫に服飾文様が表され, 当時の織物文様の多様さが見られる. その中に花文・鳥文・シムルグ文や連珠円に三日月を詰め込んだ連珠円文がある<sup>234</sup>.

ペルシアの建築装飾では, 5 世紀のチャハル=タルカン (Tchahar Tarkhan)<sup>235</sup>から, 連珠円内にそれぞれ猪頭文や八弁花を詰め込んだ文様が連なるストウッコ板が出土している.

<sup>230</sup> 『シルクロード』1988, 図 188.

<sup>231</sup> 賈 1985, p. 176-177. 賈は経・緯糸が Z 撚りの織物を例示している.

<sup>232</sup> 吉田 2006, p. 58-60.

<sup>233</sup> ターク=イ=ブスターンはケルマンシャーの北方 11km にあるザルデ=クー山麓にある遺跡で大洞と小洞がある. 小洞はシャープール III 世 (383-388) の手による.

<sup>234</sup> 道明 1981, pp. 58-59.

<sup>235</sup> テヘラン近郊にあるササン朝時代の遺跡.

他にダムガン(Damghan)<sup>236</sup>から同じ連珠円内に猪頭文を詰め込んだストゥッコ板が出土し(図 20)、クテシフォン(Ctésiphon)<sup>237</sup>から連珠円内に孔雀を詰め込んだストゥッコ板や、連珠円内に開いた翼とパフラヴィイ文字のあるストゥッコ板が出土している<sup>238</sup>。これらはすべて連珠円内に単独で文様が表され、6世紀から7世紀初めのものである。このようにササン朝ペルシアでは5世紀から7世紀初めにかけて連珠円内に動物などの文様を詰め込んだ連珠円文が盛んに用いられた。

ササン朝ペルシアで上記のような連珠円文が盛んに用いられたのは、次のような思想が根底にあったからである<sup>239</sup>。アッカーマンは以下のようにのべている。ササン期においては、王室の権力の主たる根源と本質は天空由来のものであって、占星術は上層の人々の日々の拠り所であった。そこで、連珠円を宇宙の円環を表すものとみなし、織物においては、天空のシンボルである渦巻き・月・三日月、あるいは月の代わりに借用されたダブルアクスなどを円環と円環の接点に表し、天空との結びつきを強調した。特にこの密接な結びつきを求めたのがササンの帝王と王家の人々であった。

更に、道明美保子は、アッカーマンの王権天空由來說を踏まえて考察を深め、連珠環をアフラマズダの恩寵・加護がこめられた王権の象徴フワルナフ(光輪)と考え、それを具体的に象徴するのが、天上世界を象徴する、あるいは天上と地上を結ぶ真珠であると考えた。真珠が天と地を結ぶというのは、天から落ちる露が月の光を受けながら貝に入ると玉となったと理解されているからである。連珠円文の意味は「周囲をフワルナフを象徴する神聖な円環で囲み、天空または天空の如き神聖な円形の空間に、神聖な文様をあらわしたもの」としている。連珠円文はこのような思想の存在するペルシアに起源を持っている。

本章で取り扱う「連珠円内単独文錦」の文様は、上に挙げたイラン文化圏にある遺跡や遺物の文様に一致している。それら錦の文様のうち連珠円内猪頭文は上記のダムガン出土のストゥッコ板、ターク=イ=ブスターンの浮彫やバーミヤン・アフラシアブ・パリラク=テペ・ペンジケントの壁画にも表されている。とりわけ、スタインのアスターナ発見の連珠円内猪頭文錦(図 3)は、アフラシアブの壁画(図 21)に表された猪頭文に細部に至るまでそっくりであり、連珠円内猪頭文錦とイラン文化圏との関係の深さを示唆している<sup>240</sup>。また、猪はゾロアスター教の諸神の一人ヴェラトラグナ(Verethraghna)を象徴している。この点からもイラン文化圏と密接な関係があるといえよう。

次に、シムルグ文に関しては、それはアヴェスタ(Avesta)やペルシアの神話に登場し、シャーナーメ(Shāhnamah)にはシムルグのような翼を持ち、孔雀の尾羽をもつ創造物が、ペルシアの最高支配者のところから飛来して、ササン朝の未来の建国者、アル

<sup>236</sup> テヘランの東方 300km にある都市でササン朝時代の宮殿の遺跡がある。

<sup>237</sup> ティグリス川左岸にありパルティア・ササン両王朝の首都である。

<sup>238</sup> ギルシュマン 1966, pp. 186-201.

<sup>239</sup> Pope & Ackerman 1964, pp. 878-879. 道明 1987, pp. 160-165.

デシール (Ardeshir) に従う「王朝の幸運」(を象徴するもの)として述べられる<sup>241</sup>。シムルグ文もまたペルシアと深く関わり、アフラシアブの壁画の衣装文様にも表される。

獅子文に関連して、次の中国側の史料が注目される。それは波斯国(ペルシア)について述べる条で、婚姻の際に婿が着用するのは「金線錦袍、師子錦袴」(梁書卷 54, 中華書局標点本 p. 815) とある。これによって金糸入り錦と獅子の文様のあるペルシア錦の存在が確認される。アフラシアブの壁画には連珠円内に獅子が表された錦が見られる。

その外、アフラシアブの壁画の衣装文様に連珠円内に含綬鳥文・天馬文が詰め込まれた連珠円文が見られる。このようにペルシアで知られた文様すべてがソグドに存在している。それと同時に「連珠円内単独文錦」にも猪頭文・含綬鳥文・天馬文が見られるのである。

「連珠円内単独文錦」の鹿文錦や鳥文錦の鹿や鳥が首からリボンをなびかせている表現は(図 9・10 参照) ペルシアに起源を持っていて<sup>242</sup>、ペルシア文化の影響を示している。

以上、考察してきた結果、カラホージャ・アスターナ出土「連珠円内単独文錦」が文様上、イラン文化圏と密接に結びついていることが判明した。この点から筆者もイラン文化圏生産説を採りたい。

#### 5. 「ペルシア錦」・「ソグド錦」<sup>243</sup>と「連珠円内単独文錦」との類似

そこで、今度は、技術的な面において検討する。ユイのノートルダム寺院所蔵のザンダニーギーと記載された正真正銘のソグド錦に、カラホージャ・アスターナ出土「連珠円内単独文錦」が、組織は綾組織緯錦であること(挿表 2, I, 挿表 3, I), 経糸の撚りは Z 撚り(挿表 2, J-b, 挿表 3, J-b) であること、「房耳」を持ち(挿表 2, O, 挿表 3, 資料 1, O) 線条がある(挿表 2, P, 挿表 3, P) という点において一致していることをまず述べておく<sup>244</sup>。

次にユイのソグド錦に技術上類似している「ペルシア錦」・「ソグド錦」と「連珠円内単独文錦」が類似している点を挿表 3・4 に基づいて列挙しよう。

第 1 に組織については両者とも毛織物圏に由来する緯錦である(挿表 3 の資料 1-7, I と挿表 4 資料の 1-8, I)。第 2 に撚りに関して両者とも経糸が Z 撚り(挿表 3, J-b, 挿表 4, J-b) で、緯糸は殆ど撚りのない糸が使われている(挿表 3, K-a, 挿表 4, K-a)。第 3 に両者とも経糸 1cm 間の糸数はおよそ(11-18)×2 の間に収まっている(挿表 3, J-d, 挿表 4, J-d)。第 4 に両者とも曲線で表されるべき文様の輪郭が階段状を呈したり、直線で

<sup>240</sup> 坂本 2001, pp. 84-86.

<sup>241</sup> Riboud 1983, pp. 111-112.

<sup>242</sup> ギルシュマン 1966, 図版 197・206・211・214 などペルシアの帝王に見られる。

<sup>243</sup> 括弧付きの「ペルシア錦」「ソグド錦」は本稿 p. 30 に述べたように詳細なデータが発表され、挿表 4 に挙げる錦である。

<sup>244</sup> ユイのザンダニーギーのデータは Shepherd and Henning 1959, pp. 28-30.

A	資料	1 ザンダニージー, 対羊(鹿)文錦	
B	登録 NO.		
C	図 NO.	図 6	
D	所蔵場所	ユイ, ノートルダム寺院	
E	年代 (推定)	7 末-8 世紀初	
F	製作地	ソグド	
G	文様	a	主文 羊(鹿)
		b	副文 四つ葉花文(西方タイプ)
		c	接合箇所 無し
H	材質	絹	
I	組織	綾組織緯錦	
J	経糸	a	陰経:緯経 3:1
		b	撚り方向 生糸 Z
		c	削り
		d	糸数/cm × 2(陰経+緯経)
K	緯糸	a	撚り方向
		b	削り
		c	糸数/cm × 色数
L	文丈(cm)	35.4(円の直径)	
M	窠間幅(cm)		
N	糸順		
O	耳	房耳	
P	線条/横帯	有り, 跳び杼	
Q	ベルクレ		
R	布幅(cm)	122	

- ・ データの不明な部分は空白になっている。
- ・ データは Shepherd and Henning 1959, pp. 18-40; Shepherd 1981, p. 106, 119 による。
- ・ 陰経は構成本数を示している。

## 挿表 2. 「ソグド錦」(ユイ, ノートルダム寺院所蔵)

表されたりする<sup>245</sup>。これらの線は文様において観察されるのであるが、削りの数値 3・4・6 などとして現れるのである(挿表 3, J-c, K-b, 挿表 4, J-c, K-b)<sup>246</sup>。第 5 に両者とも織物上に横向きの線条または横帯が走っている。これは跳び杼や緯糸の色の交替によるものである(挿表 3, P, 挿表 4, P)。第 6 に耳が残る錦は「房耳」を持っている(挿表

<sup>245</sup> これは文様の設計段階で織り方を決め、隣り合う 2-3 本の陰経を同時に動かしたり、4-6 越の同色の緯糸を同じ杼口に通したりするからである。陰経を同時に動かすと文様に水平の線が表れ、同色の緯糸を同じ杼口に通すと文様に垂直の線が表れる。それが繰り返されると階段状となる。経の削りが陰経 1 本で、緯の削りが 1 越の場合曲線になる。

<sup>246</sup> 削りの調査は基本的に最も多用される削りの数値を記録することになっているので、すべての調査において必ずしもデザイン上の削り、つまり直線や階段状の輪郭を数値化しているとは限らない。

		1	2	3	4	5	6	7	
A	資料	大連珠鹿文錦	連珠鹿文錦	連珠戴勝鸞鳥文錦	大連珠立鳥文錦	連珠天馬文錦	連珠猪頭文錦	連珠猪頭文錦	
B	登録 NO.	TAM 332:5	TAM 55:18	TAM 138:17	TAM 42	TKM 303	TAM 5:1, 379:2	TAM138:9/2-1	
C	図 NO.	図 10	『シルク』PL. 47・48	『シルク』PL. 42	図 9	『吐魯番』PL 141.	『吐魯番』PL. 191	図 11	
D	出土地	アスターナ332号墓	アスターナ55号墓	アスターナ138号墓	アスターナ42号墓	カラホージャ303号墓	アスターナ5号, 379号墓	アスターナ138号墓	
E	所蔵場所	新疆博物館	新疆博物館	新疆博物館	新疆博物館	吐魯番博物館	吐魯番博物館	新疆博物館	
F	年代	665年文書伴出	初唐	636年文書伴出	651年墓誌伴出	6世紀後半-7世紀前半	5号墓668年文書伴出	636年文書伴出	
G	文様	a 主文	連珠円内鹿	連珠円内鹿	連珠円内鳥	連珠円内鳥	連珠円内天馬	連珠円内猪頭	連珠円内猪頭
		b 副文	葡萄(左右対称)	植物	不明	植物?	植物	不明	連珠円内ハート型 四弁花文
		c 接合箇所	小連珠円内 変形二重円	小連珠円 内部不明	小連珠円内小円	小連珠円内 変形二重円	接合せず, 連珠環上に回文	小連珠円内小円	小連珠円内小円
H	材質	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	
I	組織	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	
J	経糸	a 陰経:母経	1(2):1	1(2):1(2)	1:1	1:1	1(2/3):1(2/3)	1(2/3):1(1/2)	1:1
		b 撚り方向	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z
		c 削り	3	最小1, 2, 主に3	最小1, 4, 6が多い	最小1, 3が多い	最小1	3	最小1, 2, 3が多い
		d 糸数/cm× (陰+母)	(15~16.5~19)×2	(13~14~15)×2	11×2	(17~18.3~20)×2	(15~15.3~16)×2	(11~12.2~14)×2	(13~16.8~20)×2
K	緯糸	a 撚り方向	無し	無し	無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し
		b 削り	最小2	最小1	最小2	最小2	最小1	最小2	最小1
		c 糸数/cm ×色数	(24~25.3~27)×3	(21~22.7~24)×3	(18~21~25)×3	(37~38~39)×3 (42~42.5~43)×2	(23~26~28)×3	(26~28.3~33)×3	(25~31.3~35)×3
L	文丈(cm)	22以上	約18	16以上	20.3	11.6(推定)	18×2 (猪頭の向きが逆の場合)	19.4	
M	窠間幅(cm)	17.3	約17	17	約16	13	19.5	13.2	
N	糸順	abccba	abccba	abccba	abccba	abcabc	abccba	abcabc	
O	耳	房耳	無し	毛糸コード3本	無し	無し	無し	有り	
P	線条/横帯	有り, 跳び杼	有り, 切り替え杼	有り, 切り替え杼	有り, 跳び杼	有り, 跳び杼	有り, 切り替え杼	有り, 切り替え杼の段文	
Q	ベルクレ	2越し交替	2越し交替	無し	無し	無し	無し	無し	

・図 NO.で『シルク』の表示は『シルクロード学研究』vol. 8, 2000を指す。  
・年代は墓誌・衣物疏・文書中で最も遅い年代を記入した。  
・陰経:母経は各経糸の1単位の比で、( )内は撚りまたは引き揃えによる構成本数である。  
・糸数の中間の値は平均値である。  
・糸順のabcは使用されているそれぞれの糸の色を示す。

・図NO.で『吐魯番』は『吐魯番博物館』1992を指し、『絲綢』は『絲綢之路』1972を指す。  
・データは坂本2000a, pp. 128-142による。  
・No.5・6・7は坂本の調査により詳細なデータが初めて公表されるものである。

挿表 3. カラホージャ・アスターナ出土 連珠円内単独文錦

		「ペルシア錦」			「ソグド錦」					
		1	2	3	4	5	6	7	8	
A	資料	シムルグ文錦 1 (カフタン)	シムルグ文錦 2	天馬文錦	連珠八弁花文錦 (コート)	連珠ダブル アクス文錦 1	連珠ダブル アクス文錦 2	連珠ダブル アクス文錦 3	連珠重八弁 花文錦	
B	登録 NO.	KZ 6584-a	NO. 16364	897.III.5 (26.812/11)	KZ 6732-d	M B-A-43 905	M B-B-165 (D) N1153	M B-469 3497	M B-Γ-H (3) 1036	
C	図 NO.	図 4	図 5	図 2	イェルサリムスカヤ 1996, Abb224-5			図 8	図 22	
D	出土地/出所	モシチェヴァヤ= バルカ	聖ルーの聖遺物	アンティノエ	モシチェヴァヤ= バルカ	モシチェヴァヤ= バルカ	モシチェヴァヤ= バルカ	モシチェヴァヤ= バルカ	モシチェヴァヤ= バルカ	
E	所蔵場所	エルミターージュ美術館	パリ装飾美術館	リヨン織物美術館	エルミターージュ美術館	モスクワAH 考古学研究所	モスクワAH 考古学研究所	モスクワAH 考古学研究所	モスクワAH 考古学研究所	
F	年代, 製作地 (推定)	8世紀前半, ペルシア	7世紀, ペルシア	7世紀前半, ペルシア	8-9世紀, ソグド	8世紀, ソグド	8世紀, ソグド	8世紀, ソグド	8世紀, ソグド	
G	文様	a 主文	連珠円内シムルグ 小三岐側花付帯	連珠円内シムルグ 小三岐側花付帯	連珠円内天馬	連珠円内八弁花 二弁でハート型花卉	連珠円内ダブルアクス 上下に変形生命の樹	連珠円内ダブルアクス 上下に変形生命の樹	連珠円内ダブルアクス	連珠円内重八弁花
		b 副文	植物 (上下左右対称)	植物(側花) (上下左右対称)	植物 (上下左右対称)	八弁花 (上下左右対称)	ダブルアクス (左右対称)	ダブルアクス (左右対称)	ダブルアクス (左右対称)	八稜花 (上下左右対称)
		c 接合箇所	小連珠内 ハート型花	小連珠内三日月 又はダブルアクス	小連珠内三日月	接合せず	無し	無し	無し	接合せず
H	材質	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	
I	組織	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	綾組織緯錦	
J	経糸	a 陰経:母経	1(2):1	2(1):1	1(3):1	2:1	1(2/3):1	1(2):1	1(2):1	1(2):1
		b 撚り方向	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z	Z
		c 削り	1	2	1	記録無し	最小 1	最小 1, 2が多い	最小 1, 2が多い	最小 1, 2が多い
		d 糸数/cm× (陰+母)	16×2	17.7×2	15×2	(18~20)×2	(18~18.5~19)×2	(14~17~19)×2	(14~16.1~18)×2	(17~17.8~19)×2
K	緯糸	a 撚り方向	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し
		b 削り	最小 2, 4,6有り	2	最小 1, 主に2	記録無し	最小 2, 4,6,8有り	最小 2, 4有り	最小 2, 4有り	最小 1, 主に2
		c 糸数/cm ×色数	72×2	51.5×2	52×3	(22~24)×2	(12~15.8~18)×2	(13~15~17)×2	(14~15~16)×2	(27~29.4~31)×2
L	文丈(cm)	20	41	13.1	14(推定)	8.5~9	10	5	10	
M	窠間幅(cm)	17	41×2(対称)	13.1	10(推定)	5.6~6	6.7	3.7~4.5	6.6	
N	糸順	abba	abba	記録無し	記録無し	abba	abba	abba	abba	
O	耳	無し	無し	無し	有り	房耳	房耳	房耳	無し	
P	線条/横帯	有り	不明	無し	有り, 切り替え杼	有り, 跳び杼	有り, 跳び杼	有り, 跳び杼	有り, 跳び杼	
Q	ベルクレ	無し	無し	一越し交替	無し	無し	無し	無し	無し	

・データは次の文献による。

シムルグ文錦 1, 2 はVial 1976, pp. 40-41, シムルグ文錦 1の年代・製作地はRiboud 1976, p.37による。

シムルグ文錦 2の年代・製作地はギルシュマン 1966, p. 228による。

天馬文錦はMartiniani-Reber 1986, p. 45による。

連珠八弁花文錦はIerusalimskaja 1996, p. 264による。

その他の錦は坂本の調査により初めて公表されるものである。

挿表 4. 「ペルシア錦」・「ソグド錦」

3, O, 挿表 4, O). このようにカラホージャ・アスターナ出土「連珠円内単独文錦」はイラン文化圏の錦と技術的に類似する。逆に次章で取り扱う「連珠円内対称文錦」と比較すればその相違は歴然としている（挿表 5, H, I-b 参照）。

なお、これまでにイェルサリムスカヤが発表したモシチェヴァヤ=バルカ出土錦の約 160 点については、そのほとんどが 8-9 世紀とされる。従って同遺跡出土の連珠円内単独文錦は 8-9 世紀のものである。しかし、組織・撚り・単位間経糸数・跳び杼など基礎的な技術においては、7 世紀の「ペルシア錦」と 8 世紀の「ペルシア錦」・「ソグド錦」は同じ傾向で、7 世紀の「ソグド錦」もペルシアの技術の影響を受け、8 世紀にはその基礎技術を継承していたと考えられる。

「ペルシア錦」と「ソグド錦」は、過去・現在の研究者によって文様・技術・色彩など色んな角度から論証され、その帰属がそれぞれペルシア本土産、ソグド本土産と認められているものである。さらに筆者の詳細な調査によって、イラン文化圏生産の両者とカラホージャ・アスターナ出土錦との技術的類似がここに判明した。前項で検討した文様の一致によるイラン文化圏生産説を補強するものとなろう。

#### 6. 「ペルシア錦」・「ソグド錦」を取り巻く歴史的状況

前項でカラホージャ・アスターナ出土錦と「ペルシア錦」・「ソグド錦」の類似を検討したが、僅かながら、カラホージャ・アスターナ出土錦と「ペルシア錦」との相違や、「ペルシア錦」の相互の違いが存在する。

カラホージャ・アスターナ出土の「連珠円内単独文錦」（挿表 3, 資料 1-7）は「ペルシア錦」（挿表 4, 資料 1-3）や「ソグド錦」（挿表 4, 資料 4-8）と技術的に類似しているが、「ペルシア錦」ほど 1cm 間の緯糸数は多くない（挿表 3, K-c, 挿表 4, K-c）。挿表に挙げた「ソグド錦」のうちダブルアクス文錦はアスターナ出土の「連珠円内単独文錦」の 1cm 間の緯糸数に届かない（挿表 4, 資料 5-7, K-c, 挿表 3, 資料 1-7, K-c）。簡単に示すと単位間緯糸数は「ペルシア錦」>カラホージャ・アスターナ出土錦 $\cong$ 「ソグド錦」である。

イラン文化圏内の「ペルシア錦」と「ソグド錦」との相違はどうだろうか。それらの違いとしては「ペルシア錦」の方が「ソグド錦」より 1cm 間の緯糸数が多い点が挙げられる（挿表 4, 資料 1-3, K-c）。これは細い緯糸を用いて緊密に打ち込んでいるからで、高級品である。特に、聖ルーのシムルグ文錦（図 5）やアンティノエ出土の連珠天馬文錦（図 2）は文様の輪郭がスムーズであり、また前者は文丈（挿表 4, 資料 2, L）や窠間幅（挿表 4, 資料 2, M）が大きい。第 1 編第 1 章第 3 節で述べたように、4 世紀に西からペルシアに移住させられた織工が、ペルシアで彼らの技術を伝え、織物業が国家的事業として発展した。そのようなペルシアの歴史的背景から考えると、7 世紀の「ペルシア錦」である聖ルーのシムルグ文錦（図 5）と連珠天馬文錦（図 2）は、織物業発展の結果可能となった精巧な織物の実物である。

それらに比べて 8 世紀のモシチェヴァヤ=バルカ出土の「ペルシア錦」であるシムルグ文錦（図 4）は文様表現の簡素化が見られる。例えば、連珠円内の付帯文様である三岐の側花文や翼の根本のパルメット文は随分デフォルメされている。おまけに全体に経方向の垂直線が目立つ。これはその箇所では緯糸が同じ杼口に連続して入れられるデザイン上の設計によるもので、綜紵数の減少や織の工程で省力につながる。

このように 7 世紀と 8 世紀の「ペルシア錦」に違いがあり、8 世紀の「ソグド錦」のなかに 7 世紀の錦に織り技術の点で及ばないものがあり、また、トゥルファンから 8 世紀の連珠円内単独文錦がほとんど出土しないのは、ペルシアやソグドの人々をとりまく 7・8 世紀の歴史的状況の変化が反映しているものと思われる。

西アジアにおいて、7 世紀初めにイスラム教が成立し、イスラム勢力は 630 年代アラビア全土に及び、635 年にクテシフォン（Ctesiphon）を占領し、641 年のニハーヴァンド（Nihāvand）の戦いでペルシアを破った。その結果 641 年、遂にササン朝ペルシアは滅亡した。651 年、東に逃れたヤズデギルドⅢ世（Yazdgerd III, 632-651 年）はメルヴで暗殺され、名実ともにササン朝ペルシアは滅んだ。

ヤズデギルドⅢ世の子ペーローズは中央アジアのトカラに亡命した。『旧唐書』によれば<sup>247</sup>、龍朔元年（661 年）アラブの侵攻を恐れ唐に救援を請うた。そこで、唐は使を遣わして波斯都督府を置き、ペーローズを都督に任命した。ペーローズはしばしば朝貢し、自ら唐朝に赴いた。儀鳳 3 年（678 年）ペーローズは波斯王とされたが本国に帰ることができないまま、本国は次第にイスラム勢力に侵された。景龍 2 年（711 年）唐に来朝して左威衛將軍を拝したが、遂に客死した。ペーローズは 20 年余りトカラに身を寄せていた。当時、部落の人々は数千人いたが次第に離散したという。

しかし、なお残った人もいたらしい。『冊府元龜』によれば 8 世紀中葉まで波斯は唐朝に使を送っている<sup>248</sup>がこれはトカラの亡命政権であろう。その部落の人々の中には王室の工房にいた織工も含まれると推定され、徐々にソグドや中国に離散していったと思われる。

8 世紀の錦が 7 世紀の錦に劣るのは、かつてペルシア王のもとで育成された織工たちが国の滅亡とともに東へ移り、イスラム勢力に王室工房が破壊された後もペルシアに残った織工たちが、かつてのペルシア錦を復元しようとして技術的に達し得なかった結果ではなかろうか。

一方、ソグドにおいては、7 世紀後半からしばしばアラブ人が襲来しては都市の富を略奪していたが、8 世紀の初頭にクタイバ（Qutaybah）がホラサンとマーワラーアンナフルのカリフの総督として着任して後、マーワラーアンナフルの殆どの都市を奪取して圧政を敷いた。

712 年、ソグドの住民はホージェントへ逃れたが、裏切りに会いほとんど全員が殺害

<sup>247</sup> 『旧唐書』卷 198, 列伝 148, 西戎（中華書局標点本, p. 5313）。

<sup>248</sup> 『冊府元龜』卷 971, 朝貢 4（宋本, p. 3854）。

された。助かったのは中国から帰ったばかりの商人 400 人だけであった。この事実はタバリーが次のように述べている。

Al-Harashī ordered that the Soghdians be put to death. First, however, he separated the merchants from the rest of them—there were four hundred merchants who possessed large quantities of merchandise; they had brought the wares from China<sup>249</sup>.

715 年のクタイバの死後も圧政は続けられ、住民は重税に苦しめられた。

このような動乱と重税にひしがれた困窮の時期に織物を織り、その織物がソグド商人の手によってソグドからトゥルフアンへ運ばれることは不可能であったろう。トゥルフアン出土の「連珠円内単独文錦」は最も遅くて 706 年の庸調布と一緒に出土した花連珠円文錦である<sup>250</sup>。盛餘韻が主張するように、トゥルフアンのソグド人がトゥルフアン出土の「連珠円内単独文錦」を織っていたなら、8 世紀に何故トゥルフアンの「連珠円内単独文錦」が途絶えるのであろうか。錦を織る作業にソグド地域のような障害は何もない。やはり歴史的状況から見て「連珠円内単独文錦」が途絶える理由は次のように考えられる。

7 世紀にソグド文化が隆盛を極めた頃にソグドで生産された「連珠円内単独文錦」がトゥルフアンへ到達していたが、8 世紀には先に述べたような事情でソグドから東方に運ぶ状況ではなかったからに違いない。

ソグドで生産された 7 世紀の「連珠円内単独文錦」に比べて、8 世紀の「ソグド錦」であるダブルアクス文錦<sup>251</sup>（図 8、挿表 4、資料 5-7）や連珠重八弁花文錦（図 22、挿表 4、資料 8）は文様が小振りで、前者は単位間緯糸数が少ないという退行は（挿表 4、資料 5-7, K-c）、ソグドにおける動乱の結果と考えられる<sup>252</sup>。

ペルシアやソグドにおける歴史的変遷は「連珠円内単独文錦」の変遷でもあった。

第 2 章を通じて論じて来たように、「連珠円内単独文錦」は、中国やトゥルフアンで生産されたものでなく、イラン文化圏で生産されたと考えられる。従って本編第 1 章第 1 節第 1 項で示した織物伝播の第 1 のケースに当たり、織物自体が生産地からトゥルフアンに到達したと結論することが出来る。

---

<sup>249</sup> Powers 1989, p. 176. 訳：アル=ハラシはソグド人を死に処するよう命じた。しかし先ず彼はソグド人の中から商人達を選び分けた。商人達は 400 人いて莫大な商品を持っていた。商人達は中国から品物を運んできたのであった。

<sup>250</sup> 他に 722 年文書を伴う連珠猪頭文錦がある。しかし未発表のため文様の詳細は不明である。

<sup>251</sup> ダブルアクス文は左右対称に表されているが、筆者の詳細な調査の結果、左右の削りが一致せず、従って左右屏風でなく、一つの文様として織られていることがわかった。

<sup>252</sup> 8 世紀のソグドにおける織物センターの違いという場合も排除できない。またザンダニージャーを織る織工がホラサンに行って織ったが、エレガンスや品質において比べものにならなかったという記述があるので（Frye, 1954, p. 20）ホラサン製という場合も考えられる。

### 第3章 「連珠円内対称文錦」

連珠円内対称文様には次のようなものがあり，組織は平組織経錦・綾組織経錦・綾組織緯錦・平地綾文綾<sup>253</sup>がある。

#### a 小連珠円（5cm 前後の大きさ）の錦

綾組織経錦：

- |                                 |                         |       |
|---------------------------------|-------------------------|-------|
| 連珠対鵲文錦（TAM206:48/1）             | 689年墓誌伴出 <sup>254</sup> | （図23） |
| 小連珠団花錦（TAM211:9） <sup>255</sup> | 633年墓誌伴出                |       |
| 大紅地団花錦（TAM104） <sup>256</sup>   | 唐                       |       |
| 連珠対鴨文錦（TAM363:2） <sup>257</sup> | 710年文書伴出                |       |
| 朱地連璧鳥形文錦 <sup>258</sup>         |                         |       |

#### b 中連珠円の錦（10cm 前後の大きさ）の錦

平組織経錦：

- |                                      |           |       |
|--------------------------------------|-----------|-------|
| 朱紅地連珠孔雀文錦（TAM169:34）                 | 576年衣物疏伴出 | （図24） |
| 連珠対孔雀「貴」字文錦（TAM48:6）                 | 617年衣物疏伴出 | （図25） |
| 連珠対馬錦（TAM302:22），                    | 653年墓誌伴出  | （図15） |
| 朱地連璧天馬文錦 <sup>259</sup>              |           |       |
| 対鳥対獅子「同」字文錦（TAM92:37） <sup>260</sup> | 668年墓誌伴出  |       |

綾組織経錦：

- |                                    |          |       |
|------------------------------------|----------|-------|
| 紅地連珠対馬錦（TAM151:17）                 | 644年文書伴出 | （図26） |
| 連珠対馬錦（TAM302:04） <sup>261</sup>    | 653年墓誌伴出 |       |
| 連珠対羊文錦（TAM206:48/2） <sup>262</sup> | 689年墓誌伴出 |       |
| 白地連璧鬪羊文錦 <sup>263</sup>            |          |       |

#### c 大連珠円の綺，錦（20cm 前後の大きさの連珠円）

綺：

<sup>253</sup> この組織の織物は錦とは異なる技法を用いた「綺」と呼ばれるものであるが，文様上極めて関係が深いので，併せて考察の対象とする。

<sup>254</sup> 以下のアスターナ出土錦の年代は墓誌・衣物疏・文書のうち最も遅い年代を記している。

<sup>255</sup> 『シルクロード学研究』2000，PL. 69.連珠内に花文が一つであるが，上下打ち返して織れるので，対称と見なす。

<sup>256</sup> 『シルクロード学研究』2000，PL. 70.

<sup>257</sup> 『吐魯番博物館』1992，PL. 180.

<sup>258</sup> 『至宝』2002，図52.

<sup>259</sup> 『至宝』2002，図51.

<sup>260</sup> 『絲綢之路』1972，図29.

<sup>261</sup> 『シルクロード学研究』2000，PL. 37.

<sup>262</sup> 『シルクロード学研究』2000，PL. 54.

<sup>263</sup> 『至宝』2002，図52.

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15		
A	資料	連珠対馬錦 1	連珠対馬錦 2	紅地連珠 対馬錦	朱地連璧 天馬文錦	連珠対孔雀 「貴」字文錦	朱紅地連珠 孔雀文錦	対鳥対獅 「同」字文錦	連珠小団花錦	連珠対鴨文錦	連珠対鶴文錦	朱晒地連璧 鳥形文錦	連珠対羊文錦	白地連璧 鬮羊文錦	連珠天馬 騎士文錦	騎士文錦		
B	登録 NO.	TAM302:22	TAM302:04	TAM151:17	大谷 コレクション	TAM48:6	TAM169:34	TAM92:37	TAM211:9	TAM363:2	TAM206:48/1	大谷 コレクション	TAM206:48/2	大谷 コレクション	TAM77:6	TAM322:22/1		
C	出土地	アスターナ 302号墓	アスターナ 302号墓	アスターナ 151号墓	アスターナ	アスターナ 48号墓	アスターナ 169号墓	アスターナ 92号墓	アスターナ 211号墓	アスターナ 363号墓	アスターナ 206号墓	アスターナ	アスターナ 206号墓	アスターナ	アスターナ 77号墓	アスターナ 322号墓		
D	図 NO.	図 15	『シルク』 PL. 37,38	図 26	『至宝』 図 51	図 25	図 24	『絲綢』 PL. 28	『シルク』 PL.69,71	『絲綢』 PL. 180	図 23	『至宝』 図 52	『シルク』 PL.54	『至宝』 図 52	図 29	図 30		
E	年代	653年 墓誌伴出	653年 墓誌伴出	644年文書 伴出	7世紀前半	617年衣物疏 伴出	576年衣物疏 伴出	668年墓誌 伴出	7世紀後半～ 8世紀初	710年文書 伴出	689年墓誌 伴出	7世紀後半	689年墓誌 伴出	7世紀後半	唐	663年墓誌 伴出		
F	文様	a 主文	連珠円内天 馬, 生命の樹	連珠円内 天馬, 縮小 生命の樹	連珠円内 天馬, 縮小 生命の樹	連珠円内天 馬, 生命の樹	連珠円内 孔雀, 連珠環上回文	連珠円内 孔雀, 香炉	大小二重連珠円 内孔雀	連珠円内 団花	連珠円内鴨	連珠円内鶴, 縮小 生命の樹, 連珠環上回文	連珠円内鳥	連珠円内羊, 縮小 生命の樹, 連珠環上回文	連珠円内 有翼羊, 縮小 生命の樹, 連珠環上回文	連珠円内騎 士, 天馬, 連珠環上回文	連珠円内騎 士, 天馬, 連珠環上回文	
		b 副文	四つ葉花文	四つ葉花文	四つ葉花文	四つ葉花文	龍馬, 貴の字	天馬, 鹿	獅子・植物	四つ葉花文	四つ葉花文	四つ葉花文	四つ葉花文	四つ葉花文	八弁花文	八弁(葉)花文	パルメット 唐草花文	パルメット 唐草花文
		c 接合箇所	八弁花文	八弁花文	八弁花文	八弁花文	接合せず	接合せず	八弁花文	接合せず	接合せず	接合せず	接合せず	接合せず	接合せず	接合せず	接合せず	接合せず
G	材質	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	絹	
H	組織	平組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	平組織経錦	平組織経錦	平組織経錦	平組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	綾組織経錦	
I	経糸	a 陰経:母経														2:1	2:1	
		b 撚り方向	殆ど無し	S	殆ど無し	S	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	S	S	S	S	S	S	
		c 削り	1	1	1	1/2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
		d 糸数/cm ×色数	(52~53~ 54)×3	(51~52.5~ 54)×3	(55~56~ 57)×3	(40~45~ 50)×3	(46~50.5~ 54)×3	(44~47.3~ 50)×3	(49~63.4~74) ×3	(48~51~ 54)×3	(81~94~105)×3	(60~62~ 63)×4	(60~63.8~ 67.5)×4	(54~55.6~ 57)×4	(52.5~57.5~ 67.5)×4, 45×5	(15~17~19) ×2(陰+緯)	(13~13.7~ 14)×2 (陰+緯)	
J	緯糸	a 陰緯:母緯	1:1	1:1(1/2)	1:1(1/2)	2:2	1:1	1:1	1:1	1:1	1:1	1:1	1:1(1/2)	1:1	(1/2)1:1			
		b 撚り方向	無し	殆ど無し	殆ど無し	無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	殆ど無し	S	殆ど無し	S	殆ど無し	殆ど無し	
		c 削り	2	2	2	2	2	2	1	2	1	2	2	2	2	1	1	
		d 糸数/cm ×(陰+母)	(14~15.7 ~17)×2	(14~15 ~16)×2	14×2	(10~11)×2	(12~13~ 14)×2	(13~13.5~ 14)×2	(14~14.8~16) ×2	(14~15~ 16)×2	(14~16~17) ×2	(12~12.8~ 13)×2	(1.2~14.3~ 15)×2	(14~14.3~ 15)×2	(12.5~13.5~ 15)×2	(24~27~30) ×5(色数)	(15~19~22) ×4(色数)	
K	文丈(cm)	8.0~8.6	8.0~8.4	8.7	9.3	10.0(推定)	9.6~10.0	12	4.0~4.2	4	6.0	5.0	7.8	7.0	約25.0	32.0		
L	窠間幅(cm)	18.8	不明	9.7	不明	不明	不明	13	4.2	3.5	4.5	3.5	6.5	7.0	25.0	不明		
M	糸順	abccba	abccba	abccba	abccba	abccba	abccba	abccba	abccba	abccba	abcdcaba	abcdcaba	abcdcaba	abcdcaba	不明	abcdabcd		
N	耳	無し	無し	無し	無し	無し	無し	有り	有り	有り	無し	有り	無し	無し	無し	無し		
O	点線現象	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	不明	有り	不明	有り	有り				
P	ベルクレ														一越し交替	一越し交替		

・図 NO.で『シルク』の表示は『シルクロード学研究』vol. 8, 2000, 『至宝』は『絲綢路の至宝』2002, 『絲綢』は『絲綢之路』1972を指す。  
・データは坂本 1996, pp. 89-93; 2000a, pp. 128-142による。 No.7・9は坂本の調査により詳細なデータが初めて公表されるものである。  
・データの表示は挿表 3に準ずる。

挿表 5. アスターナ出土

連珠円内対称文錦

黄色龍文綺 (TAM221:12) 653 年墓誌伴出 (図 27)

黄色龍文綺片 (TAM226:16) 綺片上 710 年銘文 (図 28)

綾組織緯錦：

騎士文錦 (TAM337:15)<sup>264</sup> 657 年墓誌伴出

騎士文錦 (TAM322:22/1) 663 年墓誌伴出 (図 29-a・b)

連珠天馬騎士文錦 (TAM77:6) 唐 (図 30)

騎士文錦 (MIKⅢ6236)<sup>265</sup>

対鴨文錦 (TAM92:4)<sup>266</sup> 668 年墓誌伴出

樹下対鹿連珠円文錦 (ast.i.3.a.01<sup>267</sup>) 金銀貨伴出 (表 1 参照)

花樹対鹿文錦<sup>268</sup>, スタイン発掘樹下対鹿連珠円文錦 (ast.i.3.a.01) と同文様

上記の「連珠円内対称文錦」には小円・中円・大円の連珠円がある。団花文様のえがかれた一部の例を除いて、ほとんどの錦には連珠円内に一对の動物が対称で表されている<sup>269</sup>。連珠円と連珠円の間にある菱形の空間に置かれる副文としては上下左右対称の植物文、あるいは左右対称の動物が表されている。連珠円内の動物は馬・鳥・羊・鹿・龍、人物は馬に騎乗する騎士がある。連珠環と連珠環の接点に八弁花文が表されたり、あるいは環の上下左右に回文が表されたりするが、連珠環のみのものもある。連珠円内の花文は一見単独文様であるが、上下左右対称である。織技については後述するが、上下対称に織られるので対称文様として扱った。

## 第 1 節 先行研究による分析と生産地の確定

### 1. 対称文様の織技

「連珠円内対称文錦」は、文字通り対称に配された動物、人物が連珠円内に表されている。上記の a. 小連珠円と b. 中連珠円の錦の文様は左右対称に見えるが、実際はすべて上下対称に織られている。

古くから中国に存在したタイプの機は綜純数に限界があり、綜純数 50-60 枚、文丈 5cm ぐらいが限界であった。「楼機」(空引き機)<sup>270</sup>が広く普及していなかった 6・7 世

<sup>264</sup> 武 1962, 図 4.

<sup>265</sup> Sakamoto 2004b, Pl. 7.

<sup>266</sup> 『絲綢之路』図版 30.

<sup>267</sup> Stein 1928, PL. LXXIX.

<sup>268</sup> 『西域考古図譜』1972, 染織と刺繍 [2].

<sup>269</sup> ここに挙げた「連珠円内対称文錦」は段文の連珠円内対称文錦を対象としていない。段文錦として第 4 編で対象とする。

<sup>270</sup> 敦煌文書に現れる史料用語で P. 2638 (936 年), に「楼機綾一匹」, S. 5463(2) (958 年) に「楼機一匹」という織物として登場するが、この「楼機」は高楼束綜提花機(楼があり綜純を束ねて引き、文様を織り出す機、つまり空引き機)であるとされている(王・趙 1989, pp. 101-102)。

紀の中国においては、挿表3や4に見られるように、11cmを超える文丈（挿表3、資料1-7, L, 挿表4、資料1-4, L）の織物の連珠円内に単独文様が表されるササン様式の錦を、その通り模倣することは無理であった<sup>271</sup>。そこで中国古来の機の性質上、限られている綜紵を用い、限界を超えた大きさの文様を織るために、同じ綜紵を二度使った。そのようにしてササンのモチーフを8-10cmの連珠円内に入れ、経錦で織りだしたのである<sup>272</sup>。その結果が対称文様を生み出すこととなった。言い換えれば、経錦の技法で上下打ち返して（同じ綜紵を二度使う）、大きいササンの文様を半数の紋綜紵でササン文様風に中国の機で織る工夫をしたのである。これは中国において経錦の技法で大きい文様を模倣する場合に考案されたもので、本章冒頭に挙げる a・b の「連珠円内対称文錦」は中国製である。上に述べてきた経錦は上下対称に織られていたが、7世紀中葉になると c. 大連珠円の錦・綺が綾組織緯錦<sup>273</sup>や平地綾文綾で織り出された。そのうちの「連珠円内対称文錦」である騎士文の錦は挿表5に見られるように文丈が25cmを上回り（挿表5、資料14, 15, K）、左右対称に表されている。緯錦で文丈が大きになるとペルシアやソグドの錦を連想するが、綾組織緯錦の「連珠円内対称文錦」の糸の撚りは、筆者の調査によれば、弱いS撚りである（挿表5、資料14・15, I-b 参照）。これは中国本来の撚りである。綺は上下対称で織られているが文丈が19-21cmと大きい。このことは新しい機、つまり空引き機の出現を思わせる。cの「連珠円内対称文」の綺や、綾組織緯錦で織られていても騎士文の錦は中国のものである。

## 2. 文献史料および織技による生産地の確定

「連珠円内対称文錦」について、1928年の報告で、スタインは文様では西の影響を受けつつ、技術的には中国の経錦であることを見抜いていた。1963年に夏鼐は「連珠円内対称文錦」が中国古来の織技術である経錦で織られていることによって中国製とした<sup>274</sup>。

1962年の報告で武敏はその時までには発掘されていた「連珠円内対称文錦」を経錦で中国製としたが、更に、1984年にその後新たに発掘された「連珠円内対称文錦」と花文錦を加え、6-8世紀のそれら錦の産地について検討を加えた。そこで氏は新たにその産地は蜀であると考え、その根拠として 1. 蜀は最も早くから錦を生産し、錦綾の生産

---

そして南宋の『蚕織図』に初めて図が描かれるが（染織用語解説、空引機の図参照）実際には唐代に遡る事も可能であるとされている。晩唐の詩に「美人嬾態胭脂愁，春梭抛擲鳴高樓」とあり、楼機が存在した証拠となろうと張湘雯は述べている（張 1991, p. 378）。

<sup>271</sup> 佐々木 1976, p. 29 で佐々木は対称文様が上下打ち返しの技法を用いることを指摘し、横張 1986, p. 97 で横張は古代の棒綜紵の機で経糸上に直接並べられる綜棒の数の制約を指摘している。6・7世紀の機に置いても構造原理は同じで、同様の事が言える。

<sup>272</sup> 坂本 1993, 237-239.

<sup>273</sup> 坂本 2000a p. 132, 140. 錦の組織の決定は、経錦、緯錦の決定要素である糸の交錯状態、文丈の大きさ、「点線現象」の有無によるものである。

<sup>274</sup> 夏 1963, pp. 67-68, 図版 XI.

が盛んであったこと、2. 出土錦の文様は『歴代名画記』に記されている陵陽公で益州大業台を兼ねる竇師綸の創作によるもので、その対称文様が「陵陽公様」の「瑞錦」であると記述されていること<sup>275</sup>、3. 蜀地と西域の商道は張騫が西域に至る以前から通じていたこと、4. 唐代西州市場において「梓州小練」や「益州半臂」の価格が記載された大谷文書（「唐天宝二年（743年）交河郡市估案」no. 3097・3047）が発見され、織物が実際に蜀から来たことが確認できること、さらに益州から半臂が届いているが通常半臂は錦で作られるため間接的に錦が益州すなわち蜀から来たと言えること、5. 龍紋綺（TAM226:16 図28）<sup>276</sup>に「景雲元年（710年）双流県折調紬（細）綾一疋」の題記があって、この題記は「景雲元年」（710年）に「双流県」から「調」として「細綾一疋」が絹や紬の代わりに収められたことを意味していて、そこに書かれた地名「双流県」は蜀の成都付近であることなどを列挙している。

武敏より少し前1981年に王炳華はトゥルフアンから出土した7世紀中葉から8世紀中葉の麻布17資料や絹織物3資料の墨書や印判に注目した<sup>277</sup>。そしてこれらの布がいわゆる庸調布であり、墨書や印判が税の上納の過程を示していて、同時代史料の記述に合致することを指摘した。更に、出土した墨書のある麻布や絹織物が今の河南省、陝西省、湖北省、湖南省、四川省、江蘇省、浙江省からトゥルフアンに来ていること、中原で織られた布や絹は軍資金や賜物として西方にもたらされ、貨幣として流通していたと述べている。

1982年、孔祥星は大谷探検隊がトゥルフアンから将来したいいわゆる「大谷文書」の漢文文書「唐天宝二年交河郡市估案」に記された染織品の物価表によって、絹織物は益州・梓州（四川省）、河南府・陝州（河南省）、蒲州（山西省）、麻織物は常州（江蘇

---

<sup>275</sup> 1973年論文で岡崎敬は『歴代名画記』に記された竇師綸の項により連珠円内動物対称文錦を中国製と指摘しているが、武1984, pp. 78-80で、さらに武敏は蜀であるとした。なお、『歴代名画記』では次のように記述されている。「竇師綸、字望言…封陵陽公。性巧絶。草創之際、乘輿皆闕。勅兼益州大行台、檢校修造。凡創瑞錦・宮綾、章彩奇麗、蜀人至今謂之陵陽公様。…高祖・太宗時、内庫瑞錦対雉・鬪羊・翔鳳・游麟之状、創自師綸、至今傳之。」；書下し「竇師綸、字は望言…陵陽公に封ぜらる。性は巧絶なり。草創之際、乘輿は皆闕く。勅して益州大行台を兼ね、修造を檢校せしむ。凡そ創むるところの瑞錦・宮綾は章彩奇麗なり。蜀人、今に至るもこれを陵陽公様と謂う。…高祖・太宗の時、内庫の瑞錦の対雉・鬪羊・翔鳳・游麟之状は、師綸より創まり、今に至るもこれを伝う。」；訳「竇師綸、字は望言…陵陽公に封ぜられた。生まれつきたいへん器用であった。唐朝建国の際には、朝廷の公式の乗り物（乘輿）がみな揃っていなかったため、勅令により益州大行台を兼職し、乘輿の修復製造を監督させられた。彼の創作した瑞錦・宮綾は彩色もつやも鮮やかですぐれて美しかった。蜀（四川省）の人々はいまなお、これを陵陽公の「様」（様式）とよんでいる。…高祖・太宗の時代の、宮中秘庫に収められた瑞錦のうち対向する雉の図柄、格闘する羊の図柄、天翔ける鳳の図柄、麒麟の悠々たる図柄は、師綸の創造によるもので、現在まで伝っている。」長廣1977, pp. 268-269による。

<sup>276</sup> この題記のある織物(TAM226:16)は平組織の地に双龍連珠円文が3/1の綾流れで表された断片で、文様の一部が残っている。

<sup>277</sup> 王1981, pp. 56-62.

省)、衣服は益州(四川省)からトゥルフアンに到達していることを指摘した<sup>278</sup>。生絛や半臂に冠された梓州、益州の地は蜀にある。武敏も四川(蜀)との関係を証明するのに同じ「唐天宝二年交河郡市估案」を用いている。

武敏は上記の王や孔祥星が文書に基づいて布・絹・絛・練・綺が中国からトゥルフアンに来たという見解を更に進め、麻や上記の絹織物の他に連珠円内対称文様の錦や綺が、蜀からトゥルフアンに到来したことを示したのである。また、この武敏の研究はスタンや夏鼐が「連珠円内対称文錦」を中国製としていたのを一歩すすめ蜀製としたのである。

ただ、武敏が蜀製であると考察した6世紀から8世紀に比定される錦綾のうち、6世紀の錦については、氏の挙げた根拠だけでは不十分である。なぜなら根拠の2に挙げられる「瑞錦」を創作した竇師綸は唐初に活躍した人であるからである。根拠2は7世紀以降の錦の文様にはあてはまるが、それ以前の6世紀の錦には当てはまらない。根拠4は上記のように交河郡の時期の文書に記されるから8世紀中葉の絹織物に関してのみ根拠とすることが出来る。根拠5は8世紀初めの絹織物に対して有効である。しかるに、6世紀の錦も蜀から来たという根拠に関しては1と3であり、これでは可能性に過ぎず不十分である。

上記のように不十分な部分は賈応逸の見解によって補うことが出来る。本編の第1章で述べたように、賈応逸は、トゥルフアン出土錦の一部は経・緯糸とも無撚、またはゆるいS撚りで、このS撚りは絹であれ麻であれ中原地区の織物に特徴的に見られることを指摘した。つまり、トゥルフアン出土錦のうち撚りなし、またはS撚りの錦は中国製であることを意味する。この章の冒頭に挙げた「連珠円内対称文錦」を見ると殆ど撚りがないかS撚りである(挿表5, I-b 特に6世紀の資料6参照)。武敏が挙げた6-8世紀の動物が連珠円内に入れられる対称文錦も殆ど撚りがないかS撚りである<sup>279</sup>。この撚り方向によって、武敏の証明が不十分であった点を補うことが出来、6世紀の麴氏高昌時代にも蜀から錦がトゥルフアンに到達していたことが明かとなったのである。

先行研究で述べられていない点を以下に補足すると、まず、「連珠円内対称文様」は、蜀製の「瑞錦」の文様である対雉(=鳥)、鬪羊などと一致している<sup>280</sup>。次に、蜀とトゥルフアンの関係について、トゥルフアンから出た折調細綾の龍紋綺に蜀の地にある「双流県」の文字が記載されていることを武敏が述べていたが、それらの蜀から上納された庸調は、送納を指定された地である涼州に送られ、河西・西域に送り出す軍物としての布帛の中心集積地であった涼州<sup>281</sup>から西州方面へ配布された。そのルートが存在したことが調の実物である龍紋綺(図27・28)によっても証明され、更に両地の関係が知ら

<sup>278</sup> 孔 1982, pp. 18-23.

<sup>279</sup> 坂本 2000b, p. 171, 表 1.

<sup>280</sup> 注 275 参照

<sup>281</sup> 「大谷文書」no. 2597 「劍南諸州庸調送至涼府」とある(『大谷文書集成』1, p. 99); 荒川 1992, pp. 33-34.

れるのである。

以上の点から「連珠円内対称文錦」は蜀すなわち中国本土からトゥルファンにもたらされたとすることが出来る。

## 第2節 資料における東西織物文化の伝播と融合の考察

### 1. 文様にみる東西の要素

「連珠円内対称文錦」が蜀製であることについて先行研究を紹介しつつ述べてきたが、ここでは蜀製の錦の文様面における変容と融合を見てみよう。第3章冒頭に挙げた「連珠円内対称文錦」全体に目を向け、第2章の「連珠円内単独文錦」や「ペルシア錦」・「ソグド錦」と比べると、そこには羊・騎士・龍の文様が加わり、シムルグ・猪頭・ダブルアックスの文様がない。羊のモチーフや騎士を表す狩猟のテーマはソグドの壁画や、ペルシアの銀器に表され、イラン文化圏に存在したことがよく知られている。狩猟文様については、5世紀に生きたシドニウス＝アポリナリス(Sidonius Apollinaris, 430-484)が、ペルシアの壁掛け上に表されていたと記述しているように、早くからペルシアに存在した<sup>282</sup>。しかし狩猟文様は、「連珠円内対称文錦」においては、この項の後で述べるように天馬に騎士が騎乗するように変容している。連珠環上に表される回文(二重円, 重角)はイラン文化圏に存在し、そのまま使われているが、連珠円の接点に表される八弁花文は、西のハート型四弁花文の一弁が二つに分かれ、ソグドやタリム盆地では八弁となり、更に中国に入って花卉の先の丸さが稜形となった中国風八弁花文に変容したものである。「連珠円内対称文錦」の文様は全体として文様表現が写実的となり、モチーフにイラン文化圏と中国の文様の混在が見られる。

前節の織技の項で述べたように、連珠円内対称文様においては、小さな連珠円内のモチーフが、機の性質上単独ではなく対称に配置された二文様になるため、それらは幾分デフォルメされ、さらにあるものは中国的な表現になっている。例えば天馬がいびつになり、馬の冠が形式的となったり、孔雀の表現が鳳凰風になったりするのである。

大連珠円の龍紋綺は連珠円のうちに生命の樹が変容した花柱と、それを中心に龍が左右対称(機上では上下対称)に表され、西方の文様と中国の龍が一つに融合し双龍連珠円文を形成している。

大連珠円内に騎乗する人物が表される錦を我々は狩猟文錦と呼んでいるが、この錦には本稿で扱う錦の外、有髭の騎士文錦<sup>283</sup>や同類文様断片が数点有り<sup>284</sup>、同じテーマを扱いつつも文様の細部がそれぞれ異なっている。それらの文丈は30cm前後で大きい連

<sup>282</sup> Pope & Ackerman 1964, p. 692.

<sup>283</sup> 武 1962, 図 4.

<sup>284</sup> 坂本 2000a, pp. 132-133, pp. 140-141.ここでは狩猟文錦のうち調査した連珠天馬騎士紋錦(TAM 77:6)と騎士紋錦(TAM 322:22/1)について扱う。

珠円のうちに天馬に乗った騎士が連珠円内の位置から見て左右対称に表されている(図 30)。連珠はほぼ正円である。騎士が表された狩猟をテーマとする図はササン朝の銀器によく見られるものである。その図の中で騎士が肩からリボンをなびかせている姿は銀器にも織物にも表されているが、騎士が天馬に騎乗している図は銀器に見あらず織物にのみ見られるのである。他方、「ペルシア錦」やソグドの壁画に天馬だけが連珠円内に表されたものがあるので(図 2 参照)、中国で狩猟図と天馬を合成して錦を織ったのではないかと思われる。主文である狩猟文(図 29-a)の連珠円の中に中国で発展したパールメット唐草花文が副文として詰め込まれている(図 29-b)。この副文は折調細綾と同文様の龍紋綺に表された副文と酷似している<sup>285</sup>。武敏はこの副文の酷似から狩猟文を蜀製と考えている<sup>286</sup>。筆者も同じ見解<sup>287</sup>であり、次項で技術面から武敏の説を補強したい。

## 2. 織技にみる東西の要素

狩猟をテーマとする騎士文錦と連珠天馬騎士文錦の技術的な観察に基づいて、次のようなことが判明した。馬の鼻面や胸にぼかしで陰影を付け立体感を表すためにベルクレといって、二色の緯糸が交互に織り込まれる手法が用いられていることは<sup>288</sup>、「連珠円内単独文錦」の大連珠鹿文錦(図 10, 挿表 3, 資料 1・2, Q)、「ペルシア錦」であるアンティノエ出土の天馬文錦(図 2, 挿表 4, 資料 3, Q)、「連珠円内対称文錦」の騎士文錦・連珠天馬騎士文錦(図 29-a・30, 挿表 5, 資料 14・15, P)すべてに共通する。しかしながら、ソグド地域の製作と見られる大連珠鹿文錦は 2 越(緯糸 2 本)交替であるのに「ペルシア錦」の天馬文錦<sup>289</sup>と騎士文錦・連珠天馬騎士文錦は 1 越(緯糸 1 本)交替である。つまり、騎士文錦・連珠天馬騎士文錦はこの点においては技術的にペルシアの要素を持っていることになる。

織の構成や糸に関しては、狩猟文錦 2 点の経糸配分が陰経 2 本引き揃えて母経 1 本になっているが(綾組織緯錦の図参照)、その配分は「ソグド錦」に多く見られる(挿表 4, J-a)<sup>290</sup>。また、セリシンの残る生経を 3-5 本追撚り(糸を合わせる時、最初の糸と同じ方向に撚ること)して太い糸に仕上げる手法は「ソグド錦」の一つの特徴であることを、筆者はモシチェヴァヤ=バルカの織物調査によって知っている<sup>291</sup>。このように追撚

<sup>285</sup> アスターナ出土の龍文綺には副文の一部が残っている。日本に到来した龍文綾には副文が残り、その文様から復元できる(ルボレスニチェンコ&坂本 1987, 図版 7-2 参照)。

<sup>286</sup> 武敏から口頭による。

<sup>287</sup> 坂本 2000b, pp. 176-177.

<sup>288</sup> Riboud et Vial 1981, p. 151 において vial はアンティノエ出土天馬文錦の体部にこの技法が使われていると指摘している。

<sup>289</sup> 坂本 2000b では Martiniani-Reber 1986 が削り(はつり) 2 と記しているのを参考にしたが、その後リヨンで観察したところ削りは 1 であった。

<sup>290</sup> Shepherd and Henning 1959, p. 28; Shepherd 1981, pp. 119-122.

<sup>291</sup> モスクワの考古学研究所カメネツキー教授のご厚意により、モシチェヴァヤ=バルカ出土染織資料 200 点余りの調査が可能であった。ここに教授に対して感謝の意を述べる。

りされた太い糸が陰経レベルと母経レベルで2層になっているので、裏面で緯糸は丸く膨らんでいる。この現象はサンスの寺院所蔵のソグド錦（図7）に見られるものである<sup>292</sup>。しかし、狩猟文錦2点の糸は「ペルシア錦」や「ソグド錦」のZ撚りでなく、先に述べたように、中国の特徴であるS撚りである。狩猟文錦では西方と中国とのデザイン上の合成が見られると同様に、技術上の西と東の合成も観察されるのである。

### 3. 文献史料にみる技術の伝播と東西の融合

このように西方と中国の文様や技術の混在が生じた理由を次の史料から説明してみたい。

隋の何稠の伝に、次のように述べられている。

『隋書』卷68, 列伝第33, 何稠伝（中華書局標点本, p.1596）

稠博覧古図, 多識舊物。波斯嘗獻金絛錦袍, 組織殊麗, 上命稠為之。稠錦既成, 踰所獻者, 上甚悦。<sup>293</sup>

博識の何稠はペルシアの伝統工芸品であるペルシア錦よりも勝る錦を織り出したのである。

何稠は、その姓から判断して中央アジアのソグドにある都市国家クシャーニヤの出身であると思われる。何稠の祖父、何細胡について

『隋書』卷75, 列伝第40, 何妥伝（中華書局標点本, p.1709）

何妥字栖鳳, 西域人也。父細胡, 通商入蜀, 遂家郫縣, 事梁武陵王紀, 主知金帛, 因致巨富, 號為西州大賈<sup>294</sup>。

とある。

何稠の祖父、何細胡はソグドの地を離れ、蜀の郫縣（成都の北西）に定住するようになった。南朝梁の成都是当時西方に開かれた南朝唯一の窓ともいべき国際都市であり、

<sup>292</sup> Riboud et Vial 1981, p. 146, fig.19.

<sup>293</sup> 書下し「稠は古図を博覧し、多く舊物を識る。波斯は嘗て金絛（線）錦袍（『梁書』に金線錦袍とある）を獻ずるに、組織は殊麗なり。上は稠に命じて之を為らしむ。稠の錦既に成り、獻ずる所の者を踰ゆ。上甚だ悦びたり。」訳「稠は古図に見聞が広く、舊い物事を多く知っている。ペルシアが嘗て金糸入りの錦を献納した。（その）錦の組織は非常に美しかった。帝は稠にペルシアの錦を織ることを命じた。稠の錦が既に完成してみると、それは献納されたものより優れていた。（そこで）帝は大変喜んだ。」

<sup>294</sup> 書下し「何妥, 字は栖鳳, 西域の人なり。父の細胡は、通商して蜀に入り、遂に郫縣に家す。梁の武陵王紀に事え、主として金帛を知り、因りて巨富を致す。號して西州大賈と為る。」訳「何妥は、字は栖鳳であり、西域の人である。妥の父の細胡は、商売をして蜀に来て、遂に郫縣に居住し、梁の武陵王紀に仕え、金や絹織物を司り、それによって巨万の富を築いた。」

細胡の仕えた武陵王紀は蜀にいた 17 年の間、西域向けの蜀錦の生産に努め、西域との貿易によって勢力の強化を計った。細胡は長年の経験を経て身につけた商業的手腕を発揮し、西域諸国に関する豊富な情報、更に、彼が持っていた取引のネットワークなどを縦横に利用し、政商として敏腕を揮ったことは想像に難くない<sup>295</sup>。おそらく、絹織物工房も管理し、皇家と結んで絹織物を貿易し巨商となったのであろう<sup>296</sup>。その息子何通も何妥も技芸の才があり、甥の何稠も北周の御飾下仕（朝廷の服飾を調製する技芸官）、隋の細作署（朝廷の諸工芸、調度品を調製する役所）の長となり<sup>297</sup>、三代にわたって工芸と関わった。『隋書』に記述された三代目の何稠の錦は西域に伝わる家伝の特殊技術を用いたもので、おそらく官営工房に空引機を導入し、先に述べたようなペルシアやソグドの技術を中国の技術の中に取り入れて、狩猟紋錦のような大錦を製作したに違いない<sup>298</sup>。

以上のように「連珠円内対称文錦」の生産地について中国本土、とりわけ蜀であると考えられるのは、武敏によって挙げられたトゥルフアンと蜀の関係を示すいくつかの証拠や、長廣・後藤・姜らによって挙げられたようなソグドと蜀の関係を示す何一族に関する史料が存在したことによる。おそらく何一族によって、あるいは彼らのような中国に移住した人々に導かれて、蜀に移住したペルシア人やソグド人の織工もいたであろう。ましてアラブの侵攻による受難の時、トカラから離散したペルシアの織工が蜀に移住した可能性も否めない。大連珠円の騎士文錦、連珠天馬騎士文錦が緯錦であり、その錦のベルクレにペルシアの技法が用いられるように、イラン文化圏から移住した人々がもたらした技術や文様が見られるのである。また、大連珠円の錦・綺には、イラン文化圏と中国の文様や技術が混在していた。そのようなトゥルフアン出土錦の例が示すように、「連珠円内対称文錦」は、本編第 1 章第 1 節第 1 項で述べた伝播ケースの第 2 や第 3 に当たり、文様の模倣や東西技術の併用によって蜀において製作され、トゥルフアンにもたらされたと考えることが出来る。

#### 第 4 章 吐魯番文書に現れる各種の錦の実体について

吐魯番文書には「丘慈錦」「疏勒錦」「波斯錦」「魏錦」など地名を冠した錦名、「提婆錦」「樹葉錦」「大樹葉錦」「柏樹葉錦」「飲水馬錦」「陽（羊）樹錦」「合蠡文錦」など文様による錦名のほか、色彩による錦名が見られる<sup>299</sup>。文様や色彩による錦名については、錦の文様が吐魯番文書の記述と一致するところから実体のわかるものがある。

---

（細胡は）西州大賈（西州の大商人）と呼ばれた。」

<sup>295</sup> 後藤 1987, pp. 2-3.

<sup>296</sup> 姜 1994, p. 223.

<sup>297</sup> 長廣 1977, pp. 123-124.

<sup>298</sup> 坂本 2000b, p. 177.

<sup>299</sup> 呉 2000, pp. 94-95.

それに対して地名を冠した錦については種々の見解がある。そこで「丘慈錦」「疏勒錦」「波斯錦」について先行研究を紹介しながら、筆者の見解を加えたい。

## 第1節 「丘慈錦」「疏勒錦」について

### 1. 吐魯番文書中の「丘慈錦」「疏勒錦」

まず、地名を冠した錦のうち「丘慈錦」「疏勒錦」が現れる文書は次の通りである。

「北涼承平五年（506年）道人法安弟阿奴举錦券」（TKM 88:1b）<sup>300</sup>  
高昌所作黄地丘慈中錦一張，綿経綿緯，長九(尺)五寸，広四尺五寸。

「北涼承平八年（509年）翟紹遠買婢券」（TKM 99:6a）<sup>301</sup>  
翟紹遠從石阿奴買婢老人，紹女年廿五，交与丘慈錦三張半。

「高昌主簿張縮等伝供帳」（TKM90:20a）<sup>302</sup> 482年文書伴出  
張縮伝令，出 疏勒錦一張，与処論無根。

### 2. 「丘慈錦」「疏勒錦」の実体と生産地をめぐる議論

「丘慈錦」「疏勒錦」について、武敏は1987年論文で次のような文書中にみられる錦に関する文言を取り上げ、論証を試みた<sup>303</sup>。

1. 上記記載「北涼承平五年道人法安弟阿奴举錦券」（TKM 88:1b）

2. 西向白地錦半張，長四尺広四尺。

「義熙五年道人弘度举錦券」（TKM99:6b）<sup>304</sup>

3. 紫地錦四張，…

「高昌某家失火烧損財物帳」（TKM99:17）<sup>305</sup>

4. 錦十張，…「高昌惠宗等入牒毯帳」（TKM90:21a）<sup>306</sup>

<sup>300</sup> 『吐魯番文書』1, p. 181; 『吐魯番出土文書』巻, pp. 88-89. 訳については注174参照。

<sup>301</sup> 『吐魯番文書』1, p. 186; 『吐魯番出土文書』巻, pp. 92-93. 訳「翟紹遠は石阿奴から婢，一人をかう。（その名は）紹女といい二十五歳である。（それに対して）丘慈錦三張半を支払う。」

<sup>302</sup> 『吐魯番文書』2, p. 18; 『吐魯番出土文書』巻, p. 122. 訳「張縮は令を伝え，（庫より）疏勒錦一張を出し，処論無根に与えた。」

<sup>303</sup> 武 1987, pp. 98-99.

<sup>304</sup> 『吐魯番文書』1, p. 189; 『吐魯番出土文書』巻, pp. 94-95.

<sup>305</sup> 『吐魯番文書』1, p. 195; 『吐魯番出土文書』巻, p. 98.

<sup>306</sup> 『吐魯番文書』2, p. 22; 『吐魯番出土文書』巻, p. 124.

取錦四張, …「高昌安取錦残帳」(TKM90:21b)<sup>307</sup>

## 5. 上記記載「高昌主簿張縮等伝供帳」(TKM90:20a)

まず, 1・2・3・4 の文書から中国本土の錦と違って「高昌所作」の錦は張が単位であり, 1 の文書「北涼承平五年道人法安弟阿奴拳錦券」から高昌の地産の錦は「綿経綿緯」, 即ち紡ぎ糸で織られていると主張した。「綿経綿緯」が紡ぎ糸の経糸と緯糸を示すことは, 唐長孺の説として紹介したとおりである<sup>308</sup>. つまり, 綿(真綿)から紡がれた経糸と緯糸が丘慈錦に使われているのである. 次に, 同文書が亀茲ではなく「高昌所作黄地丘慈中錦」としているところから, 「丘慈錦」も 5 の「高昌主簿張縮等伝供帳」に記される「疏勒錦」も亀茲産や疏勒産の錦の特徴をもった高昌(トゥルファン)の地産錦であると主張した.

同様に, 呉震は 1996-1998 年に行われたトゥルファン出土織物に関する日本との共同研究で著した論文のなかで, 出土文書に現れる「波斯錦」「丘慈錦」「疏勒錦」が高昌製である証拠を次の様に説明した<sup>309</sup>.

1. 波斯や疏勒でも錦は織られるが, そこから絹の主産地に向かって逆に流れることはないだろう.
2. 文書「北涼承平五年道人法安弟阿奴拳錦券」に書かれた「高昌所作黄地丘慈中錦 …」によって「丘慈錦」は亀茲製ではないことが明らかである.
3. 文書「永康□十年用綿作錦条残文書」(TKM90:34)<sup>310</sup>の中の「…須綿参斤半作锦条 …」により锦条は綿経綿緯を紡ぐ前の準備工程にある「条」<sup>311</sup>と考えられる.
4. 文書「高昌主簿張縮等伝供帳」の中の「張縮伝令, 出疏勒锦一張, 与処論無根。」により柔然の使者処論無根に与えた「疏勒锦」は王国府庫の锦であるから高昌製である.

これらの主張に対して筆者は次のように反論したい.

1. に対して,  
文様や技術の異なる絹織物であれば, 古くからの絹の産地に対しても外部から流入する事はあり得る.
2. に対して,  
確かに文書の中の「丘慈锦」は高昌製であるが, このように高昌製であることをわざわざ断り書きして述べるのは特別の例だからだろう.

<sup>307</sup> 『吐魯番文書』2, p. 23; 『吐魯番出土文書』壺, p. 125.

<sup>308</sup> 本編第1章第2節参照.

<sup>309</sup> 呉 2000, p. 94.

<sup>310</sup> 『吐魯番文書』2, p. 7; 『吐魯番出土文書』壺, p. 118.

<sup>311</sup> 呉はこの「条」について紡ぎ糸を紡ぐための前段階, つまり繭を拵げて枠にはめたもの, または繭を細長くしたものと考えているらしい.

3. に対して、

錦条とは糸を紡ぐ前準備の「条」ではなく、幅 1.5-2.0cm のリボン状の錦を言い<sup>312</sup>、衣服の縁飾りに用いられるものである。実際、「綿経綿緯」の経錦の錦条が営盤から出土している<sup>313</sup>。唐長孺も本編第 1 章で述べたように、この文書に基づいて、高昌でもこの様に細い幅の錦が織られたと指摘している。この文書により高昌で「綿経綿緯」のリボン状の錦が織られた事実は証明されるが、幅 4 尺 5 寸である「丘慈錦」が織られたことにはならない。

4. に対して、

国庫には税として高昌製の産物が納められていた。しかし、麹氏高昌において税の対象として絹は文書に現れるが<sup>314</sup>、錦は見られない。錦が貢ぎ物や輸入されて内庫に入ったものであれば疏勒からもたらされた可能性がある。なぜなら『魏書』疏勒国の条（中華書局標点本 p.2268）に「土多 … 錦・綿 …」とあるように疏勒は錦を産したからである。

以上のように、武敏や呉震の主張する「丘慈錦」「疏勒錦」のトゥルファン製作説は証明が不十分であり、「北涼承平五年道人法安弟阿奴拳錦券」に記載された文言によって「黄地丘慈中錦」の産地・糸質・寸法が分かるだけである。

上に述べた「黄地丘慈中錦」は「丘慈錦」とは呼ばれるものの、実際には高昌で製作されたという特殊性ゆえに、丘慈産と間違われまいとわざわざ高昌という生産地を明記したものであると考えられる。言い換えれば、亀茲で養蚕がなされている事実<sup>315</sup>からも推測されるように、亀茲で錦が生産されていた可能性を示唆している。また上記に示したように疏勒では錦を産すると史料にある。加えて、「大谷文書」の「唐天宝二年交河郡市估案」では本編第 3 章第 1 節第 2 項で述べたように、織物に地名が冠されていて、その地名が生産地とみなされている。このような理由から「丘慈錦」「疏勒錦」の生産地に関して、筆者は錦に冠した地名が生産地であると推定しているが、文書だけで実体と生産地を示すには限界がある。

ちなみに唐長孺は「丘慈錦」は亀茲産、「疏勒錦」は疏勒産、高昌産の「丘慈錦」は亀茲産の錦が模倣されたものと見ている<sup>316</sup>。

ところで視点を実物に移すと、「丘慈錦」「疏勒錦」が文書に現れる 5 世紀末—6 世紀中葉までのカラホージャ・アスターナ出土錦は、その全てが経錦か平組織緯錦である。漢代から盛んに織られた経錦は依然として織り続けられた。そこへ 4 世紀から現れたのが平組織緯錦である<sup>317</sup>。この平組織緯錦という組織は毛織物圏で織り始められ、その技

<sup>312</sup> 趙 2002, p. 62

<sup>313</sup> 趙 2002, pp. 62-65; 2005a, pp. 51-59.

<sup>314</sup> 唐 1985, pp. 149-150.

<sup>315</sup> 唐 1985, p.148. 『続高僧伝』巻 27, 釈道休伝（大正新脩大蔵経, 巻 50, p. 684）.

<sup>316</sup> 唐 1985, pp. 148-149.

<sup>317</sup> 第 1 編第 1 章第 3 節第 2 項および表 1 参照.

術がトゥルファンに伝播したことについて、第1編第1章第3節第2項で既に述べたところである。綾組織緯錦が現れるのは6世紀末から7世紀初めであるから(表3参照)、「丘慈錦」「疏勒錦」は平組織緯錦と考えられる。横張は1992年に「綿経」を用いた平組織緯錦であるスタイン発見の動物雲気文錦(ast.vi.1.03, 図1)を「丘慈錦」か「疏勒錦」とする見解を示した。横張の示した動物雲気文錦(ast.vi.1.03)の外、アスターナ出土の平組織緯錦で「綿経綿緯」の例としては、武敏が示した倣獅文錦(TAM313:12, 図19)に連珠小花錦(TAM323:13/3, 図31)を加えることが出来る<sup>318</sup>。「綿経綿緯」の平組織緯錦は「丘慈錦」「疏勒錦」であるとする点で、横張も筆者も同じ見解である。

一方、趙豊は平組織緯錦を紡ぎ糸の粗い錦と、高品質の繰糸の錦に分け、前者が「丘慈錦」で後者が「疏勒錦」であろうと推定している<sup>319</sup>。趙豊は後者の繰糸の錦に見られる漢字を、新疆の住人も漢人から漢字を学んで知っていたと推定し、「大吉字文錦」(TAM169:51, 表2参照)や「亀背王字文錦」(TAM44:23, 表2参照)など文字入り錦を「疏勒錦」とした。それに対して筆者は文字入り繰糸の錦を中国製とみる。なぜなら、文字入りの平組織緯錦が織られた6-7世紀初めタリム盆地では養蚕を行っているが、蚕を殺さず綿をとったと『魏書』卷102, 焉耆の条(中華書局校訂版 p. 2265), 玄奘の『大唐西域記』, 道宣の『続高僧伝』のなかで述べられることから<sup>320</sup>, その糸は繰糸ではなく紡ぎ糸でなければならない。しかも「疏勒錦」とされた錦のうち、筆者が調査した「亀背王字文錦」は経糸がS撚りで漢字が入り、その上、二色の糸の挿入技法が中国式であるように<sup>321</sup>, 中国製の特徴が際立つからである。

上に考察したように「丘慈錦」「疏勒錦」は経糸も緯糸も紡ぎ糸で織られた平組織緯錦である。それらは「張」を単位として数えられ、中国本土の錦に比べると幅の広い織物である。想定される「倣獅文錦」「連珠小花錦」など実物資料から考えると、紡ぎ糸は太く不揃いで、従って地の粗い織物である。文様は倣獅文錦のように漢錦の形式的な模倣もあれば、連珠小花錦のように西方花文の影響を受けたものもある。産地に関しては高昌(トゥルファン)・亀茲・疏勒が考えられるが、いまのところこれらの錦がいずれの産であるか結論は出ない。

## 第2節「波斯錦」について

### 1. 「波斯錦」の実体と生産地をめぐる議論の概要

「波斯錦」とは、文書や漢籍に現れる史料用語である。「波斯」とは言うまでもなくペルシアを指すが、だからと言ってただちにこの「波斯錦」をペルシア産と決め付ける

<sup>318</sup> 武 1992, p. 113; 坂本 2000a, pp. 120-121, p. 130.

<sup>319</sup> Zhao 2004, p. 73.

<sup>320</sup> 『続高僧伝』卷27, 釈道休伝(大正新脩大藏経, 卷50, p. 684).

<sup>321</sup> 坂本 2000a, p. 129. パミール以西の abba, 新疆の abab に対し中国式 aabb の挿入法については第3編で詳しく説明する。

のは早計である。実際、この「波斯錦」が果たしてペルシア産であるのか否かについて、出土文書を含めた文献研究の中から様々な見解が提出されているのである。

中国では夏鼐が1963年にカラホージャ・アスターナ出土の錦のうち連珠円内に動物文様のあるササン様式の錦2点を分析して中央アジア製としたが、その後1978年にそれらの錦を「波斯錦」として、イラン東部から輸入されたとの見解を示した<sup>322</sup>。

この夏鼐の見解を支持し、吐魯番文書中に「波斯錦」の文字が散見されることを指摘したのは、前述の1982年の孔祥星の論文である。

現時点で「波斯錦」という術語の確認されている吐魯番文書は次の4件である。

- ① 「高昌□帰等買罽石等物残帳」「鉢<sub>.....</sub>(波)斯錦」(TKM90:29/1, 482年文書伴出)<sup>323</sup>
- ② 「高昌章和十三年孝姿随葬衣物疏」「故波斯錦十張」(TAM170:9, 543年)<sup>324</sup>
- ③ 「高昌延寿十年元兒随葬衣物疏」「波斯錦被辱(褥)」・「波斯錦面依(衣)」(TAM173:1, 633年)<sup>325</sup>
- ④ 「唐唐幢海随葬衣物疏」「婆<sub>.....</sub>(波)斯錦面衣」(TAM15:6, 641年文書伴出)<sup>326</sup>

吐魯番文書ではないが、同じく出土文書である敦煌出土漢文文書2件にもこの語が確認できる。

- ⑤ 「唐為甘州回鶻貢品回賜物品簿」「波斯錦」(S8444-A, 10世紀初め)<sup>327</sup>
- ⑥ 『俗務要名林』「波斯錦」(S617)<sup>328</sup>

従来、吐魯番文書をめぐって展開された議論は以下のとおりである。

1985年には唐長孺が、カラホージャ90号墓出土の①「高昌□帰等買罽石等物残帳」に名前の拳がっている「鉢斯錦」は波斯すなわちペルシアの産物であって、ペルシアで錦が織り出されるのは高昌から北道を経てペルシアへ織物手工業が伝播したからであ

<sup>322</sup> 夏 1963, pp. 45-76; 1978, pp. 114-115. ここでは「波斯錦」の出典に触れていないが、『冊府元龜』など史料で知られた例が念頭にあると推定する。

<sup>323</sup> 『吐魯番文書』2, p. 24; 『吐魯番出土文書』巻, p. 125.

<sup>324</sup> 『吐魯番文書』2, p. 60; 『吐魯番出土文書』巻, p. 143.

<sup>325</sup> 『吐魯番文書』3, p. 267; 『吐魯番出土文書』巻, p. 421.

<sup>326</sup> 『吐魯番文書』4, p. 32; 『吐魯番出土文書』貳, p. 20.

<sup>327</sup> 『英蔵敦煌』12, 1995, p. 132. 土肥 1988, pp. 399-436.

<sup>328</sup> 『英蔵敦煌』2, 1990, p. 93. 綵帛絹布部に記載される。

るという考えを示した<sup>329</sup>。

1994年姜伯勤は文書や染織資料に基づいて総合的にシルクロードについて考察した<sup>330</sup>。その中で「波斯錦」は狭義ではペルシアの原産であるとしながらも、広義では産地はソグドあるいは中国西北、中国の他地域でありえると想定している。なかでも、スタインが第(2)シノーササン=グループに分類した「連珠円内対称文錦」を姜伯勤は中国産と想定し、西方輸出用でソグド人が関わっているとした。

1987年武敏は先に述べた「丘慈錦」「疏勒錦」を高昌(トゥルファン)産とする論文で、高昌以外の地名を冠した「丘慈錦」が高昌で製作されたところから、①の文書にみられる「鉢(波)斯錦」や②の文書にみられる「故波斯錦」もまた「波斯錦」の風格を持った高昌地産の錦とみなしている。

同様に、呉震は、先に述べた「丘慈錦」「疏勒錦」と共に「波斯錦」も取り上げている<sup>331</sup>。古代高昌は絹織物の産地であること、高昌製の錦は高昌錦という名称ではなく、「丘慈錦」といった他の地名を冠して呼ばれていたこと、そして①の文書を挙げ、波斯錦高昌産説を補強した。

「高昌□歸等買鍮石等物残帳」(…は欠字を示す)

… 歸買鍮石

… 毯百八十帳，□諸將綿 …

… 鉢斯錦糸□昌応出 …

の「諸將綿 …」と「鉢斯錦糸」の文字から綿の条を作って紡ぎ、「波斯錦糸」(経緯糸)を作り出す意とし<sup>332</sup>、つづいて「高昌応出 …」と地名を推補できるから、高昌で「波斯錦」を織っていたとした。

呉震は、更に、高昌の絹織物業の起源と発展衰退は高昌を取り巻く歴史と関係があることを根拠として、蚕桑絹織物業は漢人によるものではあるが、「波斯」を冠した錦の文様に関しては、売れ筋をよく知るソグド人を介して波斯文様が入り入れられ、その錦は高昌で織られ、西方に売られたと結論している。

その後、2004年の論文で尚剛は、下記の後唐同光2年沙州曹義金の入貢を挙げ、「波斯錦」は西方産の可能性もあるが、五代には織工が異域から移住したとも考えられ、中国西北で生産された可能性もあると考えている<sup>333</sup>。

以上のように、「波斯錦」の生産地については(1)ペルシア(2)ソグド(3)高昌=トゥルファン、(4)中国と見解が四分されている。

上記の各見解は「波斯錦」が具体的にはどのような出土染織資料に同定できるのか、

<sup>329</sup> 唐 1985 p. 149.

<sup>330</sup> 姜 1994.

<sup>331</sup> 呉 2000, p. 94, p. 102.

<sup>332</sup> 原文：原義当是用作綿条紡為織造鉢(波)斯錦糸(絲、指経、緯絲)。

<sup>333</sup> 尚 2004, p. 468. 尚剛は同光4年(926年)としているが、同光2年(924年)の間違いであろう。

という問題には満足に答えていない。それらの見解は、夏鼐が二点の「連珠円内単独文錦」を例示しているのを除いて、ただ、「波斯錦」の産地を推定し、ペルシア説は西方から織物の実物が到来したこと、トゥルファン・敦煌・中国説はペルシアの文様や技術がそれらの地に及び、そこで織られたと主張しているに過ぎない。

## 2. 生産地の検討

「波斯錦」が現れる漢籍史料を以下に挙げる。

1. 『梁書』巻 54, 列伝 48, 滑國の条 (中華書局標点本, p.812)  
滑國者, 車師之別種也。…普通元年(520), 又遣使献黄獅子、白貂裘、波斯錦等物。
2. 『冊府元龜』巻 971, 外臣部, 朝貢第 4 (宋本, p. 3849)  
(唐玄宗開元) 十五年(727)七月突厥骨吐禄遣使献馬及波斯錦。
3. 『冊府元龜』巻 971, 外臣部, 朝貢第 4 (宋本, p. 3852)  
(唐玄宗天寶) 四歳(745)二月罽賓國遣使献波斯錦 …。
4. 『冊府元龜』巻 972, 外臣部, 朝貢第 5 (宋本, p. 3858)  
同光二年(924)四月沙州曹義金進玉三团, 硃砂・羚羊角・波斯錦・茸褐・白氈 …。
5. 『白孔六帖』巻 8 (四庫全書 891-134) … 波斯錦 吐蕃其所貢波斯錦 …

上記史料の「波斯錦」は全て朝貢の場面に現れている。その年代と朝貢国はそれぞれ、520年：滑国（エフタル）、727年：突厥、745年：罽賓（カーブル）、772 - 846（白居易の生存年）：吐蕃、942年：沙州、となる。年代は6世紀から10世紀中葉にも及び、また「波斯錦」を持ち来った国も滑国（エフタル）・突厥・罽賓（カーブル）・吐蕃・沙州と広い範囲に渡っていることが見て取れる。

さて、言うまでもなく、ササン朝ペルシアは6世紀末頃からその治世が乱れ7世紀半ばには滅亡している。よって、年代から判断すれば、これらの漢文史料に現れた「波斯錦」がすべてササン朝ペルシア産の錦であるはずはなく、むしろこれらの史料は、「波斯錦」という言葉がイラン文化圏の「波斯」風の錦に対しても柔軟に用いられたことを示す証拠であるといえよう。また、「波斯」風の錦を献上した地域の広さも考え併せれば、「波斯」風の錦の生産地がそれだけの生産力を持つ必要があり、場合によっては複数存在したことも想定せざるを得ない。錦の生産地として「波斯」風文様で高品質の錦を継続して維持する力を備えていた地域はどこと考えるべきか

上記の史料によれば、「波斯錦」はすべて朝貢品であるから、それが中国本土の製品

であるはずはない。また史料に名の挙げた朝貢国は中国の南方や東方の国ではなく、大多数はシルクロードのオアシスルートに沿い、そのうち罽賓は、漢代から通じていたイラン南道を経てペルシアから、あるいは北に道を取りソグドから、「波斯錦」を手に入れることが可能であった<sup>334</sup>。また、吐蕃はパミール地域を北上してソグドへ通じることが出来、また西へ道を取り、「波斯錦」を手に入れることが可能であった<sup>335</sup>。このように上記の朝貢国は西方から手に入れる可能性が高い。朝貢品目を見ると沙州曹義金は他国から手に入れた品物、玉や礧砂を朝貢している。⑤の敦煌文書「唐為甘州回鶻貢品回賜物品簿」に現れる甘州回鶻も同様である<sup>336</sup>。「波斯錦」も他国から手に入れたものであろう。

一方、トゥルファンでは4-6世紀中葉（十六国～麴氏高昌国時代前期）『梁書』巻54高昌伝（中華書局標点本，p. 811）に、高昌では「白疊」があり、それで布を織り、商いに用いられたと記載されるように棉が産し、当時、貨幣として棉布・絹・毯・穀物が用いられた。また6世紀中葉-7世紀（麴氏高昌国時代後期～唐西州初期）には『周書』巻50異域伝高昌の条（中華書局標点本，p. 915）に、[田地]の大小に応じて銀錢を税として収め、[田]のない者は麻布？（棉布）を収めるとあるように、貨幣として用いられるのは主として銀錢で、副次的に棉布（麻布でなく）・絹・金・銅錢が用いられた<sup>337</sup>。盛唐には高昌で棉が貢<sup>338</sup>に当てられるほど棉の生産が盛んになり、かつて納税に充てられた絹<sup>339</sup>の生産が衰える状況は、唐長孺が次のように指摘している。唐西州になると調は絹や麻布でなく縹布（棉布）となり、貢は開元・天宝において「西州白氎」・「西州白氎毛」・「氎毛」・「氎布十端」と表されていて、棉が貢に当てられている<sup>340</sup>。

本項冒頭の史料に見られるように6世紀から10世紀にわたって「波斯錦」が朝貢されているが、トゥルファンでは棉中心の生産となり、「波斯」風錦がそんなに長期に織り続けられることはない。実際、8世紀以降のトゥルファン出土錦をみると「波斯」風錦は次第に姿を消し、中国製の花文錦に取って代わられる。

先述の武敏ならびに呉震は「波斯錦」のトゥルファン産説を唱えるが、しかし、上に挙げた①「高昌□歸等買鑰石等物残帳」の残存文字だけから「波斯錦」を織ったと解釈するには無理がある。文書中の「波斯錦糸」を「波斯錦・糸」と読むことも可能である。つまりこの文書は売り買いを示していて、「波斯錦と中国の糸を買う」とも解釈さ

<sup>334</sup> 松田 1975, pp. 217-251.

<sup>335</sup> 森安 1984, pp. 10-11.

<sup>336</sup> 甘州回鶻は「波斯錦」の他、象牙・礧砂・貂鼠・玉腰带勝具などが他国産のものである。

<sup>337</sup> 『慈恩伝』巻1によれば、高昌王が玄奘の旅費として賜与したのは黄金一百両、銀錢三万、綾絹等五百匹であった。トゥルファンにおいて貨幣として用いられた物に関しては森安教授のご助言による。

<sup>338</sup> 『通典』巻6食貨6賦税下「天下諸郡毎年常貢」の注によれば、貢とは地方官が官物を以て各地方の特産物を購入して貢納するものである（佐藤 1978, p. 310）。

<sup>339</sup> 唐 1985, pp. 149-150.

<sup>340</sup> 唐 1985, p. 150.

れる。姜伯勤は、この部分を「波斯錦」は買われ、「糸」は売られたと解釈している<sup>341</sup>。この文書からはこのように違った解釈も出て来る。従って、この①の文書でトゥファン産説を証明することは出来ない。

第1節で「丘慈錦」「疏勒錦」のトゥファン産説の論証に取り上げられた文書3件は5世紀後半から6世紀初めの文書である。ところが第2節に挙げたトゥファン出土の「波斯錦」記載の文書は、どこにも高昌製を示す文言はなく、しかも4件中②から④の3件は6世紀中葉から7世紀前半のものである。5世紀後半から6世紀初めの文書でもって、それより遅い時期の「波斯錦」もトゥファン製とするのは無理があるのではないだろうか。

上に考察したように、「波斯錦」の生産地として、中国産説とトルファン産説は可能性がなく、イラン文化圏産の可能性が高い。第2章で検討した「連珠円内単独文錦」は6世紀後半から7世紀に属することが伴出文書などから既に判明していて、「波斯錦」記載の文書群と同年代である<sup>342</sup>。「波斯」風の文様やその製作地を考えると、「波斯錦」の一つとして「連珠円内単独文錦」の可能性が高くなって来る。

### 3. 「波斯錦」とは

「疏勒」や「波斯」といった錦に冠された地名は、「高昌産の丘慈錦」といった特殊な例外を除けば、中国の地名が冠された「河南府生緇」・「梓州小練」・「蒲陝州緇」(no.3097)・「益州半臂」(no. 3047)<sup>343</sup>の例からも分かるように、本来、産地を示すものと考えられよう。「波斯」は文字通りにはペルシアであるから、「波斯錦」はペルシア産の錦と見なすことにいささかも不都合はない。実際に、「王中の王、偉大にして栄光ある…」とパフラヴィー文字が織り出されているペルシア製のティラーズ錦が都蘭から出土している(図32)。このようにペルシアから東へ運ばれた事例もある<sup>344</sup>。このペルシア製のティラーズ錦は「波斯錦」と呼ばれる資格は十分である。

次に、「波斯錦」の生産地をソグドに拮げて想定すればどうであろう。史料の示す年代も地域もソグド商人の活躍と十分重なり、「波斯錦」が流通する可能性は高い。錦の生産については、ソグド製とされる北コーカサスのモシチェヴァヤ=バルカ出土錦や<sup>345</sup>、ヨーロッパに残る聖遺物の錦をみると、8世紀・9世紀に至るもペルシア錦・ソグド錦の生産が続けられ、それらの文様の変化の過程をたどることができる。

ソグド錦もペルシア錦も共にササン文様を受け継ぐ錦が織り出され、連珠円文・絡縄文・鋸歯文などで飾られた円内に動物が表された錦(鋸歯文で飾られた円の例はザンダニーギーとされる錦の図7参照)が存在し、その他の錦は、第4編の文様史で例示する

<sup>341</sup> 姜 1994, p. 72.

<sup>342</sup> 坂本 2000a, pp. 128-141.

<sup>343</sup> 仁井田 1960, p. 205, p. 209, p. 213; 『大谷文書』 p. 11, p. 24, 図版 10・20.

<sup>344</sup> 林 1995, p. 146; 『中国文物精華』 1997, pl. 129, p. 245, p. 296.

が、円が失われ動物が並列する文様の錦に変化するという過程が確認できる。このような文様の変化が認められるものの、イラン文化圏では、上記の出土資料や聖遺物をみると、一貫して錦の生産が継続していたことがわかる。「波斯錦」の文様も時代とともに変化した可能性があるだろう。

以上のような錦がペルシア錦・ソグド錦とあわせて、漢文史料中では「波斯錦」の名で表現されたのではないかと筆者は考えている。本編第2章第2節で述べたように、ソグドはペルシア文化の影響を受け、壁画に表された錦の文様やソグド錦の文様にもペルシアの影響が色濃く現れているからである。

ササン朝の滅亡と共にペルシア本土からの「波斯錦」の到来には変化があったであろうが、ソグド産の「波斯錦」は8世紀初めの混乱期を除けば、6-10世紀を通じて織り続けられたことが、北コーカサス出土資料などによってわかるのである。ササン朝ペルシア、そしてササン朝ペルシアから直接影響をこうむったソグド地域が長期にわたる「波斯錦」の製作地として相応しい。

上述のとおり数世紀に渡る歴史をもち、文様に変遷も見られる「波斯錦」であるが、6-7世紀の吐魯番文書中の「波斯錦」に限って言えば、その実体はアスターナ出土の「連珠円内単独文錦」であったと考えられよう。既に本編第2章第2節で述べたように、「連珠円内単独文錦」は文様・技術とも「ペルシア錦」との共通性が指摘できると同時に、それらは「ソグド錦」にも酷似していた<sup>346</sup>。

しかし、同じ連珠円内に動物が配された文様であっても、「連珠円内対称文錦」は「波斯」風であるが中国で模倣され製作されたもので、『歴代名画記』に記されるように「瑞錦」と漢人に呼ばれた。その他、対称文様の天馬を表した文様のうち連珠対馬錦(TAM302:22, 図15)は馬が水を飲んでいる様子が表されているところから「高昌子中布帛雜物名條疏」に「飲水馬錦」と表現された<sup>347</sup>。「連珠円内対称文錦」は「波斯」風であるが「波斯錦」と記載されることはなかった。従って「連珠円内対称文錦」は「波斯錦」から除外して良からう。そこで7世紀には「波斯」風として主要な文様であった「連珠円内単独文錦」が「波斯錦」と呼ばれたに違いない。

「波斯錦」はしばしば吐魯番・敦煌文書や漢籍史料に在証される。それら文字資料に現れる「波斯錦」はトゥルファン製や中国本土製ではなく、むしろ、イラン文化圏の製作を考えさせるのである。6世紀後半から7世紀の「連珠円内単独文錦」は毛織物圏に起源のある織技で織られていて、とりわけソグド製錦と共通点を持つものが多いこと等々、以上のように考察を進めた結果、「波斯錦」と呼ばれる錦のなかに「連珠円内単独文錦」を入れることが出来よう。「波斯錦」は諸説ある中でもイラン文化圏製作の錦

<sup>345</sup> Ierusalimskaja 1996, Tafels LX-LXXXVII. 本稿のソグド錦のことである。

<sup>346</sup> 挿表3・4, Shepherd 1981, pp. 119-120; Ierusalimskaja 1996, pp. 252-287.

<sup>347</sup> 『吐魯番文書』4, p. 186; 『吐魯番出土文書』貳, p. 105.

であり、トゥルファンや中国本土にもたらされたと結論づけるのが妥当であろう。

### 第3編 カラホージャ・アスターナ以降の出土染織資料

はじめに述べたように大谷探検隊収集資料, およびドイツ隊発掘資料はそれぞれ 7-10 世紀, 7-14 世紀の資料を含んでいる. そのうち, 7-8 世紀の資料は第 2 編で取り上げた染織資料群と共通項を持っている.

本編で取り上げる 3 点の織物はそれぞれ大谷探検隊, ドイツ隊将来の染織資料で, いずれも 8 世紀までのカラホージャ・アスターナ資料群とは明らかに異なる性質を持ち, 年代も 9-14 世紀へ下る. 年代比定を含め, これらの染織資料の染織史における位置付けは以下に論じてゆくが, 第 1 編第 2 章第 1 節で述べたとおり, これらの資料は 20 世紀初頭に将来されて以来, 若干の簡単な報告を除きこれまでほとんど研究らしい研究はされていない.

大谷探検隊収集資料については, 第 1 編第 2 章で触れたが, 1963 年における龍村謙の報告以降では, 1990・1995 年に横張和子が調査して発表し, 続いて 1996 年に筆者が調査して発表した<sup>348</sup>. それらのうち本編で取り上げる三日月文錦については, 後日筆者が更に詳細に調査し発表したものである<sup>349</sup>.

ドイツ隊収集染織資料は近年, ようやく幡に使用された染織品に関するデータが公表されたばかりである<sup>350</sup>. 筆者は, 更に, 幡に使用されたもの以外の織物についても調査を続け, その一部を発表した<sup>351</sup>. それが本編で扱う棉ベルベットと金欄である.

本編では第 1 章で大谷探検隊将来の三日月文錦, 第 2 章でドイツ隊発見の棉ベルベット, 第 3 章でドイツ隊発見の金欄を取り上げ, 以前に発表した論文に一部追加し, 改訂を施した. それぞれの染織資料に基づいて, カラホージャ・アスターナ資料群以降の 9-14 世紀の織物の東西交流を示したいと思う.

#### 第 1 章 大谷探検隊将来三日月文錦

大谷探検隊収集の染織品の中で異彩をはなっているのが三日月文錦である (図 33). 出土地点の記録は残されていないが, 第 3 次大谷探検隊がトゥルフアンで収集したものと考えられる<sup>352</sup>.

---

<sup>348</sup> 注 79・80・81 参照.

<sup>349</sup> 坂本 2004a, pp. 144-149; Sakamoto 2004a, pp. 297-299.

<sup>350</sup> 注 75 参照.

<sup>351</sup> 坂本 2004a, pp. 149-158; Sakamoto 2004a, pp. 299-302; 2004b, pp. 17-44.

<sup>352</sup> 第 1 次, 第 2 次探検隊が収集した主要な資料は 1915 年に『西域考古図譜』として出版されたが, 三日月文錦はそれに記載されていない. 第 3 次探検隊がトゥルフアンで収集した資料は出版に間に合わなかったと聞いている.

## 第1節 文様

### 1. 三日月文と連珠円の歴史的变化

錦はおよそ 14.0 × 24.0 cm 大で、紺の地に白で三日月が「互の目」（互い違い）に表されている。この三日月は連珠円を伴っていない。

三日月が連珠円内に表された文様は、ササン朝ペルシアのホスロー2世（在位 591-628年）造営のターク=イ=ブスターン大洞（地図3参照）に見られる<sup>353</sup>。その他、連珠円内三日月文はクチャ（地図3参照）にある7世紀前半のキジル十六帯剣者窟（中国編号第8窟）壁画上に見られる寄進者の衣服（MIK III8426 a・b・c, 図34）や同じキジル最大窟（中国編号第60窟）壁画の連珠鴨文（MIK III8419, 図35）、アンティノエ（地図3参照）出土の7世紀前半とされる天馬文錦（Inv. 897, III. 5, 26812-11）の連珠円の接合点に表されている<sup>354</sup>（図2）。錦綾の文様史を示すトゥルファン出土資料のうち中国製錦・綾から判断すると、中国では7世紀後半から中国様式の花文が現れ連珠円文と併存し、連珠円の文様が衰えを見せるのは8世紀前半である<sup>355</sup>。しかし、中央アジア以西では連珠円は9世紀頃まで用いられ、連珠円以外の装飾を伴う円と併存している<sup>356</sup>。やがて連珠円は文様史から姿を消していく。

### 2. 織り出された文字について

大谷探検隊将来三日月文錦では、三日月に囲まれてクーフィ体のアラビア文字が織り出されている。クーフィ体アラビア文字は، فاث (fath) 「勝利」と قارب (左右逆向きの qarīb) 「近い」<sup>357</sup> で、二段に分かれて交互に繰り返される。その文字はマルシャーク(Б. И. Маршак)<sup>358</sup>、及び、百済康義の紹介によるジェンキンス(M. Jenkins)とモートン(A. H. Morton)の見解によれば<sup>359</sup>、前者は織物の表面から、後者は裏から読むことが出来るそうである。この文言はコーランから引用されたもので、コーランの第48章18節・27節、第61章13節にあり、第61章13節では“nasr min allah wa fath qarib”とある。そのフレーズは「アッラーじきじきのお助けも戴ければごく手近な勝利もある」と訳され<sup>360</sup>、英文では“help from God and a nigh victory”<sup>361</sup>、“help from God and a speedy

<sup>353</sup> 注 233 参照。

<sup>354</sup> Martiniani-Reber 1986, pp. 45-46.

<sup>355</sup> 坂本 2000b, p. 175. 一旦消えてしまうが、11-12世紀に筆者の知る限りでは3点現れる。

<sup>356</sup> Ierusalimskaja 1996, pp. 239-287.

<sup>357</sup> 趙豊は「魏唐織錦中の異域神祇」『考古』1995-2, p. 182で qarīb を farid とし「獨一的」とし林梅村も「青海都蘭出土伊斯蘭織錦及相關問題」『中国歴史文物』2003-6, p. 49で“farid fath”とし「唯有勝利」と訳しているが、筆者は B.I.マルシャークや M.ジェンキンス, A.H.モートンに従う。

<sup>358</sup> マルシャーク 1985, 解説。

<sup>359</sup> 百済 1996, p. 60.

<sup>360</sup> 井筒 1978, p. 196.

victory”<sup>362</sup>, “help from God and speedy conquest”<sup>363</sup>と訳されている。このような文言はお守りとして武具やその下着に表された<sup>364</sup>。ここに表された三日月はコーランの文言と共に表されているので、イスラムを象徴するに違いない。

## 第2節 史料に現れるティラーズ

### 1. ティラーズとは

ところで、初期イスラム王朝では、織物にコーランの文言「慈悲深き神の名において」に続いて「神よ。彼に繁栄あれかし」など祈りの言葉と共に支配者の名と称号、支配者の神に対する忠誠を示す言葉などを織り込むか刺繍することが定められた。これをティラーズ=システムと言い、その織られたり刺繍されたりした文言をティラーズという<sup>365</sup>。

このティラーズについてイブン=ハルドゥーン (Ibn Khaldūn [1332-1406]) は次のように述べている。

『歴史序説』第三章[三四]王権や支配者の特別なしるし<sup>366</sup>

支配者の名前や彼ら特有の記号を絹や錦の外衣に刺繍したり、あるいはそうした文字を織り込んだ絹織物を用いたりすることは、王や支配者の華麗さを示すもので、王朝のしきたりの一つである。その文字は金糸あるいは織物の色と違った色系で織り込まれる。その意匠や織り方は織工の技術次第による。王の外衣がこのような刺繍や特異な織物、すなわちティラーズで飾られるのは、支配者や支配者より少し身分の低い者がこのような外衣を着ることによって威厳を増すためであり、あるいはまた支配者がある者に榮譽を与えようとしたり王朝の官職に任命しようとしたりするときに、支配者自身の外衣を与えることによってその者をきわ立たせ、その威厳を増そうとするためである。

イスラム以前の非アラブ人の支配者は、王の肖像とかそのために特別に考案された図像のティラーズを作ったものであった。イスラム教徒の支配者はそれを変え、彼ら自身の名前を縁起のよい言葉や神を讃える言葉と一緒に刺繍させた……  
(後略)

また、前述の祈りの言葉や支配者の名称に加えて、どの町の工房で製作されたか、そ

---

<sup>361</sup> Arberry 1964, p. 581.

<sup>362</sup> Blair 1998, p. 201.

<sup>363</sup> Rodwell 1971, p. 406.

<sup>364</sup> Blair 1998, p. 201. Blair 1998 がこの文言について触れているという故 B. I. マルシャークの助言に感謝する。

<sup>365</sup> Liu 1998, pp. 142-143.

<sup>366</sup> 森本 2001, pp. 201-202.

して、まれに日付なども示された。ティラーズという語は上記のような成句が連ねられた縁飾りや銘文そのものを意味するだけに止まらず、それを織る工房<sup>367</sup>、織物上のあらゆる装飾的銘文<sup>368</sup>、そしてティラーズ工房で織られた織物をも意味している<sup>369</sup>。筆者は本稿で織物上に表された銘文に対してティラーズという語を使っている。

## 2. ティラーズの歴史的变化

ティラーズとして織り込まれる句が簡略になり「神による勝利」や「神の国」のような句のみが繰り返し連ねられるようになるのは、ブリットン(N. P. Britton)によればカリフの力が弱まった 11 世紀以降であるという<sup>370</sup>。また、織り込まれる句が簡略になるようなこのティラーズ=システムの崩壊はカリフの力が及ばない地方から始まったとされる<sup>371</sup>。カリフの力が及ばない地方はイスラム圏の東西に起こった。イブン=ハルドゥーンによれば、カリフが傀儡化して家臣が横暴をきわめるという事態は東方から起った<sup>372</sup>。実際、東では、半独立王朝のターヒル朝(820-872年)がホラーサーンに成立し、その後ペルシアのサッフアール朝(867-903年)とサーマン朝(874-999年)が建設された。

ブリットンの説にしたがって、簡略化された *fath qarīb* 「近い勝利」が表されたこの織物を 11 世紀以降とするわけにはいかない。なぜならば、ブリットンの研究はメソポタミアとエジプトのみに止まるからである。大谷探検隊将来三日月文錦に表されたクーフィ体アラビア文字の書体は角張っていて、しかも、装飾的な書体と比べてシンプルである。織物上に表され、三日月文錦と同様に角張ってシンプルな書体はルーブル美術館にある聖ジョセ(St. Josse)教会を出所とする 聖遺骸布に見いだせる(図 36)。そこにはホラーサーンの指揮官アブー=マンスール=バクトキン(Abu Mansur Bakhtikin)の栄光と繁栄を祈る言葉が表されている。彼はサーマン朝の支配者アブドゥル=マリク=ブン=ヌー(Abd al-Malik b. Nuh)の命で 960-961 年(ヒジュラ暦 349 年)に処刑された。この織物の製作は彼が活着している時であるから 961 年以前である<sup>373</sup>。この書体は文字の軸の端が斜線によって鋭角になり装飾化の兆しが見える。

## 3. 三日月文錦における文字とティラーズ

文字の表現をするに当たって、フリーハンドのカリグラフィ、刺繍・プリントや流し(斜め織り)技法のある綴織と違って、三日月文錦のような錦は、曲線や斜線の表現に

<sup>367</sup> Serjeant 1942, p. 60.

<sup>368</sup> Britton 1938, p. 18.

<sup>369</sup> Narshakhī の *The history of Bukhara* 『ブハラ史』の N. R. Frye 訳では P. 19 で *tirāz* を *textile* と説明している。

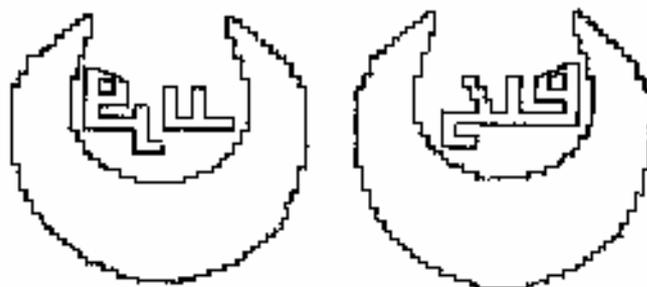
<sup>370</sup> Britton 1938, p. 21.

<sup>371</sup> Liu 1998, p. 143.

<sup>372</sup> 森本 2001, p. 105.

<sup>373</sup> Blair 1998, p. 4.

制約がある。本稿で問題とする三日月文錦は、文字が特に小さく、制約を受けざるを得ない。その様な制約の中、𐤀 ( fā ) の文字や 𐤁 ( 左右逆向きの qāf ) の文字の上部に斜線を織り出しているのは ( 挿図 2 参照 ) , 聖ジョセ教会の聖遺骸布上の文字の織表現に近い。



挿図 2. 大谷探検隊将来三日月文錦のアラビア文字

図 36 に見られるように、全般的に帯状のものが多いティラーズに対して、大谷探検隊収集の三日月文錦ではコーランの語が文様のなかに織り込まれ、文様と一体化している。先に述べたティラーズ=システムの崩壊が 9 世紀に東方で起こっている。従ってシステムの崩壊と共に、帯状に連ねられる文言が、この三日月文錦にみられるように文様と一体となり、簡略にすることがあったのではないかと筆者は考えている。

次に、ティラーズは織物の端に帯状に織り込まれたり刺繍されたりするものが多く、時には文様を左右対称に織るため、文字はミラーシンメトリーになる場合がある。其の例がヴィクトリア=アルバート美術館にある別の三日月文の錦である ( 図 37 ) 。ミラーシンメトリーに表されると文字が一方は表から、他方は裏からしか読むことが出来ない。我々の三日月文錦の単語はミラーシンメトリーに表された fath qarīb を含むアラビア語の成句のうち、右から左に読める正方向の成句から 1 単語 fath を取り上げ、次に裏側で、右から左に読んで意味がとれ、正方向と対称に表された成句から 1 単語 qarīb を模倣したのではないかと思われる。先にのべたように、お守りとして武具やその下着に使用されたのであれば、裏からしか読めなくても心理的には何ら影響はない。

### 第 3 節 織技

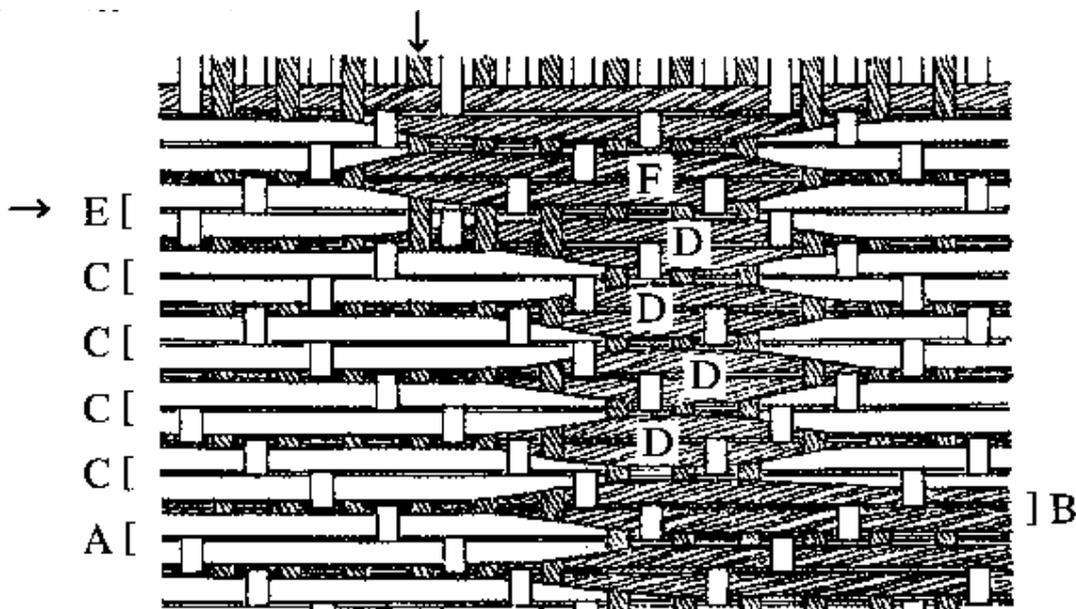
#### 1. 織の組織と跳び杼の使用

我々の三日月文錦の織り方を観察すると、クーフィ体アラビア文字と三日月が緯糸で

織り出された綾組織緯錦である<sup>374</sup>。緯糸は地を表す紺の緯糸，文を表す白の緯糸，朱の跳び杼の計三色の緯糸が確認され，無染色の経糸は陰経 (main warp) 2本，母経 (binding warp) 1本の配分でZ方向の撚りがかかる。Z撚りの経糸を用い，跳び杼を含む緯糸で文様が織り出された緯錦は，ソグドやペルシアなど西方の織物にみられることは第2編で既に述べておいた<sup>375</sup>。

クーフィ体アラビア文字の部分は朱の糸を加えて織り出されている。この色は表面では退色して見えないが裏面では色が残っているところがあって朱の糸を用いたことがわかる (図38)。この様に地や文様の色に他の色糸を追加して部分的に強調する手法は，ソグドやペルシアの織物によく見られるものである<sup>376</sup>。

## 2. 二色錦における東西の技術の差異



紋綜続 ABCDEF の操作によって表面に出る緯糸

### 挿図 3. 二色錦の中国と日本の織り方(佐々木 1973, 図 87 に ABC…を加えた)

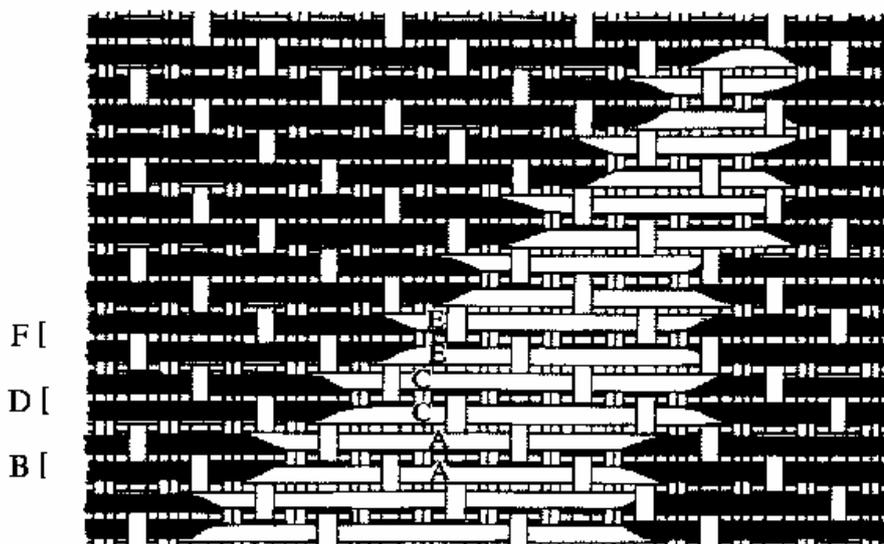
織りの操作は中国本土と違って一工夫している。日本や中国本土の7-8世紀における二色の錦の緯糸の交替するところを注目すると，同色の緯糸が連続して二越入れられ，紋綜続 (文様に応じて経糸が通されていて，緯糸を入れる杼口をあけるために，経糸を

<sup>374</sup> 龍村謙が三日月文錦を最初に調査した。緯錦という表現はないものの文章から緯錦と見ていたことがわかる [龍村 1963, p. 26].

<sup>375</sup> 第2編第2章第2節第5項参照。

<sup>376</sup> モシチェヴァヤ=バルカヤアスターナ出土錦について筆者が観察した結果による。

上下させる装置), あるいは横綜 (空引機において紋綜統と同じ機能の装置) は ABCDEF … と順序通りに操作されている. その結果, 陰経が露出することになる<sup>377</sup> (挿図 3 矢印の交わる箇所で陰経が露出).



紋綜統 ABCDEF の操作によって表面に出る緯糸

#### 挿図 4. 二色錦の西方の織り方

一方, 三日月文錦では上記と同様に同色の緯糸が連続して二越入れられるが, 陰経の露出が見られず整然と織られている. それは, 紋綜統あるいは横綜が ABCDEF … と順に並んでいるとすると紋綜統は ABA, CDC, EFE と一つ戻って操作されるからである<sup>378</sup> (挿図 4).

### 第 4 節 生産地と年代比定

#### 1. 生産地

上記の東方と違った織り方はサマルカンド・ブハラなどの西方の織り技術の進んだ織物センターで織られたことを意味している. 10 世紀に書かれたナルシャヒーの『ブハラ史』によればブハラにティラーズ工房があり, 様々な織物が織られ, それは優雅さにおいても品質においても優れていたと言われている<sup>379</sup>. その例であろうか, 本編第 2 節

<sup>377</sup> 佐々木 1973, pp. 104-123; 坂本 2000b, pp. 175-176.

<sup>378</sup> 坂本 1996, pp. 80-81.

<sup>379</sup> Frye 1954, pp. 19-20.

で述べた三日月文錦のクーフィ体アラビア文字と類似するルーブル美術館所蔵の聖ジョセの聖遺骸布は、サーマン朝の首都であったブハラで製作されたという説がある<sup>380</sup>。

三日月の文様，クーフィ体アラビア文字，コーランの文言，それに加えてこのような織りの特徴は大谷探検隊将来三日月文錦が西方イスラム圏の製作であることを示唆している。

## 2. 三日月文錦付帯文書

この三日月文錦は，ウイグル文字でウイグル語の手紙，マニ文字によるパルティア語とソグド語の宗教典籍など 12 片の文書と共に出土した<sup>381</sup>。

マニ教を信じたウイグル人がモンゴリアの故地から西遷し，トゥルフアン地域を含む東部天山地方に西ウイグル王国を築くのは 9 世紀中葉からである。パルティア語やソグド語のマニ教典は，その地にいたウイグル人をはじめ，ソグド人やペルシア人がマニ教徒であったことを示している。しかし，西ウイグルでは 10 世紀末から 11 世紀初頭にかけて仏教は急激にマニ教を凌駕していく<sup>382</sup>。

おそらく，その頃，マニ教から仏教に宗旨を変えた人々によって，マニ教の宗教典籍は反古にされたのであろう。三日月文錦をよく見ると裏に文書の小紙片が付着し，織物の周辺に糊付けされた痕跡が見られる。他に反古文書を補強に使うって経典の表紙として用いた例があり<sup>383</sup>，文章として内容的につながりのない複数の文書小断片が三日月文錦に付帯したことを考えると，この三日月文錦は反古にされた宗教典籍などを補強に使い，10 世紀末から 11 世紀に表紙として再利用された可能性がある。

## 3. 年代比定

大谷探検隊将来三日月文錦の年代に関しては見解の相違が生じている。この錦が製作された年代について，マルシャークは 8 世紀以前<sup>384</sup>，ジェンキンスは 9-10 世紀，モートンは 10-12 世紀<sup>385</sup>と考えている。筆者はティラーズ=システムの崩壊が，遅くとも 10 世紀初めであること，書体の織表現が 10 世紀の聖ジョセの聖遺骸布に見られる文字の織表現に近いこと，再利用された時期を考えて，三日月文錦を 9-10 世紀頃織られたものとしたい。

以上をまとめると，大谷探検隊将来三日月文錦は，三日月やクーフィ体アラビア文字によるティラーズが存在すること，および，織りの特徴からみてイスラム圏の製作であ

---

<sup>380</sup> Marshak 2006, p. 53.

<sup>381</sup> 百済 1996, pp. 60.

<sup>382</sup> 森安 1991, pp. 30-34, pp. 142-160.

<sup>383</sup> 坂本 1996, p. 78.

<sup>384</sup> マルシャーク 1985, 解説.

<sup>385</sup> 百済 1996, p. 60.

る。また、カリフの権力の低下と共にティラーズ=システムの崩壊がイスラム圏東方から起こったこと、三日月文錦の文字タイプがイスラム圏東辺のブハラ製と思われる聖ジョセの聖遺骸布の文字タイプに似ること、ブハラをはじめ中央アジア西部に織物センターが存在したことなどを考えると、イスラム勢力に支配された地域の東辺にある絹織物生産都市で 9-10 世紀頃織り出され、トゥルフアンに運んでこられたものであったと結論づけることが出来る。

## 第 2 章 ドイツ隊発見の綿ベルベット

### 第 1 節 本資料の分析

#### 1. 外観と織技

ドイツ隊によって将来された織物がベルリンのアジア美術館（旧インド美術館）に保存されている。その中にハート形にカットされた 7.0 × 11.0 cm の大きさで厚手の綿織物（MIK III, 6194）があり、蝶を表すような刺繍が施されている（図 39）。織物には毛羽があり、毛羽がからみあって一見フェルトクロスあるいはベロア仕上げの織物のように見える<sup>386</sup>。裏側は別の綿織物で裏打ちされていて、我々が問題にしている織物の裏面全体を観察することは不可能であったが、約 5 mm 裏のめくれるところを拡大鏡で入念に観察した結果、裏側では 1/2 の組織の地にパイル緯糸が織り込まれている綿ベルベットであることを確認した。このパイル糸が表面でカットされるとベルベットの毛羽となる。織物自体から経、緯の方向を決定することは出来ないが、一般に綿ベルベットは緯パイル織りであるとする考えに従った<sup>387</sup>。

現在、綿ベルベットはベルベッテン・別珍と呼ばれ、ベルベットとだけ書かれるときは絹製を意味している。本稿では素材を強調する時、絹ベルベットや綿ベルベットと表現し、素材がはっきりしない時、ベルベットとしている。

ドイツ隊発見の綿ベルベットは後世の綿ベルベットよりパイル密度は粗い。そのためかパイル糸は互いにかからんでいる。それは意図的になされたものか使用状態によるものかわからない。この綿ベルベットはトゥルフアンから出土した他の多くの絹織物、綿織物の中で、唯一特異な存在である。この織物は中央アジアにおいて織物史上どの様に位置づけられるものであろうか。

### 第 2 節 史料に現れるベルベットとその生産地

---

<sup>386</sup> B. Schröter がベルベットであるとアドバイスしてくれたが、氏は近代のものが紛れ込んだとみなしていた。

<sup>387</sup> CIETA 1973, p. 52.

## 1. “maxmur”

山田信夫著（他編）の『ウイグル文契約文書集成』で私文書の契約文書が分類され、WP (Will or Portion of a family's property) 03 の番号が付けられているものがある。それは龍谷大学図書館に所蔵される所蔵番号 Ot. Ry. 1414b の遺言を記すウイグル文書で、「猪年第四月。私カラチュクは重い病気になった時、私の息子に、残った財産を列举（記録）しておいた。」という文言に始まり、続いてカラチュク (Qaračuq) の所有財産が列举されている<sup>388</sup>。この WP03 は半楷書の書体、タムガ書式、文字の尻尾の長短による-q/-yy の区別があること等によって10-11世紀（どんなに遅くても12世紀）とされている<sup>389</sup>。その中に manmur と読まれていた意味不明の単語があった。

『ウイグル文契約文書集成』の編者の一人であったツィーメ (P. Zieme) は、後にそれを maxmur (maqmwir) と読み替え、この maxmur (maqmwir) は明代初期に成立した漢語ウイグル辞書『華夷訳語』の中で、ドイツ語で Velvet 「ベルベット」あるいは Samt 「ビロード」の意味を持つ maqmur であると考えた。そして、その語源はアラビア語や近世ペルシア語の maxmal であるとリゲティ (L. Ligeti) の論文を引用して述べている<sup>390</sup>。

## 2. 「剪絨」と「倭緞」

『華夷訳語』ではその人事門で問題のウイグル語は馬木児と読みが与えられ、剪絨の意としている<sup>391</sup>。清代の『官音彙解』によれば、「剪絨」は浙江語音であって官話の「倭緞」にあたる<sup>392</sup>。この「倭緞」について明代末に書かれた『天工開物』に次のような解説がある。

宋應星（撰）『天工開物』卷上、乃服、倭緞之条（陶湘本，pp. 12a-12b）

凡倭緞制起東夷，漳・泉海濱，効法為之。絲質來自川蜀，商人万里販來，以易胡椒歸里。其織法亦自夷國傳來，蓋質已先染，而斷綿夾藏經面，織過數寸，即刮成黒光。北虜互市者見而悦之。但其帛最易朽汚，冠弁之上，頃刻集灰，衣領之間，移日損壞。今華夷皆賤之，將來為棄物，織法可不傳云。<sup>393</sup>

<sup>388</sup> 『ウイグル文契約文書集成』 2, pp. 137-138; 3, Tafel 119.

<sup>389</sup> 森安 1994, pp. 76-77, pp. 81-83.

<sup>390</sup> Zieme 1995, p. 488.

<sup>391</sup> Ligeti 1969, p. 39, p. 231, pl. 10b.

<sup>392</sup> 『官音彙解』 p. 1584.

<sup>393</sup> 書下し「凡そ倭緞の制は東夷に起こり、漳・泉の海濱は、法を効い之を為す。絲質は川蜀より来り、商人は万里を販来り、胡椒に易るを以て里に帰る。其の織法も亦夷國より傳來し、蓋し質は已に先染し、而して綿を断り經面に夾藏し、數寸を織過ぎ、即ち刮りて黒光を成す。北虜の互市する者見て之を悦ぶ。但し其の帛は最も朽汚し易く、冠弁之上は、頃刻集灰し、衣領之間は、日を移りて損壞す。今、華夷は皆之を賤み、將來は棄物と為るに、織法は傳えざるべし。」；訳「倭緞の制（丈や幅のきまり）は東夷（日本）で起こったものであり、漳州や泉州の沿岸地方では（その制に）ならって織っている。材料の絹糸は四川から運ばれ、商人ははる

上記の倭緞の解説について藪内清による和訳がある。氏はその訳で、「而断綿夾藏經面」の箇所注として「この織法はビロードのそれであろう。ただビロードは金属線を織り込み、その部分を線に沿って切る。原文の綿は線の誤りであろう。」としている<sup>394</sup>。その注に書かれるビロードとはベルベットのことであるが、藪内は金属線を使用することを念頭に置いて、「綿」を「線」の誤記としている。「綿」を文字通り紡ぎ糸と取れないこともないが、筆者には「棉」の誤りと思われる。

なぜなら、中国の研究者、鍾広言は、同じく『天工開物』の倭緞の条の注で、絹糸と棉糸を経糸、緯糸共に1対1で挟んで入れ、棉糸を「絨（毛羽、パイル）」にする例が「漳絨（ベルベット）」に存在することを指摘して、「蓋質已先染」以下の織りに関するところを、「絲先染色，作為緯線織入經線之中，織過數寸以后，就用刀削断絲綿即起絨，然后刮成黒光。」としている<sup>395</sup>。

また、『天工開物』の著者、宋応星が「倭緞」は埃を吸いやすいという特徴を述べているが、実際に「棉」のベルベットは「絹」のベルベットに比べ吸塵し易い。素材の観点から、「倭緞」が「棉混」ベルベットを指す可能性は高いと言えよう。

さらに、近世日本で成立した『本朝世事談綺』によると、正保・慶安年間（1644-1651年）に輸入したビロードに針金が残っていたので、その織り方が判明して、京都で織り始めたということである<sup>396</sup>。従って、江戸時代初めまで日本ではビロード製作に金属線がもちいられていない。中国に伝わったその織法で織られた「倭緞」には金属線は使われていなかったことになる。

そこで、鍾広言の注を受け入れ、藪内清の訳のように「綿」を「線」の誤りとみなすのではなく「棉」と解する。この様に解釈すれば「倭緞」＝「剪絨」は棉混のベルベットを含む可能性がある。

既に、南宋の『夢梁録』巻18、物産、絲之品（百部叢書集成『学津討原』所収）に「錦，内司街坊以絨背為佳」とあり、南宋では裏側に毛羽のある錦が存在した。次に、元代には「剪絨緞子」という表現が存在している<sup>397</sup>。これは剪絨の織物の意でベルベットである。『元史』巻78、輿服志1、冕服・天子質孫の条に述べられる「怯綿里」も剪茸（絨の音通）の注がついている（中華書局標点本 p. 1938）。また前嶋信次によれば、

---

ばる遠いところから売りに来て、（その売り上げを）を胡椒にかえて郷里に帰る。その（倭緞の）織法も日本から伝わった。思うに、先に材料を染めてしまってから、棉糸を切って経糸の中に織り込み、（経糸を）数寸織って、こすって黒い光沢を出すのである。北方の異民族で互市に関わる者は、この倭緞を見て喜ぶのである。ただし、この織物は最もいたみ汚れやすく、（それで作った）冠弁の上は、しばらくするとほこりを集め（吸着し）、（倭緞を使った）襟は、日が経つにつれて痛んでしまう。今、中国も夷狄の人間もともに（倭緞を）賤しんでおり、先々は棄てられるであろうから、（その）織法は伝わらないだろう。」

<sup>394</sup> 藪内 1969, p. 57

<sup>395</sup> 鍾 1978, p. 95.

<sup>396</sup> 北村 1976, p. 100.

<sup>397</sup> 沈 1995, p. 443.

「怯綿里」はマルコ・ポーロの述べる *cramoisy* (赤色染料ケルメスを語源とする緋色のベルベット<sup>398</sup>)の可能性があるそうである<sup>399</sup>。この後の二つの名称は元代にベルベットが存在したことを物語る。

ついでに付け加えると、20世紀初めの東方トルコ語テキストの中で *mæxmɛl* はショールに仕立てて使用されている例がある<sup>400</sup>。これは棉か絹のベルベットを考えさせる。また、現代のアラビア語 *mukhmal* は、ベルベットあるいはベルベット様の織物を意味する。

### 3. 史料にみる棉ベルベットの原産地

ツィーメが引用したように、リゲティは *maqmur* の語源はアラビア語や近世ペルシア語の *maxmal* であるとした。実際、9世紀のイブン=フルダーズベ (Ibn *Khurdādbīh*) は『道里および諸国志』(*Kitāb al=Masālik wa'l=Mamālik*) のインドに関して述べた文で *mukhmal* (ペルシア語 *makhmal*) の単語を用いている<sup>401</sup>。また、11世紀に書かれたサーリービー (*Tha 'ālibī*) の『知識の愉しみ』(*Latāif al=Ma 'ārif*) のインドについて述べる文で同じく *mukhmal* (*makhmal*) の単語が用いられている<sup>402</sup>。このことは明代では剪絨に当たる *maqmur* の語源 *maxmal* が9世紀、11世紀に既に存在して、その言語を使った人々の住む西アジアにもインドにもベルベットがあったことを示唆する。そのベルベットが WP03 文書によってトゥルファン人の手元に届いていたことが判明したのである。

*Maxmur* すなわちベルベットは何処からトゥルファンにもたらされたのであろうか。イブン=フルダーズベは、“... on export ...; de l'Inde, ... des étoffes végétales, des tissues en veloutés” (要約: インドから植物材の織物、棉ベルベットが輸出される) と述べている<sup>403</sup>。これと同じ部分を、サージャント (R. B. Serjeant) は、“From India are derived ... the garments made of grass (*hashīsh*) and cotton garments with a velvety pile (*mukhmal*).” と翻訳する<sup>404</sup>。また、ラム (C. J. Lamm) は、“From India [are brought] ... stuffs made of [China] grass (Ramie and Rhea), velvety cotton fabrics.”<sup>405</sup> とする。このイブン=フルダーズベの記述によって棉ベルベットが9世紀にはインドに於いて織り出されていたことがわかる。

更に『知識の愉しみ』には “The land of India is the country which possesses most rare products which are found there alone. Among these are ... velvet garments (*thiyāb*)”<sup>406</sup>

<sup>398</sup> Yule 1903, p. 65.

<sup>399</sup> 前嶋 1956, p. 56.

<sup>400</sup> Jarring 1992, pp. 41-46.

<sup>401</sup> Serjeant 1951, p. 81.

<sup>402</sup> Serjeant 1951, p. 81.

<sup>403</sup> De Goeje 1967, p. 51.

<sup>404</sup> Serjeant 1951, p. 81.

<sup>405</sup> Lamm 1937, p. 187.

<sup>406</sup> アラビア語 *thiyāb* は *garment* の他に *cloth* の意味もある。

mukhmal).<sup>407</sup>と書かれるように、この文に述べられているベルベットはインドでのみ産するものであった。インドにだけ産するベルベットとは絹ではなく、イブン=フルダーズベが述べる棉のベルベットに違いない。棉の原産地であり、棉製品で有名なインドにおいて棉が用いられるのは当然のことである。もっとも、棉の栽培はすでに広汎に広がっていたが、メソポタミア・ペルシア・西トルキスタンの織物センターに関する中世の著作に棉布の記述はあっても棉ベルベットについて述べる文は見あたらない<sup>408</sup>。13世紀以降になると西アジアあるいは中央アジアにあった絹ベルベットが記載される。それはマルコ=ポーロの述べる *cramoisy* (緋色のベルベット)<sup>409</sup>や13世紀ラシードウッディーン (Rashīd al-Dīn) がタブリーズの製品として述べる多色のベルベット *qatīfa=yi alvān*<sup>410</sup>や在位1294-1303年のローマ教皇ボニファティウス8世 (Boniface VIII) の遺品として記録される ”Item, unum pannum tartaricum pilosum rubeum ad madelias aureas” (英訳: “A piece of red Tartar velvet with gold disks”)<sup>411</sup>である。

以上を総合すると、棉ベルベットとその技術はインドからアラビア語かペルシア語を話す人々によって、*makhmal* / *mukhmal* としてトゥルファン地域にもたらされ、それを耳にしたウイグルの人々が *maxmur* と呼んだ可能性が大きい。

#### 4. トゥルファンにおける棉ベルベットの生産

トゥルファン地域の織物に関する情報をもたらしてくれる中国側の史料に『松漠紀聞』がある。『松漠紀聞』は宋の洪皓が1129年、金に使いして、10年間抑留された時の前後15年間に及ぶ金国での見聞を記録したものである。その中に、

洪皓 (撰) 『松漠紀聞』p. 4b (百部叢書集成『学津討原』所収)

回鶻自唐末浸微。本朝盛時，有入居秦川為熟戸者，女真破陝，悉徙之燕山。甘・涼・瓜・沙，舊皆有族帳。後悉羈縻于西夏。唯居四郡外地者，頗自為国，有君長。其人卷髮深目，眉修而濃，自眼睫而下多虬髯。土多瑟瑟珠玉。帛有兜羅緜・毛氈・獬錦・注絲・熟綾・斜褐。……<sup>412</sup>

<sup>407</sup> Serjaent 1951, p. 81.

<sup>408</sup> Lamm 1937, pp. 193-222.

<sup>409</sup> Yule 1903, p. 63, p. 65.

<sup>410</sup> Boyle 1968, p. 508.

<sup>411</sup> Wardwell 1988-1989, p. 139.

<sup>412</sup> 書下し「回鶻唐末より浸微なり。本朝の盛んなる時、秦川に入居し熟戸と為る者有り、女真陝を破るに、悉くこれを燕山に徙す。甘・涼・瓜・沙、もと皆族帳有り。後悉く西夏に羈縻さる。唯四郡の外地に居す者は、頗る自ら国を為し、君長有り。其の人卷髮深目にして、眉修にして濃く、眼睫より下は虬髯多し。土は瑟瑟珠玉多し。帛は兜羅緜・毛氈・獬錦・注絲・熟綾・斜褐有り。……」；訳「ウイグルは唐末からようやく衰えた。宋朝の勢力が盛であった時、秦川に入居し帰順する者があった。女真(金朝)が陝西地方を破った時、皆これらの人々を燕山に移した。甘・涼・瓜・沙州にはもとウイグルの族帳があった。後に悉く西夏に服属した。これら四郡以外の地に住む者のみはほぼ独立して、君長が居る。ウイグルの人々は髪がカール

とある。この記録は甘・涼・瓜・沙州にいたウイグルとその四郡以外の地に住む西ウイグルに関するものである。その中で西ウイグルの土地に産するものを列挙している<sup>413</sup>。

この列挙された産物の箇所をピンクス (E. Pinks) は "Ihr land hat viele Se-se, Perlen und Jade. An Geweben gibt es tou-lo Baumwolle, Wollmischgewebe (?), bestickten Brokat (?), Hanf-Seidenwirkereien (chu-szu), feien Damast und geköpernten Wollstoff" とドイツ語に訳した<sup>414</sup>。また、マリヤフキン (A. Г. Малявкин) は "В земле много драгоценного камня шэшэ, жемчуга и нефрита. Из тканей имеются: хлопчатобумажная ткань, шерстяная ткань, узорчатая парча, ткань из конопля и шёлка, тонкая камка, шерстяная ткань саржевого переплетения." とロシア語に訳した<sup>415</sup>。

列挙された織物の中に「狨錦」という注目すべき織物の名がある。ピンクスはこれを?マーク付きで bestickten Brokat (繡錦) とし、マリヤフキンは узорчатая парча (紋錦) とした。

「狨錦」の「狨」の字は、けもの偏から毛織物を想像させる。「狨」は宋代に成立した『集韻』では「狨, 獸名, 禺属, 其毛柔長, 可藉. 通作戎」とあり、「狨は, 獸の名で猿に属し, その毛は柔らかで長いので敷物にすることができる. 音通で『戎』(の意味)と同じ」と解釈できる。

一方、糸偏の「絨」は、先述したように『夢梁録』には南宋代において背面に「絨」(毛羽)のある錦が存在し、次に明代から盛んに製作されるようになった織物に、「漳絨」、「天鷲絨」、「建絨」というものがあり<sup>416</sup>、それらは残存資料から絹ベルベットや棉混のベルベットであったと判明する。

「狨錦」の「狨」は「絨」と音通であるから、狨はベルベットを含む毛羽のある織物と考えられるが、上記のように『集韻』では「狨」の字義のなかで猿に属する獸の毛の敷物に触れていた。このことを考えると、『松漠紀聞』の著者は棉ベルベットをみて、毛製品と思い狨錦という文字を使ったのではないだろうか。棉ベルベットは絹のような光沢がなく、毛織物のようで、中国の人から見ると、それは「戎(すなわち異民族)」の織物と映ったからであろう。

すでに第2編第4章第2節で述べたように4世紀からトゥルファンには棉が産し、唐西州では調は縹布となり、開元・天寶において棉が貢とされるほどその生産は盛んであ

---

して奥目で、眉は整い濃く、眼睫から下は巻いた髻が多い。土産は瑟瑟という珠玉が多い。織物としては堅くて厚手の棉布(楊 1996, p. 192)・フェルト・狨錦・絹と棉の交織?(Pinksや Малявкин は「注絲」の解釈の理由を示さず絹と麻の交織としている。注絲が交織を意味するならば、出土資料から考えると絹と麻とするよりむしろ絹と棉の方が中央アジアにふさわしい)・練りをした綾・斜文の毛織物がある。」

<sup>413</sup> 森安 1994, p. 88.

<sup>414</sup> Pinks 1968, p. 51, 下線は筆者.

<sup>415</sup> Малявкин 1974, p. 91, 下線は筆者.

<sup>416</sup> 陳 1984, pp. 377-378.

った。また、カラホージャ出土の6世紀の漢文書に「白疊」や「疊縷」が<sup>417</sup>、9-11世紀、トウルファン出土のウイグル文書に kápáz「棉花」や böz「棉布」が在証され<sup>418</sup>、更に、12世紀の『松漠紀聞』の中で西ウイグル王国に「兜羅綿」という名の棉布が存在するように棉の生産は続いていた。

そのうえ、中央アジア東部において、漢代から緯パイル織物の技術が存在したことが知られるのである<sup>419</sup>。緯パイル織物である棉ベルベットの技術が12-14世紀頃にインドからもたらされたなら、棉ベルベットが当地で織られても不思議ではない。

### 第3節 年代比定

#### 1. 幡における装飾法と年代比定

本稿で検討しているベルリンのアジア美術館（旧インド美術館）所蔵の棉ベルベットはハート形にカットされて何かに使用されたい。よく似た形にカットされた織物や金属板が、法隆寺や正倉院の幡の手や足に錘を兼ねた飾りとして使用されている<sup>420</sup>。このベルベットはトウルファンの仏教遺跡スイパン（Suipang）から出土している<sup>421</sup>ので幡の手か足に使用された可能性がある。もしこの推定が正しいなら、この地域がイスラム化する以前のものである。従って、この棉ベルベットはその存在が記述される WP03 の10-11世紀からイスラム化する以前の14世紀のものと考えられる。

本編で扱ってきた棉ベルベットは、現存するベルベットとしてはまさに最古の一級資料といえるだろう。それとともに、シルクロードにおける棉ベルベットとその技術の伝播を示すものである。

## 第3章 ドイツ隊発見の金襴

### 第1節 本資料の分析

#### 1. 外観と織技

棉ベルベットと同じく、ドイツ隊がトウルファンで発見した染織資料に金襴がある（MIK III 6222）。その金襴は高昌故城 V<sup>1</sup>から出土した。それは5.2×5.5cmの大きさで花唐草の文様が表され、裏が縫いつけられていて、何か小さい器物の敷物に使用された

---

<sup>417</sup> 『吐魯番出土文書』1, p. 195.

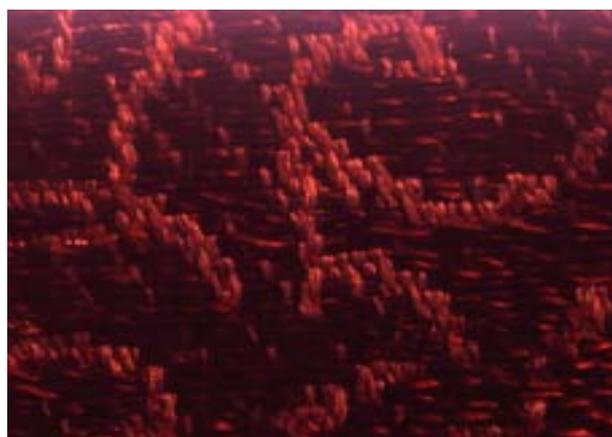
<sup>418</sup> 森安 1991, pp. 40-41, p. 53.

<sup>419</sup> 武 1996, p. 4.

<sup>420</sup> 『献納宝物』pp. 20-21.

<sup>421</sup> Bhattacharya-Haesner 2003, p. 82. 著作の出版以前にいち早くベルベットの出土地点に関して助言下さった Chhaya Bhattacharya-Haesner に感謝する。

ように見える(図 40). 織の組織は「ランパ組織」<sup>422</sup>で、文は 1:3 綾組織、地は平組織(経 2 本引き揃え、緯 1 越)、地経対別絡み経は 2:1 である(挿図 5). 地経と地緯は赤い色であったが、今はベージュに褪色している. 糸の密度は 1cm 間に地経 40~43 (2 本引き揃え) 絡み経 20~21, 地緯 12, 絵緯の金糸は地緯 1 本に対して 2 本引き揃えて入る. その金糸は Z 撚りの赤絹糸の周りに、動物の腸膜に金箔を貼ったものを細く



挿図 5. 高昌出土金欄 ランパ組織

切り Z 方向に巻き付けたものである. しかし、表では金箔は残存せず、裏地のめくれたところを観察して、やっと金箔の光を捕らえることが出来た. 腸膜の表面は黒くなっていて、経年変化によるものか、銀を下に敷いた例があるところから<sup>423</sup>、黒い層が銀かどうか今後の化学分析が待たれるところである.

## 第 2 節 史料に現れる金欄とその生産地

### 1. ヘラートからビシュバリクへ—織工の移動

出土地の高昌は西ウイグル王国の冬の都であったところであるが、王国のもう一つの夏の都ビシュバリクについて金欄に関わる情報がある. それは、1318-1322 年の間にヘラートの歴史を書いたヘラートの住民、サイフィー=ヘラヴィー (Saift Haravi) の残した『ヘラート史記』(*Ta'rikh=nāmah=i Harāt*)の記事である. この著書に基づいた本田実信やオールセン(T. T. Allsen)の著述を合わせると、ヘラートとビシュバリクの関係は、大略、次のようである.

「チングス=カンの西征が行われ、モンゴル軍が 1221 年の春にヘラートの町に侵攻したとき、アミールのイZZ=アッディン (Izz al=din) が 200 人の織工に各自 10 反の

<sup>422</sup> この織物組織に関して龍村織物美術研究所で確認した. ここに感謝の意を表す.

<sup>423</sup> Watt and Wardwell 1997, p. 131.

高価な織物を持たせて、チンギス=カンの第4子であるトルイに命乞いをした。そのときから彼らはトルイの命令でビシュバリクに住むようになり、移住した織工は1000戸をなした<sup>424</sup>。そして、1236年から1239年の間にヘラートに帰った織工はその10-20パーセントに過ぎなかった<sup>425</sup>。

これによって1221年以来、多くのヘラート出身の織工がビシュバリクにいたことがわかる。次に、同じく『ヘラート史記』のオールセン訳から織物に関係するところを要約する。

「ある日チンギス=カンの一夫人であったクトウルク=イシ (Qutlugh Ishi) が壮麗で絵のような文様の数点の金襴をオゴデイにもたらした。喜んだオゴデイは『これらの織物 (nasj) は誰が織ったのか、これらの文様は誰が描いたのか、縁飾りの刺繍は誰がしたのか』と尋ねると、彼女は『トルイがヘラートの捕虜を兄弟に分け、その織工を自分にくれたのです。これらの金襴と芸術的な仕事はその織工がしたのです』と答えた<sup>426</sup>」

この『ヘラート史記』の記述によって、ヘラートの織工は壮麗で絵のような文様の織物 “nasj”<sup>427</sup>を織ったことが示される。上記の二つの要約した内容によって13世紀前半、ビシュバリクにいたヘラートの織工は nasj を織ったことが明らかとなる。

## 2. 「ナシチ」・「納失失」・nasij とは

ところで、マルコ=ポーロの『東方見聞録』のなかに、バウダック (バグダード) について述べた箇所がある。バグダードの陥落に関する条では、「バウダックでは《ナシチ》《ナック》《クラモイシイ》などといった各種の鳥獣模様を豪華に刺繍した種々な織物が製造される。……」と記述されている<sup>428</sup>。同じ部分の H. Yule の英訳は “In Baudas they weave many different kinds of silk, and gold brocades, such as nasich, and nac, and cramoisy, and many another beautiful tissue richly wrought with figures of beasts and birds.” である<sup>429</sup>。マルコ=ポーロがバグダードで見聞した「ナシチ=nasich」は漢字で音訳され、「納失失 (našiš), 納石失 (našiš), 納失思 (našis), 納赤思 (načis)」などと書かれる。その「納失失」については『永楽大典』に『元史』百官志より取った記述がある。

『永楽大典』卷 19781, 局 17a・b 別失八里局の条 (中華書局影印本)

元史百官志。別失八里局。至元十二年為別失八里田地人匠，經值兵革，散漫居止，

<sup>424</sup> 本田 1991, p. 141; Allsen 1997, p. 39.

<sup>425</sup> Allsen 1997, p. 40.

<sup>426</sup> Allsen 1997, p. 40.

<sup>427</sup> “nasj/nasij”は「織物」の意であったが、アラビア人の征服の後、「金錦」を意味するようになったらしい (前嶋 1956, p. 47) .

<sup>428</sup> 愛宕 1970, pp. 47-48.

<sup>429</sup> Yule 1903, p. 63.

遷移京師，置局織造御用領袖納失失等段匹。十三年置別失八里諸色人匠局。秩従七品。今定置大使一員，副使一員。<sup>430</sup>

とある。至元12年(1275年)にビシュバリクから工匠達を京師に移し，局が置かれ，「納失失」などの高級絹織物が元朝の管理のもとに織られるようになったことがわかる。この「納失失(ナシチ=nasich)」は，アラビア語やペルシア語の *nasij* を語源としていることがわかっている<sup>431</sup>。したがって，ビシュバリクにいた織工は“*nasj*”，つまり「納失失」を織っていたのである。これに加えて『永楽大典』の『元史』百官志により京師に移る前，ビシュバリクでヘラートの織工や彼らから技術を受け継いだ人々が納失失を織っていて，それゆえ納失失を織る別失八里局に配属されたという事実が浮かび上がる。

### 3. 「納失失」の金糸

『元史』巻78輿服志1で納石失に「金錦也」の注がついている(中華書局標点本，p. 1938)。この注に基づいて，納失失は文様に金糸を織り込んだ織物として金襴と解釈されたり<sup>432</sup>，博物館で染織資料を扱う研究者の間では，紙に貼った金箔を細く切り絹糸に巻き付けた金糸が織り込まれ，中央アジアの文様をもつた織物を *nasij* 「納失失」とみなしたりしている<sup>433</sup>。森安孝夫はウイグル文書に現れる“*tarta / tarda*”について考察した論文で，*tarta / tarda* と「納石失」を対比して，前者を「ウイグル的あるいは西域的獨特の花模様を金糸(など)を使って織りだした緞子の一種」，後者を「色文様は西アジア風あるいはイスラム風であって，*tarta / tarda* とは全く異なるものであったと思われる。多分納石失は西アジアに伝統的なメタルヤーン(とくに金モール糸)を幅一杯に織り込んで全体が金色に輝く超豪華な織物であったろう。」としている<sup>434</sup>。この金モール糸という着想は同論文中に引用された虞集の曹南王勲德碑の「納赤思者，縷皮伝金為織文者也」に基づいている<sup>435</sup>。その曹南王は，世祖クビライに仕え，アリクブゲとの皇位争いに武勲を立て，中統元年(1260)に褒賞に与り，その後も数々の功を立て褒賞に与った人物である<sup>436</sup>。

筆者は森安論文からヒントを得，「縷皮伝金」を動物の皮や腸膜に金箔を貼った金糸

<sup>430</sup> 書下し「元史百官志。別失八里局。至元十二年別失八里は田地の匠，兵革に値うを経て，散漫に居止を為すに，京師に遷移し，局を置きて御用の領袖の納失失等段匹を織造せしむ。十三年別失八里諸色人匠局を置く。秩は従七品。今大使一員，副使一員を定置す。」；訳「至元十二年に別失八里には田地に工匠が，戦争を終えて，散らばって居住していたので京師に移し，局を置いて帝室御用の領や袖口を飾る納失失等の織物を織らせた。十三年に別失八里諸色人匠局を置く。秩は従七品である。今大使一員，副使一員を定めて置く」

<sup>431</sup> Pelliot 1927, pp. 269-271; 森安 1994, p. 89.

<sup>432</sup> 小沢 1989, p. 83.

<sup>433</sup> Watt, Wardwell et. 1997, p. 127, pp. 142-1145.

<sup>434</sup> 森安 1994, p. 91.

<sup>435</sup> 森安 1994, p. 86.

とし、本来の「納石失 / 納失失」はその金糸を布全体に用いて異様文様を織り出した豪華絢爛たる織物であったと考える。ドイツ隊発見の金襴は金錦で金糸は「縷皮伝金」にあたる。その上、問題の金襴は高昌から出土していて、ヘラートの織工が nasj (納失失) を織ったビシュバリクに近い。その金襴はすでに金の光を失っているが、もとは金色に輝く花唐草が赤い縁取りによって浮かび上がる「納失失」であったに違いない。それはウイグルの貴婦人の衣服の襟に見られる唐草文とそっくりである<sup>437</sup>。同じような皮に金箔を貼った金糸を用いて花唐草を表した金襴や本稿で問題にしている金襴と同様の撚金糸を用いた人物文の金襴が、ウルムチ南郊の塩湖南岸から出土している<sup>438</sup>。しかし、それらの金襴を報告した王炳華はヘラート織工による技術移転に触れることなく、ウイグルの織工によって織られたものと考えている。

#### 4. 「納赤<sup>楊</sup>」・「蒼<sup>舌</sup>児<sup>楊</sup>蒼思」・「納<sup>中</sup>忽<sup>楊</sup>」とは

次に、『元朝秘史』にこの「納失失」とともに織物を意味する単語が表された箇所が二つあるのを見てみよう。まず、一つには、

『元朝秘史』卷 10 (『元朝秘史三種』中文出版, p. 548)  
 (前略) ……脱<sup>舌</sup>児<sup>中</sup>合<sup>楊</sup> 納<sup>赤</sup> 蒼<sup>舌</sup>児<sup>楊</sup>蒼思 阿兀<sup>舌</sup>刺孫 阿不阿<sup>楊</sup>  
                   段匹          金段子          渾金段子          段子          将来了  
  
 亦都兀<sup>楊</sup> 亦<sup>舌</sup>列周 成吉思<sup>中</sup>合罕 突<sup>舌</sup>児 阿兀<sup>勤</sup>札罷。  
           人名          来着          太祖皇帝          行          拝見了。

とあり、小沢重男訳によれば「……絹布・金襴・緞子・織布類を持って《ウイグル王の》イドゥウドが来てチンギス可汗に謁見した。」となる<sup>439</sup>。この文はウイグルの王が、チンギス=カンへの服属と本領安堵を願って、金・銀・真珠と共に織物を持参した時の記事である。

もう一つの箇所は、

『元朝秘史』続 2 (『元朝秘史三種』中文出版, pp. 603-604)  
 (前略) ……斡歌歹<sup>中</sup>合罕 札<sup>舌</sup>児里<sup>黒</sup> 孛<sup>舌</sup>魯<sup>舌</sup>倫 綽<sup>舌</sup>児馬<sup>中</sup>罕<sup>中</sup>豁<sup>舌</sup>児赤宜  
                   名          皇帝          聖旨          做          人名          行

<sup>436</sup> 『道学園古録』卷 24, (『四部叢刊』初編 301, pp. 215-217)

<sup>437</sup> Le coq 1913, Tafel 30-b.

<sup>438</sup> 王 1973, pp. 28-29, p. 34.

<sup>439</sup> 小沢 1989, p. 83, (《》内は筆者が補った。なお中央アジアの織物から金と銀が検出されているので「渾金」とは金と銀が混じる糸の意か、金糸文様が絹地に混じる意なのかも知れない。

門 田送 探馬 撒兀周… (中略) …納<sup>中</sup>忽<sup>揚</sup> 納赤都<sup>揚</sup> 蒼<sup>舌</sup>児<sup>舌</sup>蒼思<sup>思</sup>…  
 只 那裏 官名 座着 渾金 織金 綉金  
 (中略) …桓突<sup>舌</sup>児<sup>舌</sup> 古<sup>舌</sup>児<sup>舌</sup>格兀<sup>勤</sup>周 亦連 阿<sup>(中)</sup> 渾 客額罷<sup>伯</sup>·  
 年裏 送着 教来 有者您 說了。

とあり、「オゴデイ可汗は勅するのに『チョルマカン=コルチは、そのそこに《バグダードに》タンマとして住み、……ナク織・ナチド織・ダマスク織、……を年(ごと)に送らせしめ、とどけてあれ』と云った」と訳されている<sup>440</sup>。この文はオゴデイ可汗が西アジアやコーカサス地方を攻略したチョルマカン=コルチを深馬赤に任命し、バグダードの織物を含むすぐれた産物を毎年送るように命じたものである。

ここに現れる「納赤<sup>揚</sup>」や「納赤都<sup>揚</sup>」は「納失失」のことで「金段子」や「織金」と傍訳が付けられている。この「金段子」の「段子」や「段」は緞子ではなく、「匹」と合わせて「段匹」として織物全般を指した<sup>441</sup>。また、尚剛によると、『事林廣記』別集、巻1「元日進献賀禮」に納闇赤九匹、金段子四十五匹と並べて記されているので、「納闇赤」(納失失)と「金段子」は別のものであるという<sup>442</sup>。「納失失」の傍訳としてこの「金段子」が記されているということは、「納失失」と「金段子」が外見上似ていたと考えられる。織りを職業としない者にとって区別が難しいのは織組織であろう。おそらく「金段子」は金糸によって文様が表された**地絡み**のもの(文様を表す金糸が**地経**と交錯する組織)と思われる。一方「納失失」はランパ組織(文様を表す金糸が**絡み経**と交錯する組織)で金糸が布全体に使用され、地全体や文様も金糸で表されたものや、金糸に他の色の絵緯が加わったものも含まれると思われる。「納失失」の傍訳「織金」は金糸を用いた織物の総体的な言葉と考えられる。

中国では唐代の法門寺の碑銘に「金欄袈裟」(欄に金錦を使った袈裟)や「金錦」の文字が現れ<sup>443</sup>、金糸が織り込まれた織物が出現していた<sup>444</sup>。『元朝秘史』の傍訳が付けられた頃までに中国では、十分、金糸織物が発達していた<sup>445</sup>。そこで、中国でよく知られた「金段子」や「織金」の名が「納失失」の訳語として採用されたものと思われる。

次に「蒼<sup>舌</sup>児<sup>舌</sup>蒼思」(tarta / tarda)は、「渾金段子」や「綉金」の傍訳が付けられている。現存する織金の種類や傍訳から推定すると、「納失失」のように金糸が全体に用いられるのではなく、金糸で文様が部分的に表されたもので、刺繍されたように見えたので「綉金」の傍訳が付けられたのであろう。

<sup>440</sup> 小沢 1989, p. 476, 《》内は筆者が補った。

<sup>441</sup> 内藤 1936, p. 56; 尚 2003, pp. 153-154. 坂本 2004a では「段子」を小沢訳に従って「緞子」と見ていた。本稿で「織物」と改めることにした。

<sup>442</sup> 尚 2003, p. 146.

<sup>443</sup> 陳 1990, pp. 207-208.

<sup>444</sup> 趙 1999, pp. 148-149.

<sup>445</sup> 武 1992, pp. 175, 177.

更に「納赤都<sup>楊</sup>」「荅<sup>平</sup>兒荅思」と並んで「納<sup>中</sup>忽<sup>楊</sup>」(naqud)がある(naqudはnaqの複数)。これはマルコ=ポーロがバグダードの産物として記述する“Nac”(ナック)である。『元朝秘史』では「渾金」と傍訳がつけられているが、それはおそらく部分的に金糸が用いられた織物と思われる。別に『元史国語解』巻24では「納克実 絨錦也」と解説している<sup>446</sup>。その「納克実」はマルコ=ポーロがシンダチュー(宣徳州)について述べる中にある。H. Yule 訳の第59章「テンドウク国に関して及びプレスタージョンの後裔」には、”They get their living by trade and manufactures; weaving those fine cloths of gold which are called Nasich and Naques, besides silk stuffs of many other kinds”とある<sup>447</sup>。その中の“Naques”(nac)が、『元史国語解』で「納克実」と音訳されていると思われる。『元史国語解』の「納克実」の訳語である「絨錦」は本編第2章で述べたようにベルベットである。また“Nac”は『東方見聞録』のバウダックについて述べた箇所の英訳で、”gold brocade”と記され、上記59章にも”fine cloths of gold”とあるから、金糸が織り込まれたベルベットの可能性がある。B. Lauferによれば、ペルシア語の“Nax”(nakh)は「両面に長いパイルのある美しい絨毯、短いパイルの小さい絨毯、いろんな素材の原糸、また、錦」の意味があるとされている<sup>448</sup>。“Nac”は“Naq”とも表されペルシア語“nah”と同じとされる<sup>449</sup>。“Nac”は絨毯の意もあるから毛羽があり、また錦でもある。実際に、本編第2章で触れたように、13世紀末のボニファティウス8世の遺品として金糸入りベルベットが記録されていて、13世紀に金糸入りベルベットが存在したことがわかる。近年、北コーカサスにある元代の遺跡から金糸入りのベルベットが出土している<sup>450</sup>。おそらく史料に現れる地域、西アジアか中国からもたらされたものであろう。

このようにして、もともと「納失失」は西アジア、中央アジアで発達した動物の皮や腸膜を使った金糸を織り込んだ織物”nasj”で、複雑なランバ組織のものであった。その技術や文様がヘラートからビシュバリクへ、更に中国へ織工の移動と共にもたらされ、「納失失」として発展したことが判明した。ここにとりあげた高昌出土の金欄はモンゴル帝国時代に生み出された新しい「納失失」の先駆け”nasj”の実物と考えられる。“Nac”/「納克実」については、今後、新たな情報が見出されるのを待ちたい。

<sup>446</sup> 『元史国語解』(『文淵閣四庫全書』296, 『欽定元史国語解』) p. 554.

<sup>447</sup> Yule 1903, p. 285.

<sup>448</sup> Laufer 1978, p.495.

<sup>449</sup> Pelliot 1927, p. 270.

<sup>450</sup> ロシアの織物研究者 Zvezdana Dode に聞くところによる。

## 第4編 トウルフアン出土染織資料に見る織物の発展史

トウルフアン出土染織資料には第2編と第3編で見てきたように多様な錦があり、また、平織・綺・綾をはじめベルベット・刻糸（絹の綴織）など多くの染織資料がある。以下において、織物の発展史を組織と文様に分けて述べるのであるが、組織の問題に関しては、第2編において、従来多くの研究者によって経錦と定まっている「連珠円内対称文錦」に加えて、議論のある「連珠円内単独文錦」は緯錦であることを明らかにした。また、第3編において、筆者の調査分析の結果、花唐草金欄はランパ組織であることが判明した。文様に関しては、上述の経錦や緯錦について、第3編では2点の錦の文様についてすでに触れておいた。組織や文様に関する第2編、第3編の結論をふまえ、これらの編で記述された織物に加えて多くのトウルフアン出土染織資料を用い、トウルフアン以外の地から出土した染織資料をも援用し、前近代における織物の技術と文様の発展をたどることとする。

### 第1章 トウルフアン出土染織資料に見る織技術史

トウルフアン出土染織資料は第1編で述べたようにイギリス隊発掘資料、中国隊発掘資料、大谷探検隊収集資料、およびドイツ隊発掘資料を合わせたものである。それらの発掘資料は4-14世紀と年代に幅があり非常に多様な織物を含んでいる。従って、織物の主要な組織はほとんどすべて網羅されていると云ってよい。中国の報告書に基づく織物組織に、筆者の調査によって見出されたトウルフアン出土資料の織物組織を加え以下に組織名を列挙しよう。

以下に記述する用語には組織を示す場合と織物を示す場合の両方の意味を持つものがあるが、この章では組織を指している。組織の詳しい説明と図については染織用語解説を参照いただきたい。

平組織：最もシンプルな1:1の組織<sup>451</sup>。

羅（経4本単位）：

経糸が4本単位で交差する組織。

紗（経2本単位）：

経糸が2本単位で交差する組織。

斜文組織（毛織物）：

斜文線のある組織。トウルフアンでは毛織物にこの組織が見られる。

---

<sup>451</sup> 1:1という数字は経糸および緯糸がそれぞれ1浮き、1沈み交錯する状態を示す。

平地綾：

平地に綾流れで文様が表された組織で外見上次の二種類がある。

a 両流れ（平地浮文綾）

b 片流れ（平地綾文綾）

綾地綾：

綾地に、文が不規則な浮きの綾地浮文綾と、文が綾流れの綾地綾文綾がある。綾地綾文綾に次の二種類がある。

a 異向（異向綾文綾）

b 同向（同向綾文綾）

経複様平組織（平組織経錦）：

経糸で文様が表され、全体は平組織を作っている組織。

経複様綾組織（綾組織経錦）：

経糸で文様が表され、全体は綾組織をつくっている組織。

緯複様平組織（平組織緯錦）：

緯糸で文様が表され、全体は平組織をつくっている組織。

緯複様綾組織（綾組織緯錦）：

緯糸で文様が表され、全体は綾組織をつくっている組織で、表は緯浮きの綾、裏は経浮きの綾となる。

風通： 2色で上下二層に織られている組織。

縫取織（平地 / 綾地絵緯縫取錦）：

地の中に、文様の幅以内で引き返される絵緯で文様が表される組織。

浮織（平地 / 綾地絵緯浮文錦）：

地の中に、通し絵緯で文様が表される組織。

綴織：

色違いの緯糸がそれぞれ文様の幅以内で引き返され織られる組織。

両面  $1/2$ <sup>452</sup>綾組織緯錦（準複様綾組織緯錦）：

表も裏も  $1/2$  の緯浮きの綾になる組織。

両面  $1/4$  縹子組織緯錦：

表も裏も  $1/4$  の緯浮きの縹子になる組織。

経綾地絵緯綾とじ裏浮錦（地絡み金欄を含む）：

経の  $2/1$  綾地に、絵緯を半経（はんだて）使い（経糸1本置き）による地経で  $1/2$  緯綾に抑え織り出した組織。

ランパ組織（別絡み金欄を含む）：

文様が絵緯の緯浮きで表され、それらの緯浮きは別絡み経と組織する。こ

---

<sup>452</sup> A/B の A の数値は綾組織・縹子組織それぞれの完全組織（基本単位）で1本の経糸が緯糸の上を越す緯糸の数で B は1本の緯糸が経糸の上を越す経糸の数。

の様に組織された文様が地組織の上にあつて、地組織は地経と地緯で組織される。

パイル組織：

ループや切り毛（毛羽）のある組織。

以上の組織のうち、トゥルファン出土資料のうち、筆者がドイツ調査隊発掘資料を調査し分析した結果、その資料中に見出した組織は次の 17 組織である<sup>453</sup>。それらは羅・紗（経 2 本単位）・平組織・斜文組織・平地綾・綾地綾・綴織・綾組織経錦・綾組織緯錦・風通・縫取織・浮織・両面 1/2 綾組織緯錦・両面 1/4 縹子組織緯錦・経綾地絵緯綾とじ裏浮錦（地絡み金欄）・ランパ組織（別絡み金欄を含む）・パイル組織（ベルベット）である。ランパ組織を除く、後者 6 組織はトゥルファン出土染織資料中に初めて存在が確認されたものである。パイル組織・ランパ組織についてはすでに第 3 編第 2・3 章で織物の詳細について述べ、産地について検討した。

トゥルファン出土染織資料に存在しない組織も多々ある。ちなみに種々の組織のうちトゥルファン出土資料中に見出すことが出来ない主な組織を挙げておく。

平地浮文綾変化形（漢式組織）：

平地に経糸 1 本おきに経浮きで文様が表される組織である。トゥルファン出土資料報告書の中に平文地 2/1 隔経頭花の黄色「人」字文綺(TAM183:5, 表 2 参照)がある。報告書の説明から同組織であろうと思われるが、漢式組織は 2/1 ではなく 3/1 の経浮きであつて、この点が異なっている。出土資料を見る事が出来なかつたのでどちらとも云うことが出来ない<sup>454</sup>。この漢式組織は江陵馬山一号楚墓<sup>455</sup>・パルミラ<sup>456</sup>・ニヤ<sup>457</sup>・ノインウラ<sup>458</sup>・ロプノール<sup>459</sup>など戦国～漢代遺跡から出土している。

平地 / 経綾地浮文同口錦：

地緯と絵緯が用いられ、絵緯は浮文を作る以外は地緯と同じ動きをする。同組織の錦は法隆寺に存在する<sup>460</sup>。

経綾地絵緯固文錦：

2/1 綾地に文様が絵緯で表され、絵緯は地経で 1/5 綾に抑えられ織り出され

<sup>453</sup> Sakamoto & Kimura 2003, pp. 401-402; Sakamoto 2004b, pp. 17-44.

<sup>454</sup> アスターナ出土資料であるが、新疆維吾爾自治区博物館に所蔵されないということである。

<sup>455</sup> 湖北省荊州地区博物館 1985, p. 34, 彩条文綺。江陵馬山一号楚墓は 1982 年に湖北省の江陵西北において発見された戦国時代の楚国の下級貴族の墓である。絹織物が多数出土した。

<sup>456</sup> Pfister 1934, pp. 40-42, p. 44, S4・S5・S9; Pfister 1940, p. 39-40, S 39.

<sup>457</sup> 夏 1963, p. 50-54, 図版 1; 坂本 2000a, p. 117, 59MNM1.

<sup>458</sup> Лубо-Лесниченко 1961, p. 9, МР-1013.

<sup>459</sup> Sylwan 1949, pp.103-106, 34:40a・b, 34:47.

<sup>460</sup> 『献納宝物』1986, p. 57, 山菱文錦。

る組織である。同組織の錦は正倉院に存在する<sup>461</sup>。

紗（経3本単位）：

経糸が3本単位で交差する組織である。正倉院には経2本ずつ二組が対に交差する、つまり2本単位ながら4本セットで織ったものが存在する<sup>462</sup>。他に衡陽県何家皂北宋墓<sup>463</sup>・福州市北郊南宋墓<sup>464</sup>・カラホトに3本単位の紗が存在する<sup>465</sup>。

文紗：

捩組織と平組織または綾組織によって構成される組織。文紗は福州市北郊南宋墓やカラホトに存在する<sup>466</sup>。

## 第1節 古代考古資料・文字資料による織物組織とその発展

トゥルファン出土染織資料は10世紀に亘っているが、そこに見出された組織はそれぞれいつ頃から出現したのであろうか。考古資料で出現年代を明らかにし、中国古代の文字資料にしばしば見られる染織に関する用語とその意味するところを佐藤の著作から拾い上げ<sup>467</sup>、考古資料によって実態を明かにしよう。

### 1. 考古資料と文字資料（挿表6）

第1編で述べたように紀元前3500年の河南省滎陽県青台村の遺跡<sup>468</sup>や紀元前2500年頃の銭山濠遺跡から平組織の織物が出土していることから考えて、織物は最も基本的でシンプルな組織である平組織から他の組織へ進歩していったと考えられる。殷・周時代には「帛」という文字が甲骨文や金文に表される。これは染色されない絹織物の総称と考えられている。同時代の殷墟出土の鉞に付着した平地浮文綾が発見されているところから、殷・周時代の「帛」は平組織と平地浮文綾を指したと思われる。

続いて周代の遺跡から平組織経錦が出土している<sup>469</sup>。春秋時代の『詩経』や『左傳』に「錦」の文字が現れ、彩色された糸で織られた織物と考えられる。当時は綾組織経錦や緯錦はまだ存在せず、出土資料から考えると春秋時代の錦は平組織経錦である。

---

<sup>461</sup> 佐々木 1973, p. 124.

<sup>462</sup> 佐々木 1976, p. 41-42.

<sup>463</sup> 陳 1984, p. 78. 何家皂北宋墓は湖南省にあり、出土の銅銭により北宋後期とされる。

<sup>464</sup> 福建省博物館 1977, p. 3. 福州市北郊南宋墓は三壙からなり、墓主は右壙が黄昇、左壙が孺李氏である。

<sup>465</sup> カラホトは西夏の首都であったがモンゴルに滅ぼされた。しかし元代まで遺物が残っている。織物はエルミタージュ美術館に保管され、筆者が一部調査したが未発表である。

<sup>466</sup> 上記注 464・465 参照。

<sup>467</sup> 佐藤 1977, pp. 59-75.

<sup>468</sup> 朱 1992, p. 4.

<sup>469</sup> 陳 1984, pp. 96-97.

戦国時代には江陵馬山一号楚墓から籠振れの素羅（文様のない羅）や平地浮文綾変化形（漢式組織）が出土している<sup>470</sup>。同時代の『戦国策』齊策に「羅」の文字が現れ、同じ『戦国策』齊策に「綺」の文字が現れる。本章第4節で「綺」について検討するが、「綺」には平地綾も羅も含まれている。

考古資料			文字資料		
組織	出土地/資料	出現年代	文字資料	年代	名称
平組織	河南省滎陽県青台村	新石器 紀元前 3500 年頃	甲骨文, 金文	殷・周	帛
			『詩経』	春秋	素・縞
			『戦国策』	戦国	紉
			『急就篇』	前漢	絹・縹
平地浮文綾	殷虚の鉞	殷	甲骨文, 金文	殷・周	帛
経複様平組織 (平組織経錦)	遼寧省朝陽西周早期墓	周	『詩経』・『左伝』	春秋	錦
素羅	江陵馬山一号楚墓	戦国	『戦国策』	戦国	羅・綺
平地浮文綾 変化形 (漢式組織)	江陵馬山一号楚墓	戦国	『戦国策』	戦国	綺
浮織	江陵馬山一号楚墓	戦国			
平地綾文綾	長沙馬王堆一号漢墓	前漢	『戦国策』	戦国	綺
経パイル	長沙馬王堆一号漢墓	前漢	『急就篇』	前漢	縹
縫取織	ノイン=ウラ	前漢・後漢			

挿表 6. 考古資料と文字資料

<sup>470</sup> 湖北省荊州地区博物館 1985, p. 33. 新石器時代に羅組織が存在したとする報告があるが（陳 1984, p. 33）, 炭化しているので織か編みか確認は難しい。

江陵馬山一号楚墓から浮織が出土し<sup>471</sup>、長沙馬王堆一号漢墓から平地綾文綾や経パイル織物が出土した<sup>472</sup>。続いてノインウラから縫取織が出土している<sup>473</sup>。但し、浮織や縫取織は幅の狭い帯状のものである。

以上の文字資料と出土資料を勘案すると、トゥルフアン出土資料に見られる組織のうち、平組織は紀元前 3500 年頃、平地浮文綾は殷代、経複雑平組織（平組織経錦）は周代まで遡り、羅・平地浮文綾変化形（漢式組織）・浮織は戦国時代まで遡る。その他、平地綾文綾・縫取織・経パイル組織は漢代まで遡る。なお、西周時代の遺跡で一見、斜文織のような織物が泥土に付着していたという報告があるが<sup>474</sup>、趙豊によれば、この組織も平地浮文綾変化形（漢式組織）の一種であるという<sup>475</sup>。出土状況からみると判別は難しいと思われる。

## 第 2 節. トゥルフアン出土染織資料に確認できる組織とその編年

### 1. トゥルフアン出土染織資料の織組織と文字資料との対応

本編冒頭に記された組織のうち数種のもはカラホージャ・アスターナ墓から出土した織物に見出されたものの、前述のように、すでに古代から織り続けられた組織である。それに続くものとして次の様な組織がある。それらは平組織緯錦・綾組織緯錦・綾組織経錦・絹風通・絹綴織である。

染織資料が発見されたカラホージャ・アスターナの古墓はかなり多くの墓誌・衣物疏・文書を伴出している。それによって染織資料のおおよその年代を推定することが出来る。織物が被葬者と共に古墓に埋葬される年代は古墓から伴出する墓誌・衣物疏がそれを示しているが、織られた年代は墓誌・衣物疏の年代より早いと考えられる。

一方、墓誌・衣物疏の他に、伴出する文書が墓誌・衣物疏より遅い年代を示す場合、あるいは墓誌、衣物疏が伴出せず文書のみの場合、文書の年代を考慮して織られた年代を下げなければならない。その観点から染織資料を年代順に表にまとめたのが表 3 である。しかし、その中には文様から見ると織物が織られてから埋葬されるまで数 10 年経ていると思われる場合がある。そのような場合は類似文様から年代を推定する必要が生じてくる。それらの推定が必要な場合は本文で触れることにし、表はほとんど伴出文書の年代に従っている。組織に関しては、第 2 編で検討したように、中国の一部の研究者が綾組織経錦とした織物を筆者は綾組織緯錦として扱っている。従って、以下に述べる

<sup>471</sup> 湖北省荊州地区博物館 1985, pp. 43-44.

<sup>472</sup> 上海市紡織科学院・上海市絲綢工業公司文物研究組 1980, pp. 23-28, pp. 43-54. 『長沙馬王堆』1976, p. 90 では平地綾文綾を平地浮文綾変化形（漢式組織）と見ている。

<sup>473</sup> Лубо-Лесниченко 1961, p. 31, Pls. I-3・I-4・XII-2, MP-986.

<sup>474</sup> 李 1976, pp. 60-63.

<sup>475</sup> 趙 2005b, p. 42.

ように、中国の一部の研究者と緯複様綾組織（綾組織緯錦）の出現年代に違いが生ずることとなる。

墓誌、衣物疏、文書などによって年代を示す事が出来る錦の組織を初出順に挙げると（挿表 7）、平組織緯錦の最初の出現はスタイン発掘の怪獣文錦(Ast. vi.1.03, 図 1)で、364年を示す木板が発見されている<sup>476</sup>。同組織の中国隊発掘錦では大吉字文錦(TAM169:51)が558年の墓表と衣物疏、および576年の衣物疏を伴出している。この平組織緯錦の織物は先に第1編第1章第3節で述べたようにエジプトやシリアで3世紀までに織られ、その技術がトゥルフアンに伝わったものと考えられる。次に現れるのは綾組織緯錦である。この組織についても上記と同じ第3節で述べたように4世紀に織り出され、東に伝わった。トゥルフアンにおいて最も早い年代の綾組織緯錦は鹿文錦(TAM84:5)で574年の文書を伴出している<sup>477</sup>。しかし文書のみが伴出するので製作年代は7世紀まで下がる可能性が大きい。綾組織経錦の出現は対馬錦(TAM386)で619年の墓誌を伴出している<sup>478</sup>。絹の風通が錦に次ぎ、その菱形網格填花双面錦(TAM206)は689年の墓誌を伴っている。同墓から絹の綴織(TAM206)が現れる。しかし、幅の狭い帯状のものである<sup>479</sup>。風通・綴織に次ぎ綾地綾文綾(TAM187:c)が出土する。この綾は多くの文書を伴出するが、最も遅い年代の文書は744年のものである。

トゥルフアンにおいて伴出遺物によっておよそ年代が判明している織組織の出現順を簡略に表すと次の通りである。

緯複様平組織(364年)→緯複様綾組織(574年)→経複様綾組織(619年)→絹風通・絹綴織(689年)→綾地綾文綾(744年)

上記の出現順はあくまで出土した染織資料の伴出墓誌、衣物疏、文書によっている。それによると出土した年代は経複様綾組織（綾組織経錦）より緯複様綾組織（綾組織緯錦）が早くなっているが、緯複様綾組織の鹿文錦は連珠円内単独文様で、第2編で考察したように到来したものであるから、中国本土ではおそらく経複様綾組織の方が早く出現していたと思われる。なぜなら中国本土製の綾組織緯錦は7世紀中葉に現れるからである。また、絹風通は西方の毛風通から影響を受けたものである。次に、墓の年代は不明であるが、綾地浮文綾(TAM105:1)は唐代の文書を伴っている。おそらく綾地綾文綾と前後して出現したのであろう。絹綴織は帯状であるが、法隆寺に帯状と幅の広い綴織が所蔵され、幅の広い綴織が7世紀後半にはすでに存在している<sup>480</sup>。西方で発達した毛の綴織技法が絹によって織り出されるようになり宋代に「刻絲」と呼ばれるようになるのである。

以上は中国隊によって発掘された資料であるが、ドイツ隊発掘資料に平地縫取織

<sup>476</sup> Stein 1928, vol. 2, p. 660.

<sup>477</sup> この組織については図版の錦の綾目が立っているところから判定した。

<sup>478</sup> 武 2006, p. 382.

<sup>479</sup> 『新疆出土文物』図 148 左、武 2000, pp. 152-153 (p.153 図 15B の TAM216 は 206 のミス)

<sup>480</sup> 『上代染織文』1929, 図 110.

(MIKⅢ169) や紗地縫取り(金紗 MIKⅢ6456)があり<sup>481</sup>, 縫取りの緯糸に金糸が使用されている。それらの縫取織は漢代の幅の狭い帯状のものと違って、織物として十分な幅を持っている。いつのころからか縫取織が織物の規定の幅に織られるようになったらしい。縫取織に見られるように縫取り技法は平地、綾地、羅など各種組織と併用されている。

その他、ドイツ隊発掘資料に綾地浮織(MIKⅢ7465)があり<sup>482</sup>, この織物もまた緯糸に金糸が使われている。この資料は戦国時代の幅の狭い帯状の浮織と違って、織物として相応の幅を持っている。縫取織と同様、衣装用の織物として織り出されるようになっていたと思われる。

特記すべきは五代、宋に属するとされている 5/1 六枚経綾地絵緯浮文縫取錦(勝金口出土)<sup>483</sup>である。その経糸は緯糸と 5/1 の経綾に交錯し、絵緯は不規則に浮いている。その上、縫取りが施されている。浮織と縫取りの二つの要素を兼ね揃えたものである。

トゥルファン出土染織資料					
組織	出土地	資料名	資料NO.	年代	備考
平組織緯錦	アスターナ	動物雲気文錦 (怪獣文錦)	Ast. vi. 1.03	364年木版伴出	エジプト・シリアで 3世紀までに出現
綾組織緯錦	アスターナ	鹿文錦	TAM 84:5	574年文書伴出	エジプトで 4世紀頃出現
綾組織経錦	アスターナ	対馬錦	TAM 386	619墓誌伴出	
風通	アスターナ	菱形網格填花 双面錦	TAM 206	689墓誌伴出	
綴織	アスターナ	緯絲縹帯	TAM 206	689墓誌伴出	綴織(広幅) 法隆寺に存在
綾地綾文綾	アスターナ	黄色団花綾	TAM 187:c	744年文書伴出	
綾地浮文綾	アスターナ	八彩暈綳 提花綾	TAM 105:1	8世紀	
六枚経綾地 絵緯浮文	勝金口	飛鳳蛺蝶 団花錦		10-11世紀	綾地に縫取りが 加わっている

挿表 7. トゥルファン出土染織資料に見る織組織の出現

<sup>481</sup> Sakamoto, Kimura 2003, p. 491, p. 493, p. 495.

<sup>482</sup> Sakamoto, Kimura 2003, p. 491, p. 496.

<sup>483</sup> 坂本 2000a, p. 124, pl. 75・76. 再調査の結果、絵緯は裏浮きである。年代は新疆博物館による。

## 2. トウルフアン出土染織資料にみる織組織の発展（挿表 8）

ドイツ隊発見の染織資料はカラホージャ・アスターナ出土資料のように古墓から発見されたものでなく、多くは高昌古城・トヨク・スイパンなどの遺跡から出土している。資料の幾つかは出土地点が記録されている。幡に使用された資料に関しては、その出土地点や幡の特徴からある程度資料の年代が推定出来るものがある。

それ以外の資料は同じ組織をもつ織物が出現した年代を参考にしてトウルフアン出土資料の組織の出現年代を推定することが出来る。

カラホージャ・アスターナ出土資料に見られなかった組織に両面 1/2 綾組織緯錦(MIK III 7606)があり、それと同組織で最も早い織物は法門寺地宮出土の小団鸚鵡文織金(FD4:017-2)である。法門寺地宮に残された宝物の大半は懿宗咸通 14 年(874)に奉納されたものである<sup>484</sup>。両面 1/2 綾組織緯錦は 9 世紀に出現したと見られる。

両面 1/4 縹子組織緯錦(MIK III 6200)は錦の地組織が上記の綾から縹子に変わったものである。この組織は遼代の織物に多く見られ、その一例は 941 年に亡くなった耶律羽之の墓から出土している<sup>485</sup>。

経綾地絵緯綾とじ裏浮き錦（地絡み金欄，2/1 経綾地，絵緯半経 1/2 地絡み：MIK III 7443・MIK III 7452a）は経糸の半分が絵緯と 1/2 に交錯する半経 1/2 地絡みであるが、類似組織で経綾地絵緯固文錦は、半経ではなく、2/1 経綾地に絵緯が経糸と 1/5 に交錯するものである。これは正倉院蔵茶地鳥獸花卉文錦で<sup>486</sup>、絵緯半経 1/2 の先駆けとみられる。遼・金代には金糸入りの半経で絵緯と組織するものがある<sup>487</sup>。このような経糸の半分が地緯とも絵緯とも交錯する地絡みの組織は次ぎに続くランパ組織の先駆けとみられる。

そのランパ組織の織物(MIK III 162・MIK III 6222・MIK III 6992)は同組織の織物が第 3 編で述べたトウルフアンの塩湖古墓から出土している外<sup>488</sup>、内蒙古の元代集寧路故城から出土し、河北隆化鴿子洞からも出土している<sup>489</sup>。集寧路故城には、現在、皇慶元年(1312)建立の「集寧文宣王廟学碑」が残存する<sup>490</sup>。河北隆化鴿子洞は下限が至正 22 年(1362)である<sup>491</sup>。ランパ組織の織物は西方の技術がもたらされ、モンゴル時代に現れたと考えられる。

<sup>484</sup> 趙 1999, p. 148. 気賀澤 1993, pp. 583-584. 法門寺は西安岐陽にある唐代の名刹で、真身舍利塔から宝物が発見された。

<sup>485</sup> Zhao 1999, p. 47. 耶律羽之の墓は内蒙古赤峰市阿魯科爾沁旗にあり、金銀銅器、銅鏡などのほか染織品が出土した。

<sup>486</sup> 佐々木 1973, pp. 123-126.

<sup>487</sup> Riboud 1995, p. 92, pp. 119-120.

<sup>488</sup> 王 1973, pp. 28-29.

<sup>489</sup> 羅 2005, pp. 254-256.

<sup>490</sup> 潘 1979, p. 32. 集寧路故城は内蒙古集寧市察右前旗にあり、金編宗明昌 3 年(1192)に建立され、元代にその基礎の上に拡大して建てられた。城の貯蔵庫から染織品や銅鏡が出土した。

<sup>491</sup> 隆化県博物館 2004, p. 23. 河北隆化鴿子洞は海拔 1010m にあり、人工的に掘削されたもので

パイル組織のうち絹経パイル組織はすでに漢代に見られ、敷物としての毛の緯パイル組織は第3編第2章第2節で述べたように漢代から中央アジア東部に存在している。しかし、両者ともベルベットと呼ばれるほど糸密度の高いものではない。棉の緯パイル組織(MIKⅢ6194)が織り出されるのは、第3編第2章第3節で述べたようにトゥルファンでは10世紀以降のことであろう。

ドイツ隊収集染織資料					
組織	出土地	資料名	資料NO.	年代	備考
両面1/2綾組織緯錦	新疆	連珠雲気鳥文錦	MIK Ⅲ7606	9-11世紀	法門寺(874年奉納)小団花鸚鵡文織金(FD 4:017-2)は同組織
両面1/4縹子組織緯錦	高昌故城	象文錦	MIK Ⅲ6200	10-12世紀	耶律羽之墓(941年)から同組織出土
経綾地絵緯綾とじ裏浮文錦	クルトカ(高昌近辺)	円文地絡み金襴	MIK Ⅲ7443, 7452a	11-13世紀	遼・金代に多い
ランパ組織	新疆	鳥植物文錦	MIK Ⅲ162	13-14世紀	元代集寧路故城(1312年集寧文宣王廟学碑建立)から同組織出土, 河北隆化鴿子洞(下限1362年)から同組織出土
	高昌故城	花唐草金襴	MIK Ⅲ6222		
	高昌故城	童子花文錦	MIK Ⅲ6992		
パイル組織	スイパン	縹形棉ベルベット	MIK Ⅲ6194	9-14世紀	インドに関する史料(9世紀)に棉ベルベットが記載される

挿表 8. ドイツ隊収集資料に見る織組織の発展

### 第3節 錦・綾の織技発達史と東西の技術的交流

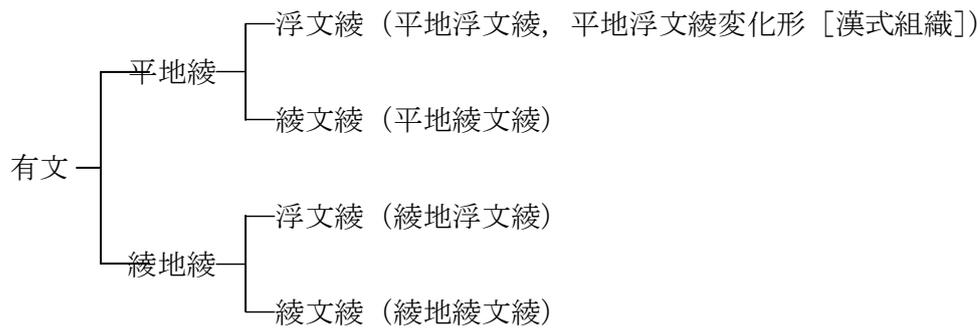
#### 1. 綾 (挿表 9)

綾の織技の発達について述べるに先立って、綾の分類と相互関係を示しておこう。この分類は地組織と綾流れの外見に基づいたものである。

無文—素文綾 (無文斜文織)

---

あるが掘削年代はわからない。多くの染織品と元代の文書が出土した。



綾組織＝斜文組織は第1編第1章第2節で述べたようにもともと西方で発達し、まず、毛織物に用いられ、1世紀ころから絹斜文織の「胡綾」として絹にも用いられるようになった。その斜文組織の技術が東方へもたらされ織り出されるようになった。錦にその技術が用いられる外、綾そのものの出土例は、先に示したようにトゥルフアン出土の綾地綾であり、その他にも都蘭出土の2/2の絹斜文織の素文綾がある<sup>492</sup>。

中国における綾は、殷・周時代から続く平地綾の平地浮文綾から平地綾文綾へと変化しながら唐代においても織り続けられた。そして唐代中頃に出現した綾地綾へと変化していった。ここには西から来た斜文織の影響が見て取れる。毛織物圏の中央アジアでは、紀元前9世紀に毛織物の斜文織があり<sup>493</sup>、トゥルフアンでも毛斜文織が発見されていることは本編第1章冒頭に斜文組織として示したとおりである。唐代中頃になって初めて綾地綾や素文綾が織り出されるのは<sup>494</sup>、それまで平組織の合成、つまり斜子技法、いかえれば2-2技法（経糸2本、緯糸2越に基づく技法）で綾流れの文様が織り出すことが出来、この技法によって糸バツリ（1本ずつ綜統に入れる織り方）よりも綜統数を減少することが出来るので、その織り方が長く保たれたからである<sup>495</sup>。

平地綾は具体的に次に挙げるような平地浮文綾から平地綾文綾へという変化がある。

平地 2/1 経浮文綾（漢式組織？）（平紋地 2/1 隔経頭花 TAM183:5）

平地経浮文綾変化形（漢式組織）(MNM [ニヤ] 1)<sup>496</sup>

平地経浮文綾（TAM170:20 [562年墓表, 衣物疏伴出]<sup>497</sup>・TAM303:1 [551年墓表伴出]<sup>498</sup>・TAM48:14 [617年衣物疏伴出]<sup>499</sup>）,

<sup>492</sup> 趙 1992, p.109.

<sup>493</sup> 『楼蘭王国』1992, 図 224, p. 169.

<sup>494</sup> 宮盤から方形の綾地綾が出土しているが、これはパルミラ出土と同様の斜文織であり、到来したものと見なされる。

<sup>495</sup> 例えば16越におよぶ文様の斜線では、糸バツリで16枚の綜統を必要とするが、斜子技法によれば平組織のための地綜統2枚と文綜統4枚計6枚で織ることが出来る。佐々木 1958, p. 26.

<sup>496</sup> 『シルクロード学研究』8, PL.103.

<sup>497</sup> 『シルクロード学研究』8, PL.104.

<sup>498</sup> 『シルクロード学研究』8, PL.105.

<sup>499</sup> 『シルクロード学研究』8, PL.106・107.

### 平地緯浮文綾（平紋地 1/3 緯浮対称頭花 TAM213:45）

この括弧内の表現のように、中国の報告書には緯浮き面を表と見ているものがあるが平地経浮文綾と同組織である。この組織の主要な浮きは 3/1 経浮きまたは 1/3 緯浮きであるが、綾流れの変化するところで経が緯 5 越を越えて浮く、あるいは緯が経 5 本を越えて浮く場合が多い。

中国の報告書によれば次のような組織の表現がある。われわれの表現を丸括弧内に示しておく

平地 5/1 経斜文 TAM326:7-2<sup>500</sup> [586 年墓誌伴出]（平地 5/1 経綾文綾）

平紋地 3/1 四枚右斜文頭花 TAM221:12 [678 文書伴出]，平紋地 3/1 左向経面斜紋頭花 TAM191:84 [681 年文書伴出]，また，3/1 斜紋逐経頭花 TAM169:70，平紋地 3/1 逐経頭花 TAM227:35・TAM227:36（平地 3/1 経綾文綾）

とある。上記の多様な組織の表現は我々の平地 5/1 経綾文綾・平地 3/1 経綾文綾を意味するように思われる。

平地経浮文綾と平地経綾文綾の区分は我が国におけるもので中国の報告書には見られない。この区分は織文の外見に基づくもので、技術的には平地経綾文綾は、5/1 経綾文綾を除き斜子技法（2-2 技法）によって織られ、一方、平地経浮文綾は斜子技法に基づきつつ、綾流れの転換点で経 2-緯 2 から経 1-緯 2・経 2-緯 3・経 3-緯 3 などの組み合わせで、経または緯 1 本、あるいは経・緯それぞれ 1 本ずれることで綾流れの方向を変えることが出来る。したがって、両者は基本的に技術的な大差はない。また、平地 5/1(5・1・1・1)経浮文綾は経 2-緯 4 の組み合わせで織ることが出来、これもまた基本的に技術的な大差はない。

次に平地から綾地に進んだ綾地綾文綾には次の様な種類がある。

#### 異向

3/1 綾地 1/3 綾文綾 [1/3 緯面斜紋 3/1 経面斜紋 TAM187:c (744 年文書伴出)]，1/3 綾地 3/1 綾文綾 [1/3 緯面斜紋地 3/1 経面斜紋頭花 TAM213:35]これらの四枚異向綾は都蘭や敦煌からも出土している<sup>501</sup>。

3/1 綾地 2/1 綾文綾？[3/1 斜紋地 2/1 異向頭花 TAM189:37 (722 年文書伴出)]中国の報告によれば上記括弧内の記述になっているが<sup>502</sup>，2/1 ではなく 1/3 の緯綾文ではないだろうか

トゥルファンには見出されないが 3/1 綾地 1/7 綾文綾の組織が異向綾にある<sup>503</sup>。これは遼代のもので 8 枚の綜紵が用いられるようになった。

#### 同向

<sup>500</sup> 新疆博物館考古部 2000a, p. 62, p. 74, 図 7-1 (7-2 はミスプリント)。

<sup>501</sup> 趙 2005b, pp. 46-47.

<sup>502</sup> 新疆文物考古研究所 2000a, p. 121.

<sup>503</sup> 趙 2004, p.71.

組織		出土地/ 所蔵場所	資料名	資料NO.	年代	備考	
平地	平地経浮文綾	殷墟	鉞		殷		
		アスターナ	天青色 幡文綺	TAM 170:20	高昌	562年墓表・ 衣物疏伴出	
	平地経浮文綾 変化形(漢式組織)	江陵馬山 一号楚墓	彩條文綺	N 13	戦国		
		ニヤ	鳥獸文綺	MNM 1	後漢		
	平地3/1経綾文綾	長沙馬王堆 一号漢墓	菱文綺	354-19	前漢	漢式組織とする見方 もある。『長沙馬王堆』 1976, p. 90.	
		ノイン=ウラ	菱文綺	MP 1804	漢		
		アスターナ	黄色団窠 対龍文綺	TAM 221:12	唐	678年文書伴出 本稿図 27	
平地5/1経綾文綾	アスターナ	棕色套環 連珠文綺	TAM 326:7-2	高昌	586年墓誌伴出		
綾地	異向	3/1綾地1/3綾文 綾	アスターナ	黄色団窠 綾	TAM 187 c	唐	744年文書伴出
		3/1綾地1/7綾文 綾	耶律羽之墓	雲山瑞鹿 銜綾	YYS 113	遼	941年埋葬
	同向	2/1綾地1/5綾文 綾	高昌故城	彩絵綾	MIK III 6213	唐	同組織正倉院蔵, 敦煌・都蘭出土
		1/2綾地5/1綾文 綾	正倉院	草木双羊双 鳳文うこん綾		唐	
		3/1綾地1/7綾文 綾	高昌故城	金糸花文 刺繍幡断片	MIK III 4909	五代・宋	
		1/3綾地3/1綾文 綾	耶律羽之墓	大雁文綾	YYS 112	遼	941年埋葬
		1/5綾地5/1綾文 綾					
		2/1綾地浮文綾	高昌故城	菱文綾	MIK III 4995	唐	同組織正倉院蔵, 草木双羊双鳳文白綾
		3/1綾地浮文綾	アスターナ	八彩暈縹 提花綾	TAM 105:1	唐	
		5/1綾	勝金口	飛鳳蛺蝶 団花錦		五代・宋	縫取錦の地

挿表 9. 綾の種類とその発展

2/1 綾地 1/5 綾文綾(MIKⅢ6213)のように 2/1 の地と 1/5 の文は最も一般的な組み合わせであり、同組織は正倉院に所蔵される白椽綾几褥の外<sup>504</sup>、敦煌<sup>505</sup>や都蘭からも出土している<sup>506</sup>。この組織を織り出すために伏機が用いられると考えられ、従来の平地綾、綾地異向綾より一歩進んだ機構が機に備わったのである<sup>507</sup>。正倉院の草木双羊双鳳文鬱金綾金泥花模様描繪裂は 1/2 綾地 5/1 綾文綾のように 1/2 と 5/1 の組み合わせや<sup>508</sup>、3/1 綾地 1/7 綾文綾 (MIKⅢ4909) のように 3/1 と 1/7 の組み合わせもある<sup>509</sup>。その外、トゥルファンには見られないが、1/5 と 5/1 や 1/3 と 3/1 の組み合わせの同向綾がある<sup>510</sup>

#### 浮文

2/1 三枚経綾地緯浮文綾(MIKⅢ4995)の同組織は正倉院に所蔵される草木双羊双鳳文白綾襪の外<sup>511</sup>、寧夏西夏陵区 108 墓からも出土している<sup>512</sup>

アスターナからは 3/1 四枚経綾地緯浮文綾(TAM105:1)が出土している。

以上のようにトゥルファン出土資料の綾地綾を見てくると異向綾がやや早く、正倉院の同向綾や綾地浮文綾は正倉院の織物のなかでも晩期に属すると見なされているものである。機の装置も一歩進んだ機構、つまり、経糸を揚げるばかりでなく下げる伏機が加えられた。浮文綾や機の機構が進歩して生み出された同向綾は 8 世紀中葉に前後して織り出されるようになったと思われる。

5/1 六枚経綾地絵緯浮文縫取錦 (勝金口出土) は綾そのものではないが、5/1 の綾地である。

## 2. 錦 (挿表 10)

先に述べたように、錦は平組織経錦から、平組織緯錦を経て綾組織経錦や綾組織緯錦に発展していった。すでに第 1 編でのべたように、中国で織られた平組織経錦が早くは戦国時代に北方へもたらされ、漢代には北方へ、更に西方へ運ばれていった。これらの東から到来した平組織経錦の影響で平組織緯錦が、続いて綾組織緯錦が西方で織り出された。それらは東方へもたらされ、先ず毛平組織緯錦が 3 世紀に、絹平組織緯錦が 4 世紀に新疆で織り出された。更に西から綾組織緯錦が運ばれて来たことについて、第 1 編・第 2 編を通じ明らかにした。西からもたらされた斜文織や綾組織緯錦にみられる綾

<sup>504</sup> 佐々木 1976, pp. 35-36.

<sup>505</sup> Riboud et Vial 1970, pp. 327-331.

<sup>506</sup> 趙 2005b, p. 47.

<sup>507</sup> 佐々木 1975, p. 12.

<sup>508</sup> 佐々木 1973, pp. 19-23.

<sup>509</sup> Schröter 2003, p. 487. Bhattacharya-Haesner 2003, p. 78-79.

<sup>510</sup> 趙 2004, p. 71.

<sup>511</sup> 佐々木 1973, pp. 13-16; 1975, p. 13-18.

<sup>512</sup> 趙 2005b, p. 49.

組織=斜文組織が隋・唐代に浸透し、綾組織経錦が織り出されるようになったのは自然の成り行きである。

ペルシアやソグドからトゥルファンへもたらされた緯錦は1/2綾組織緯錦であり、それらと同組織、同文様の錦は更に中国へ到達したのであろう。それらの文様は模倣され平組織経錦や綾組織経錦として中国伝統の経錦として織り出されたのである。勿論、1/2綾組織緯錦も7世紀に中国蜀で織り出され、その広幅で大文様の錦は空引機の機構の出現を想定させる。この錦に関してもすでに第2編第3章で論じたところである。

1/2綾組織緯錦が中国の7-8世紀を風靡したことは言うまでもないが、1/3綾組織緯錦(MIKⅢ7603)がベゼクリクから出土している<sup>513</sup>。1/3の四枚綜紵はいままで1/3綾地3/1綾文綾の綾地として存在しており、錦に用いられても不思議ではない。続いて1/4縹子組織緯錦が法門寺地宮から出土している<sup>514</sup>。四枚綜紵から五枚綜紵に綜紵枚数が増加したわけであるが、縹子組織の出現として注目すべき錦である<sup>515</sup>。

上記の緯錦は緯糸が文様を表すと同時に母経と組織して地組織も構成し、陰経は文様にかかわる緯糸を選ぶ役割をしていた。次に晩唐から両面1/2綾組織緯錦(MIKⅢ7606)が織り出されているが、遼代の出土資料に多く見られるもので、この錦では緯糸は従来通り文様を表すと同時に地も構成したが、経糸のうち従来の陰経は文様にかかわる緯糸を選ぶといったもとの役割を為さず、芯経となって厚みを保持するだけである。従来の母経は緯糸と地を組織するだけであったが、この母経は従来の役割と共に文様にかかわる緯糸を選ぶ役割を兼ねるようになる。この経糸の働きから空引機の伏機構の出現が想定されるのである。この両面1/2綾組織緯錦には文様が緯浮きや縫取りで表される変化形がある<sup>516</sup>。

1/2の綾組織が1/4の縹子組織に変わった錦が両面1/4縹子組織緯錦(MIKⅢ6200)であり、この組織は本章第2節第2項で述べたように遼代の出土資料に多く見られる<sup>517</sup>。この組織にも両面1/2綾組織緯錦と同様に変化形がある。

また、宋・遼の頃には、緯糸は文様を表す絵緯と地を構成する緯糸に分かれ、経糸は地緯と交錯すると同時に絵緯とも交錯する。

経綾地絵緯綾とじ裏浮錦(地絡み金欄, MIKⅢ7443・MIKⅢ7452a)は本章第2節第2項で述べたように、経糸は緯糸と2/1の経綾に交錯し、絵緯とは半経の1/2緯綾に交錯する。絵緯に金糸が使用されると地絡み金欄と称されるようになり、別絡み金欄、つまりランパ組織の先駆けである。

---

<sup>513</sup> Sakamoto 2004b, p. 22.

<sup>514</sup> 趙 2004, p. 55.

<sup>515</sup> 筆者は今日まで未発表であるが、エルミターージュにおいて敦煌出土の縹子とモスクワのアカデミー考古学研究所においてモンチェヴァヤ=バルカ出土の棉絹交織縹子を見出している。

<sup>516</sup> 趙 2004, p. 35.

<sup>517</sup> 趙 2004, pp. 43-55.

組織	出土地	資料名	資料 NO.	年代	備考
平組織経錦	遼寧省朝陽西周早期墓			周	
平組織緯錦	アスターナ	動物雲気文錦 (怪獣文錦)	Ast. vi.1. 03	東晋	364 年木版伴出 図 1
1/2 綾組織緯錦	アスターナ	鹿文錦	TAM 84:5	高昌	574 年文書伴出
2/1 綾組織経錦	アスターナ	対馬錦	TAM 386	高昌	619 年墓誌伴出
1/3 綾組織緯錦	ベゼクリク	植物文錦	MIK III 7603	唐	
1/4 縹子組織緯錦	法門寺			唐末	874 年奉納
両面 1/2 綾組織緯錦	新疆	連珠雲気鳥文錦	MIK III 7606	唐末/五代/ 宋/遼	法門寺 (874 年奉納)から 同組織出土
両面 1/4 縹子組織緯錦	高昌故城	象文錦	MIK III 6200	遼	耶律羽之墓 (941 年)から 同組織出土
経綾地絵緯綾と じ裏浮き錦	クルトカ (高昌近辺)	円文地絡み金欄	MIK III 7443, 7452a	遼/金	
ランパ組織	高昌故城	花唐草金欄	MIK III 6222	元	元代集寧路故城 (1312 年集寧文宣 王廟学碑建立)、 河北隆化鴿子洞 (下限 1362 年)か ら 同組織出土

挿表 10. 錦の種類とその発展

上記の経綾地絵緯綾とじ裏浮き錦の経糸の役割を一步進めて、地経と役割の異なる別絡みの経糸を配し、地経は地緯と組織し、別絡みは絵緯と組織するようになったものがランパ組織(MIK III 162・MIK III 6992・MIK III 6222)である。ランパ組織の織物のうち、花唐草金欄(MIK III 6222)は金糸が用いられている。元代において金糸が使用された織物は第3編で述べたように「納失失」と呼ばれている。

先に、第3編で「納失失」について検討したが、その語源はペルシア語 "nasj" に求

められる。その ”nasj” はチンギス=カンの西征のとき、1221年にビシュバリクへ連れてこられたヘラートの織工が織ったものであった。更に彼らの技術を継承する織工が中国本土に連れてこられ、納失失局で指導的立場に立ったものと思われる。おそらく、このとき、あるいは少し前からランパ組織の技術や彼ら独自の動物膜や皮をベースにした金糸が伝えられたと考えられる。

以上のように錦綾技術の発展において、西方からの斜文組織、平組織緯錦、綾組織緯錦の伝播とそれに伴う機の傳入、加えて機構の発達による両面綾組織緯錦や両面縐子組織緯錦の出現、さらにその後の金糸織物の伝播は中国における織物の技術的発展に大きな影響を与えたのである。

#### 第4節 綺と綾

新疆博物館の報告書によれば平地綾はすべて「綺」、綾地綾は「綾」とされている。本稿でも中国の出土品に関しては、中国の報告書に記載される通り「綺」「綾」と表現してきた。しかし、史料用語「綺」が平地綾であり、「綾」が綾地綾と認められたわけではない。「綺」・「綾」という言葉を本稿で記述する以上、史料用語「綺」と「綾」が地組織によって分けられるかどうかを明らかにしておかねばならない。以下に史料用語の「綺」・「綾」について検討を加えよう。

##### 1. 「綺」・「綾」に関する種々の見解

まず、史料用語としての「綺」がどのような組織か、今日までいろんな見解が出されている。以下に述べる「綺」と「綾」に関する技術用語の関係は本編第1章第3節第1項を参考にしていきたい。

先ず、綺は平地の綾で、綾は綾地の綾と地組織で分ける説は横張と武敏および若干の中国の研究者によって称えられている<sup>518</sup>。次に綺は平地浮文綾で、綾は綾文綾として文様の部分の糸の現れ方で分ける西村説があり<sup>519</sup>。その他、平地浮文綾を綺、その変化形、いわゆる漢式組織を綾とするルボ=レスニチェンコ説がある<sup>520</sup>。以上は組織によって分ける考え方であるが、趙豊は古代では平地綾を綺と呼び、唐代では平地綾も綾地綾も綾と呼ぶようになったと考える呼称の変化説があり、筆者は古代では平地綾や羅を綺とし、時代とともに呼称が変化するという考え方をした<sup>521</sup>。

綺は平地綾であるとする説の横張の根拠は、『六書故』の「織采為文曰錦，織素為文曰綺。」の素を平組織と解釈したところにある。武敏はアスターナ出土双龍の文様のあ

<sup>518</sup> 横張 1976, p. 61; 武 1962, p. 68; 1992, pp. 135-136.

<sup>519</sup> 西村 1973, pp. 148-149.

<sup>520</sup> Лубо-Лесниченко 1994, pp. 129-130.

<sup>521</sup> 坂本 1980, pp. 75-77; 許・趙 1991, pp. 77-78.

る平地綾の上に書かれた墨書銘(図 28)を「景雲元年折調紬(細)綾一疋 双流縣八月官主簿史渝」と読み、その「折調紬(細)綾一疋」をこのような平地綾の綺でもって「調の紬綾一疋に折す」という意味に取り、「綺」即ち平地綾が(趙豊の言うように)唐代の「綾」であったなら、どうして細綾に綾を折するだろうかと述べている。西村の説では、平地浮文綾は文様部分の糸の上がり方が不規則であるから綺で、規則的な平地綾文綾や綾地綾文綾が綾であると考えている。ルボ・レスニチェンコの説は、綺の文字の出現が綾の文字より早く、平地浮文綾の方がその変化形より早く現れるからとしている。

横張の素に対する解釈に対して、筆者は次のように考えている。素は『説文』「素白緻繒也」、『重修玉篇』「素白也」<sup>522</sup>、から白っぽい生の色を意味し、また、采に対応するから彩りではない生の色と考える。そこで、「采を織りて文と為すを錦と曰い、素を織りて文と為すを綺と曰う」と読み、「彩色した糸を織って文様とするのを錦と言って、染めていない糸を織って文様とするのを綺と言う」という解釈の方がふさわしいと思う。武敏の解釈に対して著者は「折調紬(細)綾一疋」を「調として代わりに納めた細綾一疋(匹)」の意ではないかと思う。

呼称の変化説を著者は 1980 年に発表した<sup>523</sup>が、それに新たな史料とそれらから得られる見解を加え、以下に検討しようと思う。

## 2. 「綺」・「綾」と組織

「綺」と「綾」が織物技術用語にいう平地浮文綾・その変化形・平地綾文綾・綾地綾文綾・綾地浮文綾に当たることは、以下に挙げる史料からすでに認められている。

綺の文字は戦国時代に『戦国策』齊策に現れる。しかし、平地綾(平地浮文綾)は殷代から存在している<sup>523</sup>。綺に関する史料は既に夏鼐が『六書故』・『説文解字』・『釈名』・『太平御覧』・『漢書』地理誌を挙げているが<sup>524</sup>、漢代の史料によると『説文解字』・『釈名』に次のようにある。

『説文解字』(中華書局 p.273)

綺文繒也， 从糸奇声。<sup>525</sup>

『釈名』卷 4， 釈綵帛 (欽定四庫全書 221-404)

綺敬也。其文敬邪， 不順經緯之縱横也， 有杯文， 形似杯也。有長命， 其綵色相間，

<sup>522</sup> 『説文解字』中華書局， p. 278. 『重修玉編』文淵閣四内庫全書經部 218， 小学 p. 224-218.

<sup>523</sup> Sylwan 1949, pp.18-19, p. 108.

<sup>524</sup> 夏 1963, p. 47.

<sup>525</sup> 書下し「綺は文繒なり。糸に从い， 奇の声。」訳「綺は文様のある絹織物である。糸につきそって， 奇の音である。」

皆横終幅，此之謂也。言長命者，服之使人命長，本造者之意也。有棋文者，方文如棋也。<sup>526</sup>

とあり、『六書故』の記述からも、綺とは単色で文様があり、その文様は斜めに表された文様である事がわかる。

綺が単色であることは、長沙馬王堆一号漢墓出土の竹簡上に表された副葬品リスト、つまり、遣策にも見られる<sup>527</sup>。

- 簡 251 …帷…青綺令素裏掾  
…幔幕…青い綺の乳がつく。裏と幅広い縁飾りは白い平織の絹である。
- 簡 265 縹綺鍼衣一赤掾  
黄緑色の綺の針さし一点。赤の幅広い縁飾りつき。
- 簡 266 沙綺紵一両素掾千金條飾。  
羅綺の手袋が一点。白の平織の絹で幅広い縁飾りをつけ、千金の文様のリボンの飾りがつく。
- 簡 267 縹綺紵一両素掾千金條飾。  
黄緑色の綺の手袋が一点。白の平織の絹で幅広い縁飾りをつけ、千金の文様のリボンがつく。
- 簡 270 紺綺信期繡袞囊一素掾  
紺色の綺に信期繡を施した香袋が一点。白い平織の絹の幅広い縁飾りがつく。
- 簡 272 紅綺袞囊一素掾。  
紅色の綺の香袋が一点。白い平織の絹の幅広い縁飾りがつく。

この様に簡 266 を除き青・黄緑・紺・紅と記されるように綺が単色であることが、墨書からわかる。単に文字だけでなく、竹簡との対照によって遺存した資料から証明され

<sup>526</sup> 本造意之意を本造者之意としたのは太平御覽卷 816 布帛 3 による。

書下し「綺は敬なり。其の文は敬邪にして、経緯の縦横に順わざるなり。杯文有りて、形は杯に似るなり。長命有りて、其の綵色は相間り、皆横に幅を終わるは、此の謂なり。長命と言うは、之を服せば人をして命長らえしむ、造者の意に本づくなり。棋文の者有りて、方文は棋の如きなり」；訳「綺は敬(傾く)という意味である。其の文様は傾いて斜めであって、経糸と緯糸の縦横の方向通りになっていないのである。杯文というのがあって、文様の形は耳杯に似ている。長命というものがあって、其の(光線による)いろどりは相まじわり、皆織幅いっぱいになっているのは、これのことである。長命というものがあって、之を着れば人の命を長らへさせるとの意味で、造る者の意図するところである。棋文のものがあって、その方形の文は棋盤の様である」

<sup>527</sup> 『長沙馬王堆』上 1976, pp. 204-206; 下 pp. 286-287.

るのである<sup>528</sup>。

簡 266 に当たる出土資料は、千金の文様のリボンが付く手袋である。手袋は遺物番号 443-2, 443-3, 443-4 の三点で、平織である 443-4 を除くと、残りの二点は指、手首が平織で掌が綺とされる<sup>529</sup>。千金の文様のリボンが付く手袋を図版でみると、掌の組織は羅である<sup>530</sup>。つまり、沙綺の手袋は羅の手袋であり、漢代では羅を沙綺（軽い綺）<sup>531</sup>と呼んだ事がわかるのである。ちなみに、『楚辞』招魂の王逸注には「羅綺属也」<sup>532</sup>、『玉篇』卷二十八、帛部の錦は「錦綺也」とあり、綺は平地綾（平地浮文綾・平地綾文綾）とともに多様な絹織物を包含していたと理解される。

綾について史料には『説文』・『釈名』に次のように解説される。

『説文解字』（中華書局，p. 273）

綾，東齊謂布帛之細者曰綾。<sup>533</sup>

とあるように、後漢には東齊地方で細い糸で糸密度の高いものを綾と云った。

『釈名』卷 4，釈綵帛には

綾凌也，其文望之如氷凌之理也。<sup>534</sup>

とあり、綾は光沢のある斜めの文様があるものとされた。

三国魏の張揖の『埤蒼』に、

『一切経音義』卷 66（大正新修大蔵経，卷 54, p745）

綾似綺而細也。<sup>535</sup>

とあり、綾は綺に似ているが、細い糸で糸密度の高い高級品であるとされた。綾地綾がまだ出現していない唐代以前に綾という文字が現れている。平地綾あるいは無文綾を指したのではないだろうか。上に述べてきたことを合わせて考えると綺を平地と綾地の区別によって組織だけで規定するのは正しくないことがわかる。

<sup>528</sup> 『長沙馬王堆』下 1976，図版 105・106。

<sup>529</sup> 『長沙馬王堆』上 1976, pp. 96-97。

<sup>530</sup> 『長沙馬王堆』下 1976，図版 103-106。

<sup>531</sup> 『長沙馬王堆』上 1976, p. 205。

<sup>532</sup> 『長沙馬王堆』上 1976, p. 88。

<sup>533</sup> 書下し「『綾，東齊は布帛の細かき者を謂いて曰く綾』と」；訳「東齊（山東省東部）では織物の糸が細く上等のものを綾といった」

<sup>534</sup> 書下し「綾は凌なりて，其の文は之を望むに氷凌之理の如きなり」；訳「綾は氷という意味であって，その文様を見ると氷に入った筋のようである」

<sup>535</sup> 書下し「綾は綺に似れども細かきなり」；訳「綾は綺に似ているが綺より糸が細く上等である」

次に唐代になると『漢書』地理志の顔師古注には次のように述べられる。

『漢書』卷 28 下，地理誌第 8 下（中華書局標点本，p. 1660）

綺即今之所謂細綾。<sup>536</sup>

とあり，唐代においては，綺は細綾と云われるようになる。この細綾という文字が表されている実物資料がある。それは既に第 2 編で触れ，また「綺」と「綾」に対する諸説を紹介したときにも触れたのであるが，アスターナ出土の双龍文を表した絹織物断片の上に墨書があり，「景雲元年折調紬（細）綾一疋 双流縣八月官主簿史渝」とある。武敏が「折調細綾一疋」を「調の紬綾に折したる一疋」とした部分を，先に述べたように，筆者は「調として代わりに納めた細綾一疋（匹）」の意としたい。景雲元年は 710 年あたり，双流縣は成都に近く益州にある。

『大唐六典』に租調の定めが記されている。

『大唐六典』卷 3，（広池本，p. 35）

課戸每丁租粟二石。其調随郷土所産，綾絹繩各二丈，布加五分之一。輸綾絹繩者，綿三兩，輸布者麻三斤，皆書印焉。<sup>537</sup>

とあり，調は郷土の特産品によって綾・絹・繩いずれか二丈を折し，布の場合は二丈にその五分之一を加え，綾・絹・繩を送る者は綿三兩，布を送る者は麻三斤を納め，皆これに印を記すようにとしている。

ところで，特産品である貢を『六典』について見ると劍南道の貢には綾を含んでいる。従って，調として折するべき郷土の特産品，細綾で以て代わりに納めることを明記したのであろう。細綾を細綾と読むのは，顔師古注の「綺即今之所謂細綾」に細綾が在証されることと『大唐六典』の明刊本では細綾となっているが，原本に近い宋本では細綾とあるからである<sup>538</sup>。

『大唐六典』に記載されたものは開元七年（719）の令によったものであるが，この部分は武徳二年（619）の制に準じているので，景雲元年（710）にも適用する事が出来る。「皆書印焉」の部分は開元七年に加えられたものである<sup>539</sup>。

庸調布は織物の端近くに墨書があつて，資料そのものの名称を記している。問題としている絹織物断片は文様のあり方から織物の端に近いとみなされ，調として代わりに納められた細綾の墨書の部分だけが切り取られたものと思われる。従ってこの断片は細綾

<sup>536</sup> 書下し「綺は即ち今の謂う所の細綾なり」；訳「綺は今で謂う細綾に当たる」

<sup>537</sup> 書下し「課戸の毎丁の租は粟二石。其の調は郷土の産する所に随ひ，綾絹繩各二丈，布は五分之一を加ふ。綾絹繩を輸す者は，綿三兩，布を輸す者は，麻三斤，皆印を書す」

<sup>538</sup> 『大唐六典』 1991, p. 57, 欄外の校記による。

そのものと考えてよいであろう。

この断片、即ち細綾をウルムチの新疆博物館で実際に観察したところ、報告されているとおり平地綾文綾であることを確認した。唐代では、平地綾文綾も綺ではなく細綾と云ったことがこれによってわかるのである。

### 3. 「綺」と「綾」の関係

『大唐六典』や『新唐書』には織物の単位が示されている。

『新唐書』卷 48, 志 38, 百官 3 (中華書局標点本, p.1271)

錦・羅・紗・縠・紬・緇・綾・絹・布, 皆廣尺有八寸, 四丈為匹. 布則五丈為端,  
…<sup>540</sup>

とあり、公文書から綺の字が消えている。当時の生産は綾が主であったに違いない。唐代の少府監の管轄する工匠のうち綾を織る工匠は全体の 54%以上であった<sup>541</sup>。そのうえ、唐代の貢は圧倒的に綾が多いということが佐藤の『大唐六典』・『元和郡縣図志』・『通典』・『新唐書』から採録した表によってよくわかる<sup>542</sup>。しかし、綺が生産されなくなった訳ではない。織染署の織紵の作る織物に十種類あって、その中に綾も綺も記載されている<sup>543</sup>。

『一切経音義』に唐代の綺について述べた箇所がある。

『一切経音義』卷 1 (『大正新修大蔵経』卷 54, p. 314)

范子計然云、綺出齊郡。案用二色綵絲, 織成文華; 次於錦, 厚於綾。

『一切経音義』卷 4 (『大正新修大蔵経』卷 54, p. 329)

范子計然云、綺出齊郡, 今出吳越。<sup>544</sup>

---

<sup>539</sup> 仁井田 1933, pp. 661-666.

<sup>540</sup> 書下し「錦・羅・紗・縠・紬・緇・綾・絹・布は、皆廣は尺と八寸有りて、四丈をもって匹と為す。布は則ち五丈をもって端と為す、…」; 訳「錦・羅・紗・縠・紬・緇・綾・絹・布は、皆、幅は一尺八寸、長さは四丈を一匹とする。布は長さ、五丈を一端とする …」。

<sup>541</sup> 尚 2004, pp. 462-463.

<sup>542</sup> 佐藤 1978, pp. 311-320.

<sup>543</sup> 『大唐六典』卷 22 (広池本, p. 20) 1991, p. 410.

<sup>544</sup> 書下し「范子計然云く、『綺は齊郡に出ず。案ずるに二色の綵絲を用い文華を織成す; 錦に次ぎ、綾より厚し』と; 訳「范子計然がいうには『綺は齊郡に産する。思うに二色の色糸を用いて文様を表す。綺は錦の次ぎに厚く、綾より厚い。』ということである」。書下し「范子計然云く、『綺は齊郡に出ずるも、今は吳越に出ず』と; 訳「范子計然がいうには『綺は山東に産するが、今は江東に産する』ということである」。

とある。上記史料によれば、唐代になると経緯別の色で二色にして文様を織り出した綺が織り出され、それは錦の次に厚く、綾より厚いものであった。なお、以前は齊郡（山東省）の産物であった綺が呉越地方で生産されるようになったのである。実際、「二色綺」が在証され<sup>545</sup>、経緯別色の出土資料をみると表裏が色違いになっている<sup>546</sup>。

綺が意味した内容が時代と共に変化し、漢代に「綺」に含まれていた平地綾は、東齊（山東省東部）では、そのうちの糸が細くて糸密度の高いものは「綾」と呼ばれた。唐代になると、その「綾」と呼ばれる絹織物が全盛となり平地綾も綾地綾も「綾」に含まれるようになった。唐代と同時期の法隆寺、正倉院では『東大寺献物帳』<sup>547</sup>の記録と宝物とを対照した結果として、平地綾も綾地綾も「綾」一語で表されている。

一方、二色で綾より厚い絹織物が生産され、それは「綺」と呼ばれた。綺と綾の相違は地組織の違いではなくて、糸の太さや細さによって、その結果として織物の厚み如何によって区別されたのであろう。綾は無文綾のほか<sup>548</sup>、文様のある場合はその糸の細さによって、文様表現の繊細なもの、それに対して綺は糸の太さによって文様の粗いものを指したのであろう。

このように史料を検討してみると、幾人かの研究者の「綺」は平地綾であり、「綾」は綾地綾であるとする見解は史料から導くことが出来ない。第1・2編では中国の報告に従って「綺」・「綾」と記述してきたが、本稿に使用される「綺」・「綾」は史料用語としてではなく、「綺」は平地綾、「綾」は綾地綾を示す現代用語として取り扱っている。

## 第2章 トゥルファン出土染織資料に見る文様史

### 第1節 4-8世紀出土資料の文様における東西交流と発展

4-8世紀出土資料は主にカラホージャ・アスターナから出土している。その他ドイツ調査隊によって高昌故城・トヨクからも発見されている。それらのうち主要な錦と綺を文様のタイプによってグループAからFに分け、更にグループによってa・b・cと細分した。それらの錦綾を中心に各グループの特徴を述べグループの年代を探ることとする。

以下に取り扱う用語には組織を示す場合と織物を示す場合の両方の意味を持つものがある。この章では織物を指している。

#### A 漢代文様を残す錦

---

<sup>545</sup> 『唐大詔令集』1959, p. 563. 「…天下更不得…織成帖縹・二色綺綾羅…」書下し「…天下は更に…帖縹・二色綺綾羅…織成するを得ず」訳「…天下は更に…帳の組紐・二色の綺綾羅を織ってはいけない」

<sup>546</sup> Sakamoto 2004b, p. 21.

<sup>547</sup> 『東大寺献物帳』とは聖武天皇のご遺愛品や薬物を東大寺盧舎那仏に献納された品物の目録。

<sup>548</sup> 尚 2004, p. 462, 唐代に「無紋綾」の存在を指摘している。

a 平組織経錦：

- 藏青地禽獸文錦 (TAM177:48(1)) (図 41) 455 年墓誌伴出  
夔文錦 (TAM88:2)<sup>549</sup> 567 年墓誌, 衣物疏伴出

b 平組織緯錦：

- 動物雲気文錦 (怪獸文錦) (ast. vi. 1.03) (図 1) 364 年木版伴出  
倣獅文錦 TAM313:12, (図 19) 548 年衣物疏, 598 年文書伴出

B 過渡期の文様の綺・錦

綺：

- 天青色幡文綺 (TAM170:20)<sup>550</sup> 543・548 衣物疏, 562 年墓表, 衣物疏伴出  
対鳥対獸文綺 (TAM303:1)<sup>551</sup> 551 年墓表伴出  
盤条「貴」字団花綺 (TAM48:14) (図 42) 596・604・617 年衣物疏伴出  
連珠套環綺 (TAM99:1)<sup>552</sup> 631 年文書伴出

錦 (平組織経錦)：

- 対鳥「吉」字文錦 (TAM31:15)<sup>553</sup> 620 年衣物疏伴出  
藍地对鶏対羊灯樹文錦 (TAM151:21) (図 43) 620 年墓誌, 衣物疏, 644 年文書  
伴出

C 西方到来錦

連珠円内動植物単独文様の綾組織緯錦 (主に動物単独文様)

a 正円連珠環に文様が囲まれる錦：

- 猪頭連珠円文錦 (ast. i.5.03) (図 3) 模造ユスティニアヌス(527-565)金貨伴出  
猪頭連珠円文錦 (ast. i.6.01)<sup>554</sup>  
連珠花卉文錦 (ast.i.1.01)<sup>555</sup>  
側花連珠円文錦 (ast. ix.2.01)<sup>556</sup> 706 年庸調布伴出  
連珠馬文錦 (TKM303)<sup>557</sup>  
天馬文錦 ムルトウク出土<sup>558</sup>

b 非正円連珠環に文様が囲まれる錦：

<sup>549</sup> 『シルクロード学研究』 8, 2000, PL. 58.

<sup>550</sup> 『シルクロード学研究』 8, 2000, PL. 104.

<sup>551</sup> 『シルクロード学研究』 8, 2000, PL. 105.

<sup>552</sup> 『絲綢之路』 1972, 図版 47.

<sup>553</sup> 『シルクロード学研究』 8, 2000, PL. 99

<sup>554</sup> 『染織の美』 30, 1984, 図 26.

<sup>555</sup> Stein 1928, PL. LXXX.

<sup>556</sup> Stein 1928, PL. LXXIX

<sup>557</sup> 『吐魯番博物館』 1992, PL. 141.

<sup>558</sup> 『西域考古図譜』 1972, 染織と刺繡 [2].

連珠戴勝鸞鳥文錦 (TAM138:17) <sup>559</sup>	636 年文書伴出
大連珠立鳥文錦 (TAM42) (図 9)	651 年墓誌伴出
鸞鳥文錦 TAM (332:17) <sup>560</sup>	665 年文書伴出
鳥連珠円文錦 (ast. vii. 1.01) <sup>561</sup>	
連珠鳥文錦 TAM ? <sup>562</sup>	
連珠鹿文錦 (TAM55:18) <sup>563</sup>	
鹿文錦 (TAM84:5) <sup>564</sup>	574 年文書伴出
大鹿文錦 (TAM337:13) <sup>565</sup>	
大鹿文錦 (TAM322:30) <sup>566</sup>	
大連珠鹿文錦 (TAM332:5) (図 10)	665 年文書伴出
鹿文錦 (ast. v.1.01) <sup>567</sup>	
大連珠戴勝鹿文錦 (TKM71:18) <sup>568</sup>	
連珠猪頭文錦 (TAM138:9/2-1) (図 11)	636 年文書伴出
猪頭文錦 (TAM325:1) (図 12)	663 年文書伴出
猪頭文錦 (TAM5:1) <sup>569</sup>	668 年文書伴出

#### D 西方錦の影響の下に生み出された中国錦

##### 1 連珠円内対称文様の平組織経錦と綾組織経錦 (主に動物対称文様)

##### a 小連珠円 (5cm 前後の大きさ) の錦 (綾組織経錦) :

連珠対鵲文錦 (TAM206:48/1) (図 23)	689 年墓誌伴出
小連珠団花錦 (TAM211:9) <sup>570</sup>	633 年墓誌伴出
連珠対鴨文錦 (TAM363:2) <sup>571</sup>	710 年文書伴出
鳥獸団花錦 (TAM206) <sup>572</sup> (立涌文内)	689 年墓誌伴出

大紅地団花錦 (TAM104) <sup>573</sup>

<sup>559</sup> 『シルクロード学研究』 8, 2000, PL. 42.

<sup>560</sup> 『新疆出土文物』 1975, 図版 141.

<sup>561</sup> 山辺 1979, 図版 43.

<sup>562</sup> 『吐魯番博物館』 1992, PL. 193.

<sup>563</sup> 『シルクロード学研究』 8, 2000, PL. 47.

<sup>564</sup> 『絲綢之路』 1972, 図版 33.

<sup>565</sup> 『文物』 1962, 図 17.

<sup>566</sup> 『文物』 1962, 図 3.

<sup>567</sup> 山辺 1979, 図版 48.

<sup>568</sup> 『文物』 1978, 図 29.

<sup>569</sup> 『吐魯番博物館』 1992, PL. 191.

<sup>570</sup> 『シルクロード学研究』 8, 2000, PL. 69.

<sup>571</sup> 『吐魯番博物館』 1992, PL. 180.

<sup>572</sup> 『シルクロード学研究』 8, 2000, PL. 97.

朱地連璧鳥形文錦<sup>574</sup>

b 中連珠円の錦（10cm 前後の大きさ）の錦

1 小連珠（平組織経錦）：

- 対鳥対獣盤条錦（TAM303:12）<sup>575</sup> 551 衣物疏伴出  
「胡王」錦（TAM169:14）（図 44） 558 年墓誌，衣物疏，576 年衣物疏伴出  
対獅対象球文錦（TAM19:21）<sup>576</sup> 676 文書伴出  
盤条騎士狩獵文錦（TAM101:5）（渦巻き状連珠）（図 45）

2 中連珠（平組織経錦）：

- 朱紅地連珠孔雀文錦（TAM169:34）（図 24） 576 年衣物疏伴出  
連珠対孔雀「貴」字文錦（TAM48:6）（図 25） 617 年衣物疏伴出  
連珠対馬錦（TAM302:22）<sup>577</sup> 653 年墓誌伴出  
朱地連璧天馬文錦<sup>578</sup>  
対鳥対獅「同」字文錦（TAM92:37）<sup>579</sup> 668 年墓誌伴出  
中連珠（綾組織経錦）：  
紅地連珠対馬錦（TAM151:17）（図 26） 620 年墓誌，衣物疏，644 年文書伴出  
連珠対馬錦（TAM302:4）<sup>580</sup> 653 年墓誌伴出  
連珠対羊文錦（TAM206:48/2）<sup>581</sup> 689 年墓誌伴出  
白地連璧鬪羊文錦<sup>582</sup>

c 大連珠円の綺・錦（20cm 前後の大きさの連珠円）

綺：

- 黄色龍文綺（TAM221:12）（図 27） 653 年墓誌，678 年文書伴出  
黄色龍文綺片（TAM226:16）（図 28） 710 年銘

綾組織緯錦：

- 騎士文錦（TAM322:22/1）（図 29-a・b） 663 年墓誌伴出  
連珠天馬騎士文錦（TAM77:6）（図 30）  
騎士文錦（MIKⅢ6236）<sup>583</sup>

<sup>573</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 70.

<sup>574</sup> 『至宝』, 2002, 図 52.

<sup>575</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 27.

<sup>576</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 31.

<sup>577</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 36.

<sup>578</sup> 『至宝』2002, 図 51.

<sup>579</sup> 『絲綢之路』1972, 図 29.

<sup>580</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 37.

<sup>581</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 54.

<sup>582</sup> 『至宝』2002, 図 52.

<sup>583</sup> Sakamoto 2004b, p. 41.

- 対鴨文錦 (TAM92:4)<sup>584</sup> 668 年墓誌伴出  
 樹下対鹿連珠円文錦 (ast.i.3.a.01)<sup>585</sup> 常平五銖 (581-618 発行) 伴出  
 花樹対鹿文錦<sup>586</sup>
- E 中国で発達した花文の錦
- a 小花文の綾組織経錦：  
 海藍地宝相花文 (TAM188:29) (図 46) 715 年墓誌, 716 年文書伴出  
 紺地八弁花文錦<sup>587</sup>
- b 中花文の綾組織緯錦：  
 宝相花文織成錦 (TAM117:47)<sup>588</sup> 683 年墓誌伴出  
 宝相団花錦 (TAM214:114) (図 47) 665 年墓誌伴出  
 緑地団花錦 (TAM206)<sup>589</sup> 633 年埋葬記録, 689 年墓誌伴出
- c 大花文の綾組織緯錦：  
 紅地団花錦 (TAM230:6)<sup>590</sup> 702 年墓誌, 721 年文書伴出  
 深紅牡丹鳳文錦 (TAM381) (図 48) 778 年文書伴出
- F 段文の錦
- a 平組織経錦：  
 樹文錦 (TAM170:38) (図 16) 562 年墓表, 衣物疏伴出  
 鳥獸条文錦 (TAM306:10) (図 14) 541 年写紙伴出  
 鳥獸朶花条文錦 (TAM324:16)<sup>591</sup>
- b 平組織緯錦：  
 対羊文錦 (TAM170:66)<sup>592</sup> 562 年墓表, 衣物疏伴出  
 連珠小花錦 (TAM323:13/3) (図 31) 587 文書伴出  
 亀甲「王」字文錦 (TAM44:23) (図 18) 655 年墓誌伴出  
 大吉字文錦 TAM169:51<sup>593</sup> 576 年衣物疏伴出  
 連珠文錦 (1)・(2) (TAM507)<sup>594</sup>

<sup>584</sup> 『絲綢之路』1972, 図版 30.

<sup>585</sup> Stein 1928, PL. LXXIX

<sup>586</sup> 『西域考古図譜』1972, 染織と刺繍 [2].

<sup>587</sup> 『至宝』2002, 図 53.

<sup>588</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 60.

<sup>589</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 68.

<sup>590</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 63.

<sup>591</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 82.

<sup>592</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 77.

<sup>593</sup> 『新疆出土文物』1975, 図版 81.

<sup>594</sup> Wu 2006, p. 221, fig. 158.

c 綾組織緯錦：

幾何瑞花錦 (TAM331:5) <sup>595</sup>	619 年文書伴出
連珠対孔雀錦 (TKM48:1) <sup>596</sup>	650 年文書伴出
連珠対鳥文錦 (TAM134:1) (図 49)	662 年墓誌伴出
鴛鴦文錦 (TAM337:13/2) <sup>597</sup>	657 年墓誌伴出
双鳥文錦 (TAM322:29) <sup>598</sup>	663 年墓誌伴出
対鹿文錦 (TAM330:60) (図 50)	672 年墓誌, 674 年文書伴出

1. 漢文様から円文へ

グループAのアスターナ出土藏青地禽獣文錦(455年墓誌, 図41)は織物の経方向から見ると瑞獣が柱を中心に上下対称に表されていて, 一方は倒置した形で表される(倒置対称)。瑞獣が対称に表されるのは漢代の錦より戦国時代の文様表現に近いが, 江陵馬山一号楚墓の錦は各々の瑞獣の方向と経の方向が一致していて(正置対称)両者には違いがある。また, 藏青地禽獣文錦では柱に支えられたアーチ形の屋根の文様は敦煌出土龍文経錦(MAS926, ch.00118)に同様の文様が見いだせる<sup>599</sup>。藏青地禽獣文錦は5世紀前半のもので, トゥルファン文書にある「魏錦」と呼ばれる錦にあたると思われる<sup>600</sup>。

アスターナ出土動物雲気文錦(364年木板伴出, 図1)・夔文錦(567年墓誌・衣物疏伴出)・倣獅文錦(548衣物疏・598年文書伴出, 図19)は共に漢代の瑞獣と雲気のモチーフを文様のテーマとしている。しかし, 漢代の瑞獣と雲気が躍動感あふれるのに対し, 夔文錦は表現に硬さが見られ, そこには漢錦には見られなかった西方起源の四弁花文が四菱花文に姿を変えて挿入されている。漢代錦や夔文錦の瑞獣は織物の経方向に対して正方向に表されている(正置)。一方, 第2編第4章で触れたトゥルファン産の丘慈錦と同じ綿経綿緯の倣獅文錦に見られる瑞獣は織物の経方向に対して90度回転して表されている(横置)。その瑞獣はデフォルメされ, 雲気は単なる線と化している。この錦は上記の4世紀の動物雲気文錦(図1)を模倣したものと考えられる。また, 倣獅文錦にも四弁花がぎこちなく詰められているのは中国錦である夔文錦からの模倣であろう。このように漢錦の影響は形式的なものとなりながら6世紀まで続いたようである。

グループBにおける特徴は, まずアスターナ出土天青色幡文綺(543・548年衣物疏・562年墓表・衣物疏伴出)・対鳥対獣文綺(551年墓表伴出)・盤条「貴」字団花綺(617

<sup>595</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 88.

<sup>596</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 39.

<sup>597</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 85.

<sup>598</sup> 『シルクロード学研究』8, 2000, PL. 86.

<sup>599</sup> 『西域美術』3, 1984, 図37. 図37の解説では後漢時代とされているが, 織物の時代は下の横張 1986, p. 92.

<sup>600</sup> 横張 2000, p. 181.

年衣物疏伴出，図 42)・連珠套環綺 (631 年文書伴出) などの綺では，主文様が織物の経糸方向に対して 90 度回転した横向きに表され，織り方は上下対称である (横置対称)．対鳥対獣文綺は装飾のない円に囲まれ，盤条「貴」字団花綺の主文 (主要な文様) には「貴」の字が詰められ，それを囲む渦巻き (波頭) 文で飾られた楕円は交差している．

錦においても対鳥「吉」字文錦 (620 年衣物疏伴出)・藍地对鶏対羊灯樹文錦 (644 年文書伴出，図 43) の主文様は横向きであり，鳥や動物は横置対称に表される．これら錦は経錦であるが，漢錦の正置と違って，動物雲気文緯錦の文様配置を倣って横置である．

対鳥「吉」字文錦・藍地对鶏対羊灯樹文錦 (図 43) の羊・ぶどうの文様は西方的モチーフであり，全体の構図はアンティノエ出土のペルシア錦の樹下対牛文錦に類似している<sup>601</sup>．同文様の錦が東へ運ばれデザインの手本となったと思われる．対鳥「吉」字文錦には「吉」の字が詰め込まれ，藍地对鶏対羊灯樹文錦にも表されている樹木は，アンティノエ出土錦の果実の下がる樹木が灯樹となっている．灯樹は木頭溝 (ムルトウク) の 3 号洞に表されたように，当時から樹木に明かりを灯して新年を祝う習慣があった<sup>602</sup>．ペルシア錦の樹木は中国の灯樹と化したのである．このように西からの影響を受けながら，漢字を詰め込んだり，中国独自の解釈によって新しい文様が生まれたりした．

次に対鳥対獣文綺 (551 年墓表伴出) から 6 世紀中葉に丸い形の円文が現れたといえるが，第 2 編第 3 章で取り上げた朱紅地連珠孔雀文錦 (TAM169:34, 576 年衣物疏伴出，図 24) や 571 年に亡くなった徐顕秀の墓室壁画に表された連珠菩薩像錦<sup>603</sup>や連珠対獅対鳳文錦<sup>604</sup>などに見られるように，6 世紀中葉から既にペルシアの連珠円の影響を受けていた．

この連珠円のタイプはグループ D に入るが，連珠円が小・中の大きさで，そのうち小連珠を連ねた環内にラクダや象など中国に生息しない動物を詰め，倒置対称に表した錦「胡王」錦 (558 年墓表・衣物疏・576 年衣物疏伴出，図 44)，対獅対象球文錦 (676 年文書伴出) がある．また，対鳥対獣盤条錦 (551 年墓表伴出) は小連珠を連ねた環内に鳳凰，龍馬，牛を横置対称に詰め，盤条騎士狩獵文錦 (図 45) は渦巻き状連珠内に騎士，獅子，象，龍馬や日天を横置対称に填めている．これら錦は共に円の接合部に開花文を表していて，互いに共通するモチーフがある．対獅対象球文錦は 7 世紀の文書を伴っているが，その獅子は「胡王」錦の獅子とそっくりであり，6 世紀の文様を模倣している．これら四つの錦もまた西方の文様を模しながら，次に述べる 7 世紀の「連珠円内単独文錦」が到来する以前に影響を受けた過渡期のものと言えるだろう．

<sup>601</sup> Martiniani 1986, Cat. 16. 横張 1986, p. 98.

<sup>602</sup> 耿 1995, p. 60.

<sup>603</sup> 『徐顕秀墓』2005, p. 10 (墓誌), p. 38, p. 40, p. 41, p. 50, (PLs. 23・25・26・34・35).

<sup>604</sup> 『徐顕秀墓』2005, pp. 33, PL. 19.

## 2. 西方錦の到来

グループCの文様は第2編第2章第1節で述べたように正円連珠環と非正円連珠環のペルシア錦・ソグド錦で構成され、それら錦は6世紀末から7世紀に到来したものである。主文は猪頭・天馬・鹿・含綬鳥が連珠円内に単独で表され、そのうち鹿の文様はソグド錦にのみ見られる。ソグド錦に鹿文様が多いのは、鹿の文様が突厥碑文に付帯する動物の一つであるように<sup>605</sup>、突厥の可汗の愛好する動物であり、ソグドにおいて突厥との友好関係から突厥の支配へ移っていったことなどがソグド工匠に影響を与えたものと思われる。副文はペルシア錦では余り残っていないが側花連珠円文錦 (ast. ix.2.01) には上下左右対称の八稜花文が見られ、ソグド錦ではモシチェヴァヤ=バルカ出土資料に上下左右対称の副文も存在するが、トゥルフアン出土錦では左右対称に植物が表される。トゥルフアン出土錦では連珠円の接合部は小連珠円内に二重円・小円などが表され、連珠円が接合しない錦は主として正円連珠環の錦であるが、上記側花連珠円文錦・連珠馬文錦 (TKM303)・ムルトウク出土の天馬文錦の連珠環の上下左右に回文が表されている。

非正円連珠環の連珠はいびつであったり六角形を呈したりする (図9・10・11・12)。その連珠環に囲まれる主文の動物は輪郭が曲線でなく、階段状に表されることが多い。従って、非写実的でぎこちなさが感じられる。

グループCのカラホージャ・アスターナ出土染織資料は8世紀までに到来したものであった。一方、ドイツ隊発掘のトゥルフアン出土染織資料は幅広い年代に亘り、そのなかに8世紀頃ソグドで織り出され、トゥルフアンに到来した錦がある。この錦は上記の連珠円とは異なる文様構成で主文が並列している。この錦については次の第2節で取り上げることにする。

## 3. 西方錦の影響による中国錦とその発展

グループDの特徴は第2編第3章で述べたように、カラホージャ・アスターナ出土錦で構成されるグループCなどの到来によって、ペルシア・ソグドの文様が模倣され、技術上の問題から連珠円内に動物が対称に表されたものである。それらの文様の連珠円は小連珠円・中連珠円・大連珠円に分けられる。副文は左右対称の動物文様や上下左右対称の四つ葉花文となり連珠円の大きさに応じて花文は大きく複雑になっていった。

盤条騎士狩獵文錦 (図45) は都蘭からも出土していて連珠天馬文錦と縫い合わされている<sup>606</sup>。連珠天馬文錦から推定すると6世紀後半から7世紀前半の製作と見られる。都蘭の盤条騎士狩獵文錦には太陽神ヘリオス<sup>607</sup>、またはリグ・ベータにみえる月神スーリヤが表されている。スーリヤは仏教に取り入れられ日天となったもので、単に文様の

<sup>605</sup> Klyashtorny 2006, p. 221.

<sup>606</sup> 趙 1999, pp. 302-303.

<sup>607</sup> 趙 1995, pp. 182-183.

模倣だけでなく、この錦には仏教の影響が見られるのである。

また、史料によればペルシア・ソグド錦の影響を受けた連珠動物対称文錦が中国において一世を風靡したようである。史料には、

『唐会要』卷 35, 輿服下, 異文袍, (中華書局標点本, p. 582)<sup>608</sup>

延載元年五月二十二日, 出繡袍以賜文武官三品已上. 其袍文仍各有訓戒. 諸王則飾以盤龍及鹿, 宰相飾以鳳池, 尚書飾以対雁, 左右衛將軍飾以対麒麟, 左右武衛飾以対虎, 左右鷹揚衛飾以対鷹, 左右千牛衛飾以対牛, 左右豹韜衛飾以対豹, 左右玉鈴衛飾以対鶻, 左右監門衛飾以対獅子, 左右金吾衛飾以対豸.

と述べられ、それら動物対称文様のペルシヤ風錦は官位、職務を表示するまでになった。

更に中国で織られた「大瑞錦」は内庫に納められていた。それについては「咸亨二年, 栄国夫人卒. 則天出内大瑞錦, 令敏之造仏像追福. … (後略)」『旧唐書』卷 183, 列伝 133, 外戚 (中華書局標点本, p. 4728)<sup>609</sup>とある。ペルシア・ソグド風狩獵文の錦は対称文様で幅が広く大文様である。第 2 編で述べた天馬文錦など対称文様の「瑞錦」に対して、狩獵文錦、とりわけ法隆寺所蔵の四騎獅子狩文錦はまさにこの「大瑞錦」にあたるだろう。

#### 4. 副文の独立と花文錦

動物対称文様が異国風としてもはやされる一方で、今まで連珠動物対称文の副文として表されていた四つ葉花文が独立して花文様の錦として現れるようになる。それがグループ E の海藍地宝相花文 (715 年墓誌・716 年文書伴出, 図 46) および同文様である大谷探検隊収集の紺地八弁花文錦である。上記の錦は四つ葉花文と八弁花文が交互に表されている。その他に宝相花文織成錦 (683 年墓誌伴出) も同様の八弁花文の文様であ

<sup>608</sup> 書下し「延載元年五月二十二日, 繡袍を出し以て文武官三品已上に賜う. 其の袍文には仍各々訓戒有り. 諸王なれば則ち盤龍及鹿を以て飾り, 宰相は鳳池を以て飾り, 尚書は対雁を以て飾り, 左右衛將軍は対麒麟を以て飾り, 左右武衛は対虎を以て飾り, 左右鷹揚衛は対鷹を以て飾り, 左右千牛衛は対牛を以て飾り, 左右豹韜衛は対豹を以て飾り, 左右玉鈴衛は対鶻を以て飾り, 左右監門衛は対獅子を以て飾り, 左右金吾衛は対豸を以て飾ると.」; 訳「延載元年五月二十二日, 刺繡を施した上着を内庫から出して文武官三品以上に与えられる. その上着の文様にはなおそれぞれに戒めがあった. つまり, 諸王は絡み合う龍及鹿の文様で飾り, 宰相は鳳池の文様で飾り, 尚書は対向する雁の文様で飾り, 左右衛將軍は対向する麒麟の文様で飾り, 左右武衛は対向する虎の文様で飾り, 左右鷹揚衛は対向する鷹の文様で飾り, 左右千牛衛は対向する牛の文様で飾り, 左右豹韜衛は対向する豹の文様で飾り, 左右玉鈴衛は対向する鶻の文様で飾り, 左右監門衛は対向する獅子の文様で飾り, 左右金吾衛は対向する豸の文様で飾るようにと.」

<sup>609</sup> 書下し「咸亨二年, 栄国夫人卒す. 則天は内より大瑞錦を出し, 敏之をして仏像を造り追福せしむ, …」; 訳「咸亨二年(671), 栄国夫人がなくなる. 武后は内庫より大瑞錦を出し, 敏之に命じて仏像を造らせ, 追善供養の仏事を行わせた. …」

る。

花文様が大きくなるに従って、花卉は次第に細分化され、繊細に装飾されている。宝相団花錦（665年墓誌伴出、図47）や緑地団花錦（689年墓誌伴出）がその例である。紅地団花錦（702年墓誌、721年文書伴出）は例外で花文様は大きくても一色で宝相花が表されている。花文の錦は手の込んだ繊細な装飾で表現されるものと、織り易いシンプルな表現のものとの二種類に分かれている。

やがて深紅牡丹鳳文錦（778年文書伴出、図48）のような牡丹に鳳凰の飛び交う華やかな描写となり、花鳥風物文様の先駆けとなる。なお、この錦は小花文様の豎の縁飾り「豎欄」が付き、そこには今まで主流であった開花文に側面花も加わって来る。

グループEの特徴は、7世紀後半から8世紀にかけて織り出され、花文は宝相花が中心となり、やがて宝相花のバリエーションを展開しながら花鳥風月の文様へと移っていく。それは自然を対象とする文様の幕開けである。

9世紀になると動物文様や華美な大文様は姿を消し自然を対象とした中国独自の文様の牡丹・花卉文様へ移っていく。そこには次のような禁令が関係していると思われる。

宋敏求（編）『唐大詔令集』卷108、禁奢侈服用勅、（商務印書館、p.563）<sup>610</sup>

勅…天下更不得…造作錦繡珠繩、織成帖縹二色綺綾羅、作龍鳳禽獸等異文字、及豎欄錦文者。違者決一百、受雇工匠、降一等科之。兩京及諸州旧有官織錦坊、悉停。開元二年七月

開元二年（714年）に奢侈な事物を禁ずる勅が出されたが、依然として龍鳳や禽獣の文様は織り続けられたらしい。やがて755年から763年に亘る安史の乱で国は疲弊し、華美な文様の錦・綾より馬価絹として回賜するに必要な縑帛を織ることが求められたのであろう<sup>611</sup>。

宋敏求（編）『唐大詔令集』卷109、禁大花綾錦等勅、（商務印書館 p.566）<sup>612</sup>

<sup>610</sup> 書下し「天下に勅す…錦繡珠繩を造作し、帖縹・二色綺綾羅を織成し、龍鳳禽獸等異文字及び豎欄錦文を更に作ることを得ず。違える者は一百と決し、雇を受けし工匠は一等を降して之を科す。兩京及び諸州に旧の官織錦坊有るは、悉く停む」；訳「天下に勅す…錦繡や珠繩を造作し、帳の組紐や二色の綺綾羅を織り、龍鳳禽獸等の文様、異国の文字及び豎の縁飾りの錦文を決して作ってはいけない。違反する者は杖一百と決め、雇用された工匠は罪を一等下げこれを科すこととする。兩京及び諸州にもとの官官織錦坊があるのは、すべて稼働を停止する。」

<sup>611</sup> 「歳送馬十萬匹、酬以縑帛百餘萬匹。」（『新唐書』卷51 中華書局標点本 p.1348）書下し「歳ごとに馬十萬匹を送り、酬いるに縑帛百餘萬匹をもってす。」；訳「（ウイグルは）毎年馬十萬匹を送ってきたので、（代宗は）お返しとして縑帛百餘萬匹を与えた。」に見られるように馬価絹は膨大な量に上った。

<sup>612</sup> 書下し「勅す…（中略）…外に在りて織造する所の大張錦・軟瑞錦・透背及大縑錦・竭鑿六破以上の錦・獨窠文綾・四尺幅及獨窠吳綾・獨窠司馬綾等を、みな宜しく禁断すべし。其の長行の高麗白錦・雑色錦・及び常行の小文字綾錦等、旧例に依りて造るに任ず。其の綾錦の花

勅 … (中略) … 在外所織造大張錦・軟瑞錦・透背及大綱錦・竭鑿六破已上錦・獨窠文綾・四尺幅及獨窠吳綾・獨窠司馬綾等，並宜禁斷。其長行高麗白錦・雜色錦・及常行小文字綾錦等，任依旧例造。其綾錦花文，所織盤龍・對鳳・麒麟・獅子・天馬・辟邪・孔雀・仙鶴・芝草・万字・双勝・及諸織造差様文字等，亦宜禁斷… (後略)。大曆六年四月

大曆6年(771年)の華美文様の禁止令によって、漸く幅一杯の円文やそこに詰められた動物文様は姿を消した。

## 5. 段文錦のいろいろ

グループFの特徴は文様が横方向に繰り返され、段状になったもので a. 西方文様の影響を受けた平組織経錦，b. 西方伝来技術の平組織緯錦に漢字と西方文様が表されたもの，c. 西方文様であるハート型四弁花文と動物文様(猪，鹿，鳥など)に細分される。それらは西と東の特徴を混合したグループとすることが出来る。

まず，aの錦には樹文錦(562年墓表・衣物疏伴出，図16)・鳥獸条文錦(541写紙伴出，図14)・鳥獸朶花条文錦(628年墓誌伴出)があり，樹文錦には西方に多いスペード型樹木が表され，鳥獸条文錦にはオリエントに始まりシベリアでも見出される人面鳥獸が中国の龍馬や鳳凰と共に表されている<sup>613</sup>。鳥獸朶花条文錦には連珠開花文が鳳凰と共に表されている。これらの錦は西方文様を取り入れながら中国の文様と組み合わせ，中国伝統の経錦で織られたもので，6世紀から7世紀初めに属している。

bの錦は對羊文錦(562年墓表・衣物疏伴出)・連珠小花錦(587年文書伴出，図31)・龜甲「王」字文錦(655年墓誌伴出，図18)・大「吉」字文錦(576年衣物疏伴出)・連珠文錦であり，對羊文錦・連珠小花錦・連珠文錦は西方文様の連珠・羊・ハート型四弁花文が表され，龜甲「王」字文錦・大「吉」字文錦は「王」や「吉」の字が詰め込まれる。これらの錦には西方伝来技術の緯錦や西方文様と漢字の東西の混合が見られる。6世紀後半から7世紀前半のものである。

cの錦は主にハート型四弁花文と動物文様が段に表された錦で連珠對孔雀錦(650年文書伴出)・連珠對鳥文錦(662年墓誌伴出，図49)・鴛鴦文錦(657年墓誌伴出)・双鳥文錦(663年墓誌伴出)・對鹿文錦(672年墓誌・674年文書伴出，図50)・幾何瑞花

---

文の，織る所の盤龍・對鳳・麒麟・獅子・天馬・辟邪・孔雀・仙鶴・芝草・万字・双勝・及び諸の織造せる差様文字は，亦宜しく禁斷すべし… (後略)；訳「勅す … (中略) … 官營外にあって織っている幅の広い錦・軟かい瑞錦・透背及び大きい暈綱錦・竭鑿六破以上の錦・一幅に丸文様一つの綾・四尺幅及び一幅丸文様一つの吳綾・一幅丸文様一つの司馬綾等を織ること，すべて禁じよ。其の長い丈の高麗白錦・雜色錦，及び通常の丈の小文字綾錦等は，以前の例によって造るのはよい。其の綾錦の花文の，織られている盤龍・對鳳・麒麟・獅子・天馬・辟邪・孔雀・仙鶴・芝草・万字・双勝及び織っているいろいろの違った文字は，亦、禁ぜよ… (後略)」

<sup>613</sup> 坂本 2000a, pp. 118-119. 虞弘墓の棺槨にも人首鳥身が表されているのは同じ流れである。

錦（619年文書伴出）である。これらの錦では中国の四つ葉花文が中央に開花、その四方に葉を伴う様子と異なりハート型の四つの花卉による開花文を表す。このハート型四弁花文はドラ=エウロポスの織物に既に表され、ターク=イ=ブスターンのレリーフにも衣装の文様として表されている<sup>614</sup>。その他モシチェヴァヤ=バルカ出土錦のシムルグ文を囲む連珠環の接合部にも見られる（図4）。このような四弁花文と動物の組み合わせは全く西方的であり、さらに西方伝来技術の綾組織緯錦である。西方伝来錦として挙げた連珠猪頭文錦（TAM138:9/2-1, 636年文書伴出）はまさにハート型四弁花文と猪頭文が段に表された錦で、このデザインがFのcグループを生み出したものと思われる。

すべて7世紀のもので、Cグループとよく似た条件を備えているが、動物は対称に表される。到来したペルシア錦・ソグド錦の影響と同時代の中国の対称文様に影響を受けたものと思われる。ペルシア・ソグド錦とも典型的な中国錦とも異なるところから中国北西部・タリム盆地での製作の可能性も否定できない。

以上の各グループの文様を見てくると4世紀から8世紀に至る文様の歴史が浮かび上がる。文様の変化は西からの影響、つまり、文様と織機を伴う織り技術の伝播と無関係ではない。まず、4世紀後半に経方向に瑞獣の方向が一致する（正置）漢錦の流れを汲みながら、瑞獣が90度回転して表される（横置）錦が出現した。この文様の配置は漢代経錦から緯錦への移行と無関係ではない。勿論、漢錦風文様の経錦も緯錦も6世紀まで織り続けられる。

それと同時に西から到来した円文の影響を受けて、6世紀中葉から主文が円や楕円に囲まれて現れる。また、西方錦のデザインを真似た錦も現れる。それらの文様は経錦で横置対称として表現されている。西方のモチーフと中国の伝統的文様の混ざった経錦の段文錦も織り出される。これらは「連珠円内単独文錦」やその影響を受けた「連珠円内対称文錦」に至るまでの過渡期に現れ、7世紀中葉まで織り続けられる。

同様に西方の文様の影響を受け6世紀中葉から7世紀前半にかけて織り出された錦は小連珠を連ねた環のなかに幾つかのモチーフを横置対称に填めるか、一つのモチーフを倒置対称に表すものであり、これも過渡期の錦と考えられる。

ペルシアやソグドで織られた連珠円内単独文緯錦がタリム盆地周辺や中国に到来し、トゥルファンの墓地でその幾つかが保存された。それらの文様、つまり連珠円をはじめ連珠円内に填められた動物が中国の文様に影響を与えた。それらの錦は6世紀末から7世紀に属し、錦に表された動物文様が連珠円内に対称の形を取って経錦として中国で織り出された。つづいて7世紀後半にはハート型四弁花文と連珠円内動物対称文を段に表し、東西文様が混在した緯錦が織り出された。

同時に連珠円内動物対称文錦の副文として表されていた四つ葉花文が文様として独立し、宝相花として花卉を増し、更に花卉を重ね、色々な形を取りながら豪華な牡丹へ

<sup>614</sup> Pfister and Beringer 1945, pl. XXI, 道明 1981, p. 75.

と発展し、ついに織物上に鳳凰や鳥の飛び交う自然界の美しい風物を描くようになった。

このように 4-8 世紀の文様は西方の影響を受け多様で変化に富みつつ、一世を風靡したペルシア文様の錦から中国独自文様へ転換していく大きい流れが見受けられる。

## 第 2 節 9-14 世紀出土資料の文様における東西交流と発展

9-14 世紀のトゥルファン出土資料は大谷探検隊収集資料の一部とドイツ隊発掘資料の大部分である。この両隊の資料は先に取り上げた 4-8 世紀のカラホージャ・アスターナ墓出土資料と違って、都城址や仏教遺跡から出土するため、墓誌などのように年代を直接同定する資料に乏しい。従って、この節では中国出土資料を援用し、錦綾にとどまらず刺繍、染め物などの文様も対象とする。トゥルファン出土織物に関しては幡による年代によって、幡に使用された織物の年代を特定し、また、幡と無関係な織物については、それに類似するトゥルファン以外の出土染織資料と比較して得られた年代によって文様の発展を探る。

### 1. 中国における文様の発展

先に述べたように中国では唐代後期に始まった自然の風物を愛好する傾向はますます強まり、北宋では藤花に獅子や仙鶴、牡丹に童子などが表され<sup>615</sup>、遼では花樹に鳥や動物が表されたり<sup>616</sup>（図 51）、竹や梅に蝶や蜂が表されたりする<sup>617</sup>。

ドイツ隊発掘資料の高昌出土刺繍（MIK III 4908,4909, 図 52）は金糸が刺繍された豪華な牡丹文で 10-11 世紀に入れられている<sup>618</sup>。また、トヨク出土の幡（MIK III 6639 図 53）は幡身に「京兆、県居住銷金匠、昊天宮下賜幡立、乙卯年八月」の文字が見られる。その幡頭は小花枝が織物全体に散らされた印金（中国では銷金）で製作されている。印金は 10 世紀頃からよく見られようになるが、この祈願文と幡のタイプによりこの幡は 8-9 世紀とされている<sup>619</sup>。寄進者の銷金匠が自ら製作したものであることが祈願文と幡頭に使われた織物の印金によって知ることが出来る。

ドイツ隊がトヨクで発掘した小花文様と宝尽くし文様の蠟版染め（印花）幡身（MIK III 6201）は 9-10 世紀とされているが、アスターナ 105 墓（唐代）や 187 墓（744 文書伴出）から小花文様の印花が出土している<sup>620</sup>。小花文様の染めは盛唐期から出現したらしい。

上記の植物文の外、遼では伝統的な動物も表される。例えば龍は単独で円文として表

<sup>615</sup> 陳国安 1984, p.78-80, 陳国安・馮玉輝 1984, pp.75-76.

<sup>616</sup> 内蒙古文物考古研究所他 1996, pp. 28-30; 趙豊・齊曉光 1996, pp. 33-35.

<sup>617</sup> 徳・張・韓 1994, pp. 23-25.

<sup>618</sup> Bhattacharya-Haesner 2003, pp. 78-79.

<sup>619</sup> Bhattacharya-Haesner 2003, pp. 350-351, Rong 2003, p. 475

<sup>620</sup> Bhattacharya-Haesner 2003, pp. 72-73. 武 1992, pp. 148-149.

され（図 54）、鳳凰は飛翔する姿で表される（図 55）。これらの文様は金糸で表されていて、それらに酷似する文様は敦煌莫高窟第 409 窟や西千仏洞第 13 窟の回鶻王の衣服や敦煌莫高窟第 100 窟の貴婦人供養者（甘州回鶻王妃）の衿に描かれている<sup>621</sup>。また、他の龍文は連珠円内に盤龍として収まり、鳳凰、雉は円で囲まれることなく対称に表され、足下には山岳があり、そこに根づく植物がある<sup>622</sup>。丸文の場合その内部が回転対称となるものがあり、そのような表現は唐末より見られるのである<sup>623</sup>。

一時姿を消した連珠円内対称文様が遼に現れるが表現様式はすっかり変わり、円内は上下左右対称に表される。2色で連珠円内に上下左右対称に表された錦が中国絲綢博物館に所蔵され、遼の 10-11 世紀とされている<sup>624</sup>。同様にドイツ隊発掘の資料は 2色で上下左右対称に表されている（MIKⅢ7606, 図 56）。その外、地文様の中に主文が表された錦が出現する。このドイツ隊発掘資料は七宝繋ぎ文を地文とし主文に四弁花を表して（MIKⅢ532, 図 57）この天蓋は 9-10 世紀とされている<sup>625</sup>。七宝繋ぎ文の内部に四つ菱を詰め込んだ夾纈（MIKⅢ980）もある。この幡足は 9-10 世紀とされている<sup>626</sup>。この種の文様、「瑣文」を地文とする錦は耶律羽之墓（941 年墓誌）から数点出土している<sup>627</sup>。

ドイツ隊が高昌故城で発掘した幡（MIKⅢ7755, 図 58）は四弁花や菱が繰り返し表された綾で作られ、12-13 世紀とされている<sup>628</sup>。類似の綾が内モンゴバ林右旗遼慶州白塔出土資料に存在していて数世紀織り続けられたようである<sup>629</sup>。

上記のトゥルファンにおけるドイツ隊発掘資料の比較資料として遼の遺跡から出土した織物の文様を幾つか例に挙げているが、それらの遼の遺跡出土の織物は北宋から歳幣あるいは交易によってもたらされたものも多く、また遼の地へ連れてこられた漢人によって生産された織物が中心で<sup>630</sup>、唐五代につづく中国の文様の流れを反映していると思われる。

従って、敦煌壁画に表された衣服の金襴や上記ドイツ隊発掘資料は宋あるいは遼から敦煌やトゥルファンにもたらされたものであろう。遼と西域諸国との関係は北庭の阿薩蘭回鶻の媒介によって行われ、高昌に互市が置かれていた事実から<sup>631</sup>、上記の織物が東からもたらされたとしても不思議ではない。

<sup>621</sup> 『敦煌莫高窟』5, 1982, 図版 135; 『西千仏洞』1998, p.34; 莫高窟第 100 窟甬道北壁, 西千仏洞第 13 窟甬道西壁の観察による。

<sup>622</sup> 趙 2004, pp. 135-141.

<sup>623</sup> 趙 1999, pp. 148-149; 趙 2004, pp. 171-172.

<sup>624</sup> 趙 1999, pp. 186-187.

<sup>625</sup> Bhattacharya-Haesner 2003, pp. 84-85.

<sup>626</sup> Bhattacharya-Haesner 2003, pp. 81.

<sup>627</sup> 趙 2004, p. 167.

<sup>628</sup> Bhattacharya-Haesner 2003, p. 74.

<sup>629</sup> 趙 2004, p. 73. 慶州白塔は遼代の八角形七層の仏塔で仏像・舍利塔・織物などが発見された。

<sup>630</sup> 島田 1949, pp. 31-32.

<sup>631</sup> 長沢 1957, p. 80; 1979, p. 327.

南宋では北宋から続く纏枝牡丹（花の軸や枝が曲線で描かれ織物全体に牡丹が表される）や芙蓉を紗、羅、綾の全体に表すのをはじめ多様な文様が描かれ<sup>632</sup>、北方の金においては金糸が多用され折枝梅花（枝ごと折り取られた梅花）などが金糸で描かれ布全体に散らされる<sup>633</sup>。金の織物には榷場（交易の場）を経て南宋から届いたものもあったに違いない。宋・遼・金・元と基本的なモチーフは続くものの、金糸の多用や織り技術の変化によって、まるで文様に変化したようにみえる。ここではトゥルフアン出土資料を中心としているので中国から出土した織物の様々な文様についてこれ以上詳しくは述べないでおく。

ドイツ隊発掘資料に象を表した錦がある（MIK III 6200, 図 59）。象は目と鼻の位置関係が非写実的であって、中国で表された象の姿である。同じ錦の別の断片に人物が表され、その人物はつばが丸く返り、顎ひものある帽子を被っている。この織物の両面 1/4 縹子組織緯錦の技術からすると遼以降の製作と思われる。

また、ドイツ隊発掘資料の花鳥文錦（MIK III 162, 図 60）はランパ組織で平地に別絡みで 1/3 綾組織で抑えられ、外に、地文に唐草が表され、花文と人物の足が見える錦（MIK III 6992, 図 61）はランパ組織で 1/4 縹子組織の別絡みで抑えられている。ランパ組織はモンゴル時代に現れるのでこれらの錦はモンゴル時代のものとみられる。

大谷探検隊が収集し、現在韓国の国立中央博物館に所蔵される下げ袋はランパ組織で金糸が織り込まれた「納失失」である。織物の縁飾りはニードルループで菱文を連ねている（図 62）。織物の縁飾りに同様の刺繍のある織物は内モンゴルやカラホトからも出土していて 13-14 世紀初めのものである<sup>634</sup>。これらの織物の中心に施された刺繍の文様は中国風である。大谷探検隊収集の織物の出土地は不明であるが探検ルートを考えると中国北部からビシュバリクかトゥルフアンにもたらされたものであろう。

以上述べてきたような 9-14 世紀のトゥルフアン出土織物は僅かではあるが、宋・遼・金・元に於ける文様の発展の一端を示している。それと同時に中国からトゥルフアンに多くの織物がもたらされたことを物語っている。

## 2. 西方における文様と中国への影響

先に本編第 2 章第 1 節西方錦の到来の項で 8 世紀に属するソグド錦について触れておいた。それらは直線的な構成の生命の樹錦（MIK III 4926a 図 63）や天馬文錦（MIK III 6991, 図 64）<sup>635</sup>である。生命の樹錦は丸い形の実が樹から下がり、樹の幹の両側に鳥の姿が見られる。この錦のような直線的な文様構成はソグド錦に多く、また、天馬文錦の天馬は 7 世紀の天馬の体躯 10cm 足らずに比べて 20cm と大きく、連珠は見られない。ペン

<sup>632</sup> 福建省博物館 1977, pp. 3-4; 鎮江市博物館・金壇文化館 1977, p. 21-27; 周他 1999, pp. 44-56.

<sup>633</sup> 趙 1999, pp. 216-217; 趙他 2001, 図 2-70.

<sup>634</sup> Zhao 2000, pp. 44-47.

<sup>635</sup> Sakamoto 2004b, p. 22, pp. 37-38, PL. 8.

ジケントの8世紀前半の壁画の衣服の文様に天馬が表されていて、対向する天馬は連珠環に囲まれるのではなく、連珠の横列と横列の間に配置される構図になっている(図65)<sup>636</sup>。この壁画の例からドイツ隊発掘の上記天馬文錦は8世紀のソグド製と思われる。また、モシチェヴァヤ=バルカから行列するライオン錦(МБ 422-2846, 図66)<sup>637</sup>やグリフォン錦(kz 6762, 6587, 8-9世紀, 図67)<sup>638</sup>が出土し、動物の文様は天馬文錦と同様に一頭およそ高さ15×幅20cm大で表されている。ドイツ隊発掘のトゥルファン出土天馬錦とモシチェヴァヤ=バルカ出土グリフォン錦は色遣いや翼の表現の仕方など類似点が多い。ライオン錦については、10あるいは11世紀とされるビザンツ錦に対向するライオン錦(マーストリヒト, St. Servatius セント=セルヴァティウス寺院蔵, 図68)<sup>639</sup>があり、同じライオンの文様であるが、モシチェヴァヤ=バルカ出土ライオン錦は文様の素朴さや階段状の輪郭からみて8-9世紀のソグド製であろう。

その外、8-9世紀のソグド錦は第2編の挿表2・4で挙げた錦のほかモシチェヴァヤ=バルカ出土対孔雀文錦(No. kz 5075 図69)、連珠対孔雀文錦(No. kz 6981)<sup>640</sup>、敦煌出土経秩の対獅文錦(MAS858, Ch. xlviii. 001)、同じ敦煌出土の連珠対鹿対鳥文錦(MAS862a, Ch. 009, MAS862b, Ch00359a)<sup>641</sup>、都蘭出土とされ現在アベック財団所蔵の対獅文錦(No. 4863a, 4864a, 図70)、対羊文錦(No. 4901)<sup>642</sup>などがある。それらは連珠に囲まれている錦もあれば極めて小さい連珠を連ねた環の外に絡縄文(図69参照)・鋸歯文(図7参照)・葉状文、半円形花卉が付帯した円(図70参照)に囲まれている。主文の間に表された副文には四方に伸びるペルシャ風植物文、対鳥文・小動物(図7参照)が見られ、円内の付帯文様には羽を広げたような生命の樹の縮小形(図7参照)、小動物(図70参照)、ハート形四弁花文などが見られる。これらのソグド錦に見られるように、主文は連珠円内単独から左右対称文へと変化していく。これは本来オリエント伝統の安定的な対称形の復活か、あるいは中国で西方錦を模倣した対称文様の東から西への影響とも見ることが出来る。また、副文は左右対称と上下左右対称の二種類がある。敦煌や都蘭出土資料には、8世紀初めにおけるソグドの混乱の中、ソグドから中国へ逃れた織工によって生み出された織物も存在する可能性がある。

上記の敦煌出土の対獅文錦(MAS858, Ch. xlviii. 001)と同文様の錦がサンス大聖堂(図7)、ビクトリア&アルバート美術館をはじめベルリンやブリュッセルの美術館に所蔵さ

<sup>636</sup> Marshak 2006, Fig. 32.

<sup>637</sup> この錦はモスクワの科学アカデミー考古学研究所発掘の錦で筆者が調査する機会を与えられたが今まで未発表であった。今回ここに発表する。

<sup>638</sup> Ierusalimskaja 1996, Abb. 210. この錦についてイエルサリムスカヤはシリア製と推定しているが、筆者は8世紀の天馬文錦との色や表現法の類似からソグド製ではないかと考えている。

<sup>639</sup> Muthesius 1997, pls. 10a・b.

<sup>640</sup> Ierusalimskaja 1996, pp. 253-254, Abbs. 214-215.

<sup>641</sup> 『西域美術』3, 1984, 図6・40-1,2.

<sup>642</sup> Otavsky 1998a, Abbs. 4-6; 許 2002, 図55・61・62.

れる<sup>643</sup>。ナンシーローヌの対獅文錦もソグド錦とされる<sup>644</sup>。これらはソグドからヨーロッパにもたらされたものである。これらの錦によっても、8-9世紀の僅かなトゥルファン出土染織資料を補い、この時期にソグドで織られた錦の文様がわかるのである。

述べてきたように、8-9世紀になると円文は大きく複雑となり、円文でない文様は動物が対向しつつ並列し、あるいは同方向に行列する形で並べられる錦であった。それらは西へあるいは東へ運ばれ、東へ到来した幾つかがトゥルファンに残ったのである。

これらの錦はササン朝ペルシアが642年に滅亡し、ソグドがイスラム勢力の下にあっても、多少の変化を伴いながら連珠円や動物文様をテーマとして織り続けられたソグド錦である。

次いで現れる典型的な錦はイスラム錦でアラビア文字が表されている。第3編で扱った大谷探検隊収集の三日月文錦やSt. Josseの聖遺骸布はその例である。これらの錦は第3編で述べたようにイスラム圏東辺で織られたものと思われる。ペルシアで織り出されたものにレイ出土のティラーズ錦がある<sup>645</sup>。その一つには「王中の王に栄光と繁栄あれ、(Bah)ā ad-dawla Diyā 'l-milla, Ghiyā t al'-u(mma, Abu Nasr, son of 'Adud ad-da) wla Taj al-milla, 彼の命長からんことを。…」と織り込まれている。ブワイ朝の皇子バハーダウラ(Bahā ad-dawla)は1012年に亡くなっているため、このティラーズ錦の年代が10世紀-11世紀初頭とわかるのである。このティラーズ錦にはハート型四弁花が紋章のように表されている。ハート型四弁花がペルシアで長く愛好されていた様子が窺われる。

一方、中国では、連珠や七宝つなぎの環で囲まれた円内に鷹を背合わせに表した鷹文錦や、植物文様の環に囲まれた円内に羊が相対している球路双羊回文錦(新疆阿拉爾出土10-12世紀)<sup>646</sup>、亀甲の地文に十六の弧で作られた円内に背合わせのグリフォンを表したグリフォン錦(内蒙古元集寧路遺址出土、元代、図71)、アラビア文字様の異様文錦(内蒙古達茂旗明水墓地出土13世紀)<sup>647</sup>などが出土し、宋～元代に中国本土で一般に普及していた文様と傾向が異なり西方錦の影響を受けている。トゥルファンや新疆焉耆の阿拉爾にソグド錦やイスラム錦が到達していたように中国にも届いていたに違いない。

### 3. 金糸装飾の発展

金銀の持つ輝きは古代から人々を魅了してきた。装飾として、むしろ権威として身につけていた人々が衣服にその輝きを取り込むのは自然の成り行きであった。とりわけ遊牧の民であった民族にはその傾向が強い。

<sup>643</sup> Muthesius 1997, pls. 45a,b・49a・98a,b.

<sup>644</sup> Muthesius 1997, pls. 97a・b. しかしソグド錦より文丈が大きくかなり違う点がある。

<sup>645</sup> Weibel 1972, pp. 111, pl. 110.

<sup>646</sup> 魏 1960, 図3・9. 新疆阿拉爾は焉耆区若羌県にあり、洞墓から衣服を着たミイラが染織品を伴って発見された。

<sup>647</sup> 趙 1999, p. 186, pp. 188-189, pp. 190-191. 明水墓は蒙古汪古部の墓地である。

織物の文様史において、金糸の役割を看過する事は出来ない。最初、「金刺繍はアジアで、アッタロス王によって発明された。」とプリニウスが述べるように純金の細い金線を刺繍したのであろう<sup>648</sup>。金が圧延出来るようになると裁断して糸に巻き付ける撚り金糸として<sup>649</sup>、あるいは裁断したまま糸として使用した<sup>650</sup>。更に薄い金箔が可能になると文様の形に切り貼り付けた<sup>651</sup>。中国では紙をベースとしてその上に金箔を貼り細く裁断して平金糸を作り、また、裁断した平金糸を糸に巻き付けて撚り金糸を作った。この手法による織物は日本にも伝わり法隆寺や正倉院に金糸を織り込んだ綴織が所蔵される<sup>652</sup>。中央アジア以西では皮や腸膜をベースとして金箔を貼り、平金糸や撚り金糸を作った<sup>653</sup>。この手法は中国北方に伝わり遼・金代の織物に皮ベースの平金糸や腸膜ベースの撚り金糸が使われている<sup>654</sup>。銀を使った銀糸は中央アジアで用いられた<sup>655</sup>。また金箔の下に銀を敷いて白みがかった金色にした糸や<sup>656</sup>、紙を赤く染めた上に金箔を貼った糸（MIKⅢ7465）も使用されている。

上に挙げた金糸による装飾は西方起源である。早くも古代ギリシャに金糸の出土例がある<sup>657</sup>。紀元前4-3世紀のアルタイ地方やオムスクの墓から圧延金の撚り金糸が出土しているが、他のアルタイ出土の綴織が西アジアから来ているように、アルタイの金糸は西アジアからもたらされたものらしい。先に述べたように金刺繍はアジアで発明され、後漢書西域傳大秦の条に「刺金縷繡，織成金縷罽」（後漢書，卷88，西域傳，中華書局標点本 p. 2919）とあるように、実際、西アジアでは、紀元前1～紀元後3世紀のパルミラに毛に織り込まれた金糸が見られる<sup>658</sup>。その他、紀元1世紀のサカロワ墓から金糸の刺繍が出土する<sup>659</sup>。また、ケルンの大聖堂にもローマ時代の聖遺物として残る綴織に金糸が使われている<sup>660</sup>。これらの金糸は圧延金の撚り金糸であって、上に述べたように西方において早くから使用されていたのである。

中国で紙をベースにした金糸が出現すると織物の一部に使われるようになり、7-8世紀には、先に述べたように法隆寺、正倉院の綴織の一部分に織り込まれ、9世紀の法門寺の錦や刺繍にも撚り金糸が使用されている<sup>661</sup>。

---

<sup>648</sup> 中野 1986, p. 384.

<sup>649</sup> Елкина 1986, p. 133, p. 150によれば最も早いものはオムスクとアルタイの遊牧民の墓から出土し、紀元前4-3世紀である。

<sup>650</sup> 趙 2002, pp. 100-101.

<sup>651</sup> Li 2006, pp. 262-263.

<sup>652</sup> 佐々木 1973, pp. 24-31.

<sup>653</sup> 坂本 2004a, p. 154.

<sup>654</sup> Riboud, 1995, pp. 119-120; 趙 1999, pp. 192-193.

<sup>655</sup> Serjeant 1972, pp. 100-101.

<sup>656</sup> Watt & Wardwell & Rossabi 1997, p. 131.

<sup>657</sup> 樋口 1988, p. 345.

<sup>658</sup> Pfister 1934, pp. 17-18.

<sup>659</sup> Елкина 1986, p. 133. サカロワ遺跡については注41を参照されたい。

<sup>660</sup> de Jonghe et Tavernier 1981, p. 33.

<sup>661</sup> 『唐皇帝からの贈り物』1999, p. 23.

ドイツ隊発掘のトゥルファン出土資料には種々の金糸が使われている。金糸の用い方に関しては、8-12世紀までは文様部分のみ金糸が装飾に用いられたが、時代が下り13世紀に至ると、地全体に金糸が用いられ豪華絢爛たる織物が出現する。

例を挙げると縫取織（MIKⅢ169）、浮織の絵緯（MIKⅢ7465）、紗の縫取り（TAMⅢ6456）には紙ベースの平金糸が使用され文様部分が金糸で表されている。

経帙の縁に飾られた地絡み金欄の主文である丸文の絵緯には紙ベースの撚り金糸（MIKⅢ7443、図72）が使われている。金の丸文は上記の織物の金文様より大きくなり、金箔はほとんど失われて、現在は巻かれていた糸の色が目立つが、もとは輝くような丸い金の円が表されていた。

第3編で述べたようにドイツ隊によって採集され、ベゼクリク壁画のウイグル仏教供養人の衿に用いられたと同様の花唐草金欄（MIKⅢ6222、図40）は別がらみ金欄である。その文を表す絵緯は腸膜上に貼られた撚り金糸が用いられ、もとは金色に輝く花唐草が赤い線に縁取られて布全面に浮かび上がる豪華で美しい金欄であった。

このように豪華で美しい金欄 = 「納失失」は3編で述べたように中国に技術移転され、盛んに織り出された。それらは日本に回賜や交易によってもたらされ<sup>662</sup>、一方では遠く北コーカサスの遺跡からも出土している<sup>663</sup>。このように金欄は東西に運ばれていった。

金欄ではないが、龍文刻絲（MIKⅢ535、図73）は紙ベースの平金糸が用いられ、龍の体の鱗が金糸で表されていて、刻絲全体に金糸が使われたらしく豪華絢爛たる織物であった。

このように次第に華美な織物を好む風潮が皇帝や貴族、高級官僚にとどまらず一般社会にも蔓延していった。

王暉撰『秋潤先生大全文集』卷85『烏臺筆補』3-23

請禁制異様服色事状

切惟、衣服之制、本以別貴賤定尊卑、故歴代相沿各有定制、今民間以侈靡相高、雖工商自隸、皆得衣被金綉龍鳳衣物、以致貴賤混淆、無以差別、今国家以儉徳化下、服服不衷、返為妖災。今後、合無將一切金繡異様衣物、除令得服用外、自餘即聽与鞍轡等事、一体厳行禁制。亦辨上下定民志之一端也。<sup>664</sup>

<sup>662</sup> 小笠原 1984, p. 29.

<sup>663</sup> Доде 2006, pp. 134-135, pp. 149-153.

<sup>664</sup> 書下し「異様服色を禁制する事を請う状。切に惟らく、衣服之制は、本貴賤を別するを以て尊卑を定む、故に歴代相沿い各々定制有り。今民間侈靡を以て相高く、工商自隸と雖も、皆衣を得て金綉龍鳳の衣物を被る、以て貴賤混淆を致し、以て差別無し。今国家儉を以て下を徳化するに、服服の不衷なれば、返って妖災を為さん。今後、合に將って一切の金繡異様の衣物は、服用を得令むるを除くの外、自餘は即ち鞍轡等と聽す事無く、一体に禁制を厳行すべし。亦上下を辨じ民志を定むる之一端也」。;佐藤訳「貴人にのみ許された文様を禁制にすることを求める意見書。衣服の制度というものは、元来は上下貴賤を区別するためにあり、歴代王朝はそれぞれ規定を設

に見られるように異様の文様を禁止するように提議があり、中統二年(1261)段疋・毛段上休織金の条（『元典編』巻 58, 工部 1・造作 1）の金糸の使用禁止や至元七年(1270)閏十一月戊辰の条（『元史』巻 7・世祖本紀 4）の日月龍虎の織り込み禁止が出されるのである<sup>665</sup>。この令が厳守されたとすれば、上記の金欄や金糸綴織は 1270 年までのものか、高貴な人々のための織物であったと考えられる。

9-14 世紀の織物は中国においては、自然の風物や伝統的な龍鳳が愛でられ、主文が地文様の上に表される如く、布全体が文様で占められるようになった。禁令によって影を潜めた連珠円も内部の表現を龍鳳に変えて僅かながら再び現れる。

ソグドにおいては従来から主題とされた動物文様が依然として織り続けられたが、連珠円は更に複雑な装飾を加え、次第に大きくなっていく。連珠円のないものは側面描写の動物が横並びに繰り返して表され段文となっている。

それらソグド錦やイスラム錦が到来して影響したのであろうか、中国では 7・8 世紀の文様とは違った動物対称丸文やアラビア文字風欄入りの異様文様の錦が出現する。

この時期の最も顕著な特徴は金糸の使用が時を追って盛んとなり、元代の「納失失」に至っては、金糸が布の全面を覆う豪華絢爛な織物となり、巷にも華美の風が広まった結果、やがて金糸の使用や竜虎文様禁止令に至るのである。

---

けていた。しかし今、巷では華美を競い合い、工匠・商人や自隸までもがみな金糸の刺繍や龍・鳳凰の柄の付いた衣服をまとうことができ、上下貴賤が入り混じって、区別がつかなくなっている。今、ご公家は質素儉約の行いによって天下を教化しているのに、衣服が不適當であれば、逆に災いを招きかねない。今後はさまざまな金糸の刺繍、貴人にのみ許されている文様の織り込まれている衣服は、特別に着用を許されている場合を除き、鞍や手綱などの規定と同様に禁令を厳しく実施すべきである。そうすることが、上下貴賤を定め、民心を安定させる契機にもなるのである。」佐藤 2004, p. 126 .

<sup>665</sup> 佐藤 2004, pp. 126-128.

## おわりに

異文化が接触する時、そこには反発・衝突が生じるか、あるいは受容・融合が生じる。織物文化においては、述べてきたように積極的な受容・融合の過程が見られる。

これらの過程を明らかにしてくれるのは、20世紀初頭におけるヨーロッパ諸国の中央アジア探検ブームと我が国の大谷探検隊によってもたらされた多くの文字資料および染織資料である。加えて1950年代に始まる中国隊の発掘によって新たにもたらされた豊富な資料群である。

これらの豊富な染織資料が生き延び、現在われわれの眼前にある所以は、紀元前から織物、特に絹織物がシルクロードのネットワークに乗って東西南北に運ばれていった結果、保存条件と合致した土地に残存したことによるのである。その運び手は主としてソグド商人であった。

絹織物は衣装として使用される外、唐代では貨幣の役割をし、官吏の禄や税・軍費あるいは土地・奴婢の売買などに用いられた。貿易や回賜によって出回った絹織物は遠くまで運ばれ、遊牧民や商人の懐を潤した。絹はそれを産しない土地の人々に渴望されたからである。

3世紀頃まで、絹の産地は限られていて、毛・絹・棉それぞれの文化圏が形成されていた。それぞれの文化圏では、毛・絹・棉という素材に応じた織り方が発達していて、各文化圏の特徴をなしていた。絹織物文化圏では経錦が、毛織物文化圏では綴織と経錦に範を得た緯錦が発達していた。その緯錦の技術は次第に東へ伝わり、4世紀には綾組織緯錦はペルシアに達し、平組織緯錦はトゥルファンに到達していた。

トゥルファンにおいては他の遺跡に比べると錦・綾が最も多く出土している。なぜならトゥルファンは西の毛織物文化圏の東端に位置し、東の絹織物文化圏と接し、シルクロードの要衝であったからである。本稿においてトゥルファン出土染織資料を研究の中心に据えたのは4-15世紀の染織文化がそこに凝縮していると考えたからである。

第1編においては第2編・第3編への導入を念頭に置き、上記にまとめた記述の外、導入のための予備的な解説を加えた。

その一つは第2編において重要な役割をするペルシア錦・ソグド錦の概説である。ペルシア錦はササン様式の文様を持つ錦で、アンティノエ出土の天馬文錦やヨーロッパに保存されるシムルグ文錦がその例である。そのペルシア錦と同様に重要なソグド錦とは、ザンダニーギーの銘によってソグド錦とされたユイの対鹿文錦とそれに類似する錦や北コーカサスのモシチェヴァヤ=バルカ出土の錦である。上記のように両錦について先行研究に従って祖述した。

第2編においては錦の生産地の問題が主要なテーマとなった。

従来染織研究は、概して染織資料の分析と染織に関わる文字資料に拠る研究が個々に行われてきた。染織資料の分析は更に文様の意味付けや文様の起源を探る方向と、技術

そのものの分析に分かれていた。しかし、近年研究者のなかには文様・技術・文字資料に基づいて研究する機運が目覚めている。筆者もその一人である。

土器のようにどの地域でも生産が可能で、重量のため、移動が困難な物と違って、絹織物はシルクロードのネットワークに乗って縦横に運ばれたことは先に述べたようによく知られる事実である。その事実は逆に織物の生産地を確定することを困難にしている。つまり、発掘された場所が生産地であると決めるわけにはゆかないからである。それゆえ、本稿が扱うカラホージャ・アスターナ出土染織資料の生産地について研究者により見解の相違が生じたのである。

筆者は第2編において、カラホージャ・アスターナ出土染織資料に特徴的な「連珠円内単独文錦」と「連珠円内対称文錦」を対象として生産地を論じ、「連珠円内単独文錦」の織り技術や糸質から生産地をイラン文化圏に求め、「連珠円内対称文錦」については史料と文様の一致によって蜀製であるとする先行研究を支持し、その説を補強した。そして東西の生産地からトゥルフアンに到達したことを明らかにした。

その際、筆者は文様・技術・文字資料の三方面から資料を分析検討する姿勢を貫き、生産地を求めるよう努めた。とりわけ技術の分析に力を入れ、本稿の対象とするトゥルフアン出土染織資料に限らず、中国・日本は勿論のことロシア・イギリス・フランス・ドイツの美術館に所蔵される染織資料の調査を行った。その調査結果と経験をバックにしてはじめて本稿を論じることが出来たのである。実際、本稿には発表の機会がないまま死蔵していた染織資料の分析結果や写真がいくつか公表されている。長年かけて調査した資料の一部であるが、カラホージャ・アスターナ出土染織資料中の連珠円内単独文の比較資料として用い、ソグド製を明らかにすることに役立った。

筆者が行った調査の出発点は毛織物の分析であった。その時の経験が、第1編で述べたような東の絹織物圏と西の毛織物圏との異なる技術的特徴の把握を可能にし、西で生じた絹織物の特徴を理解することに役立った。つまり、それは織物の耳の処理の違いであり、緯錦や綾組織の西方起源説の再確認である。西方技術の特徴に拠ることもまたカラホージャ・アスターナ出土染織資料中の「連珠円内単独文錦」がイラン文化圏の製作であるとする根拠となった。

また、史料に現れる「波斯錦」の実体に関して、種々検討の結果、7世紀においてはペルシア錦とともにソグド錦も含まれたという結論に達した。資料から見ればむしろソグド錦の方が数の上で勝っていたのではないかとさえ思われる。これらのソグド錦とペルシア・ソグドの文様を模倣した蜀錦は、長安の都で異国情緒にあこがれた人々にもてはやされたことであろう。

次に、大谷探検隊収集資料の調査やドイツ隊によって発掘され、長年ベルリンの旧インド美術館に埋もれていた染織資料を調査する機会を得たことは貴重な経験となった。研究者の間で、初めて資料の詳細な技術の分析を行い、その結果を公表でき、またそれらの染織資料のうち棉ベルベットや花唐草金襴に関わる文献史料にも恵まれた。棉ベル

ベットについては、インドからトゥルフアンへ技術がもたらされ、金欄すなわち「納失失」は、その技術がヘラートからビシュバリクを経て中国にもたらされたことを証明出来た。これら両資料のインド・中央アジア・中国にまたがる文化交流を証明出来たことは、本当に幸運に恵まれたと云って良い。勿論、上記織物に関連する文献史料の精密かつ的確な先学の研究に多くを負っているのは云うまでもない。

大谷探検隊収集の三日月文錦は錦の上に表されたクーフィ体アラビア文字・三日月の文様・織り技術が、イスラム圏東辺を生産地と考え、年代を 9-10 世紀とする大きな決め手となった。クーフィ体アラビア文字の先学による解読あつてのことである。

第 4 編では第 2 編と第 3 編の結論に基づき、トゥルフアン出土染織資料の技術と文様の発展を論じた。

第 3 編に加え第 4 編で記述したように、ドイツ隊発掘染織資料の分析によって、カラホージャ・アスターナ出土染織資料に継ぐ 9 世紀以降のトゥルフアン出土染織資料の文様・技術の発展を明かにすることが出来た。

技術においては原初の平織から経錦・綺・綾・緯錦と発展し、それぞれ綾も錦も織機の発達とともに複雑となって行き、ついに 1/7 の八枚綾やランパ組織の織物に到達した。

技術に関連して史料に現れる「綺」・「綾」の記述と出土資料の平地綾・綾地綾の年代を勘案して、「綺」・「綾」は時代とともにその意味内容を変え、組織とは直接関係がなく、先行研究に述べられるような組織に基づく分類はあり得ないことを明らかにした。

文様に関しては、中国では 6 世紀半ばよりササン様式の連珠円文が盛んとなり 7 世紀後半から中国様式の花文が加わった。花文は宝相花となり連珠円文も花文も大きく複雑華麗となっていった。更に牡丹に鳥や蝶などが加わり自然の風物が表現されるように変化していった。

一方、西の方ペルシア・ソグドでは、ササン様式の連珠円文は 9 世紀に至るも続き、大きく複雑になっていった。トルファン出土資料に基づく、同時に連珠円のない動物文様も存在し、その後 9-10 世紀から文様はティラーズ錦のようなアラビア文字の入ったものへ変化していった。

西を起源とする金糸文様は織り技術の発達とともに次第に豪華絢爛となり、ついには布全面を金糸でおおう「納失失」を生み出したのである。この「納失失」の技術は中国に技術移転されたことについて第 3 編で詳しく述べておいた。このようにして中国で織り出された「納失失」がコーカサスで出土していることを考えると更にヨーロッパにもたらされたに違いない。勿論日本にも到達し、それらは神社仏閣に伝わっている。モンゴル時代には世界規模で文化交流がなされたのである。

全編を通じて、織物そのものの移動に始まり、錦・綾の文様や技術の交流、技術移転を論じ文化交流の様相を明らかにした。このような相互の交流によって受容された文化と各地域独自の文化との融合によって染織文化は多大な発展を成し遂げたのである。

## 文献および文献略号 (ABC順)

AEDTA = Association pour l'Etude et la Documentation des Textiles d'Asie.

BAOM = Bulletin of the Ancient Orient Museum.

CIETA = Centre International d'Étude des Textiles Anciens.

Archaeological Textiles News Letter. No. 12, 1992

『長沙馬王堆』= 湖南省博物館・中国科学院考古研究所, 関野雄他(訳)『長沙馬王堆一号漢墓』上下, 東京, 平凡社, 1976.

『中華文物集刊』= 中華五千年文物集刊編集委員会(編)『中華五千年文物集刊』織繡篇 1, 1988, 2, 1992, 台北, 中華五千年文物集刊編集委員会.

『中国文物精華』中国文物精華編集委員会(編)北京, 文物出版社, 1997.

『中国考古三十年』= 文物編集委員会(編) 関野雄(監訳)『中国考古三十年 1949-1979』平凡社, 1981 (原著, 『文物考古工作三十年』, 北京, 文物出版社, 1979)

『大唐六典』李隆基(撰)李林甫(注)広池千九郎(校注)内田智雄(補訂)西安, 三秦出版社, 1991.

『英蔵敦煌』= 中国社会科学院歴史研究所ほか(編)『英蔵敦煌文献(漢文仏教以外部分)』全 14 卷, 成都, 四川人民出版社, 1990-1995.

『俄蔵黒水城』= 俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所・中国社会科学院民族研究所・上海古籍出版(編)『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所蔵黒水城文献』全 11 卷, 上海, 上海古籍出版, 1996-1999.

『俄蔵敦煌』= 俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所・俄羅斯科学出版社東方文学部・上海古籍出版社(編)『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所蔵敦煌文献』全 17 卷, 上海, 上海古籍出版社, 俄羅斯科学出版社東方文学部, 1992-2001.

『法蔵敦煌』= 『法國國家図書館蔵敦煌西域文献』1-34 卷, 上海, 上海古籍出版社, 1995-2005.

『上代染織文』= 『御物上代染織文』東京, 帝室博物館, 1929.

『徐顕秀墓』= 太原市文物考古研究所(編)『北齊徐顕秀墓』北京, 文物出版社, 2005.

『漢唐の染織』東京, 小学館, 1973.

『献納宝物』= 東京国立博物館(編)『法隆寺献納宝物』(染織 1, 幡と褥), 京都, 便利堂, 1986.

『国立中央博物館所蔵 西域美術』ソウル, 国立中央博物館, 2003.

『コプト織』カタログ, 東京, 古代オリエント博物館, 1998.

『西千仏洞』= 張学荣(主編)『敦煌西千仏洞石窟』甘肅人民美術出版社, 1998.

『尼雅遺跡報告書』= 中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊(編)『中日・日中共同尼雅遺跡学

- 術調査報告書』烏魯木齊，京都，中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊，1999.
- 『織物用語集』=『CIETA 織物技術用語集』道明美保子（編）京都，龍村美術織物研究所，1999.
- 『大谷文書』= 小田義久（編）『大谷文書集成』壹（龍谷大学善本叢書 5）1984，京都，法蔵館，  
『大谷文書集成』貳（龍谷大学善本叢書 10）1990.
- 『楼蘭王国』=『楼蘭王国と悠久の美女』展覧会カタログ，東京，朝日新聞社，1992.
- 『沙漠王子遺宝』趙豊・于志勇（編）2000，芸沙堂，香港.
- 『西域美術』東京，講談社，1984.
- 『西域美術展』カタログ，東京，朝日新聞社，1991.
- 『西域考古図譜』上・下，東京，国華社，1915,(再版，柏林社，1972).
- 『染織の美』29，京都書院，1984.
- 『絲綢之路』（漢唐織物），新疆維吾爾自治区博物館・出土文物展覽工作組（編）  
文物出版社，1972.
- 『至宝』=『絲綢路の至宝』1（西本願寺仏教伝播の道踏査 100 年展）・2（旅順博物館  
仏教芸術名品展），滋賀，佐川美術館，2002.
- 『新疆出土文物』新疆維吾爾自治区博物館（編）文物出版社，1975.
- 『真跡積録』=唐耕耦・陸宏基（編）『敦煌社会經濟文献真跡積録』全 5 卷，北京，  
書目文献出版社，1986-1990.
- 『シルクロード』=『シルクロード・オアシスと草原の道』奈良県立美術館，なら・  
シルクロード博協会，1988.
- 『シルクロード学研究』8，トルファン地域と出土絹織物，奈良，シルクロード学  
研究センター，2000.
- 『シルクロード学研究』19，新疆出土のサーサーン式銀貨，奈良，シルクロード学  
研究センター，2003.
- 『シルクロードの遺宝』カタログ，東京国立博物館他（編）1985.
- 『楚墓』= 湖北省柚州地区博物館『広陵馬山一号楚墓』文物出版社，1985.
- 『敦煌莫高窟』= 敦煌文物研究所（編）『敦煌莫高窟』1-5，東京，平凡社，1980-82.
- 『敦煌宝蔵』全 130 卷，台北，新文豊出版公司，1981-1985.
- 『敦煌北区石窟』I-III = 彭金章・王建軍・敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟北区石窟』I，北京，  
文物出版社，2000.  
彭金章・王建軍・敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟北区石窟』II, III，北京，文物出版  
社，2004.
- 『敦煌絲綢芸術全集』英蔵卷，趙豊（編）東華大学出版社，上海，2007.
- 『都蘭吐蕃墓』北京大学考古文博学院・青海省文物考古研究所（編）北京，科学出版社，2005.
- 『吐魯番博物館』吐魯番博物館編委会，烏魯木齊，新疆美術攝影出版社，1992.
- 『吐魯番文書』= 国家文物局考古文献研究室・新疆維吾爾自治区博物館・武漢

- 大学歴史系（編）『吐魯番出土文書』1-10，北京，文物出版社，1981-1991.
- 『吐魯番出土文書』巻 - 肆，新疆維吾爾自治區博物館・武漢大学歴史系（編）北京，文物出版社，1992-1996.
- 『唐大詔令集』 宋敏求（編）北京，商務印書館，1956.
- 『唐皇帝からの贈り物』 新潟県立美術館・朝日新聞社文化企画局・博報堂（編）新潟県立美術館，朝日新聞社文化企画局，博報堂，1999.
- 『ウイグル文契約文書集成』 山田信夫（著）小田壽典・ P. ツィーメ・梅村坦・森安孝夫（共編）吹田，大阪大学出版会，1993.

## 文献目録（著者名ABC順）

和文

荒川 正晴 Arakawa Masaharu

1992 「唐の対西域布帛輸送と客商の活動について」『東洋学報』73-3, 4, pp. 31-63.

1997 「唐帝国とソグド人の交易活動」『東洋史研究』56-3, pp. 171-204.

2003 『オアシス国家とキャラバン交易』（世界史リブレット 62），東京，山川出版.

アリバウム, L. I., Альбаум, Л. И. 加藤 久祚（訳）Katō Kyūzō

1980 『古代サマルカンドの壁画』東京，文化出版社.

土肥 義和 Dohi Yoshikazu

1988 「敦煌・回鶻間交易関係漢文文書断簡考」『中国古代の法と社会』栗原益男先生古稀記念論文集，東京，汲古書院，pp. 399-436.

道明 美保子 Dōmyō Mihoko

1981a 「ターク・イ・ブスターン大洞猪狩図の服飾文様の分類と復元」『オリエント』24 (1981), pp. 49-75, pl. 1-7.

1981b 「絹文化と羊毛文化の交流」並河万里『隊商都市』東京，新潮社，pp. 134-141.

1987 「ササンの連珠円文錦の成立と意味」『シルクロード美術論集』東京，吉川弘文館，pp. 153-176.

藤枝 晃 Fujieda Akira

1989 「大谷コレクションの現状」『西域文化資料選』京都，龍谷大学，pp. 109-118.

ギルシュマン R., Ghirshman, Roman

1966 『古代イランの美術』II，東京，新潮社.

後藤 勝 Gotō Masaru

1987 「ソグド系帰化人何氏について—西域帰化人研究 その2—」『聖徳学園 岐阜教育

学紀要』14, pp. 1-20.

原田 淑人 Harada Yosito

1970 『唐代の服飾』東京, 東洋文庫.

林 巳奈夫 Hayasi Minao

1976 『漢代の文物』京都, 京都大学人文科学研究所.

樋口 隆康 Higuchi Takayasu

1988 「阿武山古墳の金糸を巡って」榎原考古学研究所(編)『榎原考古学研究所論集』9, 東京, 吉川弘文館, pp. 339-350.

日野 開三郎 Hino Kaizaburō

1989 「唐代庸調の布絹課徴額と匹端制」『東洋史学論集』第12巻, 行政と財政, 東京, 三一書房(初出『法制史研究』15, 1965).

本田 実信 Honda Minobu

1962 「ヘラートのクルト政権の成立」『東洋史研究』21-2, pp. 38-75. [再録: 『モンゴル時代史研究』東京, 東京大学出版会, 1991.]

池田 温 Ikeda On

1968 「中国古代物価の一考察(一)」『史学雑誌』77, pp. 1-45.

1982 「中国における吐魯番文書整理研究の進展—唐長孺教授講演の紹介を中心に」『史学雑誌』1982-2, pp. 59-85.

石見 清裕 Iwami Kiyohiro

2001 「唐の国際秩序と交易」『アジア遊学』26, 東京, 勉誠出版, pp. 23-38.

2005 「唐の絹貿易と貢献制」『東洋史論集』33, pp. 61-92.

井筒 俊彦 Izutsu Toshihiko

1978 『コーラン』下, (岩波文庫), 東京, 岩波書店.

影山 悦子 Kageyama Etsuko

2002 「ソグディアナにおける絹織物の使用と生産」『オリエント』45-1, pp. 37-55.

加藤 繁 Katō Shigeru

1944 『支那経済史概説』東京, 弘文堂書房.

気賀沢 保規 Kigasawa Yasunori

1993 「法門寺出土の唐代文物とその背景—碑刻「衣物帳」の整理と分析から—」砺波護(編)『中国中世の文物』京大人文研, pp. 580-641.

北村 哲郎 Kitamura Tetsurō

1976 『日本の織物』東京, 源流社.

百済 康義 Kudara Kōgi

1996 「大谷探検隊収集西域文化資料とその関連資料」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』35, pp. 41-109.

桑原 隲藏 Kuwabara Shitsuzō

- 1968 「隋唐時代に支那に来往した西域人について」『桑原隲藏全集』第二卷，東京，岩波書店，pp. 270-360（初出 1926, 『内藤博士還暦祝賀支那学論叢』）
- ルボ-レスニチェンコ, E. I., Lubo-Lesnichenko, E. I. 高浜 秀（訳）Takahama Suguru
- 1985 「六朝時代（三~六世紀）のシルクロード」『ユーラシア』新2号，pp. 91-108.
- ルボ-レスニチェンコ, E. I. & 坂本 和子 Lubo-Lesnichenko, E. I. & Sakamoto Kazuko
- 1987 「双龍連珠円文綾について」『古代オリエント博物館紀要』 Vol. IX, pp. 93-117, pls. XIII-XVII.
- 前嶋 信次 Maejima Shinji
- 1956 「バグダードの文化とその滅亡 上」『史学』28-1/2, pp. 15-58. [再録：『民族・戦争—東西文化交流の諸相—』東京，誠文堂新光社，1982.
- マルシャーク, B. I., Marshak B. I.
- 1985 「古代と中世初期の東西文化交流」『シルクロードの遺宝—古代中世の東西文化交流—』東京，日本経済新聞社.
- 松田 寿男 Matsuda Hisao
- 1975 「イラン南道論」松田寿男博士古希記念出版委員会（編）『東西文化交流史』東京，雄山閣，pp. 217-251.
- 1986 「絹馬貿易に関する史料」『松田寿男著作集』2，東京，六興出版，pp. 154-179（初出 1959, 『遊牧社会史探究』1）
- 水谷 真成（訳）Mizutani Sinjyou
- 1988 玄奘『大唐西域記』東京，平凡社（初版 1971）
- 護 雅夫（訳）Mori Masao
- 1988 カルピニ / ルブルク『中央アジア・蒙古旅行記』東京，光風社.
- 森本 公誠（訳）Morimoto Kōsei
- 2001 イブン=ハルドゥーン（著）『歴史序説（二）』（岩波文庫），東京，岩波書店.
- 森安 孝夫 Moriyasu Takao
- 1984 「吐蕃の中央アジア進出」『金沢大学文学部論集 史学科篇』4, pp. 1-85, 2 pls.
- 1988 「敦煌出土元代ウイグル文書中のキンサイ緞子」『東洋史論叢』pp. 417-441.
- 1991 『ウイグル=マニ教史の研究』（『大阪大学文学部紀要』31, 32），豊中，大阪大学文学部.
- 1994 「ウイグル文書笥記（その四）」『内陸アジア言語の研究』9, pp. 63-93.
- 1997 「《シルクロード》のウイグル商人—ソグド商人とオルトク商人のあいだ—」『中央ユーラシアの統合』（岩波講座世界歴史11），東京，岩波書店，pp. 93-119.
- 2007 『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史5），東京，講談社.
- 村川 堅太郎（訳注）Murakawa Kentarō
- 1948 『エリュートウラー海案内記』東京，生活社.

- 長廣 敏雄 (訳注) Nagahiro Toshio  
 1977 張彦遠 (著) 『歴代名画記』2 (東洋文庫 311), 東京, 平凡社.
- 長沢 和俊 Nagasawa Kazutosi  
 1957 「遼の西北路経営について」『史学雑誌』66-8, pp. 67-83 (再録:『シルクロード史研究』東京, 図書刊行会, 1979)
- 長沢 和俊・横張 和子 Nagasawa Kazutosi・Yokohari Kazuko  
 2001 『シルクロード染織史』東京, 講談社.
- 内藤 みどり Naitō Midori  
 1988 「東ローマと突厥との交渉に関する史料」『西突厥史の研究』東京, 早稲田大学出版会, pp. 374-395 (初出 1963, 『遊牧社会史探究』22).
- 内藤 虎次郎 Naitō Torajirō  
 1936 「染織に関する文献の研究」『東洋文化研究』東京, 弘文堂書房, pp. 49-60 (初出 1925, 『古代織物』).
- 中野 定雄・中野里美・中野美代 (訳注) Nakano Sadao・Nakano Satomi・Nakano Miyo  
 1986 プリニウス『プリニウスの博物誌』第1巻, 東京, 雄山閣.
- 仁井田 陞 Niida Noboru  
 1933 『唐令拾遺』東京, 東京大学出版会.  
 1960 「吐魯番出土の唐代取引法関係文書」『西域文化研究』3, 京都, 法蔵館, pp. 189-214, 図版 19-23.
- 西村 兵部 Nishamura Hyōbu  
 1973 「漢唐染織の技法と日本古代の染織」『漢唐の染織』, 東京, 小学館, pp. 145-146.
- 布目 順郎 Nunome Junrō  
 1988 『絹と布の考古学』東京, 雄山閣,
- 小笠原 小枝 Ogasawara Sae  
 1984 「金襴」『日本の美術』9, no.220, 東京, 至文堂, pp. 1-80.
- 尾形 充彦 Ogata Mitsuhiko  
 2001 「吐魯番阿斯塔那古墓出土の絹織物と正倉院の絹織物」『シルクロード学研究』12, (『中国における絹織物のはじまりと発展』), 奈良, シルクロード学研究センター, pp. 9-31.
- 岡崎 敬 Okazaki Takasi  
 1973 『東西交渉の考古学』東京, 平凡社.
- 太田 英蔵 Ōta Eizō  
 1986 「犀円文錦について」『太田英蔵 染色史著作集』上, 東京, 文化出版局, pp. 173-200 (初出 1956, 『書陵部紀要』7) .
- 太田 英蔵・佐々木 信三郎・西村 兵部 Ōta Eizō・Sasaki Sinzaburō・Nisimura Hyōbu  
 1960 「正倉院の錦」『書陵部紀要』13, 東京, pp. 57-125, 図版 1-52.

愛宕 松男 (訳注) Otagi Matsuo

1970 マルコ・ポーロ (著) 『東方見聞録』 (東洋文庫 158), 東京, 平凡社.

小澤 重男 Ozawa Shigeo

1989 『元朝秘史全釈続攷』下, 東京, 風間書房.

坂本 和子 Sakamoto Kazuko

1980 「シルクロードの絹織物にみる東西交流」『服装文化』168, 東京 pp. 64-85.

1993 「織物の東西交渉—経錦と緯錦を中心に」『古代オリエント博物館紀要』XIV, pp. 233-249.

1996a 「染織資料について」百済康義「大谷探検隊収集西域文化資料とその関連資料」『龍谷大学仏教文化研究所紀要』35, 京都, pp. 65-109.

1996b 「羊毛文化と絹文化の遭遇」『文化遺産』1, 松江, 島根県並河写真財団, pp. 25-33.

1999 「ニヤ遺跡出土の織物について」中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊 (編)『中日・日中共同尼雅遺跡学術調査報告書』烏魯木齊, 京都, 中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊, pp. 327-334.

2000a 「トルファン出土染織資料解説」『シルクロード学研究』8, (『トルファン地域と出土絹織物』), 奈良, シルクロード学研究センター, pp. 117-142, pl. 27-109.

2000b 「トルファン出土染織資料について—錦の特徴にみる東西交流—」『シルクロード学研究』8, (『トルファン地域と出土絹織物』), 奈良, シルクロード学研究センター, pp. 169-179, pl. 27-109.

2001 「連珠文の伝播—アスターナ出土絹織物を中心として—」『シルクロード学研究叢書』4, (シルクロードの世界) 奈良, シルクロード学研究センター, pp. 83-96.

2004a 「トルファン出土の三織物断片—西方より将来の証拠として—」森安孝夫 (編)『中央アジア出土文物論叢』京都, 朋友書店, pp. 143-161.

2004b 「織物にみるシルクロードの東西交流」『シルクロード学研究叢書』10, (シルクロードの世界) 奈良, シルクロード学研究センター, pp. 1-17.

佐々木 信三郎 Sasaki Shinzaburō

1958 『上代綾にみる斜子技法』京都, 川島織物研究所.

1973 『上代錦綾特異技法』京都, 川島織物研究所 (初版 1950-1951) .

1976 『日本上代織技の研究』京都, 川島織物研究所 (初版 1950-1951) .

佐藤 貴保 Satō Takayasu 他

2004 『烏臺筆補』訳註稿 (2)『内陸アジア言語の研究』XIX, pp. 109-155.

佐藤 武敏 Satō Taketosi

1977 『中国古代絹織物史研究』上, 東京, 風間書房.

1978 『中国古代絹織物史研究』下, 東京, 風間書房.

渋谷 誉一郎 Shibuya Yoitirou

2000 「スタイン第四次中央アジア踏査について」山本英史 (編)『伝統中国の地域像』東京,

- 慶應義塾大学出版会, pp. 289-326.
- 嶋田 襄平 Shimada Jyouhei (編)  
1970 『イスラム帝国の遺産』東西文明の交流3, 東京, 平凡社.
- 島田 正郎 Shimada Masao  
1949 「遼代の絹織物業」『史学雑誌』58-5, pp. 17-32.
- 白鳥 庫吉 Shiratori Kurakichi  
1932 「拂菻問題の新解釈 (二)」『東洋学報』20-1, 東洋協会学術調査部. pp. 1-60.
- 鈴木 治 Suzuki Osamu  
1974 『ユーラシア東西交渉史論攷』東京, 国書刊行会.
- 龍村 謙 Tatsumura Ken  
1963 「大谷探検隊将来の錦綾類」『西域文化研究』6, 京都, 法蔵館, pp. 15-46.
- 角山 幸洋 Tsunoyama Yukihiro  
1968 『日本染織発達史』東京, 田畑書店.
- 梅原 末治 Umehara Sueharu  
1960 『蒙古ノイン・ウラ発見の遺物』東京, 東洋文庫.
- 梅村 坦 Umemura Hiroshi  
1996 「スタイン」高田時雄 (編) 『東洋学の系譜』欧米編, 東京, 大修館書店, pp. 81-92.
- ウイトフィールド, ロデリック Whitfield, Roderick 上野アキ (訳)  
1984 『西域美術』東京, 講談社.
- 藪内 清 (訳) Yabuuchi Kiyoshi  
1969 宋應星 (撰) 『天工開物』(東洋文庫 130), 東京, 平凡社.
- ヤクボーフスキー他 Якубовский А. Ю. 加藤九祚 (訳)  
1969 『西域の秘宝を求めて』東京, 新時代社.
- 山田 信夫 (編) Yamada Nobuo  
1971 『ペルシャと唐』東西文明の交流2, 東京, 平凡社.
- 山辺 知行 Yamanobe Tomoyuki  
1979 『シルクロードの染織』京都, 紫紅社.
- 横張 和子 Yokohari Kazuko  
1976 「パルミユラに出土の綾に関する二~三の問題」『美術史』93-96, 東京, pp. 55-78.  
1986 「アスターナ錦の編年と考察」『古代オリエント博物館紀要』VIII, 東京, pp. 87-120,  
Pls. III-X.  
1989 「綾について」『古代オリエント博物館紀要』X, 東京, pp. 185-215.  
1990 「複様平組織の緯錦について—大谷探検隊将来絹資料の研究—」『古代オリエント  
博物館紀要』XI, 東京, pp. 257-281.  
1992 「吐魯番文書に見える丘慈錦と疏勒錦について」『古代オリエント博物館紀要』XIII,  
東京, pp. 167-183.

- 1995 「大谷探検隊将来絹資料の研究：その二錦と羅」『古代オリエント博物館紀要』XVI, 東京, pp. 177-195.
- 2000 「新疆維吾爾自治区博物館における「六朝—唐代の錦・綾」調査報告」『シルクロード学研究』8, (『トルファン地域と出土絹織物』), 奈良, シルクロード学研究センター, pp. 180-203.
- 2006 「所謂ザンダニーギーZandaniji 錦をめぐって」『古代オリエント博物館紀要』XXVI, 東京, pp. 107-142.
- 吉田 豊 Yoshida Yutaka
- 2006 『コートン出土 8-9 世紀のコートン語世俗文書に関する覚え書き』神戸市外国語大学研究叢書 38, 神戸, 神戸市外国語大学外国学研究所.
- 吉川 小一郎 Yoshikawa Koichirō
- 1937 「支那紀行」上原芳太郎 (編) 『新西域記』下, 東京, 有光社, pp. 557-715.  
(再版 1984)
- 雪島宏一 (訳) Yukishima Kōichi
- 1985 イェルサリムスカヤ「シルクロード途上のアラン世界」『ユーラシア』新2号, pp. 73-90.
- 中文
- 薄 小瑩 Bo Xiaoying
- 1990 「吐魯番地区発見の連珠文織物」北京大学考古系編『記念北京大学考古專業三十周年論文集』1952-1982, 北京, 文物出版社, pp. 311-340.
- 陳 国安 Chen Guoan
- 1984 「浅談衡陽県何家皂北宋墓紡織品」『文物』1984-12, pp. 77-81.
- 陳 国安・馮玉輝 Chen Guoan・Feng Yuhui
- 1984 「衡陽県何家皂北宋墓」『文物』1984-12, pp. 73-76.
- 陳 景富 Chen Jingfu
- 1990 『法門寺史略』西安, 陝西人民教育出版社.
- 陳 娟娟 Chen Juanjuan
- 1979 「新疆出土的几种唐代織錦」『文物』1979-2, pp. 64-73.
- 陳 維稷 (編) Chen Weiji (ed.)
- 1984 『中国紡織科学技術史』古代部分, 北京, 科学出版社.
- 陳 彦妹 Chen Yanmei
- 2007 「六世紀中后期的中国聯珠紋織物」『故宫博物院院刊』2007-1, pp. 78-95.

- 德新·張漢君·韓仁信 De Xin · Zhang Hanjun · Han Renxin  
 1994 「內蒙古巴林右旗慶州白塔發見遼代佉教文物」『文物』1994-12, pp. 4-33.
- 敦煌文物研究所考古組 Dunhuang wenwu yanjiusuo kaoguzu  
 1972 「莫高窟發見的唐代絲織物及其它」『文物』1972-12, pp. 55-67, 71, pls. 1-4.
- 福建省博物館 Fujianxing bowuguan  
 1977 「福州市北郊南宋墓清理簡報」『文物』1977-7, pp. 1-16.
- 耿昇 (訳) Geng Sheng  
 1995 Maillard, M. 『古代高昌王国物質文明史』, 北京, 中華書局.
- 黃文弼 Huang Wenbi 土居淑子 (訳)  
 1994 『トルファン考古記』黃文弼著作集, 第二卷, 東京, 恒文社.
- 湖北省荊州地區博物館 Hubeisheng jingzhouyiqu bowuguan  
 1985 『江陵馬山一號楚墓』北京, 文物出版社.
- 賈應逸 Jia Yingyi  
 1985 「新疆絲織技藝的起源及其特點」『考古』1985-2, pp. 173-148, 圖版 7,8.  
 1998 「絲綢之路織物」『絲綢考古珍品』上海, 上海譯文出版社, pp. 33-43.
- 姜伯勤 Jiang Boqin  
 1994 『敦煌吐魯番文書與絲綢之路』北京, 文物出版社.
- 孔祥星 Kong Xiangxing  
 1982 「唐代“絲綢之路”上的紡織品貿易中心西州」『文物』1982-4, pp. 18-23.
- 勒柯克 Le Coq 趙崇民(訳) Zhao Chongmin  
 1998 『高昌—吐魯番古代藝術珍品』烏魯木齊, 新疆人民出版社.
- 李仁溥 Li Renpu  
 1983 『中國古代紡織史稿』長沙, 岳麓書社.
- 李也貞 Li Yezhen  
 1976 「有關西周絲織和刺繡的重要發現」『文物』1976-4, pp. 60-63.
- 林梅村 Lin Meicun  
 1995 『西域文明』北京, 東方出版社.
- 隆化縣博物館 Longhuaxian bowuguan  
 2004 「河北隆化鴿子洞元代窖藏」『文物』2004-5, pp. 4-25.
- 盧華語 Lu Huayu  
 1995 『唐代桑蠶絲綢研究』北京, 首都師範大學出版社.
- 羅群 Lou Qun  
 2005 「元代紋錦被面的組織特色和織造工藝」, 『絲綢之路與元代藝術』國際學術討論會論文集, 香港, 芸紗堂/服飾出版, pp. 254-258.
- 內蒙古文物考古研究所·赤峰市博物館·阿魯科爾沁旗文物管理所 Neimenggu wenwukaogu yanjiusuo · Chifengshi bowuguan · Alukermiqi wenwu guanlisuo

- 1996 「遼耶律羽之墓發掘簡報」『文物』1996-1, pp. 4-32.
- 潘 行榮 Pan Xingrong  
1979 「元代集寧路故城出土的窖藏絲織物及其他」『文物』1979-8, pp. 32-36.
- 錢 伯泉 Qian Boquan  
2001 「吐魯番出土魏晉南北朝時期的隨葬衣物疏研究」『吐魯番學研究』2001-1, pp. 21-35.
- 饒 宗頤 (編), 陳 國燦 (著) Rao Zongyi (ed.), Chen Guocan  
2002 『吐魯番出土唐代文獻編年』台北, 新文豐出版股份有限公司.
- 饒 宗頤 (編), 王 素 (著) Rao Zongyi (ed.), Wang Su  
1997 『吐魯番出土高昌文獻編年』台北, 新文豐出版公司.
- 沙比提 Shabiti  
1973 「從考古發掘資料看新疆古代的棉花種植和紡織」『文物』1973-10, pp. 48-51.
- 尚 剛 Shang Gang  
2003 「納失失在中國」『伊朗學在中國論文集』北京, 北京大學出版社, pp. 144-160.  
2004 「鶴綾絢爛, 鳳錦紛葩—隋唐五代的高檔絲織品種」『唐研究』10, pp. 459-491.
- 上海市紡織科學研究院·上海市絲綢工業公司文物研究組 Shanghai fangzhikexue yanjiuyuan ·  
Shanghai shi sichougongyegongsi wenwu yanjiuzu  
1980 『長沙馬王堆一號漢墓—出土紡織品的研究—』北京, 文物出版社.
- 沈 從文 (編), 古田 真一, 栗城 延江 (訳) Shen Congwen (ed.)  
1995 『中國古代的服飾研究』京都, 京都書院.
- 盛 餘韻 Sheng, Angela  
1999 「中國西北邊疆六至七世紀的紡織生產: 新品種及其創製人」『敦煌吐魯番研究』4, pp. 323-373.
- 唐 長孺 Tang Zhangru  
1985 「吐魯番文書中所見絲織手工業技術在西域各地的傳播」文化部文物局古文學研究室 (編)  
『出土文獻研究』pp. 146-151.
- 王 炳華 Wang Binghua  
1973 「鹽湖古墓」『文物』1973-10, 北京, pp. 28-35.  
1981 「吐魯番出土唐代庸調布研究」『文物』1981-1, pp. 56-62.
- 王 進玉, 趙 豐 Wang Jingyue, Zhao Feng  
1989 「敦煌文物中的紡織技藝」『敦煌研究』1989-4, pp. 99-105.
- 汪 汧 Wang Qi  
2000 「唐錦紋樣及其演變溯源」『唐研究』8, pp. 433-462.
- 王 仲萃 Wang Zhongluo  
1976 「唐代西州的縹布」『文物』1976-1, pp. 85-88.
- 武 敏 Wu Min  
1962 「新疆出土漢—唐絲織品初探」『文物』1962-7,8, pp. 5-10, 64-75 (1983, 再錄『新疆考古

- 三十年』 pp. 420-434).
- 1973 「吐魯番出土絲織物中的唐代印染」『文物』1973-10, pp. 37-47.
- 1984 「吐魯番出土蜀錦的研究」『文物』1984-6, 北京, pp. 70-80.
- 1987 「從出土文書看古代高昌地区的蠶絲與紡織」『新疆社會科學』1987-5, pp. 92-100.
- 1992 『織繡』台北, 幼獅文化事業有限公司.
- 1996 「從出土文物看唐代以前新疆紡織業的發展」『西域研究』1996-2, pp. 5-14.
- 1999 「吐魯番古墓出土絲織品新探」『敦煌吐魯番研究』4, pp. 299-321, 圖版 4-9.
- 2000 「阿斯塔那古墓出土織錦的研究」『シルクロード學研究』8, (『トルファン地域と出土絹織物』), 奈良, シルクロード學研究センター, pp. 143-168.
- 2006 「吐魯番古墓出土絲織品新探」殷晴 (主編)『吐魯番學新論』烏魯木齊, 新疆人民出版社, pp. 375-392.
- 吳 淑生・田 自秉 Wu Shusheng・Tian Zibing
- 1986 『中國染織史』上海, 上海人民出版社.
- 吳 震 Wu Zhen
- 2000 「吐魯番出土文書中的絲織品考辨」『シルクロード學研究』8, (『トルファン地域と出土絹織物』), 奈良, シルクロード學研究センター, pp. 84-103.
- 夏 鼐 Xia Nai
- 1963 「新疆新發見的古代絲織品—綺、錦和刺繡」『考古學報』1963-1, 北京, pp. 45-76, 彩色圖版 I-II, 圖版 I-XII (1983, 再錄『新疆考古三十年』pp.396-419).
- 1972 「我國古代蠶、桑、絲、綢的歷史」『考古』1972-2, pp. 12-27.
- 1978 「近年中國出土的薩珊朝文物」『考古』1978-2, pp. 111-116.
- 新疆博物館考古部 Xinjiang bowuguan kaogubu
- 2000a 「吐魯番縣阿斯塔那第二次發掘簡報」『新疆文物』3-4, pp.1-65.
- 2000b 「吐魯番縣阿斯塔那第三次發掘簡報」『新疆文物』3-4, pp. 66-83.
- 新疆博物館考古隊 Xinjiang bowuguan kaogudui
- 1978 「吐魯番哈喇和卓古墓群發掘簡報」『文物』1978-6, pp. 1-14.
- 新疆吐魯番地區文管所 Xinjing Tolufan-diqu Wenguansuo
- 1983 「吐魯番出土十六國時期的文書」『文物』1983-1, pp. 19-25.
- 新疆維吾爾自治區博物館 Xinjiang weiwuer zizhiqu bowuguan
- 1960 「新疆吐魯番阿斯塔那北區墓葬發掘簡報」『文物』1960-6 北京 pp. 13-21(1983, 再錄『新疆考古三十年』pp.70-79).
- 1972a 「吐魯番縣阿斯塔那一哈拉和卓古墓群清理簡報」『文物』1972-1, pp. 8-29, 圖版 9

- (1983, 再録『新疆考古三十年』 pp. 91-101).
- 1972b 「吐魯番阿斯塔那 363 号墓發掘簡報」『文物』 1972-2, pp. 7-9, 図 1-8 (1983, 再録『新疆考古三十年』 pp. 103-105).
- 1973 「吐魯番阿斯塔那一哈拉和卓古墓群發掘簡報」(1963-1965)『文物』 1973-10, pp. 7-27 (1983, 再録『新疆考古三十年』 pp. 79-91).
- 新疆維吾爾自治区博物館・出土文物展覽工作組 Xinjiang weiwuer zizhiqu bowuguan・Chutu wenwu zhanlan gongzuozu
- 1972 「“絲綢之路”上發現的漢唐織物」『文物』 1972-3, pp. 14-19, 図版 9-11.
- 新疆維吾爾自治区博物館・西北大学歴史系考古專業 Xinjiang weiwuer zizhiqu bowuguan・Xibeidaxue lishixi kaoguzhuanye
- 1975 「1973 年吐魯番阿斯塔那古墓群發掘簡報」『文物』 1975-7, pp. 8-18, 図版 4-6.
- 新疆文物考古研究所 Xinjiang wenwu kaogu yanjiusuo
- 2000a 「吐魯番阿斯塔那第十次發掘簡報」『新疆文物』 3-4, pp. 84-167.
- 2000b 「吐魯番阿斯塔那第十一次發掘簡報」『新疆文物』 3-4, pp. 168-214.
- 許 新国 Xu Xinguo
- 2000 「都蘭県吐蕃(チベット)古墳群の發掘と研究」大阪経済法科大学, 北京大学考古系(編)『7・8 世紀の東アジア』大阪, 大阪経済法科大学, pp. 13-22.
- 2002 「中国青海省都蘭吐蕃墓群的發現・發掘与研究」『シルクロード学研究』 14, (中国・青海省におけるシルクロードの研究) 奈良, シルクロード学研究センター, pp.212-225.
- 許 新国・趙 豊 Xu Xinguo・Zhao Feng
- 1991 「都蘭出土絲織品初探」『中国歴史博物館館刊』 1991-15,16, pp. 63-96, 図版 1-5.
- 楊 博文(校訂・訳注) Yang Bowen
- 1996 『諸蕃志校釈』北京, 中華書局.
- 殷 福蘭 Yin Fulan
- 2006 「吐魯番出土紡織品対称紋様の芸術風格探求」新疆吐魯番地区文物局(編)『吐魯番学研究』 第二屆, 第二屆吐魯番学國際學術研討會論文集, 上海, 上海辞書出版社, pp. 294-301.
- 殷 晴 Yin Qing
- 2001 「絲綢之路与西域經濟—对新疆開発史上若干問題的思考」『吐魯番学研究』 2000-1, pp. 92-101.
- 于 志勇 Yu Zhiyong
- 1999 「ニヤ遺跡出土の『五星出東方利中国』錦織について」中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊(編)『中日・日中共同尼雅遺跡学術調査報告書』烏魯木齐, 京都, 中日・日中共同ニヤ遺跡学術調査隊, pp. 320-326.
- 張 湘雯 Zhang Xiangwen
- 1988 「彩図説明」「概論」『中華五千年文物集刊』織繡篇 1, 台北, 中華五千年文物集刊編

- 委員会, pp. 98-175.
- 1991 「敦煌写本卷軸中所見特殊紡織品初探」『中華民國建国八十年, 中国芸術文物討論会論文集』器物組第一本, 故宮博物院, pp.369-397.
- 1992 「彩図説明」「概論」『中華五千年文物集刊』織繡篇 2, 台北, 中華五千年文物集刊編集委員会, pp. 84-187.
- 趙 承沢 Zhao Chengze
- 1977 「談福州, 金壇出土的南宋織品和當時的紡織工藝」『文物』1977-7, pp. 28-32.
- 趙 豐 Zhao Feng
- 1992a 『絲綢藝術史』杭州, 浙江美術學院出版社.
- 1992b 『唐代絲綢与絲綢之路』西安, 三秦出版社.
- 1999 『織繡珍品』香港, 芸沙堂.
- 2004 『遼代絲綢』香港, 沐文堂美術出版社.
- 2005a 「新疆地產綿綫織錦研究」『西域研究』2005-1, pp. 51-59.
- 2005b 『中国絲綢藝術史』北京, 文物出版社.
- 趙 豐 (編) Zhao Feng (ed.)
- 2002 『染織品考古新發現』香港, 芸沙堂.
- 趙 豐·齊曉光 Zhao Feng·Qi Xiaoguang
- 1996 「耶律羽之墓絲綢中的团窠和团花图案」『文物』1996-1, pp. 33-35.
- 趙 豐·于 志勇 Zhao Feng·Yu Zhiyong
- 2000 『絲綢之路沙漠王子遺宝展』杭州, 中国絲綢博物館.
- 趙 評春·趙 鮮姬 Zhao Pingchun·Zhao Xianji
- 2001 『金代絲織藝術』北京, 科学出版社.
- 鎮江市博物館·金壇縣文化館 Zhenjianshi bowuguan·Jintanxian wenhuaguan
- 1977 「江蘇金壇南宋周瑀墓發掘簡報」『文物』1977-7, pp. 18-27.
- 鍾 広言 (訳注) Zhong Guangyan
- 1978 宋應星 (撰) 『天工開物』香港, 中華書局.
- 鐘 遐 Zhong Xia
- 1976 「从蘭溪出土的棉毯談到我國南方棉紡織的歷史」『文物』1976-1, pp. 89-93.
- 周 迪人·周 暘·楊 明 Zhou Diren·Zhou Yang·Yang Ming
- 1999 『德安南宋周氏墓』南昌, 江西人民出版社.
- 周 偉州 Zhou Weizhou
- 1980 「試論吐魯番阿斯塔那且渠封戴墓出土文物」『考古与文物』1980-1, pp. 99-102.
- 竺 敏 Zhu Min
- 1972 「吐魯番新發現的古代絲綢」『考古』1972-2, pp. 28-31, 図版 5-10.
- 朱 新予 (主編) Zhu Xinyu
- 1992 『中国絲綢史』北京, 紡織工業出版社.

欧文

Allsen, Th. T.

1997 *Commodity and Exchange in the Mongol Empire*. Cambridge University Press.

Arberry, J.

1964 *The Koran Interpreted*. London, Oxford University Press (The world's classics).

Ascenzi, A. / Bianco, P. / Nicoletti, R. / Ceccarini, G. / Fornaseri, M. / Graziani, M. R. / Rosicarello, R. / Ciuffarella, L. / Granger-Taylor, H.

1996 The Roman Mummy of Grottarossa. Human Mummies. In: K. Spinder, H. Wilfing, E. Rastbichler-Zissernig, D. zur Nedden and H. Nothdurfter (ed.) *A Global Survey of their Status and the Techniques of Conservation*. Springer Verlag, Wien, pp. 205-217.

Azarpay, Guitty

1981 *Sogdian Painting—The Pictorial Epic in Oriental Art*. Contributions by A. M. Belenitskii, B. L. Marshak, and Mark J. Dresden, University California Press, Berkeley, Los Angeles, London.

Barber, E. J. W.

1991 *Prehistoric Textiles*. Princeton University Press.

Беленицкий А. М. и Бентович И. Б.

1961 Из Истории Среднеазиатского Шелкоткчества. *Советская Археология* No 2, Москва, pp. 66-78.

Bender-Jorgensen, L.

2000 Mons Claudianus Textile Project. *Archéologie des textiles des origines au V<sup>e</sup> siècle*. Monique Mergoïl, pp. 253-263.

Benveniste, E.

1940 *Textes sogdiens. Édités, traduits et commentés*. Librairie Orientaliste Paul Geuthner, Paris.

Bhattacharya-Haesner, C.

2003 *Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum für Indische Kunst, Berlin*. Dietrich Reimer Verlag, Berlin.

Blair, S. S.

1998 *Islamic Inscriptions*. Edinburgh, Edinburgh University Press.

Boyle, J. A. (ed.)

1968 *The Cambridge History of Iran*. Vol. 5 (The Saljuq and Mongol Periods), Cambridge University Press. (Repr.: Cambridge, New York 1993)

Britton, N. P.

- 1938 *A Study of Some Early Islamic Textiles*. Boston, Museum of Fine Arts.
- Burnham D. K.
- 1980 *Warp & Weft: Textile Terminology*. Royal Ontario Museum, Canada (US edition *Warp & Weft, A Dictionary of Textile Terms*. Charles Scribner's Sons, New York 1981)
- CIETA
- 1973 *Vocabulaire français*. CIETA, Lyon.
- Ciszuk, M.
- 2000 Taquétés from Mons Claudianus: analyses and reconstruction, *Archéologie des textiles des origines au V<sup>e</sup> siècle*, Monique Mergoïl, pp. 265-275.
- Compareti, M.
- 2000 Iranian Divinities in the Decoration of Some Duian and Astana silks. *Annali di ca' Foscari*, XXXIX, Rivista della Facoltà di Lingue e Letterature Straniere dell'Università di Venezia, pp.31-368
- de Goeje, M. J. (ed.)
- 1967 Ibn Khurdādhbih, *Kitāb al-Masālik wa'l-Mamālik*. In: Bibliotheca Geographorum Arabicorum, VI, E. J. Brill, Leiden. (1st. ed.: 1889)
- De Jonghe, D. et Tavernier, M.
- 1981 Les damasses de Palmyre. *Bulletin de Liaison du CIETA*, no. 54, Lyon, pp. 20-52.
- Dode, Zvezdana
- 2005 Determination of Chinese, Iranian and Central Asian Artistic Tradition in the décor of Silks of Mongolian Period from the Golden Horde Legacy in Ulus Djuchi. 『絲綢之路与元代芸術』 国際学術討論会論文集, 香港, 芸紗堂 / 服飾出版 pp. 265-277.
- Доде, З. В.
- 2006 Шелковые Ткани. *Погребения Знати Золотоордынского Времени в Междуречье Дона и Сала VI*. Москва, Памятники Истрической Мысли, pp. 126-167.
- Duff, J. D. (trans.)
- 1969 Lucan, *The Civil War*. Harvard University Press, London.
- Eastwood, G.
- 1982 Textiles. In: D. S. Whitcomb and J. H. Johnson (ed.) *Quseir al-Qadim 1980*. American Research Center in Egypt, Udena Publications, Malibu, pp. 285-326.
- Елкина, А. К.
- 1986 О Тканях и Золотном Шитье из Соколовой Могилы. In: Г. Т. Ковпаненко, *Сарматское Погребение I в н. э., на Южном Буге*. Чаукова Думка, Киев, pp. 132-135.
- Falke, Otto von
- 1913 *Kunstgeschichte der Seidenweberei*. 2vols., Ernst Wasmuth, Berlin.
- Flanagan, J. F.
- 1917 The Origin of the Drawloom in the Making of Early Byzantine Silks. *Burlington Magazine*

- XXXV, pp. 167-172 .
- Frye, R. N. (trans.)
- 1954 Narshakhī, *The History of Bukhara*. Cambridge, The Mediaeval Academy of America, Massachusetts.
- Fujii, H., Sakamoto, K., Ichihasi, M.
- 1989 Textile from at-Tar Caves, Part I: Cave 12, Hill C. *Al-Rafidan X*, Tokyo, pp.109-165, pl. 27-37.
- 1996 Textile from at-Tar Caves, Part II-(4): Cave 16, Hill C. *Al-Rafidan XVII*, Tokyo, pp.145-173, pl. 1-12.
- Geijer, A.
- 1964 A silk from Antinoë and the Sasanian Textile Art. *Orientalia Suecana*, XII(1963), pp. 3-36.
- Герцигер, А.
- 1973 Античные Ткани в Собрании Эрмитажа. *Памятники Античного Прикладного Искусств*. Гос Эрмитаж, Ленинград, pp. 71-100.
- Granger-Taylor, H.
- 1987 Two Silk Textils from Rome and Some Thoughts on the Roman Silk Weaving Industry. *Historic Textiles. CIETA*, Bulletin-no.65, Lyon, pp. 13-31.
- Hinds, Martin (trans.)
- 1990 al-Tabarī, *The History of al-Tabarī*, Vol. XXIII. State University of New York Press, Albany.
- Иерусалимская А. А.
- 1967 О Северокавказском «Шолковом Пути» в Раннем Средневековье. *Советская Археология* 1967-2, pp. 55-78.
- 1972а Новая Находка Так Называемого Сасанидского Шолка с Сенмурвами. *Сообщения Государственного Эрмитажа* 34, pp. 11-15.
- 1972б К Сложению Школы Художественного Шелккчестова в Согде. *Средняя Азия и Иран*, Аврора, Ленинград, pp. 5-56.
- 1978 Аланский Мир на «Шелковом Пути». *Культура Востока*, Аврора, Ленинград, pp. 151-162.
- Ierusalimskaja, A. A.
- 1996 *Die Gräer der Močvaja Balka*. Editio Maris, München.
- Jarring, G.
- 1992 *Garments from Top to Toe*. Publications of Royal Society of Letters at Lund, Lund.
- Kageyama, Etyuko 影山悦子
- 2006 Use and Production of Silk in Sogdiana. *Ēran ud Anēran*. Studies Presented to Boris Il'ič Maršak on the Occasion of His 70<sup>th</sup> Birthday, Libreria Editrice Cafoscarina, Venezia, pp.

317-332.

Klyashtorny, Sergey G.

- 2006 Ancient Turk Rock Inscriptions in the Talass Ala-Too. A Sogdian word in an Old Turk Inscription. *Ēran ud Anēran*. Studies Presented to Boris Il'ič Maršak on the Occasion of His 70<sup>th</sup> Birthday, Libreria Editrice Cafoscarina, Venezia, pp. 367-370.

Lamm, C. J.

- 1937 *Cotton in Mediaeval Textiles of the Near East*. Librairie Orientaliste Paul Geuthner, Paris.

Laufer, B.

- 1978 *Sino-Iranica*. Ch'eng Wen Publishing Company, Taipei. (1st ed.: 1919)

Le Coq, A. von

- 1913 *Chotscho*. Facsimile-Wiedergaben der wichtigeren Funde der Ersten Königlich Preussischen Expedition nach Turfan in Ost.-Turkistan. Berlin. (Reprint: Graz 1979)

Ligeti, L.

- 1969 Glossaire supplémentaire au vocabulaire sino-ouïgour du Bureau des Traducteurs. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, XXII, (1) pp. 1-49; (2) pp. 191-243.

Li Wenying

- 2006 Textile of the Second to Fifth Century Unearthed from Yingpan Cemetery. *Central Asian Textiles and Their Contexts in the Early Middle Ages*. Abegg-Stiftung, Riggisberg, pp. 243-264.

Liu, Xinru

- 1998 *Silk and Religion*. Oxford University Press, Delhi. (1st ed.: Oxford University Press 1996)

Лубо-Лесниченко, Е. И.

- 1961 *Древние Китайские Шелковые Ткани и Вышивки V в до н. э. - III в н. э. В Собрании Государственного Эрмитажа*. Государственный Эрмитаж, Ленинград.
- 1984 Могильник Астана. *Восточный Туркестан и Средняя Азия*, Наука, Москва, pp. 108-120.
- 1993 Western Motifs in the Chinese Textiles of the Early Middle Ages. *National Palace Museum Bulletin* XXVIII, pp.1-28.
- 1994 *Китай на Шелковом Пути*. Наука, Москва.
- 1997-1998 Dunhuang Textiles. *Dunhuang Art Relics Collected in the State Hermitage Museum of Russia*, I, II. (俄藏敦煌艺术品) 上海, 上海古籍出版社, pp. 27-32, 71-80, pls. 164-217.

Лыкошнь, Н. (trans.)

- 1897 Мухаммадь Наршахи, *История Бухры*. Типо-Литография, Ташкенть.

- Mackie, Louise W.
- 1989 Textiles. In: W. Kubiak and G. T. Scanlon (ed.) *Fustāt Expedition Final Report*. The American Research Center in Egypt, Eisenbrauns, Winona lake, pp. 81-97.
- Малявкин, А. Г.
- 1974 *Материалы по Истории Уйгуров в IX-XIIвв.* (The documents concerning the history of Uighur Kingdom), Наука, Новосибирск.
- Marshak Boris I.
- 2006 The so-called Zandanījī Silks: Comparisons with the Art of Sogdia. *Central Asian Textiles and Their Contexts in the Early Middle Ages*. Abegg-Stiftung, Riggisberg, pp. 49-60
- Martiniani-Reber, M.
- 1986 *Lyon, musée historic des tissus, Soieries sassanides, coptes et byzantines Xe-Xie siècles*. Editions de la réunion des musée nationaux, Paris.
- Muthesius, Anna
- 1997 *Byzantine Silk Weaving AD 400 to AD 1200*. Verlag Fassbaender, Vienna.
- Otavsky, Karel
- 1998a Stoff von der Seidenstrasse: Eine neue Sammlungsgruppe in der Abegg-Stiftung, *Entlang der Seidenstrasse*. Abegg Stiftung, Riggisberg, pp. 13-41.
- 1998b Zur Kunsthistorischen Einordnung der Stoffe. *Entlang der Seidenstrasse*. Abegg Stiftung, Riggisberg, pp. 119-214.
- Pelliot, P.
- 1927 Une ville musulmane dans la Chine du Nord sous les Mongols. *Journal Asiatique*, 1927, oct.-déc., pp. 261-279.
- Pfister, R.
- 1934 *Textiles du Palmyre*. Paris.
- 1937 *Nouveaux textiles du Palmyre*. Paris.
- 1940 *Textiles du Palmyre*. Paris.
- Pfister, R. and Beringer, L.
- 1945 *The excavation at Dura-Europos; Final Report IV; part II*, New Haven.
- Pinks, E.
- 1968 *Die Uiguren von Kan-chou in der frühen Sung-Zeit (960-1028)*. (Asiatische Forschungen, Band 24), Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- Pope, U. & Ackerman, P.
- 1964 *A Survey of Persian Art*. Meiji-Shobō , Tokyo, (Original edition, Oxford University Press, 1938-9).
- Powers, D. S. (trans.)
- 1989 al-Tabarī, *The History of al-Tabarī*, Vol. XXIV. State University of New York Press, Albany.

- Rackham, H. (trans.)  
 1969 Pliny, *Natural History*. vol. II. Harvard University Press, London.
- Raschmann, S. C.  
 1995 *Baumwolle im türkischen Zentralasien: Philologische und wirtschaftshistorische Untersuchungen anhand der vorislamischen uigurischen Texte*. Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.
- Riboud, K.  
 1975 Further Indication of Changing Techniques in Figured Silks of the Post-Han Period (A.D. 4th to 6th Century). *CIETA* 41-42, pp. 13-40.  
 1976 A newly Excavated Caftan from the Northern Caucasus. *Textile Museum Journal* IV, The Textile Museum, Washington, D. C., pp. 21-40.  
 1983 Brief Comments on the Depiction of the Simurgh. *Bulletin*, Nos. 4, 5 and 6, National Museum, New Delhi, pp. 107-113, pl. 92-110.  
 1995 A Cultural Continuum, A New Group of Liao & Jin Dynasty Silks. *Hali* 1995-8, 9, pp. 92-105, 119-120.
- Riboud, K. & Vial, G.  
 1970 *Tissus de Touen-houang*. L'Académie des Inscriptions et Belles-lettres, Paris.  
 1981 Quelques considérations techniques concernant quatre soieries connues. *Documenta Textilia*, (Festschrift für Sigrid Müller Christensen). Deutscher Kunstverlag, pp. 129-155.
- Rider, M. L.  
 1983 *Sheep & Man*. Duckworth, London.
- Rodwell, J. M.  
 1971 *The Koran*. Dent & Son's LTD, London (Everyman's library).
- Rong Xinjiang 荣新江  
 2003 Chinese Inscriptions on the Turfan Textiles in the Museum of Indian Art, Berlin, In: Chhaya Bhattacharya-Haesner (ed.), *Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum für Indische Kunst, Berlin*. Appendix II, Dietrich Reimer, Verlag Berlin, pp. 475-476.
- Rudenko, S. I.  
 1970 *Frozen Tombs of Siberia*. University of California Press, Berkeley & Los Angeles.
- Савченко Е. И.  
 1980 Исследование Могильника Мощевая балка. *Археологические Открытия*. pp. 116-117.
- Sakamoto, Kazuko 坂本 和子  
 2004a Two Fragments of Luxury Cloth Discovered in Trufan: Evidence of Textile Circulation from West to East. D. Durkin-Meisterernst et al (ed) *Trufan Revisited—The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*. Dietrich Reimer Verlag, Berlin, pp.

297-302.

2004b Textile excavated in Xinjiang by the German Expeditions. *BAOM*, Tokyo, pp. 17-44.

Sakamoto, Kazuko & Kimura, Mitsuo 坂本 和子 & 木村 光雄

2003 Data of Banners and Banner Fragments. (Analysis of Textiles from Central Asia.) In: Chhaya Bhattacharya-Haesner (ed.), *Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum für Indische Kunst, Berlin*. Appendix IV, Dietrich Reimer, Verlag Berlin, pp. 491-496.

Schmit-Colinet, A.

1995 *Palmyre*. Mainz

Schmit-Colinet, A., Stauffer, A. & Al-As'ad, Khaled

2000 *Die Textilien aus Palmyra*. Philipp von Zabern, Mainz.

Schröter, B.

2003 Central Asian Temple Banners: Techniques of Production, Ornamentation, and Embroidery. In: Chhaya Bhattacharya-Haesner (ed.), *Central Asian Temple Banners in the Turfan Collection of the Museum für Indische Kunst, Berlin*. Appendix III, Dietrich Reimer Verlag, Berlin, pp. 477-489.

Serjeant, R. B.

1942 Material for a History of Islamic Textiles up to the Mongol Conquest. *Ars Islamica*, vol. 9, pp. 54-92.

1951 Material for a History of Islamic Textiles up to the Mongol Conquest. *Ars Islamica*, vols. 15 - 16, pp. 29-85. (Repr.: *Islamic Textiles, Material for a History up to the Mongol Conquest*. Beirut 1972)

Sheng Angela

1998 Innovations in Textile Techniques on China's Northwest Frontier, 500-700 AD. *Asia Major* XI, part 2, pp. 117-160.

Shepherd, D. G.

1981 Zandaniji Revisited. In: *Documenta Textilia*. (Festschrift für Sigrud Müller Christensen), Deutscher Kunstverlag, pp. 105-122.

Shepherd D. G. & Henning W. B.

1959 Zandanījī Identified? *Aus der Welt der islamischen Kunst, Festschrift für Erust Kühnel*. pp. 15-40.

Stein, A.

1921 *Serindia* I-IV. Oxford University Press. (Repr.: Delhi 1980-1981)

1928 *Innermost Asia* III. Oxford University Press. (Repr.: New Delhi 1981)

Sylwan, V.

1949 *Investigation of Silk from Edsen-gol and Lop-nor*. Stockholm.

Trombert, Éric

- 1996 Textiles et tissus sur la Route de la Soie. Éléments pour une géographie de la production et des échanges, *La Sérinde, Terre d'Échanges, Art, Religion, Commerce du Ier au Xe siècle*. La Documentation Française, Paris, pp. 107-120.

Vial, Gabriel

- 1976 Technikal Analysis. *Textile Museum Journal* IV, The Textile Museum, Washington, D. C., pp. 40-42.

Винокулова М.П.

- 1957 Ткани из Замка на горе Муг. *Известия Отделения Общественных Наук* 14, Издательство АН Таджикской ССР, pp.17-32.

Vogelsang-Eastwood, G. M.

- 1990 *Resist Dyed Textiles from Quseir al-Qadim Egypt*. A. E.D.T.A., Paris.

Wardwell A. E.

- 1988-1989 Panni Tartarici = Eastern Islamic Silks Woven with Gold and Silver (13th-14th Centuries). *Islamic Art* 3, pp. 95-173.

Watt, J. C. Y. & Wardwell, A. E. & Rossabi, M.

- 1997 *When Silk Was Gold, Central Asian and Chinese Textiles*. The Metropolitan Museum of Art, New York.

Weibel, Adèle Coulin

- 1972 *Two Thousand Years of Textiles*. Hacker Art Books, New York.

Wild, J. P.

- 1967 Two Technical Terms used by Roman Tapestry-weavers. *Philologus: Zeitschrift für das Klassische Altertum*, 111, pp. 151-155.
- 1984 Some Early Silk Finds in Northwest Europe. *Journal*, 23, The Textile Museum, Washington, pp. 17-23.

Wu, Min 武敏

- 1996 Study on Some Ancient Wool Fabrics Unearthed in Recent Years from Xinjiang of China. *Al-Rafidan* vol. XVII, pp. 1-20, pl. 1-7.
- 2006 The Exchange of Weaving Technologies between China and Central and Western Asia from the Third to the Eighth Century Based on New Textile Finds in Xinjiang. *Central Asian Textiles and Their Contexts in the Early Middle Ages*. Abegg-Stiftung, Riggisberg, pp. 211-242.

Yokohari, Kazuko 横張 和子

- 1991 An Essay on the Debut of the Chinese Samit Based on the Study of Astana Textiles. *Bulletin of the Ancient Orient Museum*, Vol. XII, pp. 41-101.

Yule, H.

- 1903 *The Book of sir Marco Polo*, Vol.1. John Murray, London.
- Zhao Feng 趙豐
- 1999 Satin Samite: A Bridge from Samite to Satin. *Bulletin of CIETA* 76, pp. 46-63.
- 2000 The Chronological Development of Needlelooping Embroidery. *Orientalia* vol. 31-2, pp. 44-53.
- 2004 *Evolution of Textiles along the Silk Road, China: Dawn of a Golden Age*. The Metropolitan Museum Art, New York, pp. 66-77.
- Zieme, P.
- 1995 Philologische Bemerkungen zu einigen alttürkischen Stoffnamen. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, XLVIII (3), pp. 487-494.

## 染織用語解説

(あいうえお順)

網振れ (あみもじれ)

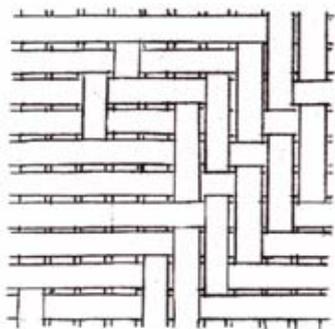
羅, 参照

綾 (あや)

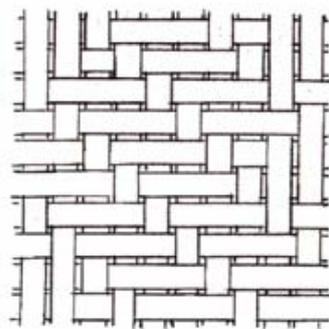
綾地に浮き糸や綾流れで文様が表された織物 (ただし史料用語ではなく現代中国の織物用語, 第4編第1章第4項参照). 日本では平地に浮き糸や綾流れの平地綾もこれに含まれる.

綾地綾 (あやじあや)

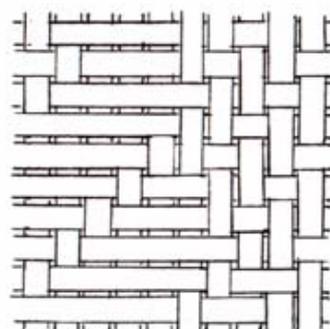
地が綾流れ, 文は不規則な浮きで表された綾地浮文綾と地も文様も規則的な浮きの綾流れで表される綾地綾文綾がある. 綾地綾文綾には綾流れの方向が異なる異向綾文綾と同じ方向の同向綾文綾がある.



綾地浮文綾



綾地異向綾文綾



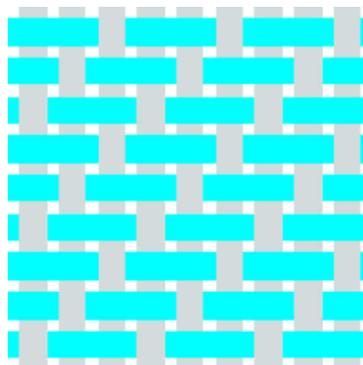
綾地同向綾文綾

綾地綾文綾 (あやじあやもんあや) 綾地綾参照

綾地浮文綾 (あやじうきもんあや) 綾地綾参照

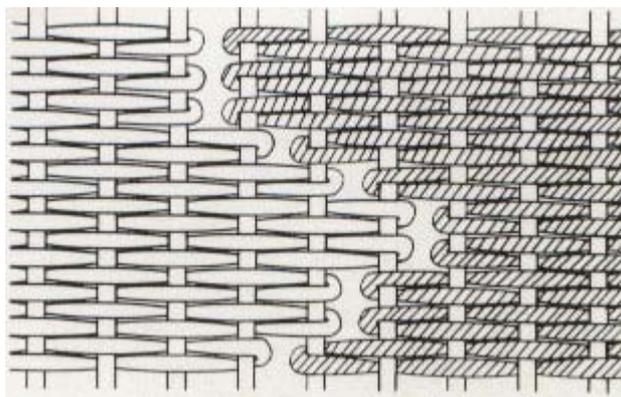
綾組織 (あやそしき)

斜文組織ともいう. 緯糸を通す毎にすべての組織点を経1本分右または左方向に移動して出来る斜め方向の斜文線 (綾流れ) によって特徴づけられる組織. 最低3枚の綜紵を必要とする.



1/2 綾組織

綾組織経錦（あやそしきたてにしき）	経複様綾組織で織られた織物。
綾組織緯錦（あやそしきよこ/ぬきにしき）	緯複様綾組織で織られた織物。
綾流れ（あやながれ）	斜文織や綾において斜めに流れる斜文線。
印花（いんか）	文様を型でプリントしたもの。
印金（いんきん）	文様の型に糊あるいは膠など接着剤を塗り，その接着剤の上に金銀箔や金銀粉をのせ文様からはみ出た分を除き文様を表す。中国では銷金という。
浮き（うき）	経糸が，連続する2越以上の緯糸の上をまたいだ状態，あるいは緯糸が，連続する2本以上の経糸の上をまたいだ状態。
浮織（うきおり）	地の組織とは別に，耳から耳まで通される通し絵緯で文様が表される組織あるいは織物で緯込みである。
絵緯（えぬき）	地緯に対して文様を表すための緯糸をいう。
母経（おもだて, binding warp）	役割の違う数種の経糸をもつ織物において，ここでは緯錦において，緯糸と組織して地をつくる経糸。（緯複様平組織・緯複様綾組織の図を参照）
母緯（おもぬき, binding weft）	役割の違う数種の緯糸をもつ織物において，ここでは経錦において，経糸と組織して地をつくる緯糸。（経複様平組織・経複様綾組織の図を参照）
開口（かいこう）	経糸の上下運動で，それによって経糸は上下2面に開かれ，その間に杼が通される。
緯糸（かくし）	綴織のこと，多色文様の織物の一つで各緯糸は，それぞれ文様モチーフに必要な範囲に限って用いられ経糸を覆う。



綴織組織

陰経（かげだて, main warp） 役割の違う数種の経糸をもつ織物において，ここでは緯

	錦において、文様に関わる緯糸を表に出す役割をする経糸。(緯複様平組織・緯複様綾組織の図を参照)
陰緯 (かげぬき, main weft)	役割の違う数種の緯糸をもつ織物において、ここでは経錦において文様に関わる経糸を表に出す役割をする緯糸。(経複様平組織・経複様綾組織の図を参照)
籠振れ (かごもじれ)	羅, 参照
窠間幅 (かまはば)	文様が緯糸方向に繰り返されるその一単位.
綺 (き)	平地に綾流れで文様が表された織物 (ただし史料用語ではなく現代中国の織物用語).
夾纈 (きょうけち)	2枚の板に文様を彫り、布をたたみ、布の両面をその板で夾み、浸染した布.
絹 (けん)	絹糸で平組織に織られた織物. 素絹は無文で白地のもの
縑 (けん)	ふたこ絹といわれ経糸か緯糸が、2本引き揃えて平組織に組織された織物とされる. ただし、「縑」と記された漢代の出土織物は経糸・緯糸とも1本の平組織である.
絞纈 (こうけち)	糸で縫って絞り、または糸で括り防染して染めた布.
刻絲 (こくし)	緯糸と同じ
地組織 (じそしき)	1. 織物の地部分を構成している組織で、文様部分とはっきり区別される. 2. 経または緯の浮きの下地となる組織.
地経 (じだて)	地組織を構成する経糸.
地緯 (じぬき)	地組織を構成する緯糸.
紗 (しゃ)	透かし目のある織物で、平組織で粗く織ったものと2本単位3本単位の縵れ組織で織ったものがある. 日本では平組織のものを含まない.



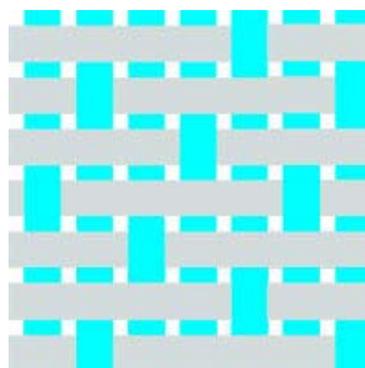
紗組織 (2本単位)



紗組織 (3本単位)

(佐々木 1976, 図 28・29)

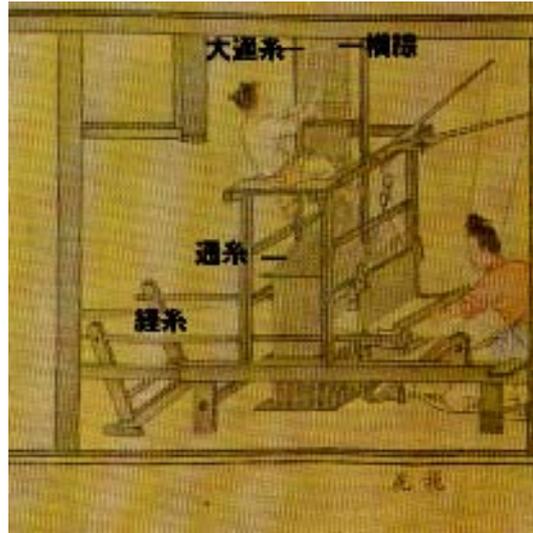
斜文織(しゃもんおり)	1/2, 2/2, 1/3 などの斜文組織で, 無地で無文と有文があり, 有文は山形, 方形の昼夜(表裏が逆の浮き文様)など幾何文様の織物.
斜文組織(しゃもんそしき)	綾組織と同じ.
繡(しゅう)	刺繡あるいは刺繡した布.
縺子組織(しゅすそしき)	綾流れのように浮きが組織点1つ移動して連続するのではなく, 浮きが飛んでいる組織. 最低5枚の綜紵を必要とする.



1/5 縺子組織

上下打ち返し(じょうげうちかえし)	文様に応じて経糸が通された綜紵 ABCDEF を FEDCBA と逆に操作すること. 文様は経糸方向に上下対称となる.
織成(しょくせい)	綴織の組織の緯糸1本毎に全幅にわたって緯糸が通される織物.
綜紵(そうこう)	上下2本の綜紵棒に糸を渡し並べられ, 経糸を通す目のあるものか, 綜紵棒に固定され, 経糸を通す目のあるもの一式. 材料は糸や木などが使われる. その目に経糸が組織, 文様に応じて通される.
双面錦(そうめんきん)	表の地色が裏の文様の色となり, 表の文様の色が裏の地色となる錦. 二色錦, 風通などをそのように呼ぶことがある.
空引機(そらびきばた)	紋織物を織る機. 機は織り手と引き手の二人によって操作される. 紋綜紵に通され水平に張られた経糸は, まず綜紵に連結した糸(通糸)によって文様に応じて一つに束ねられる. 次にその束に連結し, 垂直に配置された糸(大通糸)を, 横綜(よこべ)によって引くことで文様

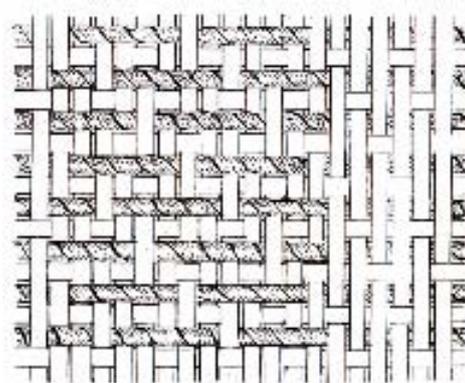
が得られる。横綜は空引機においては、他の機における綜紵の役割をする。空引機においては、各大通糸に対応する各釜（1文様）の通糸と連結することによって自動的に織り幅の方向における文様の繰返しが出来る。織物の丈方向の繰返しは大通糸に取り付けられた横綜の操作によって得られる。



空引機の図

(『文物』1984-10, カラー図版 宋『蚕織図』文字は筆者が加筆)

経綾地絵緯綾とじ裏浮錦 (たてあやじえぬきあやとじうらうきにしき)  
 経の2/1綾地に絵緯を半経使い(経糸1本置きに)による地絡みの1/2緯綾で抑え, 織り出した組織である。絵緯は裏で浮いている(トゥルフアン出土染織資料の場



経綾地絵緯綾とじ裏浮錦

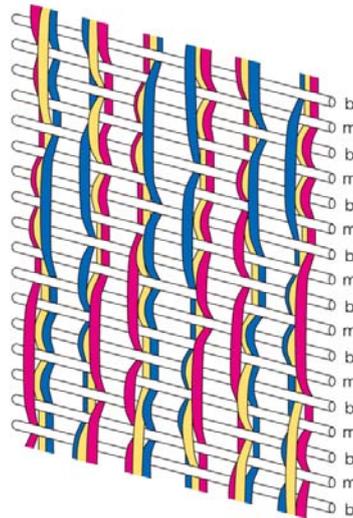
合). 絵緯の一つに金糸が用いられた場合地絡み金欄と呼ばれる.

経綾地絵緯固文錦 (たてあやじえぬきこもんにしき) 経の 2/1 綾地に文様が絵緯で表され, 絵緯は地絡み (経糸が組織する) の 1/5 綾で織り出される組織で経て込みである. 絵緯に金糸が用いられた場合, 地絡み金欄と呼ばれる.

経込み (たてこみ) 単位間の経糸数が緯糸数より大であること.

経錦 (たてにしき) 経糸によって文様が表された複様織物. 経複様平組織・経複様綾組織参照.

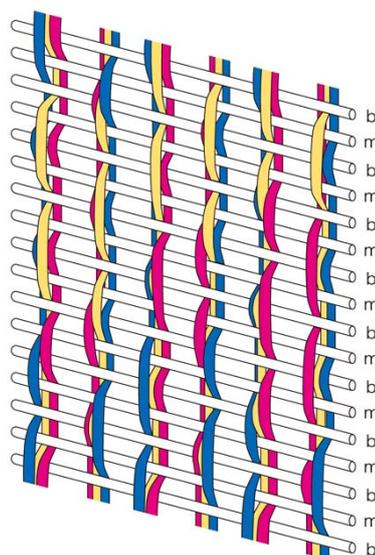
経複様綾組織 (たてふくようあやそしき) 表となる面が経の綾組織によって完全に覆われている織物で, この組織は地と文様を作るために配列した数色の経で作られている. 色経の一組を経糸 1 本とみなすと, 緯糸の半数 (母緯) は 2/1 の綾を作っている. もう半数の緯糸 (陰緯) は専ら経糸を選び分ける. すなわちそれぞれの色経を必要な所だけ表に出し, その他の色の経糸を裏にまわす. その結果, 経糸は 2 層となり, 表では経糸は最大 5 越浮き, 経糸を分ける緯糸を完全に覆っている. 綜統は紋綜統と地綜統に分かれ, 各色経は紋綜統に, 経糸の各組は地綜統に通されている.



**b: binding weft (母緯) m: main weft (陰緯)**

経複様綾組織

経複様平組織（たてふくようひらそしき）色違いの経糸一組が緯糸の半数（母緯）と平組織に組織する．もう半数の緯糸（陰緯）は経糸を文様に応じて表か裏かに仕分ける．すなわち陰緯は文様に必要な場所で色経のうち1色だけ表に出し，その他の色経を裏に沈める．従って経糸は2層になる．経糸は表も裏も最大で3越にまたがり，その経浮きが互い違いに配されて経糸を仕分ける緯糸を完全に覆ってしまう．綜紬は紋綜紬と地綜紬に分かれ，各色経は紋綜紬に，経糸の各組は地綜紬に通されている．



**b: binding weft (母緯) m: main weft (陰緯)**

経複様平組織

単層（たんそう）

織物の経糸あるいは緯糸が，全体を通して上下に層をなさない状態．2層または複様でないこと．

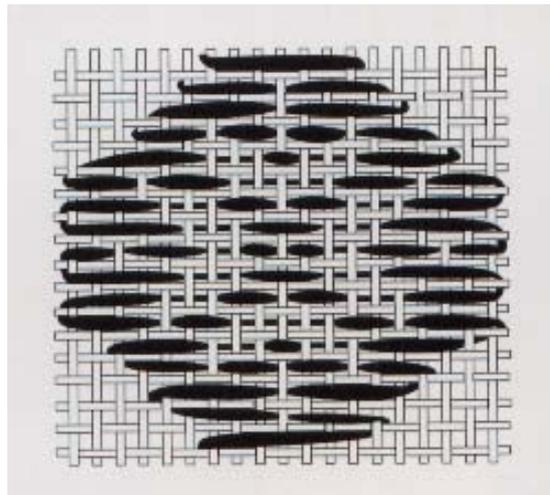
綴織（つづれおり）

多色文織物の一つ．経糸と緯糸は1:1に交錯し，単層である．緯糸は織物の耳から耳まで通されることなく，各モチーフの色違いの緯糸は文様に依じてそれぞれ途中で引き返される．引き返しを繰り返しながら文様が表される．引き返しの箇所では，はつり目が出来るので，それに対処する幾つかの方法がある．

紡ぎ糸（つむぎいと）

繊維には絹のような長繊維と棉や毛のような短繊維が

	り，短繊維を糸にする場合，撚りをかけて短繊維をつなぎあわせ糸にする．そのようにして出来た糸を紡ぎ糸という．絹の場合も蚕が飛び出た後の繭や二つひつついた繭は，一般に真綿にされ，真綿から糸を紡ぎ出し，紡ぎ糸を作る．
跳び杼（とびどう）	織り初めから通される緯糸ではなく，必要などころにのみ通される緯糸．
斜子技法（ななこぎほう）	2-2 技法ともいわれ，経糸 2 本，緯糸 2 越のハツリに基づく技法．
ニードルループ	編み針で作られた連続した環状のループ．
錦（にしき）	多色で文様のある織物．縞，チェックを除く．
縫取り（ぬいとり）	文様を表す技法の一つで，緯糸方向において，地緯とは別に絵緯が文様の幅以内で折り返され文様が表される技法．
縫取織（ぬいとりおり）	地の組織とは別に，文様の幅以内で折り返される縫取り絵緯で文様が表される織物．



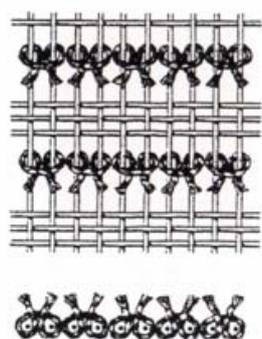
縫取織組織 (『コプト織』1998, 図3)

削り，ハツリ（はつり）	文様の輪郭に段をつくる，いいかえれば刻み目をつくる経糸または緯糸のグループ． 空引機では文様を大きくする場合，複数の経糸が《通糸》を経て《把釣り》でひとつに束ねられる．その数が《把釣り数》である．《把釣り》を介して束ねられた糸は《大通糸》によって引かれる．束ねられた経糸の数は，1本の《大通糸》によって操作される経糸の本数に当たる．
-------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

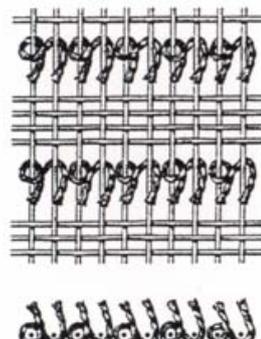
その結果、文様の輪郭に水平線の《経の削り》を生ずる。

《経の削り》の最小数値が把釣り数である。同じ綜紬を繰り返し使用し、緯糸を通すことによって、《緯の削り》を生じ、その結果、文様の輪郭に垂直の線を生じる。本稿においては織機上だけでなくデザイン上生ずる段をつくる経糸のグループ、または緯のグループも削りとして記述している。

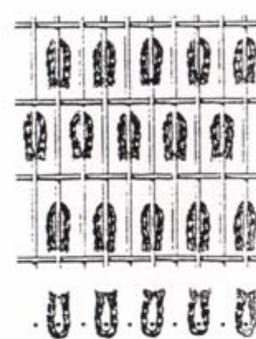
パイル織物（パイルおりもの）地組織にパイル経、あるいはパイル緯を用いループや切り毛（毛羽）を加えた織物。タオル、ベルベット、絨毯など。絨毯のパイル糸の結び方に対称結び（通称トルコ結び）、非対称結び（通称ペルシャ結び）などがある。



パイル結び（対称）



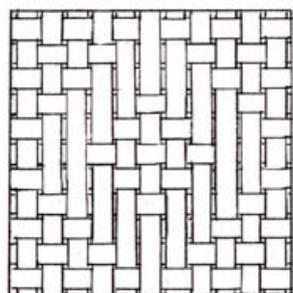
パイル結び（非対称）



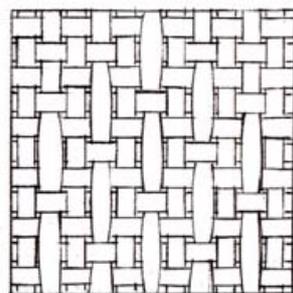
緯パイル結び

平地綾（ひらじあや）

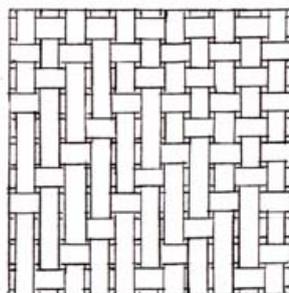
地は平組織で文様が綾流れで表される組織または織物。平地に不規則な浮きで文様が表れるもの、あるいは不規則な浮きで、綾流れが両方向に流れる平地浮文綾、および平地に経糸1本おきに経浮きがあるその変化形と、規則的な浮きで綾流れが一方方向に流れる平地綾文綾がある。



平地浮文綾



平地浮文綾（変化形）

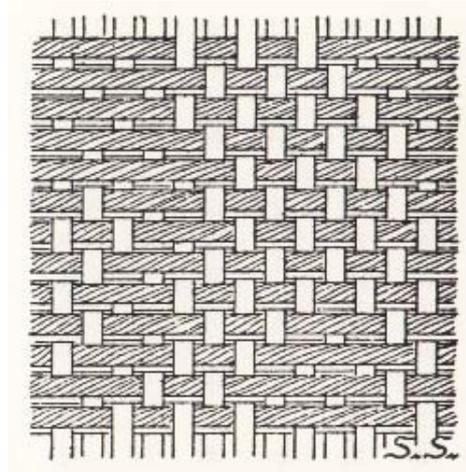


平地綾文綾

平地綾文綾（ひらじあやもんあや）平地綾参照

平地浮文綾（ひらじうきもんあや）平地綾参照

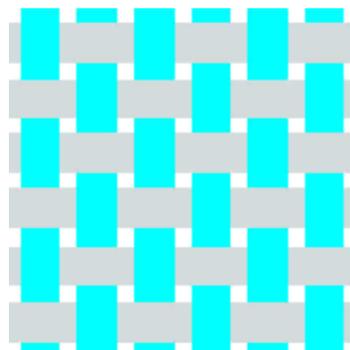
平地浮文同口錦（ひらじうきもんだうこうにしき）地は平地で緯糸には地緯と絵緯が用いられ、絵緯は浮文を作る以外は地緯と同じ動きをする。地が綾地のものもある。



平地浮文同口錦（佐々木 1973, 図 31）

平組織（ひらそしき）

経糸 2 本，緯糸 2 越を 1 単位として，緯糸 1 越に対し奇数番目の経糸と偶数番目の経糸とが交互に浮き沈みする組織。また，経糸 1 本に対し奇数番目の緯糸と偶数番目の緯糸とが交互に浮き沈みする組織。1:1 の組織という。



平組織

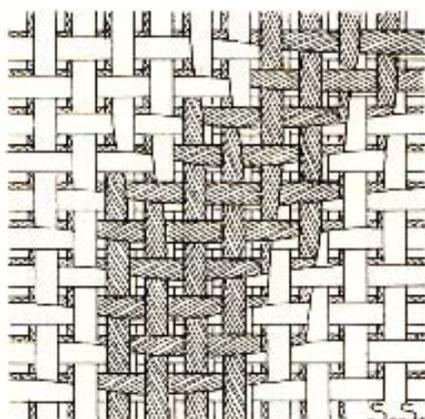
平組織経錦（ひらそしきたてにしき）経複様平組織で織られた織物。

平組織緯錦（ひらそしきよこ/ぬきにしき）緯複様平組織によって織られた織物。

風通（ふうつう）

経糸 2 色，緯糸 2 色共に同じ色の組み合わせで交互に配

され、織物または織物の一部が上下二層に織られているもの。双面錦ともいう。



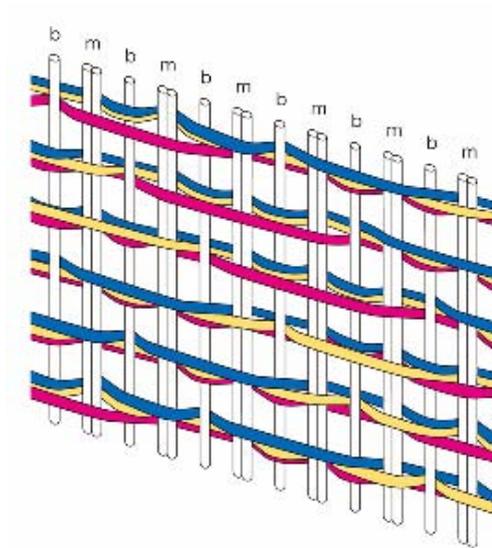
風通 (佐々木 1976, 図 85)

- 伏機 (ふぐせ) 機の前部に備えられた装置 (前機装置) において文様部分の緯糸を抑えるために経糸を下へ下げる装置。
- 別搦 (絡) み経 (べつがらみだて) ランパ組織において地経と違った役割をする経。すなわち文様を表す絵緯の緯浮きを平組織あるいは綾組織あるいは縹子組織で交錯して押さえる役割をする。  
(ランパ組織の図を参照)
- ベルクレ 色合いの異なる二種の緯糸によって作り出される効果でそれぞれの色の緯浮きが交互に現れる。それによって二種の色のかし効果があり、立体感を表す。
- 耳 (みみ) 織物を織る時、緯糸を引き返す箇所、織物の端に当たる。
- 縹れ組織 (もじれそしき) 経糸を 2 本か 3 本か 4 本単位で左右に絡ませて織る組織。紗や羅の組織。
- 紋綜統 (もんそうこう) 文様に応じて経糸が通されていて、緯糸を入れる杼口をあけるために、経糸を上下させる装置。
- 文丈 (もんたけ) 文様が経方向に繰り返されるその一単位。
- 文紗 (もんしゃ) 振組織と平組織あるいは綾組織によって構成され、文様は振組織あるいは平・綾組織、また両方の組織によって表される。



文紗 (角山 1968, 図 75 より)

- 緯込み (よここみ)                      単位間の緯糸数が経糸数より大であること.
- 横綜 (よこべ)                            空引機において紋綜紬と同じ機能の装置.
- 緯錦 (よこ/ぬきにしき)                緯糸で文様が表された複様織物. (緯複様平組織・緯複様綾組織参照).
- 緯複様綾組織 (よこふくようあやそしき) 表では緯浮きで文様を表し, 裏では経浮きになっている. 経糸は母経と陰経が規則正しく交互に置かれる. 母経は一組の緯糸と 1/2 または 1/3 に組織され緯糸と地を作り, 陰経は文様に応じて必要な緯糸を選び文

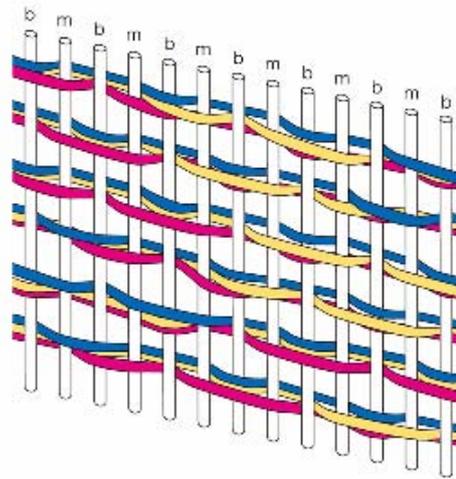


**b: binding warp (母経) m: main warp (陰経)**

緯複様綾組織

様を作る。その他の緯糸は裏にまわされる。陰経は緯糸の間に隠され、緯糸は2層となる。綜統は紋綜統と地綜統にわかれ、陰経は紋綜統に通され、母経は地綜統に通される。紋綜統は緯糸1本毎に異なるのでその数は経錦に比べて非常に多くなる。

緯複様平組織（よこふくようひらそしき）母経と陰経が交互に置かれ、母経は緯糸一組と平組織に組織する。陰経は緯糸の間に隠れ、各部分で文様に必要な色緯を選び出し、不必要な緯糸を裏にまわすように緯糸を仕分ける働きをする。従って緯糸は2層となる。この陰経の働きによって文様が表される。綜統は紋綜統と地綜統にわかれ、陰経は紋綜統に通され、母経は地綜統に通される。紋綜統は緯糸1本毎に異なるのでその数は経錦に比べて非常に多くなる。



**b: binding warp (母経) m: main warp (陰経)**

緯複様平組織

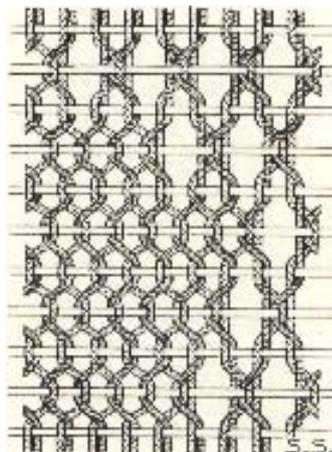
撚り (より)

糸を回転させて糸に強度、硬さ、伸張力を加えること。回転方向にSとZがある。



羅 (ら)

透かし目のある組織で織られた織物。文様がある場合は4本単位の経糸で構成される二種の縞れ組織，つまり経糸の交差の仕方によって透け目の細かい網縞れと透け目の粗い籠縞れを組み合わせた複雑な組織の織物。透かし目の小さい方の網縞れ組織が文様を表す。

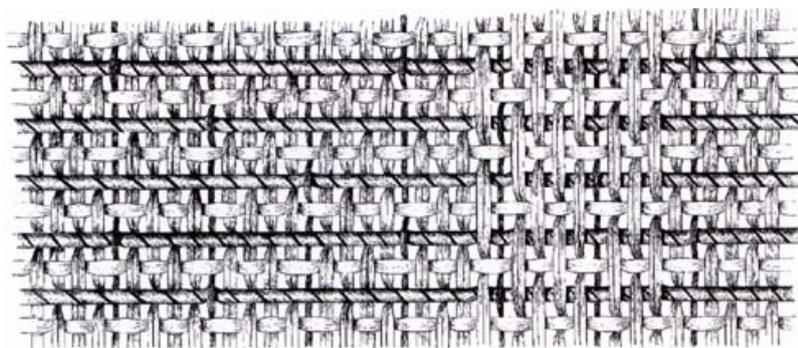


5.S. (佐々木 1976, 図 34)

羅組織 左下が網縞れ，右が籠縞れ

ランパ組織 (らんぱそしき)

文様が絵緯の緯浮きで表され，それらの緯浮きは地経の間に配置された別絡み経と平組織か綾組織か縹子組織に交錯する。この様に組織された文様は地組織の上にある。地組織は地経と地緯で平組織か経綾組織か経縹子組織に組織される。地文のある場合は地緯で表される。絵緯が金糸の場合，別絡み金欄と呼ばれる。

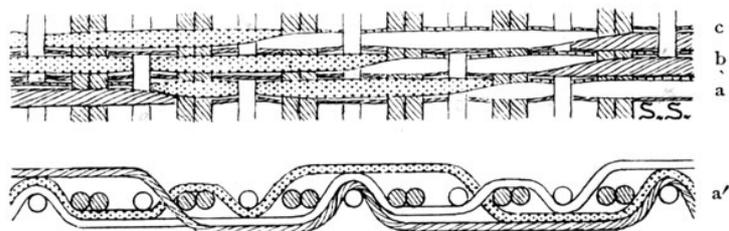


地：平組織，文：別絡み（黒糸）と1/2綾組織

ランパ組織 (Доде 2006, fig.36)

両面 1/2 綾組織緯錦 (りょうめん 1/2 あやそしきよこにしき) 綾組織緯錦とは違って，表も裏も 1/2 の緯浮きの綾になる組織。母経は緯糸の一

組と綾組織をつくる以外に文様を表す緯糸を選ぶ役割も兼ねている。陰経は文様を選ぶ役割より芯糸として織物のふくらみを増す役割となっている。



両面 1/2 綾組織緯錦 (佐々木 1976, 図 82)

両面 1/4 縹子組織緯錦 (りょうめん 1/4 しゅすそしきよこにしき) 両面綾組織緯錦とは違って、表も裏も 1/4 の緯浮きの縹子になる組織。母経は緯糸の一组と縹子組織をつくる以外に文様を表す緯糸を選ぶ役割も兼ねている。陰経は文様を選ぶ役割より芯糸として織物のふくらみを増す役割となっている。

練 (れん) 平組織に織られた絹織物に練りを施して柔らかくした艶のある織物。

蠟纈 (ろうけち) 蠟によって防染され文様が染め出された布。

#### 参考文献

- 佐々木信三郎『日本上代織技術の研究』川島織物研究所，1976。  
 京都市染織試験場『時代裂織組織一覧 (図と解説)』1985。  
 道明美保子 (編)『CIETA 織物用語集』龍村美術織物研究所，1999。  
 趙豊『織繡珍品』芸沙堂，1999。





図 1. アスターナ出土 動物雲気文錦 (ヴィクトリア・アルバート美術館蔵 Ast. vi. 1. 03)

(出典: 『染織の美』 30, pl. 7)



図 2. アンティノエ出土 連珠天馬文錦 (リヨン織物美術館蔵 897.III. 5)

(リヨン織物美術館提供)

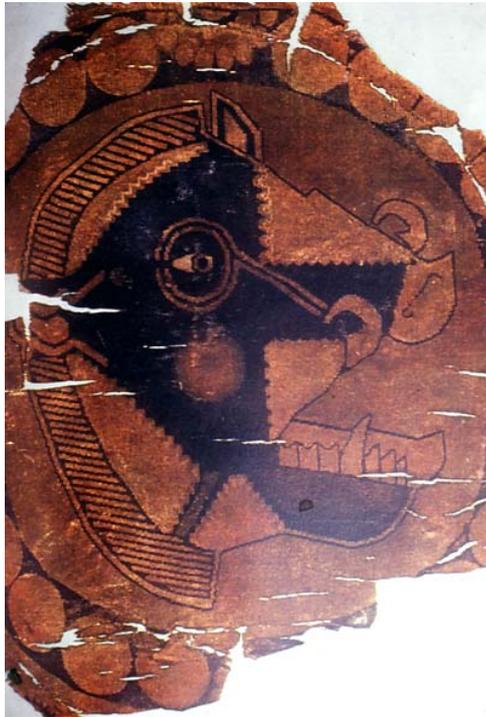


図 3. アスターナ出土 猪頭文錦 (インド国立美術館蔵 Ast. i. 5. 03)  
(出典：趙豊『織綉珍品』1999, 03.06a)

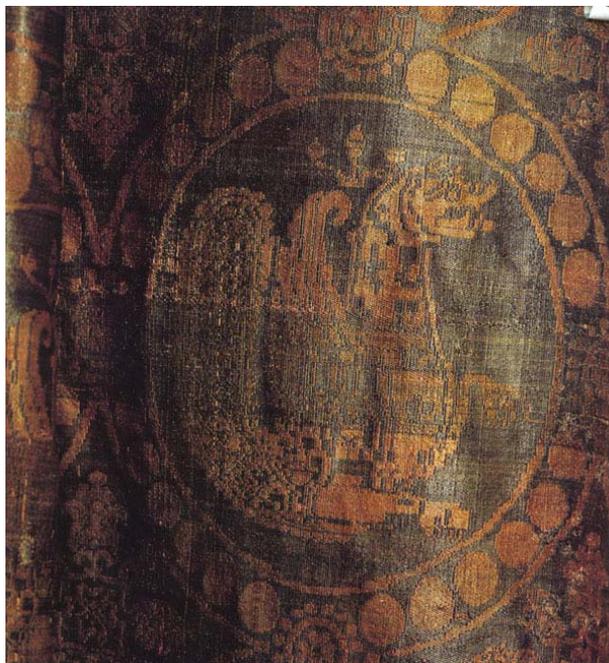


図 4. モシチェヴァヤ=バルカ出土 シムルグ文錦カフタン (エルミター  
ジュ美術館蔵 Kz 6584-a) (出典：『シルクロードの遺宝』1985, 図 121)



図 5. 聖ルー シムルグ文錦 (パリ 装飾美術館蔵 no. 16364)  
(出典：ギルシュマン『古代イランの美術』II, 1996, PL. 275)



図 6. 対羊(鹿)文錦 (ユイ ノートルダム寺院蔵)  
(出典：趙豊『織綉珍品』1999, 03.07b)



図7. 対獅錦（Sens, Cathedral Treasury, 左端に「房耳」が見える）  
（出典： Muthesius , *Byzantine Silk Weaving AD 400 to AD 1200*, 1997, 49A)



図 8. モシチェヴァヤ=バルカ出土 ダブルアクス文錦 (モスクワ考古学研究所蔵 MB 469-3497) (著者撮影)



図 9. アスターナ出土 大連珠立鳥文錦 (新疆博物館蔵 TAM 42)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 52)



図 10. アスターナ出土 大連珠鹿文錦 (新疆博物館蔵 TAM 332:5)  
(出典: 『シルクロード学研究』 8, PL. 49-a)



図 11. アスターナ出土 連珠猪頭文錦 (新疆博物館蔵 TAM 138:9/2-1)  
(出典: 『絲綢之路』 1972, 図 38)

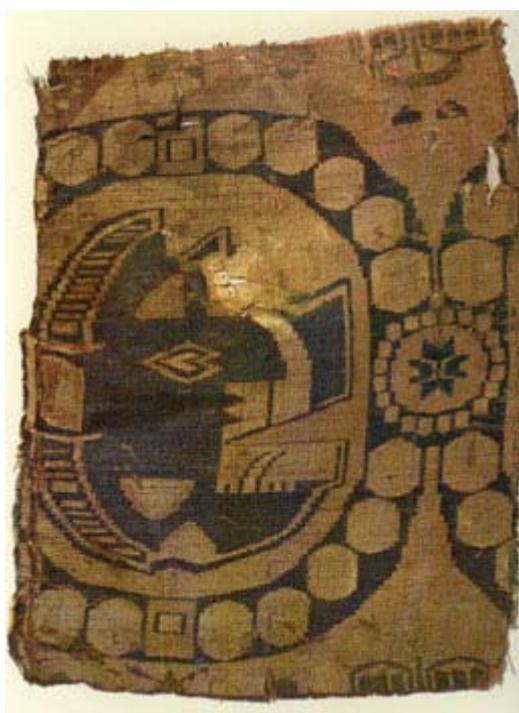


図 12. アスターナ出土 猪頭文錦 (新疆博物館蔵 TAM 325:1)  
(出典:『新疆出土文物』1975, 図 143)



図 13. 尼雅出土「延年益寿大宜子孫」錦 (新疆博物館蔵)  
(出典:『絲綢之路』1972, 図 5)



→

図 14. アスターナ出土 鳥獣条文錦 (新疆博物館蔵 TAM 306:10)  
(出典: 『シルクロード学研究』 8, PL.81-b)



→

図 15. アスターナ出土 連珠対馬錦 (新疆博物館蔵 TAM 302:22)  
(出典: 『シルクロード学研究』 8, PL.36-a)



→

図 16. アスターナ出土 樹文錦 (新疆博物館蔵 TAM 170:38)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 79-a)



図 17. アスターナ出土 棋紋錦 (新疆博物館蔵 TAM 139:1)  
(出典:『絲綢之路』1972, 図 31)



図 18. アスターナ出土 亀甲「王」字文錦 (新疆博物館蔵 TAM 44:23)  
(出典: 『シルクロード学研究』 8, PL. 83-b)



図 19. アスターナ出土 倣獅文錦 (新疆博物館蔵 TAM 313:12)  
(出典: 『シルクロード学研究』 8, PL. 56-a)



図 20. ダムガン猪頭文ストゥッコ (テヘラン考古博物館蔵)  
(出典：ギルシュマン『古代イランの美術』1996, PL. 239)



図 21. アフラシアブの壁画  
(出典：アリバウム 加藤訳『古代サマルカンドの壁画』1980, 図版 6)



→

図 22. モシチェヴァヤ=バルカ出土 重八弁花文錦 (モスクワ考古学研究所蔵 MB-Г-Н-(3) 1036) (著者撮影)



図 23. アスターナ出土 連珠対鵲文錦 (新疆博物館蔵 TAM 206:48/1)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 53)



→  
図 24. アスターナ出土 朱紅地連珠孔雀文錦 (新疆博物館蔵 TAM 169:34)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 28-a)



図 25. アスターナ出土 連珠対孔雀「貴」字文錦 (新疆博物館蔵 TAM 48:6)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 33-b)



図 26. アスターナ出土 紅地連珠対馬錦 (新疆博物館蔵 TAM 151:17)

(出典: 『シルクロード学研究』 8, PL. 34-a)



図 27. アスターナ出土 双龍連珠円文綺 (新疆博物館蔵 TAM 221:12)

(出典: 『新疆出土文物』 1975, 図 155)

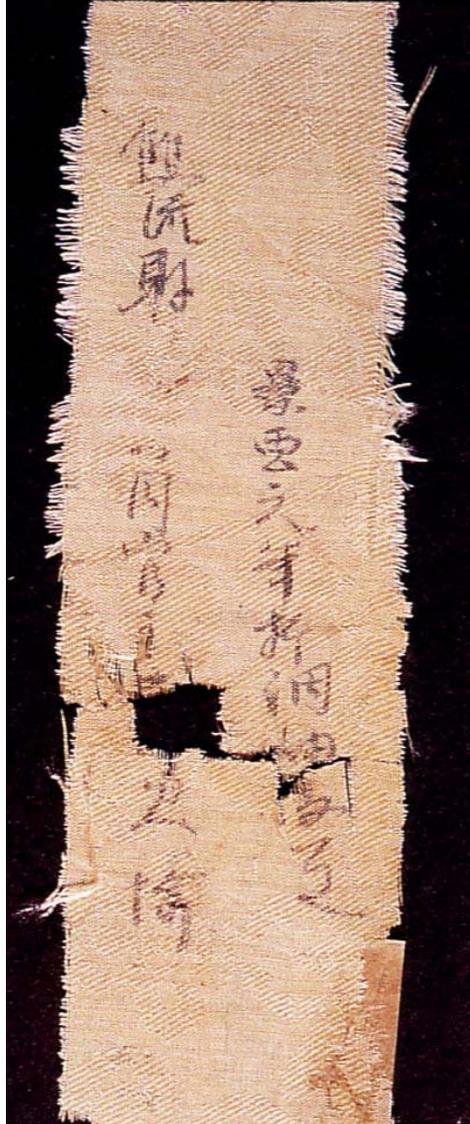


図 28. アスターナ出土 双龍文綺 (新疆博物館蔵 TAM 226:16)  
(出典：武 1992, 図 101)



図 29-a. アスターナ出土 騎士文錦

(新疆博物館蔵 TAM 322:22/1) (出典：『シルクロード学研究』 8, PL. 45-a)



図 29-b. アスターナ出土 騎士文錦副文 (新疆博物館蔵 TAM 322:22/1)

(出典：『シルクロード学研究』 8, PL. 46-b)



図 30. アスターナ出土 連珠天馬騎士文錦 (新疆博物館蔵 TAM 77:6)  
(出典: 『シルクロード学研究』 8, PL. 55)

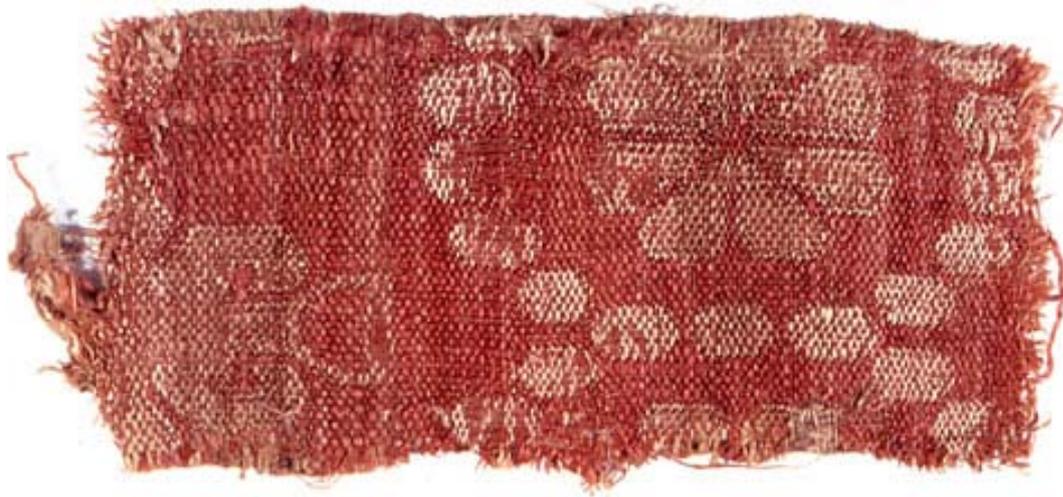


図 31. アスターナ出土 連珠小花錦 (新疆博物館蔵 TAM 323:13/3)  
(出典: 『シルクロード学研究』 8, PL. 32-a)

→



図 32. 都蘭熱水郷血渭吐蕃墓出土 紅地波斯婆羅鉢文字錦  
(出典：『中国文物精華』1997, PL. 129)



図 33. 大谷探検隊将来三日月文錦（龍谷大学大宮図書館蔵）  
(著者撮影)



図 34. キジル十六帯剣者窟の寄進者（ベルリン、アジア美術館蔵）  
(出典：『西域美術展』1991, 図 29)



図 35. キジル最大窟の連珠鴨文（ベルリン，アジア美術館蔵）  
（出典：『西域美術展』1991， 図 31）



図 36. St. Josse の聖遺骸布（ルーブル美術館蔵）  
（出典：Muthesius *Byzantine Silk Weaving AD 400 to AD 1200*, 1997, PL. 9b)



図 37. 三日月文錦（ビクトリア・アルバート美術館蔵）

（出典：『染織の美』29，図25）



図 38. 大谷探検隊収集三日月文錦 裏面（龍谷大学大宮図書館蔵）

（著者撮影）



図 39. スイパン出土 綿ベルベット (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6194)  
(旧インド美術館提供, I. Papadopoulos 撮影)



図 40. 高昌故城出土 花唐草金襴 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6222)  
(旧インド美術館提供, I. Papadopoulos 撮影)



図 41. アスターナ出土 藏青地禽獣文錦 (新疆博物館蔵 TAM 177:48(1))  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL.73)



→

図 42. アスターナ出土 盤条「貴」字団花綺 (新疆博物館蔵 TAM 48:14)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL.107)



図 43. アスターナ出土 藍地对鶏对羊灯樹文錦 (新疆博物館蔵 TAM 151:21)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL.101)



図 44. アスターナ出土「胡王」錦 (新疆博物館蔵 TAM 169:14)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 29)



→

図 45. アスターナ出土 盤条騎士狩獵文錦 (新疆博物館蔵 TAM 101:5)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 43)



→

図 46. アスターナ出土 海藍地宝相花文 (新疆博物館蔵 TAM 188:29)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 65)



図 47. アスターナ出土 宝相団花錦 (新疆博物館蔵 TAM 214:114)

(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 64)



→

図 48. アスターナ出土 深紅牡丹鳳文錦 (新疆博物館蔵 TAM 381)

(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 66)



図 49. アスターナ出土 連珠対鳥文錦 (新疆博物館蔵 TAM 134:1)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 40)



図 50. アスターナ出土 対鹿文錦 (新疆博物館蔵 TAM 330:60)  
(出典:『シルクロード学研究』8, PL. 87)



図 51. 耶律羽之墓出土 花樹獅鳥文綾 (中国絲綢博物館蔵)  
(出典：趙豊『遼代絲綢』2004, p. 86)



図 52. 高昌故城出土 牡丹文刺繡 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIK III  
4908,4909)

(旧インド美術館提供, I. Papadopoulos 撮影)



図 53. トヨク出土の幡（ベルリン，アジア美術館蔵 MIKIII6639）  
（旧インド美術館提供，I. Papadopoulos 撮影）



図 54. 龍円文金欄（AEDTA 蔵 no. 3270）  
（出典：Riboud 1995, p. 94）



図 55. 鳳凰文金襴 (AEDTA 蔵 no. 3086)

(出典 : Riboud 1995, p. 95)



→

図 56. 連珠鳳凰雲文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKIII7606)

(著者撮影)



図 57. 七宝繋ぎ地四弁花錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKIII532)  
(旧インド美術館提供, I. Papadopoulos 撮影)



図 58. 高昌故城出土 菱繋ぎ四弁花文綾 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKIII7755) (旧インド美術館提供, I. Papadopoulos 撮影)



→

図 59. 高昌故城出土 象文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6200)  
(著者撮影)



図 60. 花鳥文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵, MIKⅢ162)  
(旧インド美術館提供, I. Papadopoulos 撮影)

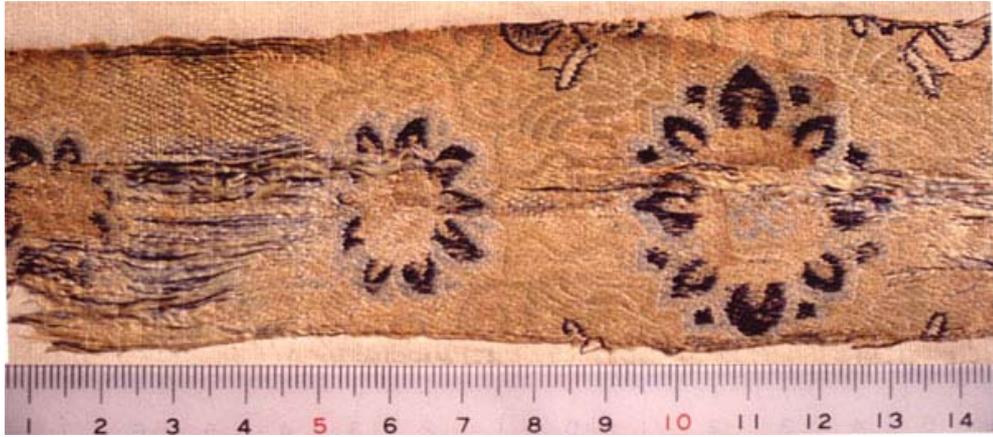


図 61. 高昌故城出土 唐草地花文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6992)  
(著者撮影)



図 62. 刺繡小袋 (韓国国立中央博物館蔵)  
(出典:『国立中央博物館所蔵 西域美術』2003, p. 118)



図 63. 高昌故城出土 生命の樹錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ4926a)  
(旧インド美術館提供, I. Papadopoulos 撮影)



図 64. 天馬文錦 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKⅢ6991)  
(旧インド美術館提供, I. Papadopoulos 撮影)

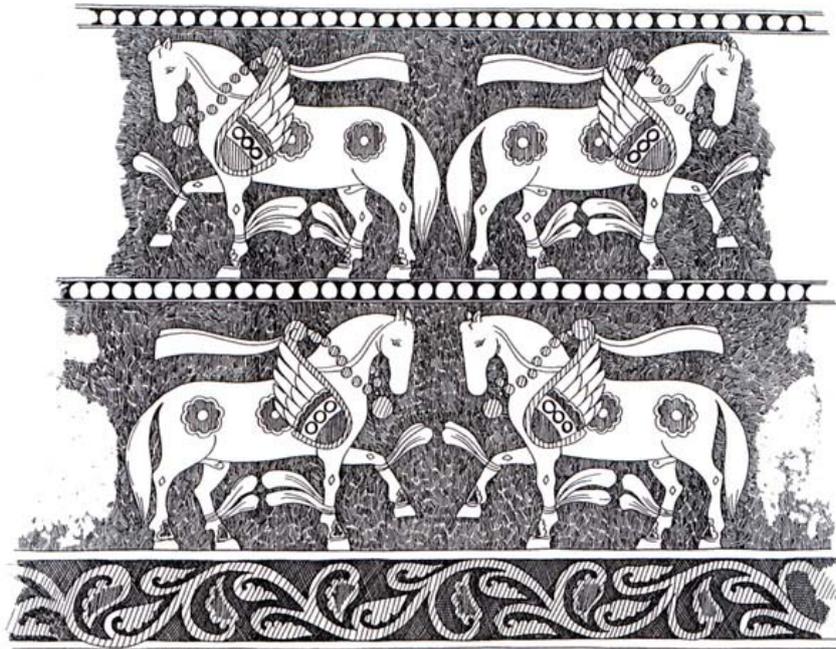


図 65. ペンジケント壁画の衣服の文様

(出典 : Marshak 2006, Fig. 32)



図 66. モシチェヴァヤ=バルカ出土 ライオン錦 (モスクワ考古学研究所蔵 MB 422-2846) (著者撮影)



図 67. モシチェヴァヤ=バルカ出土 グリフォン錦（エルミターージュ美術館蔵  
Kz 6762, 6587）（出典：Ierusalimskaja Die Gräer der Močvaja Balka, 1996, Abb. 210）



図 68. 対向するライオン錦（マーストリヒト， St. Servatius 寺院蔵）  
（出典：Muthesius *Byzantine Silk Weaving AD 400 to AD 1200*, 1997, 4b）



図 69. モシチェヴァヤ=バルカ出土 対孔雀文錦 (エルミタージュ美術館蔵 Kz 5075) (出典 : Ierusalimskaja Die Gräer der Močvaja Balka, 1996, Abb. 214)



図 70. 対獅文錦 (アベック財団蔵 no. 4863a)  
(出典 : Otavsky 1998, Abb. 5)



図 71. 内蒙古元集寧路遺址出土 亀甲地グリフォン錦 (内蒙古博物館蔵)  
(出典：趙豊『織繡珍品』1999, p. 191)

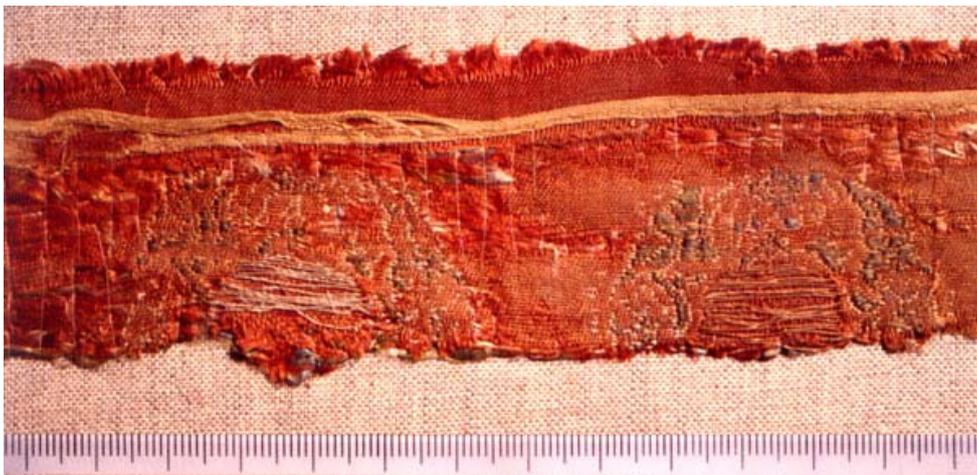
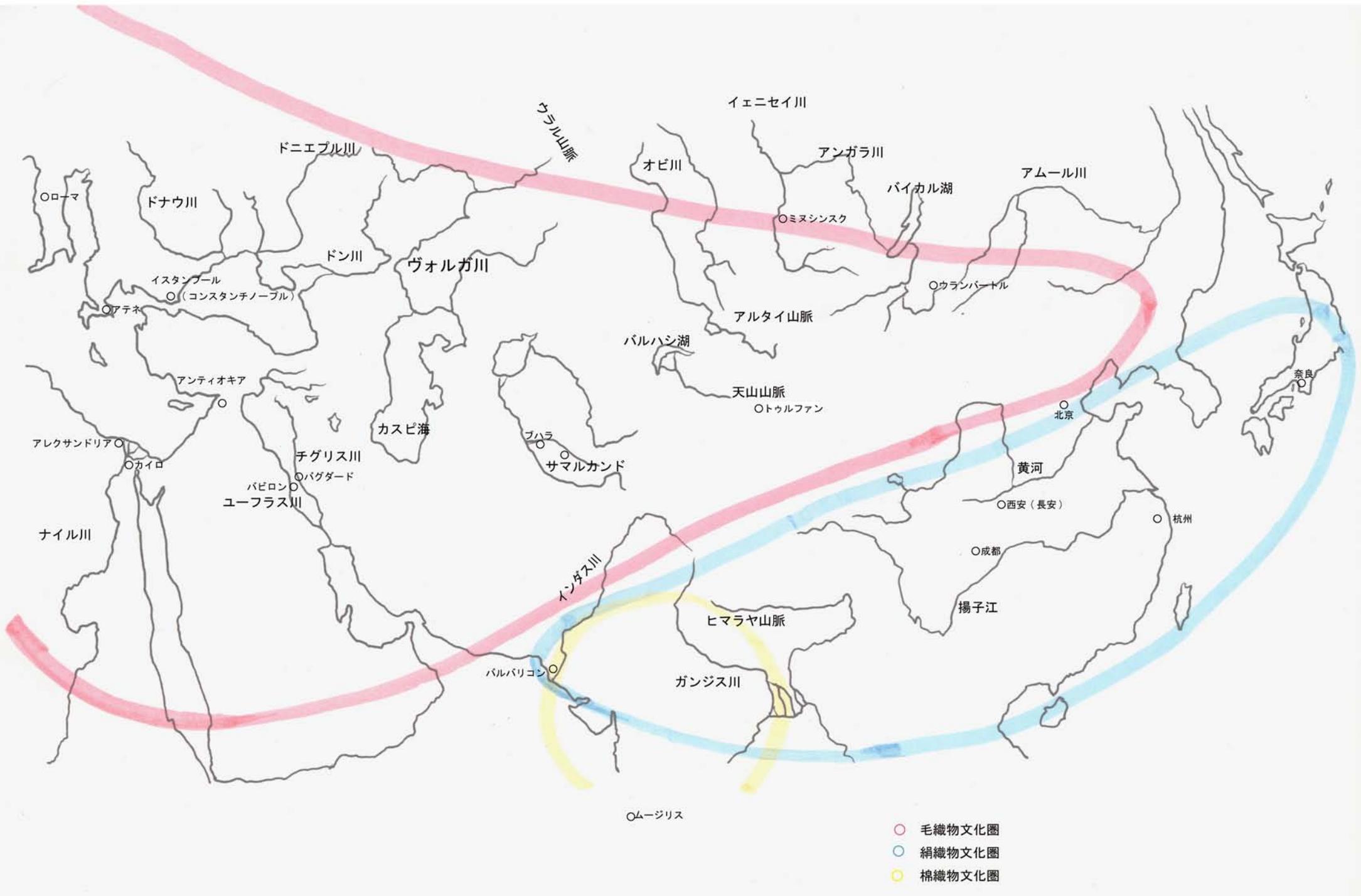


図 72. クルトカ出土 縁飾り円文金欄 (ベルリン, アジア美術館蔵  
MIKⅢ7443) (著者撮影)

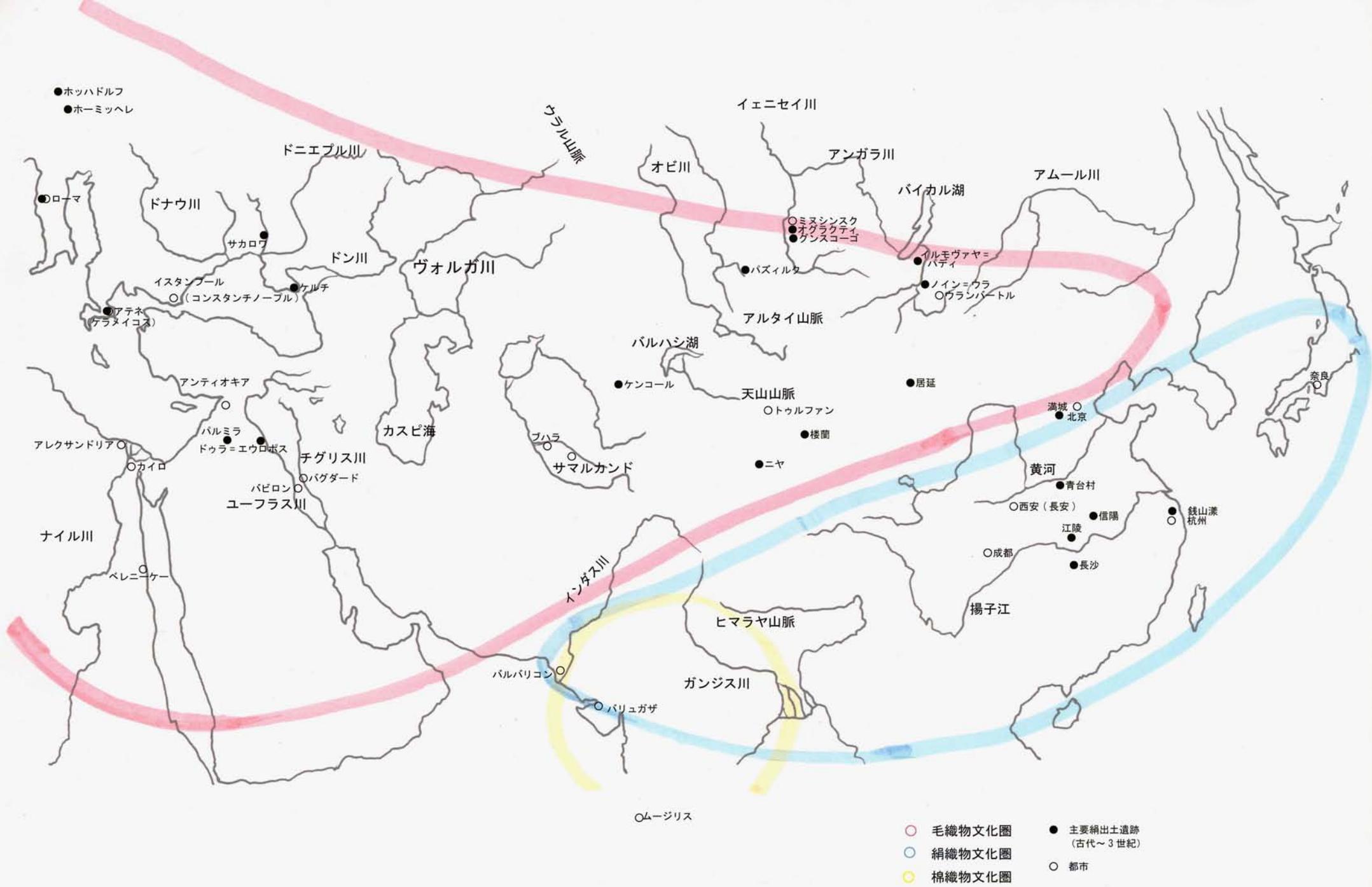


図 73. 高昌故城出土 龍文刻絲 (ベルリン, アジア美術館蔵 MIKIII535)

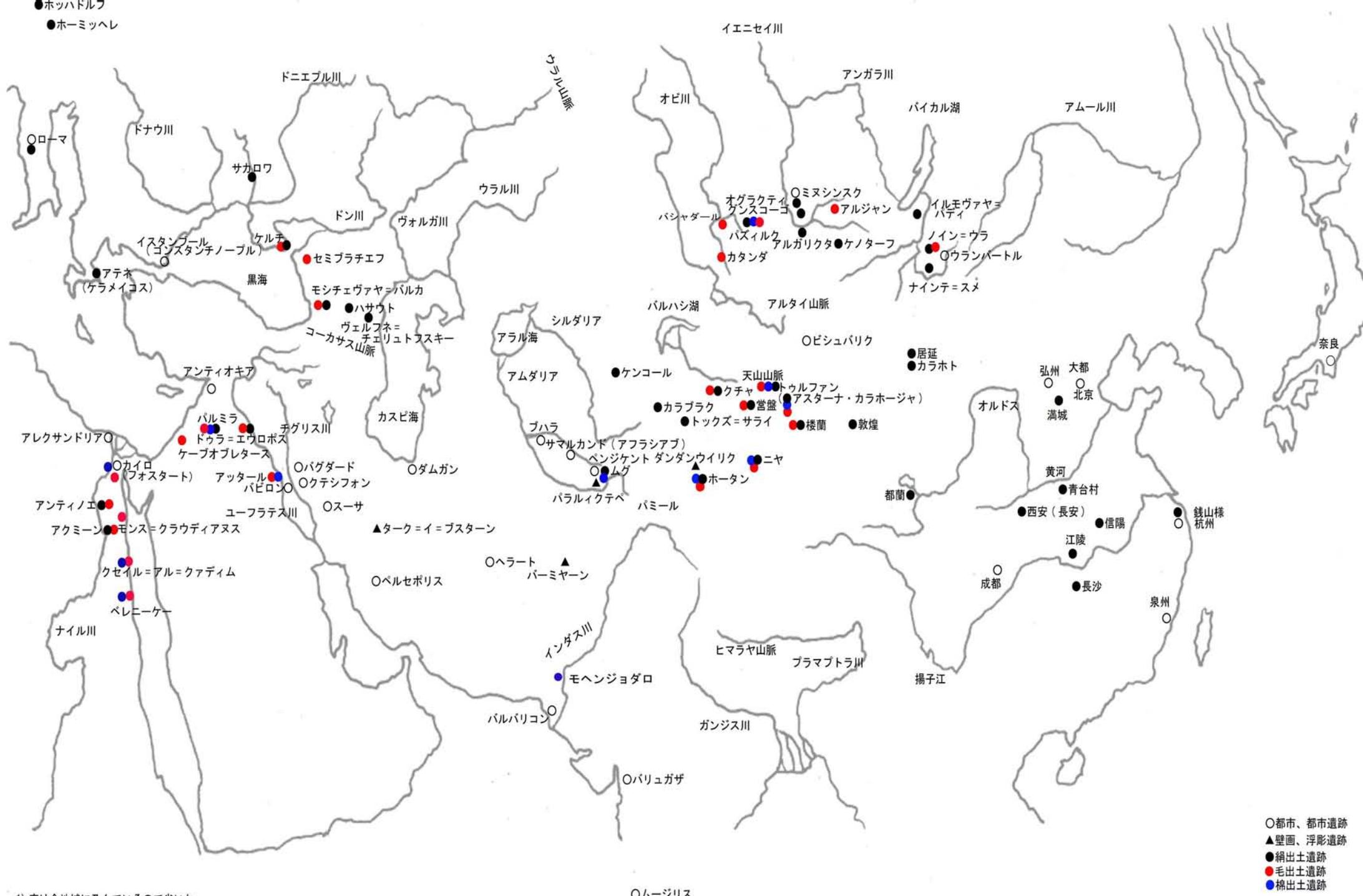
(出典 : *Le Coq Chotscho*, Tafel 49-c)



地図1 三大織物文化圏



地図 2 経錦・平地綾の西漸



1) 麻は全地域に及んでいるので省いた。  
2) 素材が報告されている場合のみ記載した。

地図3 シルクロード染織関係主要遺跡図

Stein 発掘アスターナ出土染織資料

発掘墓NO	年代関係出土資料	Stein.A., Innermost Asia 出土染織資料NO.及びPL.NO.	資料名(和名は坂本による) と文様タイプ	英語分類表示	備考	山辺 図版NO
i. 1		Ast. i. 1. 01, LXXX	連珠花卉文錦, Byzantine pattern	Figured silk, Twill weave		
		Ast. i. 1. 02 a, XLIII	綾	Silk damask		
		Ast. i. 1. 010, LXXXIV	四つ菱花文綾	Silk damask		86
		Ast. i. 1. 011, LXXVIII, LXXXIII	八弁花文錦	Figured silk, Twill weave	大谷探検隊収集八弁 花文錦(綾経錦)と同文	
i. 2						
i. 3	模造ユスティニアヌスI世金貨 (527-65) ササン銀貨ホスローI世 (531-79) ササン銀貨ホルムズドIV世 (579-91) 常平五銖 (隋代[581-618]発行)	Ast. i. 3. a. 01, LXXIX	樹下対鹿連珠円文錦, Sasanian type	Figured silk, Twill weave	大谷探検隊収集 樹下対鹿文錦(綾緯錦)と同文	42
		Ast. i. 3. b. 01	葡萄文錦, Sasanian type	Figured silk		
i. 4	延和7年(608)墓誌 貞観20年(646)墓誌					
i. 5	模造ユスティニアヌスI世金貨 (527-65)	Ast. i. 5. 03, LXXVI	猪頭連珠円文錦, Sasanian type	Figured silk, Twill weave	本稿図 3	
		Ast. i. 5. a. 01(a), LXXXIV	菱格子十字文錦	Figured silk		
		Ast. i. 5. a. 01©, LXXXIV	対龍人物文綾	Silk damask		
		Ast. i. 5. b. 01, LXXIX	対鳥連珠円文錦, Sasanian motif, Chinese work	Figured silk, Warp-rib weave		
i. 6	延寿9年(632)墓誌 模造ユスティニアヌスI世金貨 (527-65) 五銖銭 2	Ast. i. 6. 01	小型猪頭文錦, Sasanian type	Figured silk, Twill weave		
i. 7		Ast. i. 7. 03, LXXXIV	小花, 葉, 飛鶴文綾	Silk damask		
		Ast. i. 7. 04, XXXVI	菱文羅	Silk gauze		51
		Ast. i. 7. 05, LXXIX	入り子四つ菱対鷺鳥文綾	Silk damask		
i. 8		Ast. i. 8. 01, LXXXVII	花文錦	Figured silk		
ii. 1						

## Stein 発掘アスターナ出土染織資料

発掘墓NO	年代関係出土資料	Stein.A., Innermost Asia 出土染織資料NO.及びPL.NO.	資料名(和名は坂本による) と文様タイプ	英語分類表示	備考	山辺 図版NO
ii. 2						
iii. 1						
iii. 2	開元通宝	Ast. iii. 2. 02, XXXVI	方形文平織	silk veiling		
		Ast. iii. 2. 03, LXXVIII	小四弁花, 蓄文錦	Figured silk		
iii. 3	開元10年(722)文書 天宝2年(743)文書					
iii. 4	神龍元年(705)文書 載初/天授元年(690)文書 長寿2年(693)文書 景龍3年(709)文書					
iv. 1	神功2(698)墓誌					
v. 1	乾封2年(667)墓誌	Ast. v. 1. 01	連珠円文錦, Sasanian type	Figured silk, Twill weave		47
v. 2	ササン銀貨	Ast. v. 2. 01, LXXVIII	対孔雀, 獅子唐草連珠円文錦, Sasanian type, Chinese work	Figured silk, plain with faint ri	法隆寺蔵赤地双鳳獅子唐草 連珠円文錦(平経錦)と同文	44
vi. 1	升平8年(364)木板	Ast. vi. 01, from tomb 1, XLV	綾地花唐草刺繍	Silk embroidery on damask		105
		Ast. vi. 02, from tomb 1, LXXVIII	対鳥花文	Figured silk, Warp-rib weave		
		Ast. vi. 1. 02, LXXXVI	纈纈	silk with knot-dyed		76
		Ast. vi. 1. 03, LXXX	怪獣文錦, Lou-lan silk type	Figured silk	太い耳付き, 本稿図 1	3
		Ast. vi. 1. 04, XLV	羅地三日月刺繍	Silk gauze embroidered		50
vi. 2		Ast. vi. 2. 04, XXXVI	怪獣文錦, Lou-lan silk type	Figured silk, Warp-rib weave	紺地点文ろう染布に縫い付け	24
vi. 3		Ast. vi. 3. 07	花文刺繍	Embroidery, Chain stitch		82
vi. 4						
vii. 1		Ast. vii. 1. 01, LXXVII	鳥連珠円文錦, Sasanian type	Figured silk		43
		Ast.vii. 1. 06, LXXX	菱格子四弁花入り八稜星文錦, Similar design from Near East	Figured silk		29
vii. 2						
vii. 3						
vii. 4						
viii. 1		Ast. viii. 1. 01, LXXXV	入り子四つ菱, 連珠交円文綾	Silk damask		40

Stein 発掘アスターナ出土染織資料

発掘墓NO	年代関係出土資料	Stein,A., Innermost Asia 出土染織資料NO.及びPL.NO.	資料名(和名は坂本による) と文様タイプ	英語分類表示	備考	山辺 図版NO
ix. 1	永徽3年(652)墓表 乾封2年(667)墓銘					
ix. 2	神龍2年(706)庸調布 光宅元年(684-5)租布 永昌(689)墓誌 乾封2年(667)墓誌	Ast. ix. 2. 01, LXXIX	側花連珠円文錦, Sasanian type	Figured silk, Warp-rib weave		45
		Ast. ix. 2. 02, LXXXIII	菱格子八弁花文錦	Figured silk		32
		Ast. ix. 2. 016, XXXVI	菱文羅	Silk gauze		53
		Ast. ix. 2. 017	猪頭連珠円文錦, Sasanian type	Figured silk		
		Ast. ix. 2. 022, LXXVIII	開花連珠円文錦, Modified Sasanian type	Figured silk	大紅地団花錦(TAM 104綾経錦)と同文	46
ix. 3		Ast. ix. 3. 02, LXXX	対天馬連珠円文錦, Sasanian type, Chinese work	Figured silk, Warp-rib weave	連珠対馬(59TAM 302平経錦)と同文	49
		Ast. ix. 3. 03, LXXVIII	対鳳開花段文錦	Figured silk, Twill weave	鳥獸染花文錦(60TAM 324: 16平経錦)と同文	22
ix. 4, 5	貞観22年(648)墓誌 永淳元年(682)墓表					
ix. 6						
x. 1		Ast. x. 1. 02, XXXVI	菱文羅	Silk gauze		
		Ast. x. 1. 03, XXXVI	唐花文錦	Figured silk	変体宝相花文錦 (68TAM 381平経錦)と同文	
		Ast. x. 1. 05, LXXXV	植物文綾	Silk damask		
		Ast. X. 1. 05, XXXVI	六弁花段文錦	Figured silk	大谷探検隊収集花鳥段文錦 (綾経錦)と酷似	16
		Ast. x. 1. 06, LXXXIII	六弁花段文錦	Figured silk	大谷探検隊収集花鳥段文錦 (綾経錦)と酷似	28
		Ast. x. 1. 07, LXXIX	花文錦	Figured silk, Twill weave		

表注

Stein, A. Innermost Asia, II, Oxford University Press, 1928, pp. 587-718 (Repr.: New Delhi 1981).  
山辺知行 『シルクロードの染織』京都, 紫紅社, 1979. による.

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
64	TAM029	039	杏黄色綺	672,675,682,685年文書	平紋地経綫起花 (新疆博)			
66	TAM048	014	貴字套環綺	541,587年文書, 596,604,617衣物疏	平織地3/1四枚 斜紋頭花(武92)	平地経浮文綾(坂) 平地綾(横)平織経 緯斜紋頭花(張)	『シルクロード学研究』8, PL.106,107.『織繡』図99. 『絲綢之路』図46.	図42
68	TAM099	001	連珠套環綺	631文書	平紋地斜紋起花 (新疆博)	平地綾(横)平織 斜紋起花(張)	『絲綢之路』図47.	
68	TAM105	001	八彩暈縹提花綾	唐	3/1斜紋緯浮線頭花 (武92)	経四枚緯浮文綾 (坂)三枚綾地絵 緯固文縫取(横)	『シルクロード学研究』8,PL.72. 『文物』1972-1,図62. 『織繡』図104.	錦の表にも記載
73	TAM116	047	紫色連珠環鳥獸文 綺	619,620年文書, 614,621年墓表.	平紋地起6枚斜紋花 (5/1)組織(考古研)		『新疆文物』3-4, p.173,図5-3,図版8-2.	
72	TAM151	030	紫綺	609,613-618,644年文書,620 年墓誌,衣物疏				
72	TAM151	031	黄綺	609,613-618,644年文書,620 年墓誌,衣物疏				
72	TAM167	012	暈縹細綾	唐西州				
72	TAM169	070	黄色卷雲套環 舞人对獸文綺	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	3/1斜紋逐経頭花 (考古研)			
72	TAM169	074	白綺	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM170	020	天青綺 (天青色幡文綺)	543,548年衣物疏,562年墓表, 衣物疏	平紋地3/1相对斜紋頭花 (武92)	平地経浮文綾(坂) 平地綾(横)平地浮 文綾(尾)平文地三 枚経斜紋起花(張)	『シルクロード学研究』 8,PL.104. 『新疆出土文物』図版83. 『織繡』図73.	

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
72	TAM170	059	絳紫色幡文嵌対鳳 立人獸面綺	543,548年衣物疏,562年墓表, 衣物疏	平紋地3/1斜紋 逐経頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.100,図10-1	
72	TAM170	059	絳色大連珠対獅文 綺	543,548年衣物疏,562年墓表, 衣物疏	平紋地5/1嵌合組織 頭花(考古研)			
72	TAM170	099	黄綺	543,548年衣物疏,562年墓表, 衣物疏				
72	TAM170	A	黄色亀甲填花綺	543,548年衣物疏,562年墓表, 衣物疏	平紋地3/1四股経浮 逐経頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.101,図11-2	
72	TAM174	005	白綺(衣)	高昌郡				
72	TAM177	047(00)	烟色回文綺	高昌郡				
72	TAM177	048(20)	菱文綺	高昌郡				
72	TAM177	081(00)	紅綺	高昌郡				
72	TAM177	082(00)	紅綺	高昌郡				
72	TAM177	083(00)	紅綺	高昌郡				
72	TAM177	087(00)	深紅綺	高昌郡	平紋地5/1嵌合組織 経向斜紋頭花(考古研)			
72	TAM177	088(00)	浅黄色綺	高昌郡				
72	TAM183	002	黄綺	唐西州				
72	TAM183	005	黄色「人」字文綺	唐西州	平紋地2/1隔経頭花 (考古研)			
72	TAM186	006	宝藍色亀甲文綺	魏氏高昌				

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
72	TAM186	026	黄綺(裙)	魏氏高昌				
72	TAM187	008	米黄色綺(裳)	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書				
72	TAM187	016	黄綺帯	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書				
72	TAM187	117	茶色方谷文綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書	平紋地単向斜紋3/1 右斜頭花(考古研)		『新疆文物』3-4,p.119, 図24-3.	
72	TAM187	173	紫綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書				
72	TAM187	206	紫菱文綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書				
72	TAM187	A	暈縹菱文綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書	平紋地逐経頭花3/1 対称斜紋組織(考古研)		『新疆文物』3-4,p.119, 図24-2.	
72	TAM187	B	白色斜文綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書	平紋地上嵌合組織 頭花(考古研)		『新疆文物』3-4,p.119, 図24-4.	
72	TAM187	C	黄色団花綾	687,743,744,742-743,689- 704,744年文書	1/3緯面斜紋3/1 経面斜紋(考古研,武92)	綾地綾(横)	『織績』図103.	
72	TAM188	B	絳紫色菱格蟬文綺	706,707,716年文書, 715年墓誌	平紋地3/1四枚 経斜紋頭花(考古研)		『新疆文物』3-4,p.119, 図24-1,図版6-2.	
72	TAM189	002	緑色対波葡萄文綺	705,705-707,716,722年文書	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			
72	TAM189	016	絵画綺					
72	TAM189	032	黄緑綺					
72	TAM189	034	黄綾					

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
72	TAM189	037	暈縹提花綾 (暈縹彩条綾)		3/1斜紋地2/1 異向顕花(考古研)			M189:7,20,28同文
72	TAM189	052	綾					
72	TAM189	055	緑地彩条綾					
72	TAM189	059	暈縹彩条綺					
73	TAM191	084(0)	絞縹朶花綺	680,681年文書	平紋地3/1左向経面 斜紋顕花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-7,8.	
73	TAM191	118(2)	紅緑綺(百納袋)	680,681年文書				
73	TAM191	129(0)	彩色暈縹柿蒂文綺	680,681年文書	平紋地3/1逐経顕花 (考古研)			
73	TAM196	015	褐色綺	唐西州				
72	TAM204	017	菱文綺	648年文書,632墓誌				
72	TAM204	057	絳綺	648年文書,632墓誌				
72	TAM204	060	綺	648年文書,632墓誌				
73	TAM206	000	柿蒂文綺	618,672-674,684年文書, 633(墓誌より),689年墓誌	平織地3/1四枚 斜紋顕花(武92)	平地綾(横)	『織繡』図102.	
73	TAM208	006	綺	653年墓誌				
73	TAM211	004	黄色菱格文綺	唐西州	平紋地3/1右向 経顕花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-3.	
73	TAM213	035	黄緑双色閃花綾	唐西州	1/3緯面斜紋地3/1 経面斜紋顕花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.190,図19-4,図版8-4.	
73	TAM213	045	熟褐色谷文綺 (烟色菱文綺)	唐西州	平紋地1/3緯浮対称 顕花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-2.	

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
73	TAM213	054	熟褐色柿蒂文綺	唐西州	平紋地1/3緯浮 頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-4,5.	
73	TAM214	003	黄綺	665年墓誌				
73	TAM214	101	花青色対波文綺	665年墓誌	平紋地1/3緯浮頭花 (考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-6.	
73	TAM214	132①	浅棕色宝花葡萄文 綺	665年墓誌	平紋地1/3緯浮頭花 (考古研)		『新疆文物』3-4, p.190,図19-2.	
73	TAM214	132②	浅棕色卷藤蓮花 柿蒂文綺	665年墓誌	平紋地1/3対称斜紋 緯浮頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.190,図19-3.	
72	TAM217	009	緑綺	唐西州				
72	TAM217	010	暈縹綺	唐西州				
72	TAM218	009	暈縹提花綾	唐西州				
72	TAM218	031	紫綾	唐西州				
72	TAM218	032	藍綾	唐西州				
73	TAM221	004	紅色亀甲文綺	644,648,647-649,650, 652,678年文書,653年墓誌	平紋地1/3緯浮頭花 (考古研)			
73	TAM221	012	黄色団窠対龍文綺	644,648,647-649,650, 652,678年文書,653年墓誌	平紋地3/1四枚 右斜紋頭花 (考古研,武92)	平地綾(横)	『新疆文物』3-4,p.120,図25. 『新疆出土文物』図版155. 『織績』図100.	図27
72	TAM223	006	菱文紅綾	708,723年文書				
72	TAM226	016	景雲元年双流県折 調細綾(双龍文綺)	710年	平織地3/1四枚 斜紋頭花(武92)		『織績』図101.	景雲元年双流県折 調細綾の銘, 図28
72	TAM226	021	暈縹彩条綺	722,723年文書	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
72	TAM226	025	団花紅綺	722,723年文書				
72	TAM226	027	白綺	722,723年文書				
72	TAM226	030	天青綺	722,723年文書				
72	TAM226	031	緑綺	722,723年文書				
72	TAM227	004	暈縹彩条提花綾 (裙)	唐西州				絹裏に益州都督府 の印
72	TAM227	016	緑綺(衣)	唐西州				
72	TAM227	027	緑綺(褥)	唐西州				
72	TAM227	029	暈縹彩条綺(被)	唐西州				
72	TAM227	035	緑色菱格填花綺	唐西州	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			
72	TAM227	036	棕黄色菱文綺	唐西州	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			
72	TAM227	037	米黄色綺	唐西州				
72	TAM229	012	綺	723年文書				
73	TAM232	009	深藍地宝相花綺	唐西州(開元以前)			『新疆文物』3-4, p.190,図19-1,図版8-5.	
72	TAM234	008	熟褐色七点梅花綺	唐西州				
59	TAM303	001	対鳥対獸文綺	551墓表	平紋三枚経斜紋(武62)	平地経浮文綾 (坂) 平地綾(横)	『文物』1960-6,p.3図8. 『シルクロード学研究』8, PL.105.『文物精華』図13-2.	
60	TAM307	011-2	棕色宝照文綺	632年文書	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM308	005/0	藍色連珠環文綺	588年文書	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
60	TAM308	005/1	藍色文綺	588年文書	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM308	029/0	連珠套環団花綺	588年文書	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博)	平地綾(横)		
60	TAM309	030-3	黄色菱格幾何文綺	魏氏衣物疏, 551年頃(M303より)	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			M303とM309に 樹文錦が出土する
60	TAM309	036-0	棕紅色環文綺	魏氏衣物疏, 551年頃(M303より)	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM309	045-0	棕紅色綺	魏氏衣物疏, 551年頃(M303より)	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM312	016-1	桔黄色連珠套環文 綺	魏氏高昌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM313	012-0	亀背文綺	548年衣物疏, 598年文書	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM313	016-2	原白色連珠文綺	548年衣物疏, 598年文書	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM317	033-2	棕色綺	662墓表	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM319		棕色綺	魏氏高昌	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM325	002	棋局団花文綺 (棋局団花双鳥綾)	659,663年文書	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博) 1/1地3/1花(趙92b)			

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
60	TAM326	007-2	棕色套環連珠文綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM326	007-3	桔黄色綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM326	007-4	黄色連珠圈文綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM326	012-1	棕紅色綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			同ナンバー: 棕色 綺 平地5/1経斜紋
60	TAM326	012-2	姜黄色綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			同ナンバー: 桔黄 色綺 平地3/1経斜紋
60	TAM326	012-3	姜黄色綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM328	005/1	連珠套環菱文綺	唐西州	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM329	022	原白色菱格文綺	魏氏高昌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM329	007-2	黄色文綺	魏氏高昌	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM329	007-3	棕色文綺	魏氏高昌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM335	011-0	回文綺	592年衣物疏	平紋三枚経斜紋(武62)			
60	TAM335	014-0	連珠套環菱文綺	592年衣物疏	平紋三枚経斜紋(武62)	平地綾(横)		
60	TAM335	015-2	原白色綺	592年衣物疏	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および 本稿図No. M=TAM
60	TAM337	014	花樹孔雀文綺 (套環花樹孔雀綾)	568,649,650,656, 663年文書,657年墓誌	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博) 1/1地3/1花(趙92b)			
60	TAM338	023-1	棕色菱格文綺	625-664文書, 667墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
	TAM340	003/0	黄色菱格文綺	唐西州	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM340	003/2	棕色菱格花草文綺	唐西州	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM340	012/0	黄色回文綺	唐西州	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
64	TAM005	001	連珠猪頭文錦 (連珠熊頭文錦)	668年文書	綾緯(斜紋緯錦, 吐魯番博)	綾緯(坂, 本稿)	『吐魯番博物館』PL. 191.	
64	TAM018	005	「胡王」錦	589年墓誌	平経(三重三枚平紋経錦, 新疆博)	平経(平紋経錦, 張) 平経(横)	『文物』1973-10, 図版1-2.	M169:14と同文
64	TAM019	021	対獅対象球文錦	651,656,660,656-661,673 ,674,676年文書	平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	平経(横)	『織績』図69. 『シルクロード学研究』8, PL.31.	
64	TAM020	028	紅地宝相花文錦	656,659,706年文書	綾緯(四重五枚斜文緯錦, 新疆博)綾経(経頭花 夾緯経二重2/1経面 斜紋組織, 武92)綾緯 (1:3斜紋緯二重, 趙92b)	緯錦(緯線頭花, 張) 綾緯(横)	『文物』1973-10, 図版1-1. 『織績』図78.	
64	TAM031	015	対鳥「吉」字文錦	620年衣物疏	平経(三重三枚平紋経錦, 新疆博)	平経(坂, 横)	『シルクロード学研究』8, PL.99,100. 『文物』1973-10, 図48.	
64	TAM036	003	香色地瑞花錦	705年文書,713年墨書, 714年墓誌				
64	TAM039	000	『富且昌宜侯王天 延命長』織成絲履	367,370年文書	織成(武92) 絞編法織成(趙)	通経断緯法(張) 織成(横)	『織績』図60. 『絲綢之路』図版23. 『織綉珍品』02.10.	

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
65	TAM042	000	大連珠立鳥文錦 (覆面)	651墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横)	『織績』図83.『シルクロード 学研究』8,PL.51,52.	図9
66	TAM043	001	猪頭文錦	唐			『文物』1972-1,図57.	
66	TAM044	023	亀背「王」字錦	655年墓誌	平経(経畦紋, 新疆博)	平緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.83. 『絲綢之路』図32.	図18
66	TAM048	006	連珠対孔雀「貴」字錦 (覆面)	541,587年文書 596,604,617年衣物疏	平経(経畦紋, 新疆博) 綾緯(斜紋緯錦, 竺) 平緯(1:2平紋緯二重, 趙 92b)	平経(坂,横, 尾) 平経(夾緯経二重 平紋, 張)	『シルクロード学研究』8, PL.33 『文物』1972-1,図59. 『絲綢之路』図28.	図25
66	TAM048	007	藍地小団花錦	541,587年文書 596,604,617年衣物疏	平経(経畦紋, 新疆博)			
66	TAM049	013	彩条錦	東晋				
66	TAM050	027	「天王」錦	622文書	平経(経畦紋, 新疆博)	経錦(経線頭花, 張)	『絲綢之路』図26.	
66	TAM055	018	鹿文錦(覆面)	唐	綾経(経斜紋, 新疆博) 綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織(武92)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.47,48. 『織績』図87.『絲綢之路』図版35.	
66	TAM069	002	天馬騎士錦	唐				
66	TAM070	012	対鳥文錦	唐	綾経(経斜紋, 新疆博)			
66	TAM073	025	小団花錦	623,627,636年文書 M138と同文により	綾経(経斜紋, 新疆博)			M138:7,9と同文
67	TAM076	003	紅地団花文錦	唐			『絲綢之路』図39.	

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
67	TAM076	019	小団花錦	唐	綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾経(経斜紋, 新疆博)	綾経(2/1経面斜 紋, 張) 綾経(横)	『絲綢之路』図39.	
67	TAM077	006	天馬騎士錦	ヤズデギルド三世 (642年発行)『シルク ロード学研究』19, 2003.	綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾経(経斜紋, 新疆博) 綾緯(1:2斜紋緯二重, 趙 92b)	緯錦(緯線頭花, 張) 綾緯(坂,横) 綾経(尾)	『シルクロード学研究』8, PL.55. 『文物』1972-1,図51. 『絲綢之路』図34.	図30
67	TAM084	005	鹿文錦(覆面)	唐, 574年文書	綾経(経斜紋, 新疆博)	綾緯(横)	『絲綢之路』図33.	
67	TAM088	002	夔文錦	567年墓表, 衣物疏	平経(経畦紋, 新疆博)	平経(平紋経錦, 張) 平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8, PL.58,59 『文物』1972-1,図版9. 『絲綢之路』図25.	
67	TAM090	025	套環樹文錦	558文書,568墓誌				
67	TAM090	026	方格幾何文錦	558文書,568墓表				
67	TAM092	004	対鴨文錦	639,668年墓誌	綾経(経斜紋, 新疆博) 緯錦(緯線頭花, 陳編) 綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾緯(1:2斜紋緯二重, 趙 92b)	綾緯(緯線斜紋 起花, 張) 綾緯(横)	『文物』1972-1,図53. 『絲綢之路』図30.	
67	TAM092	037	対鳥対獅「同」字文錦	639,668年墓誌	平経(経畦紋, 新疆博)	平経(経畦紋, 張) 平緯(横) 平経(坂, 本稿)	『絲綢之路』図29.	
67	TAM093	006	棋局文錦	702,703年文書				

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
68	TAM099	001	瑞獸文錦(方勝獸文錦)	631文書	平経(経畦紋, 新疆博) 平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92) 経錦(経線頭花, 竺)	経錦(経線頭花, 張) 平経(横)	『文物』1972-1, 図54 『絲綢之路』図版27. 『織繡』図63.	
68	TAM101	005	盤縵騎士狩獵文錦	唐	平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	経錦(張) 平経(坂, 横, 尾)	『シルクロード学研究』8, PL.43,44. 『新疆出土文物』図版80. 『織繡』図70.	図45
68	TAM103	000	人面獸身文錦	644文書			『文物』1972-1, 図50.	
68	TAM104	000	大紅地団花錦	唐		綾経(坂, 横)	『シルクロード学研究』8, PL.70,71b.	
68	TAM105	001	彩条文錦 (八彩暈綳提花綾)	唐	単経三枚経斜紋, (新疆博) 3/1地緯浮花, 趙92b)	綾緯(斜紋緯錦, 張)経四枚緯浮 文綾(坂)三枚綾地 繪緯固文縫取(横)	『シルクロード学研究』8, PL.72. 『文物』1972-1, 図62. 『織繡』図104.『絲綢之路』図42.	綺, 綾の表にも記 載
68	TAM108	005	彩条文錦	707,715文書, 721年調布		綾経(斜紋経錦, 張)	『絲綢之路』図41.	
69	TAM117	047	宝相花文錦	627-646年文書 683墓誌	綾経(経斜紋, 新疆博)	綾経(経斜文組 織, 張) 綾緯(坂, 横)	『シルクロード学研究』8, PL.60,61. 『文物』1972-1, 図56. 『絲綢之路』図40.	
69	TAM134	001	連珠対鷄文錦	665年文書,662年墓誌	綾経(経斜紋, 新疆博) 綾経(経頭花夾緯経 二重2/1経面 斜紋組織, 武92)	綾緯(坂, 横) 綾経(尾)	『シルクロード学研究』8, PL.40,41b. 『文物』1972-1, 図55. 『織繡』図88.『絲綢之路』図36.	図49

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
69	TAM138	007/0-0	小団花錦	623,627,636年文書	綾経(経斜紋, 新疆博)			M138:9と同文
69	TAM138	009/2-1	熊頭文錦(覆面) (連珠猪頭文錦)	623,627,636年文書	綾経(経斜紋, 新疆博) 綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾緯(1:2斜紋緯二重, 趙 92b)	綾緯(斜紋緯錦, 張) 綾緯(横) 綾緯(坂, 本稿)	『絲綢之路』図38.	図11
69	TAM138	009/2-2	小団花錦	623,627,636年文書	綾経(経斜紋, 新疆博)			M138:7と同文
69	TAM138	010/0-0	連珠立鳥文錦	623,627,636年文書	綾経(経斜紋, 新疆博)			
69	TAM138	017/0-0	連珠立鳥文錦 (連珠鸞鳥文錦)	623,627,636年文書	綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾経(経斜紋, 新疆博) 綾緯(1:1斜紋緯二重, 趙 92b)	綾緯(緯線斜紋起 花, 張) 綾緯(坂, 横, 尾)	『絲綢之路』図37. 『シルクロード学研究』8, PL.42.	M138:10と同文
69	TAM139	001	藍地棋局文錦	隋		綾緯(斜紋緯錦, 張)	『絲綢之路』図31.	図17
72	TAM150	013	連珠文錦	645年文書				
72	TAM151	017	紅地連珠対馬文錦	609,613-618年文書 620年墓誌, 衣物疏 644年文書	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜文組織, 武92)	綾経(坂) 平経(横)	『シルクロード学研究』8, PL.34,35. 『織績』図89.	図26
72	TAM151	021	藍地对鳥対祥樹文錦	609,614-618年文書 620年墓誌, 衣物疏 644年文書	平経(経頭花夾緯経二重 平紋組織, 武92)	平経(坂, 横)	『シルクロード学研究』8, PL.101,102.『織績』図77.	図43
72	TAM152	012	連珠天馬文錦	566,577,594,645年文書				
72	TAM153	017	土紅地四角花文錦	596,597年文書				

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
72	TAM154	002	褐地三葉文錦	621年文書				
72	TAM155	003	菱形幾何文錦	621-625,627,629, 631,633年文書				
72	TAM155	005	幾何文錦	621-625,627,629, 631,633年文書	平経(平紋経二重組織, 考古研)			
72	TAM161	002	彩條錦	唐				
72	TAM161	003	朱紅地連珠対馬文錦	唐				
72	TAM169	004	対獅対象文錦 (盤球獅象錦)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	平経(1/1平紋経二重, 考古研)	平経(横)		
72	TAM169	014	牽駝胡王文錦 (盤球胡王錦)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	平経(経頭花夾緯経 二重平紋錦,武92)	平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.29,30. 『織績』図68.	図44
72	TAM169	016	緑地鳳花文錦	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM169	017	獸文錦	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM169	019	朱紅地錦	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM169	021	樹葉文錦	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM169	034	連珠対鳳文錦(覆面) (朱紅地連珠孔雀文 錦)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦,武92)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL.28. 『新疆出土文物』図版78. 『織績』図72.	図24

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
72	TAM169	050	紅地吉字錦(手套)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏			『新疆文物』2000,3-4図版4-1.	M169:48,72(1) -(3)同文
72	TAM169	051	大吉字文錦(被)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	平緯(1/1平紋緯二重, 考古研)	平経(経畦紋,張) 平緯(坂,横)	『新疆出土文物』図版81.	M169:28と同文
72	TAM170	011-(1)	樹葉文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	経錦(経二重組織, 考古研)			M170:11-(2)と 縫い合わせ
72	TAM170	011-(2)	吹奏人物文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	平経(平紋経錦, 考古研)		『新疆文物』2000-3,4,図版4-3.	M170:11-(1)と 縫い合わせ
72	TAM170	012-(0)	樹葉文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏				
72	TAM170	014-(0)	緑地对鳥对羊灯樹 文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏				
72	TAM170	025-(0)	鶏鳴錦(枕)	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	経錦(経二重組織, 考古研)		『新疆文物』2000-3,4,図版3-3.	
72	TAM170	038-(0)	樹葉文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.79,81a. 『織績』図65.	M170:45,50,58 同文, 図16
72	TAM170	056-(0)	宝塔文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏				
72	TAM170	060-(0)	紅地人面鳥獸文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	平緯(1/1平紋緯二重, 考古研)		『新疆文物』2000,3-4,図版3-2.	
72	TAM170	066-(0)	緑地对羊文錦(覆面)	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	平緯(趙99)	経錦(張) 平緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL.77,78. 『新疆出土文物』図版77.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
72	TAM170	069-(0)	樹葉文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏				M170:85同文
72	TAM171	002	菱形幾何文錦	637文書,642墓誌				
72	TAM175	003	連珠戴勝鳥文錦	唐西州	綾経(2/1斜紋経錦, 考古 研)			
72	TAM177	033	紅黄双色錦	455墓誌(周 1980)	平経(経頭花平紋二重 組織, 考古研)			
72	TAM177	038	紅地对鳥幾何文錦	455墓誌	平経(1/1平紋二重組織 夾緯, 考古研)			
72	TAM177	048(1)- (13)	蔵青地禽獸文錦(被)	455墓誌	平経(経二重平紋経錦, 考古研) 平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.73,74. 『新疆出土文物』図版56. 『織繡』図61.	M177:36,54同文, 図41
72	TAM186	018-0	对羊对鷄樹文錦	魏氏高昌	平経(平紋経二重組織, 考古研) 平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	経錦(経二重夾緯 経線頭花, 張) 平経(横,尾)	『新疆出土文物』図版79. 『織繡』図64.	M186:24同文
72	TAM186	025-0	樹葉文錦	魏氏高昌				M186:28,42-44 同文
72	TAM186	041-1	填花樹葉文錦	魏氏高昌	平経(平紋経二重組織, 考古研)			
72	TAM186	041-2	素地条文錦	魏氏高昌	平経(平紋経二重組織, 考古研)			
72	TAM187	024	黄緑条文錦	687~744文書				

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
72	TAM187	115	四葉彩条文錦	687~744文書				
72	TAM187	150	団花錦 (白地朶花双面錦)	687~744文書	(平紋)風通・双層 織物組織(武92)	平地平文風通(坂) 平両面錦(横)	『シルクロード学研究』8,PL.91,92b. 『織績』図96.	
72	TAM188	029	海藍地宝相花文錦	706,707文書, 715墓誌,716文書	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.65,67a. 『織績』図81.	図46
72	TAM189	006	大連珠文錦	705,705-707,716,722文書				
72	TAM189	010	大連珠猪頭文錦	705,705-707,716,722文書	2/1斜紋二重組織 (考古研)			
72	TAM195	002	藏藍地連珠菱文錦	唐西州	綾緯(斜紋緯錦, 考古研)			
72	TAM195	003	大連珠文錦	唐西州	綾緯(五枚斜紋緯錦, 考古研)			
72	TAM195	004	菱形幾何文錦(褥)	唐西州	緯錦(考古研)			
72	TAM200	004/0	「王」字連珠星月文錦	魏氏高昌				
72	TAM200	004/3	「王」字菱格文錦	魏氏高昌				
72	TAM200	005/0	黄地杯花鷹文錦	魏氏高昌	綾経(斜紋経錦, 考古研)			
72	TAM200	A	「王」字文錦	魏氏高昌				
72	TAM200	B	紅地連珠亀甲 星月文錦	魏氏高昌	平緯(平紋緯二重組織, 考古研)			
72	TAM202	005	連珠変体如意 卷草文錦	675文書, 664,677墓誌				
72	TAM202	010	連珠戴勝鹿文錦	675文書, 664,677墓誌				

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
72	TAM204	061	十字棋局文錦	632墓誌,648文書	経錦(経二重組織, 考古研)			M204:12,13,58 同文
72	TAM205	007	絳地黄色套環 対鳥文錦	620衣物疏	平緯(平紋緯二重組織, 考古研)		『新疆文物』2000-3,4,p.101図11-1.	
72	TAM205	011	連環対鳥文錦	620衣物疏				
72	TAM205	015	連珠圈幾何文錦 (環点幾何文錦)	620衣物疏	平緯(平紋緯二重組織, 考古研)			M205:5,57同文
72	TAM205	059	草葉吉字文錦(褥)	620衣物疏				
73	TAM206	000/0	七点梅花錦(小半臂)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.93. 『文物』1975-7,図版6-2. 『織績』図82.	
73	TAM206	000/0	菱形網格填花双面錦	633年埋葬記録,689年墓誌	双層組織(新疆博,西北大)	平地平文風通(坂) 平両面錦(横)	『シルクロード学研究』8, PL.98. 『文物』1975-7,図版6-1. 『織績』図130.	
73	TAM206	000/0	鳥獸团花錦(小半臂)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.97. 『文物』1975-7,図版6-3. 『新疆出土文物』図版148. 『織績』図93.	
73	TAM206	000/0	緑地团花錦(枕)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横)	『織績』図80. 『シルクロード学研究』8,PL.68.	
73	TAM206	048/1	連珠対鵲文錦 (小半臂)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横)	『織績』図92. 『シルクロード学研究』8,PL.53.	図23

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
73	TAM206	048/2	連珠対羊文錦 (小半臂)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.54. 『文物』1975-7,図版6-5. 『織績』図94.	
73	TAM211	009	小連珠団花錦	633墓誌(武1984, p.75)	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(夾緯経二重 斜紋, 張) 綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.69,71a. 『新疆出土文物』図版147. 『織績』図91.	
73	TAM214	114	宝相団花文錦	665墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横,尾)	『織績』図79. 『シルクロード学研究』8,PL.62,64a.	図47
72	TAM218	016	条文提花錦	唐西州				
72	TAM226	032	団花幾何文錦	722,723文書				
72	TAM226	033	絳地小団花文錦	722,723文書				
72	TAM226	034	暈綳彩条文錦	722,723文書				
72	TAM228	025	彩条錦(鞋)	731,733,744,742-755文書				
72	TAM228	026	褐地錦(鞋)	731,733,744,742-755文書				
72	TAM230	006	紅色小錦衣(紅地 団花小半臂錦料)	678,684,691文書, 702墓誌,714,721文書	綾緯(緯頭花含心経緯二重 1/2緯面斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.63,64b. 『織績』図95.	
59	TAM301	000	香地菱文錦(菱花錦)	643年衣物疏	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾緯(二重三枚斜紋緯錦, 賈85)		『文物』1960-6,表紙裏図8. 『考古学報』1963-1,図版10.	
59	TAM301	000	規矩文錦	643年衣物疏	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾緯(二重三枚斜紋緯錦, 賈85)綾緯(1:1斜紋緯 二重, 趙92b)		『文物』1960-6,表紙裏図7. 『考古学報』1963-1,図版10.	

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
59	TAM302	004	対馬文錦(球路対馬)	637,649,650年文書, 653年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92) 経錦(経線起花, 夏)綾経 (1:2斜紋経二重, 趙92b)	綾経(経斜紋, 張) 綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.37,38b. 『文物』1960-6,p.2図1. 『考古学報』1963-1,図版11. 『織績』図129.	Ast.ix.3.02(625, 628年)同文錦
59	TAM302	022	対馬文錦	637,649,650年文書, 653年墓誌	平経(二枚経畦紋, 武62) 平経(経頭花夾緯経二重 平紋組織, 武92) 経錦(経線起花, 夏)平経 1:2平紋経二重, 趙92b)	平経(経畦紋, 張) 平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.36,38a. 『考古学報』1963-1,カラー図版3. 『織績』図128.	図15
59	TAM302	028	小団花文錦	637,649,650年文書, 653年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)	平経(横)	『文物』1960-6,カラー図版. 『文物精華』1963, p.15-1.	
59	TAM303	000	樹文錦	551墓表	平経(経畦紋, 武62) 平経(経頭花夾緯経 二重平紋錦, 武92)	経錦(張)	『考古学報』1963-1,図版7-2,8-2. 『織績』図66. 『絲綢之路』図24.	M315(2点),309, 310(魏氏衣物 疏)同文錦出土
59	TAM303	012	双獣対鳥文錦 (鳥獣文錦)	551年墓表	平経(経畦紋, 武62) 平経(経頭花夾緯経 二重平紋錦, 武92)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL.27. 『文物』1960-6,表紙. 『考古学報』1963-1,図版6-2. 『織績』図71.	
59	TAM306	010	鳥獣樹木文錦 (鳥獣縹文錦)	541年写紙	平経(経畦紋, 武62) 平経(経頭花夾緯 経二重平紋錦, 武92)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL. 80,81b. 『考古学報』1963-1, 図版6-1. 『文物』1960-6,p.4図23. 『織績』図67.	図14
60	TAM307	008	忍冬菱文錦	632年文書	平経(経畦紋, 武62)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL.94.	

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
60	TAM307	010	条帯連珠文錦	632年文書	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM308	029	棋局錦	588年文書	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM309	047	樹文錦	魏氏衣物疏, 551年(M303より)				M303(551墓表), 315(2点), 310(魏氏衣物 疏)同文錦出土
60	TAM309	048	幾何文錦	魏氏衣物疏, 551年(M303より)	平経(経畦紋, 武62) 平緯(緯二重平紋, 賈85)		『考古』1985-2, 図版7-1.	絲棉交織(賈85, p.178), M303(551 年)とM309共に 樹紋錦出土
60	TAM313	012	瑞獸文錦 (倣獅文錦)	548衣物疏 598文書	平緯(緯頭花含心経 緯二重平紋錦, 武92) 平緯(緯二重平紋, 賈85)	平緯(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.56,57.	「綿経綿緯」図19
60	TAM315	018/1	樹文錦	551年(M303より)	平経(経畦紋, 武62)		『文物』1960-6,p.3図9.	M303(551墓表), 315(2点),309, 310(魏氏衣物 疏)同文錦出土
60	TAM315	018/2	海青色絲文小錦被	551年(M303より)				
60	TAM315	028/1	菱花錦	551年(M303より)	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM315	028/2	獅文錦	551年(M303より)	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM317	031/1,2,3	小団花錦	662年墓表				

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
60	TAM317	031/4	亀背文錦(覆面)	662年墓表	綾経(一枚経斜紋, 武62) 綾経(経二重2/1経面斜 紋, 新疆博)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.95,96.	
60	TAM317	033/7	黄地球路套団花文錦	662年墓表	綾経(経二重夾緯 3/1斜紋, 新疆博)			
60	TAM317	033/8	棕地菱格四弁花文錦	662年墓表	綾経(経二重3/1斜紋, 新疆博)			
60	TAM322	022/1	騎士文錦	663年墓誌		綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.45,46. 『織緯』図127.	図29
60	TAM322	022-1	鴛鴦文錦	663年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)			在故宮博
60	TAM322	029/0	双鳥文錦(覆面)	663年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(2/1経面斜紋, 新疆博)綾緯(二重三枚 緯斜紋, 賈85)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.86.	
60	TAM322	030/0	大鹿文錦	663年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経二重2/1経面斜 紋, 新疆博)	綾経(経斜紋, 張) 綾緯(横)	『文物』1962-7,8図3.	M334墓同文錦 出土『新疆 文物』2000-3,4, p.32の図は緯錦
60	TAM323	010/0	彩条錦	587年文書	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM323	013/1	双鴨文錦	587年文書				
60	TAM323	013/2	彩条錦	587年文書	平経(経畦紋, 新疆博)			
60	TAM323	013/3	連珠小花錦	587年文書	平経(経畦紋, 武62)	平緯(坂) 綾緯(横)	『シルクロード学研究』8, PL.32.	図31

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
60	TAM324	016	鳥獸朶花縵文錦	625,628年墓誌 Ast.ix.3より		平経(坂,横) 平緯(尾)	『シルクロード学研究』8, PL.82.	Ast.ix.3.03(625, 628年)同文錦
60	TAM325	001	猪頭文錦	659,663年文書,	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(2/1経面斜紋, 新疆 博)綾経(経頭花夾緯経 二重2/1経面斜紋組織, 武92)綾緯(斜紋緯錦, 夏) 綾緯(斜紋緯重双夾経, 趙99)	綾緯(斜紋緯錦, 張) 綾緯(横)	『考古学報』1963-1, 図版12-2. 『新疆出土文物』図版143. 『織繡』図84.『織繡珍品』03.06	図12
60	TAM325	023	小団花文錦	659,663年文書,	綾経(二枚経斜紋, 武62)	綾経(横)	『文物』1960-6, カラー図版	M317(662年 墓), M302(653年 墓)同文錦出土
60	TAM326	005/1	樹文錦	551,583,584文書 ,586墓誌				
60	TAM327	001/0	幾何瑞花錦	655衣物疏				
60	TAM327	002/3	鳥獸欄桿錦	655衣物疏				
60	TAM328	005	獸文錦	北朝期	平経(経畦紋, 武62) 平緯(緯二重平紋, 賈85)			
60	TAM330	010-1,2	黄地球路文小宝照錦	668,674年文書 672年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(3/1経面斜紋, 新疆博)			
60	TAM330	012-00	瑞花遍地錦	668,674年文書 672年墓誌	綾経(経斜紋, 武62)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.90,92a.	

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
60	TAM330	060-00	対鹿文錦	668,674年文書 672年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(経二重2/1斜紋, 新疆 博)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.87,89a.	図50
60	TAM331	004/1	獣頭錦	619年文書	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(2/1経面斜紋, 新疆博)			
60	TAM331	005/0	幾何瑞花錦	619年文書	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(2/1経面斜紋, 新疆博)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.88,89b.	M331(2点)出土
60	TAM332	005/0	大鹿文錦	661,662,665年文書	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92) 綾緯(1/2斜紋緯錦, 賈98)	綾経(経斜紋, 張) 綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.49,50. 『新疆出土文物』図版142. 『織績』85.	図10
60	TAM332	005/2	双鳥文錦	661,662,665年文書	綾経(2/1経面斜紋, 新疆博)			
60	TAM332	017/0	鸞鳥文錦	661,662,665年文書	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経二重2/1斜紋, 新 疆博)綾経(経頭花夾緯経二 重2/1経面斜紋組織, 武 92)綾緯(斜紋緯錦, 夏)	綾緯(斜紋緯線 起花, 張)	『考古学報』1963-1,図版12-1. 『新疆出土文物』図版141. 『織績』図86.	
60	TAM334	012	猪頭文錦					
60	TAM334	020	鹿文錦			綾経(経斜紋, 張)		
60	TAM337	012-3	小宝相花文錦	568,649,650,656, 663年文書,657年墓誌				
60	TAM337	013/1	大鹿文錦	568,649,650,656, 663年文書,657年墓誌	綾経(2/1経面斜紋, 新疆博)	綾経(経斜紋, 張) 綾緯(横)	『文物』1962-7,8図17.	

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
60	TAM337	013/2	鴛鴦文錦	568,649,650,656, 663年文書,657年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(2/1経面斜紋, 新疆博)	綾緯(坂,横)	『文物』1962-7,8図16 『シルクロード学研究』8, PL.84,85.	M322(663年墓) 類似文錦出土
60	TAM337	015/0	騎士文錦	568,649,650,656, 663年文書657年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(2/1経面斜紋, 新疆博)	綾緯(横)	『文物』1962-7,8図4.	
60	TAM338	016/2	連珠宝相花文錦	625~664文書, 667墓誌				
60	TAM338	022-1	幾何花卉文錦	625-664文書, 667墓誌	平紋(新疆博)			
60	TAM339	055/1,2	大吉錦(吉字文錦)	620年文書, 626年墓表	平経(経畦紋, 武62)			
67	TAM363	002	連珠対鴨文錦	665,677,676-679, 710年文書	綾経(経絲頭花, 二支 経斜紋, 新疆博)綾経 (斜紋経二重, 趙92b)	綾緯(横) 綾経(坂, 本稿)	『文物』1972-2,図2. 『吐魯番博物館』PL.180.	
67	TAM379	002	連珠猪頭文錦			綾緯(坂, 本稿)		
68	TAM381	000	深紅牡丹鳳文錦	778年文書	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92) 綾緯(斜紋緯錦, 陳) 綾緯(1:4斜紋緯二重, 趙92b) 緯錦(緯線頭花, 陳編)	綾緯(緯線 斜紋起花, 張) 綾緯(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8, PL.66,67b. 『文物』1972-1図版10. 『絲綢之路』図版45.『織績』図90.	図48
68	TAM381	000	宝相花文錦	778年文書	綾経(斜紋経錦, 陳) 綾経(1:3斜紋経二重, 趙92b)	綾経(経斜文, 張) 綾経(横)	『絲綢之路』図版43,44.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
68	TAM381	000	暈綉花鳥文錦	778年文書	綾経(斜紋経錦, 陳) 綾経(1:1斜紋経二重, 趙92b)	綾経(斜文経錦, 張) 綾経(横)	『絲綢之路』図版43.	
79	TAM382	000	獣文錦(枕)	424,425,436,437,441年文書				
	TAM386		対馬錦	619墓誌(武2006)	綾経(武2006)			
	TAM507	000	双人対飲文錦	北朝末～隋	平経(1:2平紋経錦, 趙99)		『織綉珍品』03.04 『シルクロード学研究』8,p.156図21.	
	TAM507	000	連珠文錦(1)	北朝末～隋	平緯(Wu2006)	平緯(坂, 本稿)	"CAT&CEMA" fig.158	
	TAM507	000	連珠文錦(2)	北朝末～隋	平緯(Wu2006)	平緯(坂, 本稿)	"CAT&CEMA" fig.158	
	TAM519	000	対馬錦				『シルクロード学研究』8,p.156図20.	
69	TKM048	001	連珠孔雀文錦	649,650年文書		綾経(経斜文組 織, 張) 綾緯(坂, 横)	『シルクロード学研究』8, PL.39,41a. 『文物』1972-1, 図52. 『絲綢之路』図63.	
75	TKM071	018	大連珠戴勝鹿文錦	唐西州	経錦(新疆博)	綾緯(横)	『文物』1978-6, 図29. 『中国五千年文物集刊』織綉篇2 付図3.	
75	TKM071	023	小連珠双人侍壇錦	唐西州	平経(経畦紋, 新疆博) 平経(1:2平紋経二重, 趙92b)	平経(横)	『文物』1978-6, 図30.	
75	TKM096	012	回文錦(鞋)	423,424,432年文書, 425衣物疏				

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ()内別名 または用途	年代	組織 武1962,1992,2006, Wu2006,夏1963,竺1972, 陳1979,陳(編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999,新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b.吐魯番博物館 =(吐魯番博)1992	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考および本稿 図No. M=TAM
66	TKM303	000	連珠天馬文錦	魏氏高昌	綾緯(斜紋緯錦, 吐魯番 博)	綾緯(坂, 本稿)	『吐魯番博物館』PL. 141.	

表2. 錦, 綺, 綾の表注

- \* 蔵品番号, 資料名は1960~2000年の間に出版された中国の報告書(本文参照)に基づく. 報告書の本文と報告書の表の表記が異なる場合, 本文に従った.  
以下同じ.
- \* 年代は主に『吐魯番出土文書』1-10, 文物出版社, 1981-1991に基づく. その他, 周偉州 1980論文, 『シルクロード学研究』19, 2003, 武2006論文, および同文様出土墓の年代による.  
唐や唐西州などの表記は報告書に従う.  
年号A~EはA年からE年の間に文書の年号がA年C年E年などある場合, 年号A-Eは一文書がA年からE年の間にわたる年号である場合, および各文書の年号がA年からE年の間  
A年B年C年D年E年と続く場合を略している.
- \* 錦について括弧内の組織に関する用語と文字は中華人民共和国および中華民国の報告書や図版集に基づいている. それらの漢語表記に日本の用語を付した. 日本の用語と文字は  
日本の報告書に基づき, 次のように略している, 平組織経錦: 平経, 綾組織経錦: 綾経, 平組織緯錦: 平緯, 綾組織緯錦: 綾緯.
- \* 掲載図および図版はカラー図版を記すことを心がけた.
- \* "CAT&CEMA"は *Central Asian Textiles and Their Contexts in the Early Middle Ages*, Abegg Stiftung, 2006を指す.

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM174	005	白綺(衣)	高昌郡				
72	TAM177	047(00)	烟色回文綺	高昌郡				
72	TAM177	048(20)	菱文綺	高昌郡				
72	TAM177	081(00)	紅綺	高昌郡				
72	TAM177	082(00)	紅綺	高昌郡				
72	TAM177	083(00)	紅綺	高昌郡				
72	TAM177	087(00)	深紅綺	高昌郡	平紋地5/1嵌合組織 経向斜紋顕花(考古研)			
72	TAM177	088(00)	浅黄色綺	高昌郡				
59	TAM303	001	対鳥対獣文綺	551墓表	平紋三枚経斜紋(武62)	平地経浮文綾 (坂) 平地綾(横)	『文物』1960-6,p.3図8. 『シルクロード学研究』8, PL.105.『文物精華』図13-2.	
60	TAM309	030-3	黄色菱格幾何文綺	魏氏衣物疏, 551年頃(M303より)	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			M303とM309に 樹木文錦出土
60	TAM309	036-0	棕紅色環文綺	魏氏衣物疏, 551年頃(M303より)	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM309	045-0	棕紅色綺	魏氏衣物疏, 551年頃(M303より)	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM170	020	天青綺 (天青色幡文綺)	543,548年衣物疏, 562年墓表,衣物疏	平紋地3/1相對斜紋頭花 (武92)	平地経浮文綾(坂) 平地綾(横)平地浮 文綾(尾)平文地三 枚経斜紋起花(張)	『シルクロード学研究』 8,PL.104. 『新疆出土文物』図版83. 『織繡』図73.	
72	TAM170	059	絳紫色幡文嵌対鳳 立人獸面綺	543,548年衣物疏, 562年墓表,衣物疏	平紋地3/1斜紋 逐経頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.100,図10-1	
72	TAM170	059	絳色大連珠対獅文 綺	543,548年衣物疏, 562年墓表,衣物疏	平紋地5/1嵌合組織 頭花(考古研)			
72	TAM170	099	黄綺	543,548年衣物疏, 562年墓表,衣物疏				
72	TAM170	A	黄色亀甲填花綺	543,548年衣物疏, 562年墓表,衣物疏	平紋地3/1四股経浮 逐経頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.101,図11-2	
72	TAM169	070	黄色卷雲套環 舞人対獸文綺	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	3/1斜紋逐経頭花 (考古研)			
72	TAM169	074	白綺	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
60	TAM326	007-2	棕色套環連珠文綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM326	007-3	桔黄色綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM326	007-4	黄色連珠圈文綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM326	012-1	棕紅色綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			同ナンバー: 棕色 綺 平地5/1経斜紋

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
60	TAM326	012-2	姜黄色綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			同ナンバー: 桔黄色綺 平地3/1経斜紋
60	TAM326	012-3	姜黄色綺	551,583,584文書, 586墓誌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM308	005/0	藍色連珠環文綺	588年文書	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM308	005/1	藍色文綺	588年文書	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM308	029/0	連珠套環団花綺	588年文書	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博)	平地綾(横)		
60	TAM335	011-0	回文綺	592年衣物疏	平紋三枚経斜紋(武62)			
60	TAM335	014-0	連珠套環菱文綺	592年衣物疏	平紋三枚経斜紋(武62)	平地綾(横)		
60	TAM335	015-2	原白色綺	592年衣物疏	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM313	012-0	亀背文綺	548年衣物疏, 598年文書	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM313	016-2	原白色連珠文綺	548年衣物疏, 598年文書	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
72	TAM186	006	宝藍色亀甲文綺	魏氏高昌				
72	TAM186	026	黄綺(裙)	魏氏高昌				
60	TAM312	016-1	桔黄色連珠套環文綺	魏氏高昌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
60	TAM319		棕色綺	魏氏高昌	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM329	022	原白色菱格文綺	魏氏高昌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM329	007-2	黄色文綺	魏氏高昌	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM329	007-3	棕色文綺	魏氏高昌	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
66	TAM048	014	貴字套環綺	541,587年文書, 596,604,617衣物疏	平織地3/1四枚 斜紋頭花(武92)	平地経浮文綾(坂) 平地綾(横)平織経 緯斜紋頭花(張)	『シルクロード学研究』8, PL.106,107.『織繡』図99. 『絲綢之路』図46.	
73	TAM116	047	紫色連珠環鳥獸文 綺	619,620年文書, 614,621年墓表.	平紋地起6枚斜紋花 (5/1)組織(考古研)		『新疆文物』3-4, p.173,図5-3,図版8-2.	
68	TAM099	001	連珠套環綺	631文書	平紋地斜紋起花 (新疆博)	平地綾(横)平織 斜紋起花(張)	『絲綢之路』図47.	
60	TAM307	011-2	棕色宝照文綺	632年文書	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
72	TAM151	030	紫綺	609,613-618,644年文書, 620年墓誌,衣物疏				
72	TAM151	031	黄綺	609,613-618,644年文書, 620年墓誌,衣物疏				
72	TAM204	017	菱文綺	648年文書,632墓誌				
72	TAM204	057	絳綺	648年文書,632墓誌				
72	TAM204	060	綺	648年文書,632墓誌				
73	TAM208	006	綺	653年墓誌				

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
60	TAM317	033-2	棕色綺	662墓表	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM325	002	棋局団花文綺 (棋局団花双鳥綾)	659,663年文書	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博) 1/1地3/1花(趙92b)			
60	TAM337	014	花樹孔雀文綺 (套環花樹孔雀綾)	568,649,650,656, 663年文書,657年墓誌	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博) 1/1地3/1花(趙92b)			
73	TAM214	003	黄綺	665年墓誌				
73	TAM214	101	花青色対波文綺	665年墓誌	平紋地1/3緯浮頭花 (考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-6.	
73	TAM214	132①	浅棕色宝花葡萄文 綺	665年墓誌	平紋地1/3緯浮頭花 (考古研)		『新疆文物』3-4, p.190,図19-2.	
73	TAM214	132②	浅棕色卷藤蓮花 柿蒂文綺	665年墓誌	平紋地1/3対称斜紋 緯浮頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.190,図19-3.	
60	TAM338	023-1	棕色菱格文綺	625-664文書, 667墓誌	平地3/1経斜紋 (新疆博)			
73	TAM221	004	紅色亀甲文綺	644,648,647-649,650,652, 678年文書,653年墓誌	平紋地1/3緯浮頭花 (考古研)			
73	TAM221	012	黄色団窠対龍文綺	644,648,647-649,650,652, 678年文書,653年墓誌	平紋地3/1四枚 右斜紋頭花 (考古研,武92)	平地綾(横)	『新疆文物』3-4,p.120,図25. 『新疆出土文物』図版155. 『織繡』図100.	
73	TAM191	084(0)	絞縹朶花綺	680,681年文書	平紋地3/1左向経面 斜紋頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-7,8.	

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
73	TAM191	118(2)	紅緑綺(百納袋)	680,681年文書				
73	TAM191	129(0)	彩色暈縹柿蒂文綺	680,681年文書	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			
64	TAM029	039	杏黄色綺	672,675,682,685年文書	平紋地経綫起花 (新疆博)			
73	TAM206	000	柿蒂文綺	618,672-674,684年文書, 633(墓誌より),689年墓誌	平織地3/1四枚 斜紋頭花(武92)	平地綾(横)	『織績』図102.	
72	TAM167	012	暈縹細綾	唐西州				
72	TAM183	002	黄綺	唐西州				
72	TAM183	005	黄色「人」字文綺	唐西州	平紋地2/1隔経頭花 (考古研)			
73	TAM196	015	褐色綺	唐西州				
73	TAM211	004	黄色菱格文綺	唐西州	平紋地3/1右向 経頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-3.	
73	TAM213	035	黄緑双色閃花綾	唐西州	1/3緯面斜紋地3/1 経面斜紋頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.190,図19-4,図版8-4.	
73	TAM213	045	熟褐色谷文綺 (烟色菱文綺)	唐西州	平紋地1/3緯浮対称 頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-2.	
73	TAM213	054	熟褐色柿蒂文綺	唐西州	平紋地1/3緯浮 頭花(考古研)		『新疆文物』3-4, p.189,図18-4,5.	
72	TAM217	009	緑綺	唐西州				
72	TAM217	010	暈縹綺	唐西州				
72	TAM218	009	暈縹提花綾	唐西州				
72	TAM218	031	紫綾	唐西州				

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM218	032	藍綾	唐西州				
72	TAM227	004	暈縹彩条提花綾 (裙)	唐西州				絹裏に益州都督府 の印
72	TAM227	016	緑綺(衣)	唐西州				
72	TAM227	027	緑綺(褥)	唐西州				
72	TAM227	029	暈縹彩条綺(被)	唐西州				
72	TAM227	035	緑色菱格填花綺	唐西州	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			
72	TAM227	036	棕黄色菱文綺	唐西州	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			
72	TAM227	037	米黄色綺	唐西州				
73	TAM232	009	深藍地宝相花綺	唐西州(開元以前)			『新疆文物』3-4, p.190,図19-1,図版8-5.	
72	TAM234	008	熟褐色七点梅花綺	唐西州				
60	TAM328	005/1	連珠套環菱文綺	唐西州	平紋三枚経斜紋(武62) 平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
	TAM340	003/0	黄色菱格文綺	唐西州	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM340	003/2	棕色菱格花草文綺	唐西州	平地3/1経面斜紋 (新疆博)			
60	TAM340	012/0	黄色回文綺	唐西州	平地5/1経面斜紋 (新疆博)			
72	TAM226	016	景雲元年双流県折 調細綾(双龍文綺)	710年	平織地3/1四枚 斜紋頭花(武92)		『織績』図101.	景雲元年双流県折 調細綾の銘

アスターナ出土織・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM188	B	絳紫色菱格蟬文綺	706,707,716年文書, 715年墓誌	平紋地3/1四枚 経斜紋頭花(考古研)		『新疆文物』3-4,p.119, 図24-1,図版6-2.	
68	TAM105	001	八彩暈縹提花綾	唐	3/1斜紋緯浮線頭花 (武92)	経四枚緯浮文綾 (坂)三枚綾地絵 緯固文縫取(横)	『シルクロード学研究』8,PL.72. 『文物』1972-1,図62. 『織績』図104.	錦の表にも記載
72	TAM189	002	緑色対波葡萄文綺	705,705-707,716,722年文書	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			
72	TAM189	016	絵画綺	705,705-707,716,722年文書				
72	TAM189	032	黄緑綺	705,705-707,716,722年文書				
72	TAM189	034	黄綾	705,705-707,716,722年文書				
72	TAM189	037	暈縹提花綾 (暈縹彩条綾)	705,705-707,716,722年文書	3/1斜紋地2/1 異向頭花(考古研)			M189:7,20,28同文
72	TAM189	052	綾	705,705-707,716,722年文書				
72	TAM189	055	緑地彩条綾	705,705-707,716,722年文書				
72	TAM189	059	暈縹彩条綺	705,705-707,716,722年文書				
72	TAM223	006	菱文紅綾	708,723年文書				
72	TAM226	021	暈縹彩条綺	722,723年文書	平紋地3/1逐経頭花 (考古研)			
72	TAM226	025	団花紅綺	722,723年文書				

アスターナ出土綺・綾

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名( )内別名 および用途	年代	組織 武敏1962,1992 新疆博物館考古部 =(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所 =(考古研)2000a,b. 趙1992b	組織 張1992, 坂本2000a,(坂) 横張2000,(横) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM226	027	白綺	722,723年文書				
72	TAM226	030	天青綺	722,723年文書				
72	TAM226	031	緑綺	722,723年文書				
72	TAM229	012	綺	723年文書				
72	TAM187	008	米黄色綺(裳)	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書				
72	TAM187	016	黄綺帯	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書				
72	TAM187	117	茶色方谷文綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書	平紋地単向斜紋3/1 右斜頭花(考古研)		『新疆文物』3-4,p.119, 図24-3.	
72	TAM187	173	紫綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書				
72	TAM187	206	紫菱文綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書				
72	TAM187	A	暈縹菱文綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書	平紋地逐経頭花3/1 対称斜紋組織(考古研)		『新疆文物』3-4,p.119, 図24-2.	
72	TAM187	B	白色斜文綺	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書	平紋地上嵌合組織 頭花(考古研)		『新疆文物』3-4,p.119, 図24-4.	
72	TAM187	C	黄色団花綾	687,743,744,742-743, 689-704,744年文書	1/3緯面斜紋3/1 経面斜紋(考古研,武92)	綾地綾(横)	『織繡』図103.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
64	TAM039	000	『富且昌宜侯王天 延命長』織成絲履	367,370年文書	織成(武92) 絞編法織成(趙)	通経断緯法(張) 織成(横)	『織績』図60. 『絲綢之路』図版23. 『織綉珍品』02.10.	
66	TAM049	013	彩条錦	東晋				
75	TKM096	012	回文錦(鞋)	423,424,432年文書, 425衣物疏				
79	TAM382	000	獸文錦(枕)	424,425,436,437,441年文書				
60	TAM328	005	獸文錦	北朝期	平経(経畦紋, 武62) 平緯(緯二重平紋, 賈85)			
72	TAM177	033	紅黄双色錦	455墓誌(周 1980)	平経(経頭花平紋二重 組織, 考古研)			
72	TAM177	038	紅地对鳥幾何文錦	455墓誌	平経(1/1平紋二重組織 夾緯, 考古研)			
72	TAM177	048(1)- (13)	蔵青地禽獸文錦(被)	455墓誌	平経(経二重平紋経錦, 考古研) 平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.73,74. 『新疆出土文物』図版56. 『織績』図61.	M177:36,54同文

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
59	TAM306	010	鳥獸樹木文錦 (鳥獸縹文錦)	541年写紙	平経(経畦紋, 武62) 平経(経頭花夾緯 経二重平紋錦, 武92)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL. 80,81b. 『考古学報』1963-1, 図版6-1. 『文物』1960-6,p.4図23. 『織績』図67.	
59	TAM303	000	樹文錦	551墓表	平経(経畦紋, 武62) 平経(経頭花夾緯経 二重平紋錦, 武92)	経錦(張)	『考古学報』1963-1,図版7-2,8-2. 『織績』図66. 『絲綢之路』図24.	M315(2点),309, 310(魏氏衣物 疏)同文錦出土
59	TAM303	012	双獸対鳥文錦 (鳥獸文錦)	551年墓表	平経(経畦紋, 武62) 平経(経頭花夾緯経 二重平紋錦, 武92)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL.27. 『文物』1960-6,表紙. 『考古学報』1963-1,図版6-2. 『織績』図71.	
60	TAM309	047	樹文錦	魏氏衣物疏, 551年(M303より)				M303(551墓表), 315(2点), 310(魏氏衣物 疏)同文錦出土
60	TAM309	048	幾何文錦	魏氏衣物疏, 551年(M303より)	平経(経畦紋, 武62) 平緯(緯二重平紋, 賈85)		『考古』1985-2, 図版7-1.	絲棉交織(賈85, p.178), M303(551 年)とM309共に 樹文錦出土
60	TAM315	018/1	樹文錦	551年(M303より)	平経(経畦紋, 武62)		『文物』1960-6,p.3図9.	M303(551墓表), 315(2点),309, 310(魏氏衣物 疏)同文錦出土

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
60	TAM315	018/2	海青色絲文小錦被	551年(M303より)				
60	TAM315	028/1	菱花錦	551年(M303より)	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM315	028/2	獅文錦	551年(M303より)	平経(経畦紋, 武62)			
72	TAM170	011-(1)	樹葉文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	経錦(経二重組織, 考古研)			M170:11-(2)と 縫い合わせ
72	TAM170	011-(2)	吹奏人物文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	平経(平紋経錦, 考古研)		『新疆文物』2000-3,4,図版4-3.	M170:11-(1)と 縫い合わせ
72	TAM170	012-(0)	樹葉文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏				
72	TAM170	014-(0)	緑地对鳥对羊灯樹 文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏				
72	TAM170	025-(0)	鷄鳴錦(枕)	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	経錦(経二重組織, 考古研)		『新疆文物』2000-3,4,図版3-3.	
72	TAM170	038-(0)	樹葉文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.79,81a. 『織績』図65.	M170:45,50,58 同文
72	TAM170	056-(0)	宝塔文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏				

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM170	060-(0)	紅地人面鳥獸文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	平緯(1/1平紋緯二重, 考古研)		『新疆文物』2000,3-4,図版3-2.	
72	TAM170	066-(0)	緑地对羊文錦(覆面)	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏	平緯(趙99)	経錦(張) 平緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL.77,78. 『新疆出土文物』図版77.	
72	TAM170	069-(0)	樹葉文錦	543,548衣物疏 562墓表,衣物疏				M170:85同文
72	TAM186	018-0	対羊対鶏樹文錦	魏氏高昌	平経(平紋経二重組織, 考古研) 平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	経錦(経二重夾緯 経線頭花, 張) 平経(横,尾)	『新疆出土文物』図版79. 『織繡』図64.	M186:24同文
72	TAM186	025-0	樹葉文錦	魏氏高昌				M186:28,42-44 同文
72	TAM186	041-1	填花樹葉文錦	魏氏高昌	平経(平紋経二重組織, 考古研)			
72	TAM186	041-2	素地条文錦	魏氏高昌	平経(平紋経二重組織, 考古研)			
67	TAM088	002	夔文錦	567年墓表, 衣物疏	平経(経畦紋, 新疆博)	平経(平紋経錦, 張) 平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8, PL.58,59 『文物』1972-1,図版9. 『絲綢之路』図25.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
67	TAM090	025	套環樹文錦	558文書,568墓誌				
67	TAM090	026	方格幾何文錦	558文書,568墓表				
72	TAM169	004	対獅対象文錦 (盤球獅象錦)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	平経(1/1平紋経二重, 考古研)	平経(横)		
72	TAM169	014	牽駝胡王文錦 (盤球胡王錦)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	平経(経頭花夾緯経 二重平紋錦, 武92)	平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.29,30. 『織績』図68.	
72	TAM169	016	緑地鳳花文錦	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM169	017	獣文錦	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM169	019	朱紅地錦	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM169	021	樹葉文錦	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏				
72	TAM169	034	連珠対鳳文錦(覆面) (朱紅地連珠孔雀文 錦)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL.28. 『新疆出土文物』図版78. 『織績』図72.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM169	050	紅地吉字錦(手套)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏			『新疆文物』2000,3-4図版4-1.	M169:48,72(1) -(3)同文
72	TAM169	051	大吉字文錦(被)	558年墓表,衣物疏, 576年衣物疏	平緯(1/1平紋緯二重, 考古研)	平経(経畦紋, 張) 平緯(坂,横)	『新疆出土文物』図版81.	M169:28と同文
60	TAM326	005/1	樹文錦	551,583,584文書 ,586墓誌				
60	TAM323	010/0	彩条錦	587年文書	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM323	013/1	双鴨文錦	587年文書				
60	TAM323	013/2	彩条錦	587年文書	平経(経畦紋, 新疆博)			
60	TAM323	013/3	連珠小花錦	587年文書	平経(経畦紋, 武62)	平緯(坂) 綾緯(横)	『シルクロード学研究』8, PL.32.	
60	TAM308	029	棋局錦	588年文書	平経(経畦紋, 武62)			
64	TAM018	005	「胡王」錦	589年墓誌	平経(三重三枚平紋経錦, 新疆博)	平経(平紋経錦, 張)平経(横)	『文物』1973-10,図版1-2.	M169:14と同文
	TAM507	000	双人対飲文錦	北朝末～隋	平経(1:2平紋経錦, 趙99)		『織綉珍品』03.04 『シルクロード学研究』8,p.156図21.	
	TAM507	000	連珠文錦(1)	北朝末～隋	平緯(Wu2006)	平緯(坂, 本稿)	CAT&TCEM fig. 158	
	TAM507	000	連珠文錦(2)	北朝末～隋	平緯(Wu2006)	平緯(坂, 本稿)	CAT&TCEM fig. 158	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM153	017	土紅地四角花文錦	596,597年文書				
60	TAM313	012	瑞獸文錦 (倣獅文錦)	548衣物疏 598文書	平緯(緯頭花含心經 緯二重平紋錦, 武92) 平緯(緯二重平紋, 賈85)	平緯(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.56,57.	「綿経綿緯」
69	TAM139	001	藍地棋局文錦	隋		綾緯(斜紋緯錦, 張)	『絲綢之路』図31.	
66	TKM303	000	連珠天馬文錦	魏氏高昌	綾緯(斜紋緯錦, 吐魯番博)	綾緯(坂, 本稿)	『吐魯番博物館』PL. 141.	
66	TAM048	006	連珠対孔雀「貴」字錦 (覆面)	541,587年文書 596,604,617年衣物疏	平経(経畦紋, 新疆博) 綾緯(斜紋緯錦, 竺) 平緯(1:2平紋緯二重, 趙 92b)	平経(坂,横, 尾) 平経(夾緯経二重 平紋, 張)	『シルクロード学研究』8, PL.33 『文物』1972-1,図59. 『絲綢之路』図28.	
66	TAM048	007	藍地小団花錦	541,587年文書 596,604,617年衣物疏	平経(経畦紋, 新疆博)			
68	TAM101	005	盤縵騎士狩獵文錦	唐	平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	経錦(張) 平経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8, PL.43,44. 『新疆出土文物』図版80. 『織績』図70.	
	TAM386		対馬錦	619墓誌(武2006)	綾経(武2006)			
60	TAM331	004/1	獸頭錦	619年文書	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(2/1経面斜紋, 新疆博)			
60	TAM331	005/0	幾何瑞花錦	619年文書	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(2/1経面斜紋, 新疆博)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.88,89b.	M331(2点)出土
64	TAM031	015	対鳥「吉」字文錦	620年衣物疏	平経(三重三枚平紋経錦, 新疆博)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.99,100. 『文物』1973-10,図48.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM205	007	絳地黄色套環 対鳥文錦	620衣物疏	平緯(平紋緯二重組織, 考古研)		『新疆文物』2000-3,4,p.101図11-1.	
72	TAM205	011	連環対鳥文錦	620衣物疏				
72	TAM205	015	連珠圈幾何文錦 (環点幾何文錦)	620衣物疏	平緯(平紋緯二重組織, 考古研)			M205:5,57同文
72	TAM205	059	草葉吉字文錦(褥)	620衣物疏				
72	TAM154	002	褐地三葉文錦	621年文書				
66	TAM050	027	「天王」錦	622文書	平経(経畦紋, 新疆博)	経錦(経線頭花, 張)	『絲綢之路』図26.	
60	TAM339	055/1,2	大吉錦(吉字文錦)	620年文書, 626年墓表	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM324	016	鳥獸朵花縵文錦	625,628年墓誌 Ast.ix.3より		平経(坂,横) 平緯(尾)	『シルクロード学研究』8, PL.82.	Ast.ix.3.03(625, 628年)同文錦
72	TAM200	004/0	「王」字連珠星月文錦	魏氏高昌				
72	TAM200	004/3	「王」字菱格文錦	魏氏高昌				
72	TAM200	005/0	黄地杯花鷹文錦	魏氏高昌	綾経(斜紋経錦, 考古研)			
72	TAM200	A	「王」字文錦	魏氏高昌				
72	TAM200	B	紅地連珠龜甲 星月文錦	魏氏高昌	平緯(平紋緯二重組織, 考古研)			
68	TAM099	001	瑞獸文錦(方勝獸文錦)	631文書	平経(経畦紋, 新疆博) 平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92) 経錦(経線頭花, 竺)	経錦(経線頭花, 張) 平経(横)	『文物』1972-1, 図54 『絲綢之路』図版27. 『織績』図63.	

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
60	TAM307	010	条帯連珠文錦	632年文書	平経(経畦紋, 武62)			
60	TAM307	008	忍冬菱文錦	632年文書	平経(経畦紋, 武62)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8,PL.94.	
72	TAM155	003	菱形幾何文錦	621-625,627,629, 631,633年文書				
72	TAM155	005	幾何文錦	621-625,627,629, 631,633年文書	平経(平紋経二重組織, 考古研)			
73	TAM211	009	小連珠団花錦	633墓誌(武1984, p.75)	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(夾緯経二重 斜紋, 張) 綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.69,71a. 『新疆出土文物』図版147. 『織績』図91.	
66	TAM073	025	小団花錦	623,627,636年文書 M138と同文により	綾経(経斜紋, 新疆博)			M138:7,9と同文
67	TAM076	019	小団花錦	唐	綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾経(経斜紋, 新疆博)	綾経(2/1経面斜 紋, 張) 綾経(横)	『絲綢之路』図39.	
69	TAM138	007/0-0	小団花錦	623,627,636年文書	綾経(経斜紋, 新疆博)			M138:9と同文
69	TAM138	009/2-1	熊頭文錦(覆面) (連珠猪頭文錦)	623,627,636年文書	綾経(経斜紋, 新疆博) 綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾緯(1:2斜紋緯二重, 趙 92b)	綾緯(斜紋緯錦, 張)綾緯(横) 綾緯(坂, 本稿)	『絲綢之路』図38.	
69	TAM138	009/2-2	小団花錦	623,627,636年文書	綾経(経斜紋, 新疆博)			M138:7と同文
69	TAM138	010/0-0	連珠立鳥文錦	623,627,636年文書	綾経(経斜紋, 新疆博)			

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
69	TAM138	017/0-0	連珠立鳥文錦 (連珠鸞鳥文錦)	623,627,636年文書	綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾経(経斜紋, 新疆博) 綾緯(1:1斜紋緯二重, 趙 92b)	綾緯(緯線斜紋起 花, 張) 綾緯(坂,横,尾)	『絲綢之路』図37. 『シルクロード学研究』8, PL.42.	M138:10と同文
72	TAM175	003	連珠戴勝鳥文錦	唐西州	綾経(2/1斜紋経錦, 考古 研)			
67	TAM084	005	鹿文錦(覆面)	唐, 574年文書	綾経(経斜紋, 新疆博)	綾緯(横)	『絲綢之路』図33.	
72	TAM171	002	菱形幾何文錦	637文書,642墓誌				
67	TAM077	006	天馬騎士錦	ヤズデギルド三世コイン (642年発行)『シルク ロード学研究』19, 2003	綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾経(経斜紋, 新疆博) 綾緯(1:2斜紋緯二重, 趙 92b)	緯錦(緯線頭花, 張) 綾緯(坂,横) 綾経(尾)	『シルクロード学研究』8, PL.55. 『文物』1972-1,図51. 『絲綢之路』図34.	
66	TAM069	002	天馬騎士錦	唐				
59	TAM301	000	香地菱文錦(菱花錦)	643年衣物疏	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾緯(二重三枚斜紋緯錦, 賈85)		『文物』1960-6,表紙裏図8. 『考古学報』1963-1,図版10.	
59	TAM301	000	規矩文錦	643年衣物疏	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾緯(二重三枚斜紋緯錦, 賈85)綾緯(1:1斜紋緯 二重, 趙92b)		『文物』1960-6,表紙裏図7. 『考古学報』1963-1,図版10.	
68	TAM103	000	人面獸身文錦	644文書			『文物』1972-1,図50.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM151	017	紅地連珠対馬文錦	609,613-618年文書 620年墓誌, 衣物疏 644年文書	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜文組織, 武92)	綾経(坂) 平経(横)	『シルクロード学研究』8, PL.34,35. 『織績』図89.	
72	TAM151	021	藍地对鳥対祥樹文錦	609,614-618年文書 620年墓誌, 衣物疏 644年文書	平経(経頭花夾緯経二重 平紋組織, 武92)	平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.101,102.『織績』図77.	
72	TAM150	013	連珠文錦	645年文書				
72	TAM152	012	連珠天馬文錦	566,577,594,645年文書				
72	TAM161	002	彩條錦	唐				
72	TAM161	003	朱紅地連珠対馬文錦	唐				
72	TAM204	061	十字棋局文錦	632墓誌,648文書	経錦(経二重組織, 考古研)			M204:12,13,58 同文
69	TKM048	001	連珠孔雀文錦	649,650年文書		綾経(経斜文組 織, 張) 綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.39,41a. 『文物』1972-1,図52. 『絲綢之路』図63.	
65	TAM042	000	大連珠立鳥文錦 (覆面)	651墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横)	『織績』図83.『シルクロード 学研究』8,PL.51,52.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
59	TAM302	004	対馬文錦(球路対馬)	637,649,650年文書, 653年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92) 経錦(経線起花, 夏)綾経 (1:2斜紋経二重, 趙92b)	綾経(経斜紋, 張) 綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.37,38b. 『文物』1960-6,p.2図1. 『考古学報』1963-1,図版11. 『織績』図129.	Ast.ix.3.02(625, 628年)同文錦
59	TAM302	022	対馬文錦	637,649,650年文書, 653年墓誌	平経(二枚経畦紋, 武62) 平経(経頭花夾緯経二重 平紋組織, 武92) 経錦(経線起花, 夏)平経 1:2平紋経二重, 趙92b)	平経(経畦紋, 張) 平経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.36,38a. 『考古学報』1963-1,カラー図版3. 『織績』図128.	
59	TAM302	028	小団花文錦	637,649,650年文書, 653年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)	平経(横)	『文物』1960-6,カラー図版. 『文物精華』1963, p.15-1.	
	TAM519	000	対馬錦				『シルクロード学研究』8,p.156図20.	
66	TAM044	023	亀背「王」字錦	655年墓誌	平経(経畦紋, 新疆博)	平緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.83. 『絲綢之路』図32.	
60	TAM327	001/0	幾何瑞花錦	655衣物疏				
60	TAM327	002/3	鳥獸欄桿錦	655衣物疏				
66	TAM055	018	鹿文錦(覆面)	唐	綾経(経斜紋, 新疆博) 綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織(武92)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.47,48. 『織績』図87.『絲綢之路』図版35.	
66	TAM070	012	対鳥文錦	唐	綾経(経斜紋, 新疆博)			
67	TAM076	003	紅地団花文錦	唐			『絲綢之路』図39.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
69	TAM134	001	連珠対鶏文錦	665年文書,662年墓誌	綾経(経斜紋, 新疆博) 綾経(経頭花夾緯経 二重2/1経面 斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横) 綾経(尾)	『シルクロード学研究』8, PL.40,41b. 『文物』1972-1,図55. 『織績』図88.『絲綢之路』図36.	
60	TAM317	031/1,2,3	小団花錦	662年墓表				
60	TAM317	031/4	亀背文錦(覆面)	662年墓表	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経二重2/1経面斜 紋, 新疆博)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.95,96.	
60	TAM317	033/7	黄地球路套団花文錦	662年墓表	綾経(経二重夾緯 3/1斜紋, 新疆博)			
60	TAM317	033/8	棕地菱格四弁花文錦	662年墓表	綾経(経二重3/1斜紋, 新疆博)			
66	TAM043	001	猪頭文錦	唐			『文物』1972-1,図57.	
60	TAM322	022/1	騎士文錦	663年墓誌		綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.45,46. 『織績』図127.	
60	TAM322	022-1	鴛鴦文錦	663年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)			在故宮博

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
60	TAM322	029/0	双鳥文錦(覆面)	663年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(2/1経面斜紋, 新疆博)綾緯(二重三枚 緯斜紋, 賈85)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.86.	
60	TAM322	030/0	大鹿文錦	663年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経二重2/1経面斜 紋, 新疆博)	綾経(経斜紋, 張) 綾緯(横)	『文物』1962-7,8図3.	M334墓同文錦 出土『新疆 文物』2000-3,4, p.32の図は緯錦
60	TAM325	001	猪頭文錦	659,663年文書,	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(2/1経面斜紋, 新疆 博)綾経(経頭花夾緯経 二重2/1経面斜紋組織, 武92)綾緯(斜紋緯錦, 夏) 綾緯(斜紋緯重双夾経, 趙99)	綾緯(斜紋緯錦, 張) 綾緯(横)	『考古学報』1963-1,図版12-2. 『新疆出土文物』図版143. 『織繡』図84.『織繡珍品』03.06	
60	TAM325	023	小団花文錦	659,663年文書,	綾経(二枚経斜紋, 武62)	綾経(横)	『文物』1960-6,カラー図版	M317(662年 墓),M302(653年 墓)同文錦出土
60	TAM334	012	猪頭文錦					
60	TAM334	020	鹿文錦			綾経(経斜紋, 張)		

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 橫張2000.(橫) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
60	TAM337	012-3	小宝相花文錦	568,649,650,656, 663年文書,657年墓誌				
60	TAM337	013/1	大鹿文錦	568,649,650,656, 663年文書,657年墓誌	綾経(2/1経面斜紋, 新疆博)	綾経(経斜紋, 張) 綾緯(横)	『文物』1962-7,8図17.	
60	TAM337	013/2	鴛鴦文錦	568,649,650,656, 663年文書,657年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(2/1経面斜紋, 新疆博)	綾緯(坂,横)	『文物』1962-7,8図16 『シルクロード学研究』8, PL.84,85.	M322(663年墓) 類似文錦出土
60	TAM337	015/0	騎士文錦	568,649,650,656, 663年文書657年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(2/1経面斜紋, 新疆博)	綾緯(横)	『文物』1962-7,8図4.	
68	TAM104	000	大紅地団花錦	唐		綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.70,71b.	
60	TAM332	005/0	大鹿文錦	661,662,665年文書	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92) 綾緯(1/2斜紋緯錦, 賈98)	綾経(経斜紋, 張) 綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.49,50. 『新疆出土文物』図版142. 『織績』85.	
60	TAM332	005/2	双鳥文錦	661,662,665年文書	綾経(2/1経面斜紋, 新疆博)			
60	TAM332	017/0	鸞鳥文錦	661,662,665年文書	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(経二重2/1斜紋, 新 疆 博)綾経(経頭花夾緯経二 重2/1経面斜紋組織, 武 92)綾緯(斜紋緯錦, 夏)	綾緯(斜紋緯線 起花, 張)	『考古学報』1963-1,図版12-1. 『新疆出土文物』図版141. 『織績』図86.	

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
73	TAM214	114	宝相団花文錦	665墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横,尾)	『織繡』図79. 『シルクロード学研究』8,PL.62,64a.	
60	TAM338	016/2	連珠寶相花文錦	625~664文書, 667墓誌				
60	TAM338	022-1	幾何花卉文錦	625-664文書, 667墓誌	平紋(新疆博)			
67	TAM092	004	対鴨文錦	639,668年墓誌	綾経(経斜紋, 新疆博) 緯錦(緯線頭花, 陳編) 綾緯(斜紋緯錦, 竺) 綾緯(1:2斜紋緯二重, 趙 92b)	綾緯(緯線斜紋 起花, 張) 綾緯(横)	『文物』1972-1,図53. 『絲綢之路』図30.	
67	TAM092	037	対鳥対獅『同』字文錦	639,668年墓誌	平経(経畦紋, 新疆博)	平経(経畦紋, 張) 平緯(横) 平経(坂, 本稿)	『絲綢之路』図29.	
64	TAM005	001	連珠猪頭文錦 (連珠熊頭文錦)	668年文書	綾緯(斜紋緯錦, 吐魯番博)	綾緯(坂, 本稿)	『吐魯番博物館』PL. 191.	
67	TAM379	002	連珠猪頭文錦 (連珠熊頭文錦)			綾緯(坂, 本稿)		

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
60	TAM330	012-00	瑞花遍地錦	668,674年文書 672年墓誌	綾経(経斜紋, 武62)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.90,92a.	
60	TAM330	010-1,2	黄地球路文小宝照錦	668,674年文書 672年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62) 綾経(3/1経面斜紋, 新疆博)			
60	TAM330	060-00	対鹿文錦	668,674年文書 672年墓誌	綾経(二枚経斜紋, 武62)綾 経(経二重2/1斜紋, 新疆 博)	綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.87,89a.	
64	TAM019	021	対獅対象球文錦	651,656,660,656-661,673 ,674,676年文書	平経(経頭花夾緯経二重 平紋錦, 武92)	平経(横)	『織績』図69. 『シルクロード学研究』8,PL.31.	
72	TAM202	005	連珠変体如意 卷草文錦	675文書, 664,677墓誌				
72	TAM202	010	連珠戴勝鹿文錦	675文書, 664,677墓誌				
75	TKM071	018	大連珠戴勝鹿文錦	唐西州	経錦(新疆博)	綾緯(横)	『文物』1978-6,図29. 『中国五千年文物集刊』織績篇2 付図3.	
69	TAM117	047	宝相花文錦	627-646年文書 683墓誌	綾経(経斜紋, 新疆博)	綾経(経斜文組 織, 張) 綾緯(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.60,61. 『文物』1972-1,図56. 『絲綢之路』図40.	

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
73	TAM206	000/0	七点梅花錦(小半臂)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.93. 『文物』1975-7, 図版6-2. 『織績』図82.	
73	TAM206	000/0	菱形網格填花双面錦	633年埋葬記録,689年墓誌	双層組織(新疆博,西北大)	平地平文風通(坂) 平両面錦(横)	『シルクロード学研究』8, PL.98. 『文物』1975-7, 図版6-1. 『織績』図130.	
73	TAM206	000/0	鳥獸团花錦(小半臂)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.97. 『文物』1975-7, 図版6-3. 『新疆出土文物』図版148. 『織績』図93.	
73	TAM206	000/0	緑地团花錦(枕)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横)	『織績』図80. 『シルクロード学研究』8, PL.68.	
73	TAM206	048/1	連珠对鵲文錦 (小半臂)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横)	『織績』図92. 『シルクロード学研究』8, PL.53.	
73	TAM206	048/2	連珠对羊文錦 (小半臂)	633年埋葬記録,689年墓誌	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横)	『シルクロード学研究』8, PL.54. 『文物』1975-7, 図版6-5. 『織績』図94.	
75	TKM071	023	小連珠双人侍壇錦	唐西州	平経(経畦紋, 新疆博) 平経(1:2平紋経二重, 趙92b)	平経(横)	『文物』1978-6, 図30.	
67	TAM093	006	棋局文錦	702,703年文書				

## カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
64	TAM020	028	紅地宝相花文錦	656,659,706年文書	綾緯(四重五枚斜文緯錦, 新疆博)綾経(経頭花 夾緯経二重2/1経面 斜紋組織, 武92)綾緯 (1:3斜紋緯二重, 趙92b)	緯錦(緯線頭花, 張) 綾緯(横)	『文物』1973-10,図版1-1. 『織績』図78.	
67	TAM363	000	連珠対鴨文錦	665,677,676-679, 710年文書	綾経(経絲頭花, 二支 経斜紋, 新疆博)綾経 (斜紋経二重, 趙92b)	綾緯(横) 綾経(坂, 本稿)	『文物』1972-2,図2. 『吐魯番博物館』PL. 180	
64	TAM036	003	香色地瑞花錦	705年文書,713年墨書, 714年墓誌				
72	TAM188	029	海藍地宝相花文錦	706,707文書, 715墓誌,716文書	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92)	綾経(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.65,67a. 『織績』図81.	
68	TAM108	005	彩条文錦	707,715文書, 721年調布		綾経(斜紋経錦, 張)	『絲綢之路』図41.	
72	TAM230	006	紅色小錦衣(紅地 団花小半臂錦料)	678,684,691文書, 702墓誌,714,721文書	綾緯(緯頭花含心経緯二重 1/2緯面斜紋組織, 武92)	綾緯(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8,PL.63,64b. 『織績』図95.	
72	TAM189	006	大連珠文錦	705,705-707,716,722文書				
72	TAM189	010	大連珠猪頭文錦	705,705-707,716,722文書	2/1斜紋二重組織 (考古研)			
72	TAM195	002	藏藍地連珠菱文錦	唐西州	綾緯(斜紋緯錦, 考古研)			
72	TAM195	003	大連珠文錦	唐西州	綾緯(五枚斜紋緯錦, 考古研)			

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000.(横) 坂本2000a.(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM195	004	菱形幾何文錦(褥)	唐西州	緯錦(考古研)			
72	TAM226	032	団花幾何文錦	722,723文書				
72	TAM226	033	絳地小団花文錦	722,723文書				
72	TAM226	034	暈縹彩条文錦	722,723文書				
72	TAM187	024	黄緑条文錦	687~744文書				
72	TAM187	115	四葉彩条文錦	687~744文書				
72	TAM187	150	団花錦 (白地朵花双面錦)	687~744文書	(平紋)風通・双層 織物組織(武92)	平地平文風通(坂) 平両面錦(横)	『シルクロード学研究』8,PL.91,92b. 『織繡』図96.	
68	TAM105	001	彩条文錦 (八彩暈縹提花綾)	唐	単経三枚経斜紋,(新疆博) 3/1地緯浮花, 趙92b)	綾緯(斜紋緯錦, 張)経四枚緯浮 文綾(坂)三枚綾地 絵緯固文縫取(横)	『シルクロード学研究』8, PL.72. 『文物』1972-1, 図62. 『織繡』図104.『絲綢之路』図42.	綺, 綾の表にも記載
72	TAM218	016	条文提花錦	唐西州				
72	TAM228	025	彩条錦(鞋)	731,733,744,742-755文書				

カラホージャ・アスターナ出土錦

蔵品番号 (発掘年)	蔵品番号 (墓番号)	蔵品 番号	資料名 ( )内別名 または用途	年代 M=TAM	組織 武1962,1992,2006, 夏1963,竺1972,陳1979,陳 (編)1984, 賈1985,1998, 趙1992b,1999新疆博物館 考古部=(新疆博)2000a,b, 文物考古研究所=(考古 研)2000a,b. 吐魯番博物館=(吐魯番 博)1992.	組織 張1992, 横張2000,(横) 坂本2000a,(坂) 尾形2001.(尾)	掲載図書, 図 および図版番号	備考 M=TAM
72	TAM228	026	褐地錦(鞋)	731,733,744,742-755文書				
68	TAM381	000	深紅牡丹鳳文錦	778年文書	綾経(経頭花夾緯経二重 2/1経面斜紋組織, 武92) 綾緯(斜紋緯錦, 陳) 綾緯(1:4斜紋緯二重, 趙92b) 緯錦(緯線頭花, 陳編)	綾緯(緯線 斜紋起花, 張) 綾緯(坂,横,尾)	『シルクロード学研究』8, PL.66,67b. 『文物』1972-1図版10. 『絲綢之路』図版45.『織績』図90.	
68	TAM381	000	宝相花文錦	778年文書	綾経(斜紋経錦, 陳) 綾経(1:3斜紋経二重, 趙92b)	綾経(経斜文, 張) 綾経(横)	『絲綢之路』図版43,44.	
68	TAM381	000	暈縹花鳥文錦	778年文書	綾経(斜紋経錦, 陳) 綾経(1:1斜紋経二重, 趙92b)	綾経(斜文経錦, 張) 綾経(横)	『絲綢之路』図版43.	

表3は表2の注を参照